

# コロニア万葉集

コロニア万葉集刊行委員会



## 目次

戦前（一九四五年以前）

戦後

コロニア慣用語註解

コロニア短歌略史

解題

後記

戦 前

一九四五年以前

掲載誌・紙

ブラジル時報 聖州新報 日伯新聞（ブラジル朝日を含む）

日本

新聞 南米新報 農業のブラジル 椰子樹 僚原 山茶

農友 林泉

新万葉集 その他私歌集

安部 栄子

家そばの木立に来鳴くビンチビーの声透るなり朝のしじまに

一九三九年

サンパウロもはや遠からず山々の起伏はゆるく車窓に迫る

一九四〇年

阿部 青杜

火のぬくみいまだも灰にのこり居る焼山原に春の雨降る

一九三九年

立ちぬれて独りききおり焼山の灰にいぶせき春雨の音を

同

吾が汽車の吹き鳴らす笛は霧ふかき溪にこだましあわれにき

こゆ

同

馬小屋の軒の低きに伸び立ちて今盛りなる煙草ぐさの花

同

しじみ汁しじに食べまく思い居り病めばはかなきねがいなる

かも

同

吾が友の岩波菊治吾を評して世過ぎの道に暗しとぞいう

同

アベニード パウリスタ街とりどりの家の構えを見つつもと

おる

同

聖戦四年目に入る祖国のさまを具さにききて思うこと多し

一九四〇年

いやはての国に居て思う祖国人興亜と呼べり何ぞ気宇の小さ

き

同

一等車皆白人の中に独り聖戦祖国を思い涙ぬぐい居り

一九四〇年

この事に唯一人なる日本人自を愛おしむこころしじなり

同

山垣の連互遠し見渡せば日にかげるあたりジュケリー村か

同

馬あまた尾を振り振りて草喰めり目にしたしきよ朝の牧原

同

霧雨はるるサンロッケ駅に汽車着きぬ青き葡萄を子等ひさぎ  
おり

同

季節のけじめさやかに得分かねどマンガの熟れて夏去ぬるら  
し

同

人の世の世すぎのさまのさびしさを咲き移る棉の花に見にけ  
り

同

秋 永 三 郎―天津夢城―

山焼きの煙遠近立ちそめぬやがて来るらしこの国の春

一九三七年

馬止めて朝の静寂を風にゆるる珈琲の青実見つめてありき

一九三八年

世論いま第二世の上にかかりて同胞多く世にあげつらう

一九三九年

日本人の血はかなしもよひた恋えどはてなく還し大和島根は

同

現には未だ海も見ずその海の遠く遙けく日本ありと聞く

同

あくがれの募り来る日は幻に小さく書きぬ箱庭の如き日本を

同

朝霧の中ゆおぼろに陽の昇り行けども行けども果てぬ野を行

く  
同

排日的法令は日に次ぎ布かれつつ吾をこの国になじましめざ

り  
同

浅 田清 ― 今日志 ―

茅屋の土間に水打ち一時をせめてすがしく憩わんと思う

一九三八年

カザメント デ ラポーザと呼ぶ雨降りぬ旱りの秋の昼下り

頃  
同

たまさかに巡回シネマに来にければ娘等化粧して嬉々と集え

り  
同

次々に知り人の帰国見送りてわが永住の心うごきぬ

同

とにかくに帰り来よてう故里の便り受けつつ過ごす幾年

同

早咲きのイペー咲きにけり冬空と地平線とのやや手前にて

同

つけかえし鋤の柄ようやく手になれて予定の除草明日すむらしき

一九四〇年

此の道を共に通いし吾が友の幾人ならむ村に住めるは

同

普及会巡回図書の歌書をかりしばしひもとく夜毎のいとまに

一九四一年

幼くて離りし国の山川を或夜の夢にあわれ見にしか

同

永かりし旱のあとの雨ながら三日止まねばほとほと倦みつ

一九四一年

取り替えむ瓦なければ空缶の古きを切りて割れ目つくろう

同

やがてまた移り住む日の来たるべきは必然なりと思いつつ住む

同

やや遠く集合合図の花火鳴りぬ空巢狙いの入りしにやあらむ

同

荒 木 八 雲

うちなびき棉穀燃ゆる裏畑のあかりを浴びて夕飼とるなり

一九三六年

畑にして棉つみにつつこの年の出来のわるさを妻とかこつも

一九三七年

来し方の四年五年は夢なりきようやく土地を求めんとする

同

道の辺に灰のたまりて夜警等が踏みしだきたる草の伏し居り

一九三八年

村々に夜警の起ちてものものし遠近の空に花火ひびかせ

同

夜警等も今は帰るか明け近むしじまにせきの聞こえて行きぬ

同

夜更けて明日の豆など鍋に煮つつ耳をすぎせば鹿のなくなり

一九三九年

妻子らを明日は迎うと求め来しバラなど植えて庭ととのうる

同

いえがたき痛いとなりて吾が妻に言葉やさしくもの言いて居り

一九三九年

春の畑のどかに妻の種蒔くを吾病みこやり窓ゆ見て居り

同

咲き初めし花の頃より吾は病みマンガはうれぬ枝もおおに

同

夜もすがらむくろ守りてうからども母のひと世を偲びつつ居り

同

長病みのわれはも遂に死なずしてみとりつかれて母死なしめ



ぬ

同

ははそはの母のはうりに足立たず野辺のおくりに出でざりに  
けり

同

阿 部 芳 治

埴土（はに）道に我が影みつつひた歩むこの境野（あらの）  
には雲も動かず

一九三八年

一筋に広野にとおれる埴土道はさみしきかもよ空に消えいて

同

列をして蟻は歩めり真日中の埴土道よぎり草に消えつつ

同

果てしなき広野に影を落しつつあらわにぞ居る白鳥一羽

一九三九年

荒原に聳えて高き一本のペローバの肌のあらわなるかも

同

伸びのびて真直に空にそそり立つこれの焼木の肌の真白さ

同

荒原の焼木の聳え見あぐれば空のひろごりゆゆしくあるも

同

ふかふかと空にせまれるこの草野すべなきときに我がおらび  
たり

一九三九年

牧水の歌詠みおれば清々と眼にうかび来る日本の景色

同

荒 木 浅 子

立ちこめしもや晴れ初めてくれないのイペの花見ゆ向つ山辺  
に

一九三八年

枯れ果てし荒野の中につぶらなるトマトは赤くうれそろいけ  
り

同

荒 木 葉 刀

ひとところ眼にしむ程の白光り遙かに望む山頃の町

一九三七年

夏山に木を伐りながらいささかの傷してにじむ血のうつくし  
さ

一九三八年

荒 木 千代乃

蔦サンジョン枯木の枝にからみ咲きマカコ群れくる吾が家の  
前

一九四五年

石 井 衣 子

わが住まむ町と思えばあわれなりあかしやの花黄に散りしく  
も

一九二五年

見かえれば町のあかりは夕空に光りましつゝ速さかりゆく

一九二五年

明日はここにふたたび立たむわれならず心佗びつつ桜をめづ  
る

同

ミモザの花黄にうちけぶり春の日の照り曇らえる果なき大野

一九三八年

また来べきアマゾンならず一時の雨に濡れつつ蛇の皮買う

同

ぶらじる語独習書をば物蔭に読みふける娘の浴衣もあわれ

同

## 石 井 繁 美

野は遠く空につらなり曙の色になごみて静かなるかな

一九三八年

霧のなか降りれば汽車の窓ちかく房おもたげにバナナ垂れた  
り

同

波がしら白く群れよる長汀を馬車かり行けば風の涼しも

同

青々と茂れる山の円やかに煙れるなかに見ゆる人里

同

和 泉 生

リベイラの河に臨める白亜館眺め涼しくカノア浮かべり

一九二二年

今 本 義 美

窓開けば吹き入る風のすがすがしひまわり畑に日の昇る見ゆ

一九三九年

ふるさとの春の雪解を思い居り日のさす軒ゆ雨の重りつつ

同

サンジョンも近づきにけり夕されば遠近の家ゆ花火あがるも

同

桃の花そよ吹く風に咲き出でてうらなごみたり今朝の光は

同

おちかかる細き月かげうちけぶり野にひとしきりふくろう鳴くも

同

いただきにさやぐ風ありユーカリの並木に赤く夕焼けのして

同

はずみつつ初蒔き居るや朝沢の狭霧がくれに鳴けるサラクラ

同

山けぶる今日此の頃を咲き出でてすがすがしさや珈琲の花は

同

丘はいま冬枯色のわびしさに棉の木を焼く煙なりけり

一九三九年

しずかに降り続く雨か夜半の室にランプの芯のゆらぎだにせず

一九四〇年

炭酸瓦斯の湧き来る音か雑音の四方より起こる地下深くして

同

永病みの母もこの頃癒えにけり収穫（とりいれ）にむかう空は晴れつつ

同

めずらかに空晴れぬれば病む母も布団干したまえり日向に出て

同

父と呼び子といいながらした心相なじめねばさびしかりけり

同

夜に入り燃えつづく野火は折からのふきしく風に火の粉あげたり

一九四一年

窓の外の穂草おどろに吹きなびき影寒々と夕さにけり

同

葡語学ぶときおい夜学に通いつつ仕事づかれの頭に入らず

同

池田 重二

終日を若芽喰いあき牧牛は搾乳所（たまり）に集い日ぐるる  
を待つ

一九三八年

カタカタと播種機（マキナ）の音は響けども人影みえぬ霧の  
焼け山

同

遠近に山焼く煙空にみちて冬日ほのかにくれそめにけり

同

ひたすらに母思いつつ年ふれば文かく事もうとくなりたり

一九三九年

移り来しわが同胞の誰もかれも子の教育に思い煩う

同

得意げに農村繁栄を語らうは鋤に親しまぬ移民等なりき

同

父母も妻子もなくてこの国に住みわびにつつ七年を過ぐ

一九四〇年

今井 白鷗

濃緑の珈琲園に夕陽落つほのかに温き柱に椅れり

一九三〇年

パイネーラのほの紅の花の色夕暮淡く月に浮かびぬ

一九三〇年

伊藤 掬泉

五年はふるさとごとをくりつつも異郷の土に馴れしこのごろ  
一九二二年

岩波 菊治

赤道を越えて幾日夜毎に高くなりしよ南十字星  
一九二五年

あかときの山は静けし焼あとに烟は低くなびかいにつつ  
一九二七年

折々は猿（ましら）も出づる山中に妻と我が住む家建つるな  
り  
同

常夏の国とはいえどマンジョカの葉の枯れおつる時となり  
し  
同

いかずちの雲にかも似て遠空に山焼く煙高くあがれり  
同

山焼の時も過ぎにし此頃やさやかに空の澄み渡るなり  
同

倒れ木に日除を吊りしその下に昼餉食すなり妻子と共に  
一九二八年

父母よ喜び給え我が生まれし村の広さの山求め得し  
同

醤油も味噌も我が手に作りつつこの国住みも三年となりぬ

同

幼子を新墾原のま日中に日々連れ行きし事を悔いおり

一九二八年

珈琲の植え並青く見ゆるなり刈り乾きたる陸稻畑に

一九二九年

いささかも肥料はせねど畑つ物なべてみのれりうましこの国

同

土人らが小屋掛けしたる跡どころ雑草の中にトマト熟れおり

同

この国のくらしも慣れつ朝なさな熱きカフェーの濃きをたの  
しむ

一九三二年

革命戦いつ果つるべしと思おえず村の物資は乏しくなりぬ

一九三三年

珈琲を先売りしたるそこばくの金は忽ち使い果たしぬ

同

病みあとの身は力なしマンジョカを掘りつつ直ぐに汗は流れ  
ぬ

一九三八年

いついつと帰る日知らぬ故里の信濃の国の山川を恋う

一九四〇年

砂蚤の袋を除りし蹠がいたくも痒し夜の小床に

同



フエイジョンに黍の粉かけて日毎食す慣れては旨し米高ければ  
同

池田 春郎

くろぐろと天地くぎる地平線の暁の空は明るみそめたり

一九三七年

石火矢 秋香

うずたかく積みたる珈琲匂うさえ南の国に我が来しと知る

一九三七年

今本 金鐘児

晝かけて降り続く春雨を侘びしみ居ればビンチビー鳴く

一九三八年

雫する背戸の木立に夕日さし今さわやかに雨あがるらし

同

いこま なみを

良き人よと我をほめにし異国娘の眼の青さなど忘れがたきか

一九三九年

いみつつもあり経る異国いつ知らず言葉づかいもなれしこの  
頃 同

戦死者は皆吾が友と便りありこの日力なくコーヒーもげり  
同

生 田 静 夫

人夫等は事もなげに友の柩を埋め終りて煙草吸いおり  
一九四〇年

池宮城 積 功

わが臥せる部屋にて邦人がひそひそと金策しおり棉作者なら  
む 一九四〇年

飯 塚 末 太 郎

鹿を逐う角笛の音聞えしが暮れゆく森に銃響きけり  
一九四一年

井 本 惇

切り倒したペローバの幹に跨りて空腹にうまし昼の飯喰う

一九三六年

三人の弟の髪をつみ終ればこの日曜も半ば過ぎたり

同

コーヒー樹の僅かな影にもぐり入り犬の如くに眞昼を憩う

一九三八年

五月未だ繁る青葉をわけて摘む珈琲は紅しつぶら実の珠

一九三九年

宵月夜珈琲煎りし残り火に薪を足して落花生も煎る

一九四〇年

ジャラグワイの穂向きになびく夕煙あわわとして草にこも  
りぬ

同

夕蛙啼くべくなりぬけならべて野を焼く煙空をこめたり

一九四一年

黍皮にきざみ煙草を巻き給う吾が老父の骨太のゆび

同

牛を飼い珈琲つくり外国の国原に吾が住みつぐべしや

同

同郷の人幾人か帰国して幾人か永眠（ねむ）るこの国原に

同

一 木 蘇 花

磯け山の灰の匂いの来る小屋で雨をききつつ播種機（マキナ）繕う

一九三六年

春の日の風のさやけさ珈琲をいれる厨の窓を過ぎゆく

同

焼け山の小屋に小さくなりながら種蒔き止めて雨宿りする

同

鐘が鳴る耕地の朝の薄雲りなき渡りゆくマリタカの群

一九三七年

サントスの外海はすでに明くるらし島山越しの空の明るみ

一九三九年

陽のさせるアルト ダ セーラの山裾は湖のごと霧沈みたり

同

同胞の漁師住むてう入海の岸の青草に潮満てるかも

一九四〇年

ひとときは日本学童ら駆けおりし校庭の枯草に秋日しみ照る

一九四一年

我が丈ほどの青麦畑を分けゆけば真昼乾かぬ露散りかかる

同

上 野 紅 陽

もの言わぬ父ものいわぬ子が鋤を引く意見別れしその日の裏山

一九三六年

浅緑の新芽さやかにしみじみと焼山に注ぐ春の雨かな

一九三七年

大過なく過ぎし六歳母上は只寺なきが淋しと言えり

同

浮 草

あえぎつつ火の粉飛ばして行く汽車は医師のいるてう町に着  
きけり

一九三六年

上 岡 光 子

汗ふきてうち連れ帰る夕方の風もさやけき棉畑の路

一九三八年

月冴えし外に出づればはるかなる牧場に白く牛の影見ゆ

同

遠近にランプの光淡くして淋しきまでに静かなる村

一九三九年

牛 窪 星 泗

身のいたみひとりこらえて遠方の丘ゆく牛を見つつ吾が臥す

一九三九年

堀立の小屋のひと間のおきふしやつつがはあらで若きふたり  
あり

一九四〇年

柩埋め畢えぬを雨の降りいでてみ墓の穴に水の流るる

同

梅 木 幹 弘

紀伊水道をひた南下する移民船の祖国を離（か）るる水脈を  
みつむる

一九三五年頃

梅 木 けさを

うずまきて流れ明るく夕映ゆる河心にカノア向きをかえたり  
上り下り着くべき船はみなつきて町はしずかに灯りたりけり

一九三八年

同

翁 長 助 成―白水郎―

二た月の航海おえし喜びかさざめきあえる船舷の群

一九一九年

おもたげに信玄袋背負いたる少女をなぶる熱帯の雨

同

古里に貧しく老ゆる我が父の還暦の日を思い涙す

一九二〇年

## 大花 きみの

この国に来て早や六歳唐黍をかぐ手の指のかたくもなりぬ

一九二九年

死ぬるまで百姓仕事を喜びてこの地にわれは果てんと思う

一九三〇年

伯語もて話し遊べる吾子見れば淋しと思う時もありけり

一九四〇年

いささかの小遣い子等に与えんと茶の芽つむなり昨日も今日も

同

十余年住みにし土地ぞ木々は皆太りて高く空にそびゆる

同

夫の言う移転話を聞きつつも尚今の土地に執着があり

同

馬使う術にも慣れて農婦吾早十余年此処に住みぬる

同

リベイラの水の流れは変らねどコロニア人は代り変りぬ

一九四一年

小川 碧水

山伐りの斧音高き処女林の奥探くイペの花盛りなり

一九三四年

森逕を辿りて行けばかすかにも耳に入り来るマシャデイロの  
唄 同

雨晴れの眩野遙けくゆく汽車のさやかに白き煙ひきつつ

一九三六年

押川 青波

マンチケーラの山脈下にその昔吾が住める家小さくぞ見ゆ

一九三六年

パルミットの壁にうつれる我が影の淋しきままに夜ぞ更け行  
く

同

大橋 武三郎

肩や腕のいたきをたえて妻とともに山散らしに行くコロノの

我は

一九三七年

眼をやれば赤土煙の中に立ち鋤打ちふるうわが妻もまた

同



岡 めぐみ

仕事なしとむげには断わりかねたりきあまりにも老いたる力  
マラダなれば

一九三八年

棉摘みを止めて帰らむ夕闇の我が家の背戸に風呂の火燃ゆる

同

奥 田 葉 吉

正札を高しと思うは日本の値段の記憶まだ去らぬなり

一九四〇年

乙 村 政 雄

移り来て二十年経れど我未だコケーロの家に住みて貧しく暮  
らす

一九四〇年

大 平 忠 男

久々の雨をよろこび棉蒔けど棉より先に草生い敷きぬ

一九四〇年

緒方新男

言いつのる同胞なりきしどろなる葡語を哀れと心を寄せき

一九四一年

大野綾子

常夏の国の初日は雲深くいかずちの音もとどろきにけり

一九一七年

隠岐多 春陽

コーヒー摘む首の疲るる時たまに休める如く物を想えり

一九三六年

パトロンとコロノいささか争いてタベコロニアいたく淋しき

同

一枝の若葉手向けぬ古ぼけし十字架（クルス）や寂し山路の  
辻に

同

丘の道一人歩みてゆくりなく見つつ寂しきコロニアの昼

同

うす緑珈琲若葉の柔かさ噛めばほろほろ苦き味する

一九三八年

降りきれぬ空夕まけて黍畑に明るくなりて風立てる見ゆ

一九四〇年

何時しかに会釈かわしつつカボコ等と語りて悔いぬ我とはなれり

同

此の国に来しよろこびの一つなり野猪の群を具さにぞ見し

一九四〇年

春の野の目路はろかなるみちの涯黄に咲く花はイペーなるなし

同

長内 チェ

なだらなる山の肌えにしらじらと棉の実ふきて秋は深めり

一九三八年

太田 菊野

ミシンふむ窓に西陽のさし入りて白き服地の反射目に沁む

一九四〇年

紫陽花のほこれる株の葉がくりにマンガ生え居り皮をかむりて

同

感激の涙しきりにぬぐいつつこの夜くだちに陣中短歌読み居

り

同

いささかなれど吾が身をこらし日本に献金せんと煙草絶ちし  
老父いとし

同

官憲のすきをぬすみてふところに読本かくして夜学に行く吾  
子

同

沖 田 宵 星

サツク着て焼野横切る黒ん坊の息が眼に見ゆ今朝の初霜

一九三六年

今日も又疲れて鋤の土落し明日の仕事場にかくして帰る

一九三七年

住み古す椰子の木壁の下に咲く日本種なる白菊の花

一九三七年

霧こむる朝の牧場に乳牛の追われ来るらしどよめき聞こゆ

一九三八年

尾 鈴 山 子

山畑の真昼静かに夫といて穂に出てゆらぐ草たおすなり

一九三八年

小田切 剣

病む妻を守りて久しも外つ国に來し鋭心も失せむとす今は

一九三四年

貧しき生計の料にせむものと親子の山羊を手離しにけり

一九三六年

コジンニヤの隅におきたる馬鈴薯は忘れて久し芽をふきにけり

一九三七年

なじみうすきバウルーの町に妻を逝かせあわただしくも年くれんとす

同

朝をなく子にかかずらい久々に炊くフエイジョンをこげつかしめぬ

同

死ぬる身の己れは言わず生き残る我をあわれと言ひし妻はも

一九三八年

つのぶえを吹きならしつつ牧よぎるネグロは言わず手をふりにけり

同

行きずりに礼して通る村人のネグロは町に勤め持つらし

同

バルサ守るネグロの小屋に雨をさけ濡れし上衣を火にかわかしむ

一九三八年

雨に濡れし上衣ほす間をもてなしてネグロの妻の我にやさしき

同

ただならぬ時世に生れて己が錢（ぜに）を祖国（くに）に捧

ぐる子に泣かされつ

同

荒れ山を鋤きて植えたる蜀黍の代さえ祖国に子等は献げし

同

原始林は裏庭つづき家近く来て鳴く鹿を二夜ききけり

一九四一年

大原友蘭

ゆとりなき生活に生くる今年又郷里送金は覚束なかり

一九四一年

小畑葉露

プラント機の快き音ひびきけり土くろぐろき畑のうねりに

一九三〇年

小原睦子

山を越え訪ね来し友送り行く流れの際に夕顔の咲く

一九三一年頃

マット隔て入植者在れば昨夜より木の間を洩るる灯が一つ見  
ゆ

一九三三年頃

寝姿を整えやれば早口のブラジル語にて寝言いう子よ

同

尾形 天涯

夕早き食卓に独りピンガのむ老づく父をかなしみにけり

一九四〇年

河南 節子

つつましく土に親しむ一人をめぐりて鳴ける昼のこおろぎ

一九二九年

華 潮

その昔ブグレ住みしと人の言う山開かれぬ同胞の手に

一九一七年

水の如き粥すすりつつ植民の成功急ぐを思うて悲し

一九二〇年

川 の 村 人

我一人フオイセを杖にたたずめば雪の如くに木棉散り来る

一九二二年

コロニアに豚よぶ声のきれぎれにきこえて秋の夕しずかなり

一九二二年

川上 春吉

余念なくむしる珈琲の手をとめて牛ほゆるきけば昼近きかも

一九二二年

かつら子

朝風は流るる如く吹き入りぬとのもに繁き青葉のかがやき

一九二九年

白雲は遠き牧場に小羊の群れ居る如く空に浮かべり

同

川原 比露思

春浅き珈琲園に大根の花白々と咲きていにけり

一九三四年

春の風吹き過ぎて行く珈琲園わがいる樹蔭の光青しも

同

鍬の柄でマモンとりいる女ありうらら夕日をまともにうけて

同

梯子によじ珈琲もげばかたむける冬の陽ぎしの我が目に眩しも

同



炎天の下に夢中でわが引ける鋤の光のいみじかりける

一九三五年

白雲のうわ光りつつ山焼の煙静かに片なびきすも

一九三九年

春あらし今日も一日を吹くならしバルバ　デ　ボーデの草光  
りつつ

同

新聞の帰国挨拶眼にとめぬわれにかかわりなき人なれど

一九四一年

夜に入りて樹海を渡る風の音潮騒に似しといねて聞きおり

一九四一年

牛も飼い豚も飼いつついささは落ちつき得たりとひそかに  
思う

同

## 開　沼　　貴　代

冬がれの落葉散りしくカフェーに花咲き匂うひと枝のあり

一九三五年

わき上るその項は雲となり遠山焼きの煙は雄々し

一九三六年

今年こそは今年こそはと三度目の棉摘む秋もちかづきにけり

一九三七年

心なく戦況記事を読み過ししが弟はすでに出征し居りしなり

一九三八年

この日頃山焼く煙天地（あめつち）にみなぎり満ちて照る陽が昏し

同

かくもせば野菜とれむときおいつつわずかの濕地日がな手入れす

一九三九年

老いまさるみ姿遠くしのぶのみ故郷の母に会うべくもなし

一九四一年

乏しさを時には嘆け山住みの穏しき業（なり）に足りて在り  
経る

同

此の国に二人の子をば生みなして帰国（かえ）るのぞみも薄らぎにけり

同

情報の絶たれデマ飛ぶ中にして祖国の力疑わずいむ

一九四三年

購いし新山（やま）に移れぬ法令（レイ）いでて古地に桑植え蚕を飼わむとす

一九四三年

葛 西 妙 子

目のとどく限りは白き棉畑にひねもす我は棉を摘むなり

一九三七年

目を閉じて野風呂にひたりふるさとのいで湯の秋を思うこの  
頃 同

水汲みて薪拾いて棉摘みていつか四年の秋を送りぬ  
同

生活の苦しさは言わず空青く常夏の国と友に文書く  
同

秋となり棉を摘めども自（し）が嘆き邦語教育にかかわりて  
あり 一九三八年

富を得て帰る人あり吾子を連れてわが帰りゆくは何時の日な  
らむ 同

朝の光うつらう早し天つ日は椰子の梢を高照らしつつ  
一九四〇年

手づくりの眞棉伸ばしつつ幾年もかえり見ざりし夜着をつく  
ろう 同

統制のきびしき祖国偲びつつ青空の下に安らけくおり  
一九四一年

唐 沢 正 徳

この年の棉を蒔き終え雨待ちつつ夕暮道をのろく歩めり

一九四〇年

故里の父のみ墓は荒れしならむ守る者なく七年を経つ

一九四〇年

唐 沢 恵津子

いりたての珈琲ひけばほろ苦き香りただよう昼の厨辺

一九四一年

河 村 哉太郎

人氣なきこの山里に逝きし吾子箱ごと我は担ぎてぞ行けり

一九三六年

黒人の児等と並びて逝きし吾子の異国の土は余りに重し

同

假小屋に森の夜風をききながら静寂の部屋に亡子（こ）を守りけり

一九三七年

学校にも行けず畑に子守りしつつマモンの笛を吹く子よ哀れ

同

新しき藁の匂いをかきながら棉積む小屋の屋根ふきかえる

同

山に移て幾日もたたず逝きし子にそえやる花も無き吾なりき

一九三八年

金足らぬ日を堪えて来て早稲の穂のかたむく見れば心足らい  
来

同

山ひらき此処に住めるは同胞か泉湧く辺に桶かけてあり

一九三九年

根づきたる草花もなし吾子が墓十字架長く蔭おとし居り

同

倒るべきは皆倒れたり虫害の棉にほのけく花の見えつつ

一九三九年

高光る風のひびきやひもすがら荒野に草の実は光りつつ

同

日並べて煙は探し新はりの斧のひびきはたゆるまもなし

同

速さかり七年は経ぬちちのみの父のみ墓もくずれておらむ

同

妻が云うふるさとの日の憶い出は夢の如くに十年ふりにき

一九四〇年

面やつれ鏡に見つつ棉積みの野良をし思えば病む身嘆かゆ

同

アローバ拾ミルの安値の棉は摘みつつも掠奪農法は我が悔い  
ていつ

同

二十軒は歩みしならむ鋤き終えて馬に餌をかい疲れつつ

一九四一年

ささやかな税務所ぞこれ州境の河のほとりの畠に立つも

金子 秀雄

死ぬ程の病癒れる妻が焚く火に暖まりカマラダに出る

一九三六年

母上の形身の着物よこのズボン隙間なき程カラピショ着けり

同

トルコ人馬より下りていささかの金催促す山散らしおれば

同

カミニョンで行く引越しの悲しさよ積荷の上にゆれる家族ら

一九三七年

原始林に今落ちてゆく太き陽よぼさりぼさりと蟻は棉を切る

一九三七年

森林の彼方より出て棉畑を越す虹すがし妻は風呂焚く

同

毒蛇の血清を買ったのでああ妻よむらさきセルの服地はこの  
次

一九三八年

歌を書くノートに俺の頭からダニひとつ落ちてやがて這いだ  
せり

同

棉かげに糞する時もこの農夫いくつも着かない玉を数える

一九三九年

ブレイジヨの向うは黒人住む家か火がつくように子が母を呼ぶ

同

ふるさとへ夢で行きにけりいろり辺に母は居ませり声をききけり

同

闇の夜の石山こえてわが土地のカピンフイーナをブーロが喰いに来る

一九四〇年

三、四日続く奥地の秋の雨背骨の中を何者か這う

同

ピンガのめば悲しみ次々湧き出るかのめばのむ程父眼を見張る

同

## 神志那 絹 江

丘の道人声すれば走り行くひそけき村落（むら）に生い立ちし子よ

一九三六年

メイアをも靴をも町の入口ではかして行きぬ山に育つ子

一九三七年

タビンニヤの屋根よりもるる朝の日をつかまんとする寝台の嬰（こ）子は

一九三七年

初棉のましろき清さみ仏にダリアを束ね今朝ささげたり

一九三八年

何をして遊んでいるや鍬とめてしばし聞きいぬ子のはしやぐを

同

カワムラ サトシ

わが生活（くらし）かくも貧しくなりてより優しき母のごと  
思おゆる妻

一九三六年

健やかに生くるところは言いやれど帰ると言えず我病みてあ  
り

一九三七年

河原 一男

船腹に描ける旗の日の丸の心に沁みて佇みにけり

一九四〇年

川原 白楊

二つ三つ蜜柑の色の黄にうれてここ南米に秋は来ぬらし

一九三〇年

海 子

その枝に小鳥数多巣くいいてゆたかなるかな牧場の大樹

一九三二年



金村孝一

汗乾き塩の吹きたる仕事着を又濡らしつつひたに鍬引く

一九三四年

山焼の無事を祈りて経を誦す父の後姿（うしろ）をあらたま  
り見る

一九三七年

朝霧にからき煙を交えつつ炭がまのあり今日も木を切る

一九三九年

官憲の家宅捜査を受けし夜は移住の意義を想いていねず

―日伯国交断絶―

一九四二年

笠石春江

カマラーダと七人の弁当は重かりきカルデーロンの豆汁こぼ  
れ固まる

一九四四年

菊地康高

エンシャーダ引きては汗をぬぐいつつ子等の働く姿いたまし

一九三二年

シネマ来し報せの花火三キロの向うの空に鳴る夕べかな

一九三七年

銀 月

鍬ついて見渡す谷の森探しパウフロールの遠近に咲く

一九二七年

遠近に芋を蒔くらし霧の朝馬馭する声頻りにきこゆ

一九二七年

清 谷 勝 馬

木つつきの木をつつく音かそけくも朽ち木の匂う冬の真昼日

一九二九年

秋たけし共同墓地のささやかな墓標を読むにすべて幼し

一九三七年

太やかの西瓜もぎりて子に持たせ心豊かに吾が帰るなり

一九三八年

仄かなる月夜の庭にシルビヤは日本の歌を唄えといえり

同

清 谷 益 次

帰り得るめあてなけれど何となく船賃下がると聞けばうれしも

一九三四年

種豆をむくとひそかに納屋におり外の面あかるき月夜なるかな  
一九三五年

むすびに添え母がもて来し一切れの胡瓜漬けはよし惜しみつつ食う  
一九三七年

故国の幼な友等はすめらぎの軍（いくさ）に起たむ五師団動く  
同

夜もすがら荒き風吹き外（と）に掛けし馬の首輪の鈴鳴りつづく  
一九三八年

切り株の燃ゆる煙の一すじになびかず昇る暑き夕ぐれ  
同

泥つきし棉花は買わぬと聞く頃を昨日も今日も荒き雨降る  
同

建艦競争激しときけば日本の経済のことをひそかに愁う  
同

わが姉等サントス港を出（た）帆つ日ぞと炊ける赤飯を我は野に食う  
一九三九年

天の川傾きながらなおしるし棉を摘むべくいでたちにけり  
同

サラクーラ声のはるけく鳴くものか朝明（け）の月はなお冴えにつつ  
同

敵弾に皇居が燃ゆる現実をうべない難く一日こだわる  
一九四五年

戦は祖国に迫り戦場の名も耳に易き硫黄島 摺鉢山

同

アツ―島守備兵全滅を慄りしが沖縄に失えるは幾万ならむ

同

祖国敗るる日の朝の街に我は聞く物売り歩く同胞の声

同

事もなく日本の勝利を言い捨ててかえりみぬ人を今は寧ろ憎む

同

金 紫 朗

山という山を枯らせし大野火の焰も今日はややおとろえぬ

一九四〇年

奇 山 生

珈琲の木の間かくれに出来ないのレンズを見ては汝を思える

一九一九年

木 安 卓 児

日本より持ち来し妻の三味線は売らでも暮し立つべかりしに

一九三六年

朝の陽は雲間ゆさして焼畑に芽生えし稲のほつほつに見ゆ

同

木村 茅里

長兄と言うをうべない幼かるこの子は母を助けんとする

一九三八年

ふるさとの信濃を恋いて声もなき友をいたわり唄うたいけり

一九三九年

歌人の中にしありていつ識らず裸身の吾となり居たりけり

同

北島 文子

怒りたる風の鞭（しもと）に身をよじてユーカリの樹はひね  
もすを哭く

一九四〇年

工藤 信平

雨風に打たれて壁にあらわれぬ塗り込められし椰子の実一つ

一九三四年

背を撫でて吾子を諭せる伯人の教師を識りて心安らぐ

一九三八年

久 高 彰

天長の佳節待ちつつ今年また棉摘み急ぐ日は廻り来ぬ

一九四〇年

パイネーラの花咲かぬまま今日もまたトツカーノ啼きて日は  
昏れんとす

同

部屋に籠り棉つめ居れば我が歌の載りたる「椰子樹」を甥  
が持ち来ぬ

同

鶏を飼い豚を養い野菜植え借地農わが心安けし

一九四一年

丈なせる雑草分けて棉拾う吾が手に触れて鶉鳴き立つ

同

黒 川 修

なげかわす五色のテープとりどりのさだめを乗せて船はいづ  
るも

一九三八年

故里を遠くも来つれ赤道の真下すぐるとり船の鐘なる

同

いつの日か又乗る船ぞサントスに着きぬときけば別れ惜しま  
る

同

洗えどもなお指にしむうすよこれトマテの芽うみて今日も暮  
れたり

同

虎 吼 山 人

愛し児の墳墓（はか）訪えば今日もまた十字架の上にチコチ  
コの啼く

一九二二年

晃 生

日の丸とアウリベルデと交叉して今日天長のよき日はうらら

一九二八年

小 石 茂 行

槻那の根をピングに入れて吞むうちにようやく我も酒を覚え  
ぬ

一九三七年

移り去る人多き秋よ向つ岡去年の如くにパイネーラ咲かず

同

便り絶えし友の行方を献金の新聞の記事に今日見出せり

一九三八年

孤 萍

妹つれて何しに来しかアマゾンにはてしなくつづく森と水の  
み

一九三七年

小 島 鷗 人 — 正徳 —

ひたむきに土に生きんと移り来て原始林深き山を拓くも

一九三三年

椰子の葉に丸太を組み立てし森の我が家に今日移り来ぬ

同

播種（プランタ）機の音かしましく聞こえる開墾村は雨季  
に入りたり

同

水嵩のとみに増えたる湿地（パンタナール）に今宵はあまた  
河豚の出づ

同

吼猿（プジュー）の啼く声きこゆ霧深く朝（あした）をこむ  
るチエテ河岸

同

孤 独 生

更け行けど暑さは止まず南球の夏十二月の工場の中

一九一七年



日曜の夜半の工場の静けさにとのいの吾はもの思いする

同

紅 月 白 舟

永住の心に植えしみかんの木すすくのびて我が背丈あり

一九三七年

紅 晴

森ぬちにおののひびきの心地よし朝餉の煙木の間よりもる

一九三二年

斉 藤 広 志

濁流の河をはさみてこみ合える此の古き町に樹木少なし

一九三七年

狭き丘に押し並ぶ家の大方は世紀を経たる赤煉瓦なり

一九三七年

雨降らねば一二寸伸びしフェイジョンのまひるは萎れつつ已  
に久しき

一九四一年

ゆまりしつつふと見し庭の芥溜にマモン生えいて寸余となれ  
る

同

夢うつつに屋根の雨音ききいしが雷とどろきてたちまち覚めぬ  
同

酒井 繁一

船体が暴（あ）風（ら）雨（し）にきしむ音のなお耳に残りて珈琲ちぎる  
一九三四〜一

九三七年

日曜を働く移民とさげすまれ我等働く金溜めむため

同

水樽（コロツテ）に残れる水を地にこぼす日の没りたれば帰らむとして  
同

黒人の傭人五人と木伐りつつ日本人われの惨めに小さし

同

百姓になりて生きたき願いすら日本に居ては叶わざりしなり

同

昔のことは皆忘れたと木田さんは黒人（ニグラ）の妻を振り向きて言う  
同

新移民にて心弱ければ言うべきを言わず無漸なる表情に落つ

同

靴をはき働くからに手に比べ足は見違ふほどに真白し

一九三八〜一九四二年

二世等に邦語を教え帰るとき伯人が示せる日本革命の記事

―二・二六事件―

同

天皇と秩父の宮と反（そ）れ給う風説も海を渡りて聞こゆ

同

体裁をてらいてもよしなし食うことが出来ず日本を出でし我なり

同

山焼の跡を見廻る靴底に地の温もりは伝わりて来る

同

永住の説もいつしか影ひそめ南洋移住の説も生まるる

同

買物に出で来し我を同胞が呼び止めて対米宣戦を知らす

一九四二―一九四五年

二世等の従軍のことも伝うれば泥手をさげて我は聞き居る

同

老獣医は開拓者なれど伯人を娶り同胞にうとまるるなり

同

敵性の民となりたる薄寒さ帰りて妻に言うも氣細く

同

独乙降伏の騒ぎ大きく買物はそこそこにして我家に帰る

同

敵艦が砲すら撃たず迫りしか我が揺藍の郷土の海に

同

「吹雪」と言う馬に乗りたしと憎々しく署長は我を訊（ただ）

しつと言う

同

坂 根 準 三 — 嵯峨 —

今日の中に何か言いたき人ひとり丘へ入る陽の真向いに立つ

一九三八年

美々しくもすこし狭霧らう落日は緋衣着けし聖徒（ひじり）  
にか似る

一九三八年

黄昏れし野の草踏めば大地（つち）深く微かに透きものの声  
聞こゆ

同

万人の飲む珈琲を焼き棄つる不思議の国に来てぞ住みける

一九三九年

新しき野の国明くる朝ぞらの大気を吸えば老いらくもなし

同

独り居て書籍置き換え列べ見るわが世の中はさびしけど良し

同

わが護る大和の民の二十万この国の上に実と蒔かれ生く

同

天つ日の輝く国の御民守る任（まけ）かしこしと西し東す

同

なお何か今日の務の存らずやと糸瓜眺むる植民地の宿

同

植込みの中に見つけし小鳥の巢卵六つあり葉を載せて去る

同

むらさきに家居霞みて街並の花ジャカラランダ今盛りなり

同

わが思いはてなきごとし西の方大アンデスへつづく高原

同

赭土を掘る夕立のまた来るか海岸山脈霧がくれたり

同

チエテ川奥地へ流れラプラタの海に入るほどながきわが旅

同

総領事として支那へ歸らむ斯く思い待つ中にあなや公使となりぬ

一九四〇年

総領事坂根準三此の名刺十年手馴れ裂くに忍びず

一九四〇年

此の邦に来ては一向（ひたすら）何事も第二世日本人の為ぞと励みぬ

同

佐原 信男

母の煮るフエイジョンの匂いにおいつつもまだ起き出ざり日曜日の朝

一九三八年

山焼きに疲れしならむに今夜また我が子はひとり日本語さらう

一九三九年

佐藤 次郎

何処より飛び火せし火かわが山は真昼の空に轟々と燃ゆ

一九三八年

佐竹 丈雨

日たぐれば背に照る陽のきびしくて言惜しみつつ棉の芽摘みす

一九三九年

正月よりものの増えるを喜びつつ吾が妻は豚の仔をいたわりぬ

同

佐藤 南風

風呂もらうとカフェの香する裏口に声をばかけて一人入りにき

年代不明

三太 世四

二十越して鋏とるすべも知らざりし身はブラジルの農夫となりぬ

一九二六年

佐藤 花情

めつきりと齒かけて老いし両親のバナナ頬張る笑顔（かお）  
も哀しき

一九三六年

雨の日に隣家は客のあるらしく犬に追わせる鶏さわぐ

一九三八年

たんたんと調子合わせて打つ豆の炎天を飛び光りりおどれり

同

植民者の非常招集に集いたる顔みな髯の黒くたくまし

同

片塗りのまま入植せし家の壁塗る暇もなく朽ち果てんとす

一九三九年

耕馬とめて畦に妹とメロン食うたつきの幸を語り合いつつ

一九四〇年

夕立雲暗くせまりつつはるかなる樹海を風の渡り来る見ゆ

同

母逝きし隣家はいかに乳呑み児のこの夜寒きに泣く声もせず

同

佐藤 文六

いささかの事に諍い棉畑の境の蟻を共に殺さず

一九三六年

濯ぎ物乾しある見れば人住むか枯野に低き草家一軒

一九三七年

春浅き丘にまろべばほの遠く鐘うつ如き夕鳥の啼く

同

カーボ採りに入りたる森のとある樹の節に真紅な蘭の花見ゆ

同

午餉時カフェ樹下に陽をさけて食べた西瓜で爪などみがく

同

鈴蛇の皮をむきつつあてもなき帰国土産にするという父

同

長雨の暫し止む間をコロニアの言い合いしごと薪を割る音

一九三八年

作も値も好調なりと移り行きてトマテ作れる友の便りは

同

夕立雲湧きて牧場の中空にウルブーの群れ輪に舞う暑さ

一九三九年

片塗りのままの墾家の壁にして幾歳月を耐えて来にける

同

陣中の兵ら想いて皺のばす銀紙に寒きカンテラの光

同

アルバムの劈頭にしてそのサイン「感激 南部忠平」とあり

同

縁ありて妹嫁ぎ行けり二昼夜の汽車の道程遠しともせず

同



拾ミルでよしと云われて買い得たり窪田空穂の「短歌随見」  
を――日本書店にて――

一九四〇年

坂 根 雪 枝

二三人白き衣着て黒ん坊の楽しげに行く街路樹の蔭

一九三八年

肩章を縫いつづくてう故郷の友の便りを幾度か読む

同

笹 舟

外国人登録の要迫りつつ村人ら皆写真屋に集う

一九四一年

笹 野 瑞 枝

汲まんとてふと見る井の面に青空と赤きレンソの小さくうつ  
りぬ

一九三六年

よき雨と言いつつカーマに身をなげし父はいつしか寢息立て  
つつ

同

桜井 健三

情しげなく珈琲畑を焼き払い棉を作るも時の流れか

一九四一年

強張りし手に見入りつつ思うなり三十路過ぎにしカマラダ我  
を

同

十四 生

枕辺に蜜柑ならべて頑是なき幼子の如く母は眠れり

一九二二年

松 風 軒

安らかに眠れるごとしコロニアの戸毎に人の気配もなくて

一九二二年

山小屋の椰子の壁より流れこむ月の光に我が身は冷えぬ

一九二五年

名も知らぬ鳥啼き去りし夕ぐれを柩を送りて帰る山みち

一九二六年

晋 一 郎

幼くて父母に連れられこの国に働き過ぎしぬ七年の日を  
一九三〇年

志津野 華 絵

明日はもう働けぬかと思う程疲れつかれて夕仕度する  
一九三六年

日曜はせめて子等と共にいて遊びてやらんと切に思えり  
同

山を捨てて聖市に行きし人の皆妻や娘を女給になせり  
一九三七年

月光をまともにうけて浴（ゆあみ）する原始の女のごと恥ら  
わず  
一九三八年

月の夜の野風呂はうれし日焼けせし我が肌さえも真白く見え  
て  
同

薄紅の小貝の如き子の爪に黒くたまれる土のかなしさ  
同

カフェ時子等は違えず遠くより草笛吹きて帰り来たりぬ  
同

巡回の教師招きて我が村もひそかに小さき学校始む

一九三九年

暮れなずむ棉畑の道ぬいめぐり亡夫（つま）を乗せ行く自動  
車は走る

同

悲しみが人事のごとうつろなる心にひびく棺つくる音

同

此の土に夫死なしめて入植の記念日今日は切なきものを

同

指先に軽き疲れを覚ゆなり棉の芽搔きにひと日過ごせば

同

病窓録と夫が名づけて送り来し日記は悲し我を泣かしむ

同

当然の事のごとくに再婚の話すすむる人と居対う

一九四〇年

珈琲を焙る香漂う朝霧の冷たき中に棉摘み急ぐ

同

起き伏しを喪に籠らいて過ごし来し夫の忌日の一年を迎う

同

吾がひと世ついに農婦となりしまま過ぎ終らんか悔ゆるにあ  
らねど

一九四一年

亡夫（つま）に代りて家を興（た）てむと鋤とりてかにかく  
も経ぬ二年の日を

同

風よけて子等の遊びの日蔭にと亡夫が植えたるパイネーラ咲  
く

同

君がみ骨抱きて故郷に帰らなむ願いもいつか失せゆかむとす

同

椎 木 文 也

白雲のひねもすかりいたりけるテレゾポリス嶺に月あらわれぬ

一九三八年

高山の夜は冷え渡りアルゴ―座澄み定まりぬ頭上に低く

同

大西洋の南雲厚く迫りたる渚に群れて鷗動かず

一九三九年

日本には何日（いつ）帰れるか朝な朝なアメシアの新芽延びゆくを見つつ

同

月更けて寝しずまりたる病院の熱帯樹林にわが靴の音

同

強烈に日の照る椰子の並木道邦人の棺さびしく通る

同

邦人の柩埋めて立ててやりし日本の線香のけむり乱るる

同

しんしんと朝日かすめるリオ湾にあるぜんちな丸は静かに入り来る

同

伊国船と英艦の間に日本より着きし巨船が横たわりたり

同

リオ湾を出でし日本の大船が夕霧の中に終にかくれぬ

同

大西洋は静かに明けぬアンデスを日本号は越えつつおらん

一九四〇年

ニッポン号の大きプロペラ止りたり手を挙げし操縦士の齒は  
白かりき

一九四〇年

ビンテビイ鳴かずなりたる日暮時われは病み臥す妻子と離  
(さか)り

同

土人らの住みいたりけん岩窟に海より出でし日はさし入りぬ

同

青空は澄みてはろけし土人らの踏みけむ土に鍬うちおろす

同

魚を食みバナナを食みて土人らは此の青空のもとに生きいし

同

仏桑花の花ひらきつつしぼみつつ海靄深き日々はつづきぬ

同

フロラ ジャポネースと言える白蘭に似し花に雨の一日を対  
いてありき

同

プリマベールの花衰えて朝な朝な小鳩の声はうつつに還し

同

妻子らを帰して既に三年(みとせ)経ぬ水平線に雲おぼろな  
り

同

如 星

一万里北と南にさかり居て病める子思い悶えいる父

一九一七年

塩 月 修一郎

もろこしの枯葉のもとにそだちたる莢ささ豆の脹らみのよさ

一九二九年

暮れ迫るひろ野の涯に人動き空の下びに野火燃えさかる

一九二九年

渋 川 不二夫

四十度の熱にうなされ弟は草除る草除（と）ると口走る夜半

一九三六年

向う岸の坂下り来し黒奴はバルセーロならむ顔洗い居り

一九三九年

煉瓦やく赤き瓦の屋根見えてバンデイランテの町近づけり

同

霧にぬれ珈琲採集に出で行ける人等の中に教え児も見ゆ

同

バルセーロの操るカノア朝の陽を浴びて漕ぎ来も此方をさして

同

水の上をすべるが如く我が乗れるカノア漕ぎゆく朝のシンザを

同

パーをもて流れ漕ぎゆく黒奴の昔語りに耳そば立てぬ

同

セマーナの昼の陽ざしを背に浴びて歩む荒野に人影見えず

同

遠近の豆打つ音のさわやかさ冬晴の空に響きてやまず

同

片照りの丘に立ちたるペローバの梢のあたりトカーノ啼けり

一九四〇年

清水 百代

木の間洩る日かげよぎりて飛ぶ虫のたまなま白くきらめきにけり

一九三四年

黒人の子等まろびおる焼砂の道辺にあかき日照草の花

一九三七年

雨期もややたけゆく頃を鳴き出でて一つの蛙夜をきこえ来る

同

川ぞいの一筋白く霧なずみバウルーの町は朝あけんとす

同



夫おらぬ家の日暮れの寂しきにバナナの広葉風にゆれいつ

同

子と二人見下す町は沈む陽の赤きに映えてはるかなるかも

同

一と所影を落として浮き雲の移りゆたかに野をよぎる見ゆ

同

昼の陽の光あまねき牧原に子づれの牛の草を食む見ゆ

同

山畑の東へゆるく傾きてふもとの道を人のぼり来る

同

山原の枯草の穂をすれすれにかすめて早き鳥は野鳩か

同

眼下（まなした）の牧場を白く迫り来る日光の移りすみやかなるも

一九三八年

## 蕉 風 軒

三番摘みの棉もおおかた摘み終えて負債（おいめ）償い心なごめり

一九三六年

## 鈴 木 南 樹（貞次郎）

この愁い消すべくもなし木によりて自ら捨てし心を笑う

一九一八年

うらうらにイペ咲く家に日本より日傘をさして移民着きたり

一九三四年

荷物自動車（カミニヨン）の上に日傘をかざしつつうらうらの日に新移民着く

同

鈴木 久米雄

ブラジルに来たりて早やも八年を経しと母親淋しく笑う

一九三二年

幾年を経てもコロノの暮しかと言われて吾も悲しかりけり

同

年ごとに移りて住めば来年はどこへ行くかと子らの問いける

同

金溜めることも思わずサンフォナ弾く黒人を羨しみにけり

同

す ま 子

山々の峽に古りたる教会の塔ある村は静かなるかな

一九三八年

鈴木 愛果

鍬とりて先ずわが土を入れにけり母のみ柩に落つるその音

一九三三年

葉がくり数うるばかり珈琲のつぶら赤実は見えそめにけり

一九三四年

すみ子

秋なれば夜毎に深かむ霧の中に灯火黄なるサンパウロの町

一九二七年

緋の翼はろらにかけるアララの声けざやかに森は晴れたり

同

行き行けばパウダーリオの香鼻をうち森のうれいは吾を囚うる

同

寸 南

同航の友の一人は故郷に帰るてう広告を吾ついに見し

一九三六年

夢見よければロテリアなど買いてはと語りて妻は淋しく笑えり

同

須 貝 富美子（さだめ）

月紅く野火にかすめる枯野行く二つの騎馬は夫婦なるらし

一九三六年

我が背の子は眠りたり高台の月明き畑にトマテ移植す

一九三九年

盲腸の予後なる夫は恐々と畑の高处に水かつぎゆく

同

売上げは二十ミル余のフェイラより大雨に会いて夫かえり来ぬ

同

コンデにて腹一杯にまんじゅうを食べる身分になりたしと言う

一九三九年

貧しさのさなかに生まれしこれの子の次男の弱きは栄養不足か

同

朝な朝な衣の裾をひきずりて尼僧は白き階（きざわし）を拭く

同

フェイラにて求めし草の名を知らず十日まりにて小さき花つく

一九四〇年

末藤 弥寿太

久々に通りてみればここもまた切り開かれて棉植えるらし

一九三七年

ながながと棉葉をかつぐ蟻の群流るる如く道をよぎれる

一九三八年

穫り入れのすみし頃なり行商のこの山奥にあまた入りきぬ

同

待ち待ちし雨は来たりぬ穂孕める稲の蘇生を家に居て思う

一九三九年

荒れはてし隣耕地のマルゴーズ打ちなびくかも日和つづけば

同

今日もまた煙に染まり太陽は血色にてりて椰子かげにおつ

同

いずくにて山焼くらんか畑に居て草除り居れば一日灰降る

同

おぼろ夜の背戸につづけるカフェ烟花の匂いのほのかに漂う

同

われもまた祖国に在りなば銃剣（つつ）とりて皇国の楯にな

らんとぞ思う

一九四〇年

来年はマモナも高値と思いつつ少し無理して種をおろせり

同

いつしかに秋とはなりぬ棉摘みの日雇（ひやとい）あまた村  
に入り来ぬ

同

うす暗きランプによりてわが姪は母に日本語を習いはじめつ

同

聖州を貫き来たるチエテ河水の流れは見つつあかなく

同

幾千の牛放ちあるチエテ岸牧場のはての山は霞める

同

珈琲の安値はいわず今年この豊かな収穫に心足らえり

同

秋の陽の暖く照る棉畑に残りの棉を摘み急ぎおり

同

住 吉    光 雄    — 砂丘 —

青き燐光あげて火は燃ゆ卓上にこぼれしピング精霊の如く

一九三二年

珈琲の青葉ふくらむ季節にて山焼くけむりたちのぼる日々

同

製材所の汽笛か遠く森越えてこのたそがれの畑に聞え来

一九四〇年

ハワイ真珠湾攻撃さると繰り返すけたたましき叫び挙げいる

ラジオ

同

瀬崎 涛声

風寒き煙雲りのひるさがりおどろおどろと雷の鳴る

一九三三〜三九年

木の根焼くけむり静かに立ち昇る開墾畑の春のたそがれ

同

霧しずく落ちて冷たき朝山に心はずみて樹を伐る我は

同

日並べて我が伐り伏せし雑木林見つ親しき仕事の帰り

同

焼け山の雑木の根株掘りている夕べを寒くふり出でし雨

同

ひさびさに降り出でし雨をよろこびて濡れつつ帰るに焼け木の匂い

同

帰国など思いもよらず六年越し生活（くらし）のことに追われ来にけり

同

はるばると金の工面に来たりけり汗まみれなる乗馬（うま）の哀れさ

同

この頃はあぶら草野の花ざかり日に日に空は晴れ渡りつつ

同

出稼ぎの身にしあらねど金を待て人の帰国（かえ）るを聞けばさびしえ

一九三九年

正月にふさわしからぬ此の国のこの蒸し暑さ雑煮食しおり

一九四〇年

秋晴の耕地（ファゼンダ）をゆく汽車ゆ見る丘のなぞえの棉  
摘みの群

一九四〇～四五年

奥地行きの汽車待ちわびて居る駅の朝（あした）を寒く雨は  
降りつつ

同

聖州とミナス州との境なる尾根の高きに馬鈴（いも）著を作  
れる

一九四〇～四五年

今日も来てトマテ撰りいる納屋先の木々明るくも芽をふきに  
けり

同

仙 田 満寿子

父逝きて二十七年過ぎしきよう我はブラジルに住みて病みお  
り

一九三九年

仙洞田 武 定

ミナスに家族持つてうカマラダの唄う調べは身に沁みてきく

一九三七年



瀬古 義信

我が父の墓土固くかたまりてその枕辺の木偶（でぐ）の十字  
架  
一九三五年

多 故 しげる

借金のこと思われてたどたと雨降るなかに刈る稲重し  
一九二七年

多羅間 絹子

夕やみのせまる埠頭に立ちつくす友等の顔の見分けがたしも  
一九三八年  
十年ぶりに訪う故郷のことよりも心ひかるるブラジルのこと  
一九三八年

匠

生々と伐り倒されし大木の葉裏白々と強陽照るなり  
一九三〇年

谷垣 芳月

春寒し細き流れの洗い場に日本鍋一つひたしありけり

一九三六年

やせ馬の背に僅かなるバナナ積み売りゆく翁の声あわれなり

同

武田 忠男

ふるさとの信濃河原の夕映えを想いつつ牧場さまよいて行く

一九三六年

田代 寅五郎

片腕となる日の子のこと語りつつ心楽しく妻と棉摘む

一九三七年

田代 章子

鈴なりのマモンをあまたちぎり来て切り干し作りぬ秋の夜長  
に

一九三七年

武田 静

日本語学校閉鎖の記事見つつ湧く悲しみは消さむ術なし

一九三八年

抗し難き法の前には児等と俱に唯嘆かうもつつ国びと我は

同

谷 口 洋 子

ようやくに棉植えすませしうら安さ降りしく雨を聞きつつ眠  
る

一九三八年

橘 秀 子

たまさかに町に出づると我がつけしお白粉濃きを夫に叱らる

一九四〇年

滝 谷 儀 助

ここだくの花落ち新芽落ちコーヒーの寒々として雨に打たる  
る

一九四〇年

武田 一淋

棉売りに出づれど余り安ければ店から店へ歩き巡れり

一九四一年

高林 明雄

低地にて蛙わめくを赤土の丘に住みいて夜な夜なにきく

一九三六年

雨来むと人等家路に急ぐ頃畑中にして草焼くる見ゆ

一九三七年

谷垣 光枝

我が移民史のその一頁に涙もて記されてある吾子の墓所

一九三七年

購いし土地に住めども安らわぬ想いたゆとう移民我らは

一九三九年

熱帯と思いて来しをこの国にかく水冷ゆる冬もありける

同

武 夫

採集の間近き畑に追わるるごと秋の準備の小屋建て急ぐ

一九三八年

田 淵 浩

棉作者の決算知らずか棉摘める黒人吾等の生活（くらし）羨しむ

一九三八年

武 本 由 夫

いささかの恙ながらに寝くたれて朝はカフェの少しくにがし

一九三六年

あらたまの年の始かの祝詞にも暑さを言いて怪しまざりき

一九三七年

ワイヤーのにぶき唸りをききしより汽車の降下が意識にのぼる

一九三八年

社会面を担当せしより妻子らと共に食すさえ稀々なりき

一九三九年

夜半にさめて乏しき銭をかぞえたるはかなき心は耐えて語らず

一九四〇年

隣席に黒人の男女が乗り込みて傍若無人にあらそい止めず

同

たまわりし日本茄子はやわくして齒の悪き妻が食いおしみた  
り

同

錢撲ちてえらぐ子等見つ此の国の趨かむ末に想い至りぬ

一九四一年

沈みゆく霧の彼方に連なれるミナスの山やいやはるかなる

一九四四年

玉 木                  梅

満員にためらう吾を片寄りてかけよと招くニグロの娘

不 詳

見上ぐれば雨脚早くそそりたつこの岩山も動くがに見ゆ

同

目路はるか幾尾根越えて連れるミナスの山は雨に煙ろう

一九四〇年

高原を走る電車に日本語を巧みに話し外人の居り

一九四一年

谷

佐椎子

野菜畑の隅のあき地に去年植えし芙蓉は細き芽を出しにけり

一九四二年

小豆の花つくづく見れば故里の野に摘みにける紫雲英を想う

同

小雨降る日は窓しめてなお寒し部屋にこもりて姪を遊ばす

一九四五～六年頃

クワレズマの花折りもちて帰る道夕べの雲に茜さしたり

同

厨べの窓のガラスをふき清め素枯れ初めし篠懸を見る

同

千代子

夫の乗る馬の後に我も乗り今年の稲の出来を見に行く

一九三八年

朝来生

月白き夜をば路ゆく外人の爪びくギターかすかに聞こゆ

一九三四年

積田 三郎

医師の打つ最後の注射断わりて逝きにしと言う教え子哀れ

一九三八年

教え児の墓を尋ねて一つずつ日本文字の墓標読み行く

同

国禁を犯す教師はかむごとく日本歴史を子等に語るも

一九三九年

人來れば我より先に子等はみな教科書を閉じておののけるあわれ

同

巡回の日本語教授つつがなく今日も終れり有難きかな

同

もつれつつ二人の吾子の高笑いキヤボの畠の奥にひびけり

一九四〇年

土屋 為三郎

胴を締めれば紅き舌はきて怒り立ち鈴蛇は尾の鈴をうち振る

一九三九年

聖州のはたての崖に佇ちて見るパラナの河の白きさざなみ

同

棉の値の日々にのぼると百姓ら憑かれし如くきおいはずめり

同



賭博農と識者らは言え我も亦かく物植えて十年在り経し

一九四〇年

昏れなずむ木の間の徑に聞くものか樹上に啼けるけだものの  
声を  
同

土屋 紫晶

継ぎはぎのズボンにつきし草の実を数えつつ取る冬の日ざし  
に  
一九三六年

カンテラを点して徑をもどり来れば息を吹きつつ吾が馬の寄  
る  
同

値切るにはあまりに佗し行商の人うら若き同胞（はらから）  
なれば  
一九三七年

坪内 広代

山吹きの上輪咲けるをしみじみと顔よせてみつ日本莊園に  
一九三九年

吾が歩み人の歩みの大方も見ゆがに思う四十路に入りて  
一九四〇年

山焼きの跡しるきかも青草のほのかに萌えて灰のおえる  
一九四一年

生まれたる国によく似し山ありてモジの町居は親しかりけり

一九四五年

戦いは四年に入りぬ老いらくの我が母憶えば耐えられなくに

同

輝 生

鞭くれてボテキンの前過ぎる耳にフイスカール フイスカールと土方共私語す

一九二八年

寺 岡 晃 児

山伐りの音遙かなり鋏止めて木蔭に憩う午后のひととき

一九三七年

移り来て語ろう友も未だ得ず草原の路の夕映えに佇つ

同

T 生

夕されば灯を入れしコジンニヤにケイジヨの匂い漂いにけり

一九二六年

哲 郎 生

フエイジョンの皿を眺めて何となく単調過ぎる寂しさがあり

一九三二年

富岡 清治

リオ デ ジャネイロなみうちぎわにおりたちて日本と砂に  
書きても見たり

一九二四年

イペの花一本咲ける谷の家に野菜作りの同胞（ひと）住むと  
言う

一九三六年

手ずからに子の墓たててぬかづけば涙は出でずむなしき心

同

広からぬ墓地の一部をくさぎりて墓守ならむフエイジョンま  
きたる

同

きのうあたり埋めたるらしき新墓の墓標の文字に同胞と知る

同

北米のドルならばなどと話しつつ棉売りし金を国に送る人

一九三八年

田舎駅貨車のあたりにこぼれたる棉花にまぶしく秋の陽のて  
る

一九三八年

遠山湍水

馬とわれの影を夕日のうつしけり今耕やせる畑のうねりに

一九二九年

朝からの小雨そば降る家の中に珈琲を炒る香り満ちたり

一九三〇年

故郷にかえらむ望み遂げずして母ブラジルの土となり給う

一九三三年

新しき家に移りて母なきを淋しむ夕山焼きの見ゆ

同

木の実食う野猿の群を見ることがもしばしばありて山に住まえる

同

かすむ野の果にいくつも山焼きの煙立ちつつ赤き日の入る

同

十字架に南無阿弥陀仏と記されし母の御墓に風吹き渡る

同

棉売りて黄昏時に帰る道ジャラグワイの穂に風の冷たし

一九三四年

桃の花咲きて霞める町外れ鶏下げし黒坊通る

一九三

六年

うららけきジーン サントなり家に居てブーロのたてがみ刈り揃え居り

一九三九年

道の辺の十字架半ば朽ちかけて百日草の花咲きにけり

同

川べりにオンサは棲むと村人は髭づらあげて事もなげに言う

一九四一年

徳尾 溪舟（垣寿）

おちこちに白きパンノの見えつつも稲打つ音をきく日和かな

一九二九年

六歳（むとせ）して異国娘と戯れ言を何時しか交わす我とは  
なりぬ

一九三〇年

何処よりか味噌汁の香の快くにおう夕べのコンデ街行く

一九三四年

洗えども洗えども落ちぬ手の汚れかくして土になじみ行く我  
か

一九三五年

日に焦げて荒れし手見れば自ずから諦めに似し思い湧き来る

同

雲垂れて珈琲の香いこめし街うる覚えのルア行きつつもとな  
し

一九三七年

独逸訛り多き伯語の独逸人と入り組める交渉しつっいらだつ

一九三九年

日本人街を行きつつ今日は幾人も顔見知りなる人達に会う

同

富吉 好人

花咲きし棉に夜雨の降りつづき虫を気配（つか）う義兄と酒  
くむ

一九三七年

コンデ街のだるま食堂に夕べ来て触れたる暖簾（のれん）の  
風情愛しも

同

なまめかしく聞こえて来るは日本座敷の三味のさんざめきこ  
こは富美之家

一九三七年

生活の貧しさに日毎愚痴をいうみごもる妻にわれは言なし

一九三八年

ゴンザガの水泳場のめずらしさ妻や子供に見せたい思い

一九四〇年

母逝きて十年経つれどふるさとの夢には母が生きて在せり

同

都 魅 緒 生

牛使い馬を馱しつつ年を経つかくして土に住みつくわれか

一九三八年

樋田 美砂子

我が生活貧しき故かこの日頃子等のさかしくなるかに思う

一九三八年

眞昼を憩うサンビセンテの岩かげに勿忘草はここだ咲きおり

同

丈低く繁れる椰子の葉がくれにあまた黄蜂は巢をつくり居り

一九三九年

二十日余りの田舎の旅を帰り来て小雨の駅に子らと下り立つ

同

有閑マダムと人は言いたり病持ち三人の子等と家守る我を

同

いきどおり身ぬちに湧けど我たえて荒げる黒女に對っていたり

同

心臓瓣膜症は不治なりと医師は言いにけり吾が現身の心昂ぶる

一九四〇年

わびしさを夫にも言わずこやりいて本を閉じ眼を閉じ涙落ち来ぬ

同

わずわらしき世相を言いつつ吾が夫はこの頃教師退きたしと言う

同

馬一頭もとどとなして老いの身をバナナひさぎて生活するらし

同

永住を思うにあらねど果樹を植え花壇作りて家を整う

一九四一年

樋田 陽 莊

その昔列車の窓ゆ遠見せし妙高に似たりタイパスの山は

一九三九年

旧友は戦の場に起つという便り読みつつ心たかぶる

同

棲みつきて二年すぎき小庭辺に石集め来て池を作りぬ

一九四〇年

遠 山 千歌子

道ばたの十字架に来て子供等の遊びしか草の花輪かけあり

一九三三年

鳥 路 資

あの白い棉畑の中のサペ葺きに筑紫の人の娘は住めり

一九二五年

センフインのないて飛び去るカンポ中にバルバチモンよ汝も  
淋しき

一九二五年



遠山 神刀

五頭引の馬車ゆるやかに蟻の巣の高く積まれるカンポ道行く  
一九二九年

仲眞 美登利

見ゆる限りただ蒼々とひろごれる甘蔗園の面を風渡りゆく  
一九二二年

この国も最早や永住の地ならずと思う心のきざすは寂し  
一九四一年

カボクロの住みける跡か枇杷の木が幾本かあり林の中に  
同

四百余种ありという蘭をつぎつぎにただ珍らかに観つつ巡りぬ  
同

中島 すみ子

わが小さきされど尊き生を托（よ）すこのうまし国永久に栄あれ  
―ブラジル独立百年祭―

一九二二年

中 須 夏 山

試作せし麦の穂の揃う夕冷えの岡に匂うは故郷のかおり

一九三〇年

倒れゆくペローバ仰ぎカボクロのペローバは泣くと振り向き  
し顔

同

町に来て食る如く物食える土人に似たる同胞（はらから）の  
さま

一九三九年

呆けたる人にも見ゆれ同胞の片言まじりに物問うさまは

同

弾圧下の教育問題あげつらう人らにひびく午のサイレン

同

産組の組織を識れる人しなく成立ちし組合の一員我も

一九四〇年

中 井 はじめ

苦しかりし年を送りて貧しくもマンジョカ雑煮啜り寿ぐ

一九三二年

牛ゆけばまつわり動く霧白し日射し淡々と牧のひと時

一九四一年

摘み棉を驚掴みつつしみじみと棉の安値を語る人はも

同

永田 稠

海の上にまろく大きな朝虹の間に見ゆるブラジルの国

一九三八年

夏井 緑

ちかい来し十年の日はすぎんとす帰るすべなく初日をあおぐ

一九三七年

中川 生

定期市は八九分迄は同胞の蔬菜業者なりなおも殖（ふ）えつ  
つ

一九三七年

長友 安徳

故郷の友思いつつ棉摘めば何時しか籠に棉は満ちけり

一九三八年

棉摘みも終り頃らし今日もまたカマラダの来て仕事を乞えり

同

カンテラの石油乏しくなりにつけり明日の仕事を思いつつねる

一九三九年

植えおきしマモンようやく実のなるに今年に移転する吾は借  
地農  
同

邦語教育の嵐の前に学校の新築校舎建て急ぎけり

一九四〇年

残り棉ひろいてそこばくの金を得むとピンコ カラピシヨの  
畑に通えり  
同

木の根焼く煙に一日巻かれつつ働きし夜はまなこの痛む  
同

今年こそ本買うことも覚束なき生活となりむ棉作る我は  
一九四一年

かにかくに我が知り人の幾人は従軍願して故国（くに）に帰  
れり  
同

## 中山 稠子

爽やけきミーリヨ畑の朝風に黙してひとり煙草のみ居り

一九三九年

赤に黄につぶら実熟れし珈琲樹は朝餉の窓ゆ見つつ飯食  
（お）す  
同

山焼ける野火の煙のみなぎらい日光（ひかげ）はくらしこの  
秋晴れを  
同

五人（いったり）の男の子を持ちてみ民われ住みつぐべしや  
この国原に

同

七十路を出でし齡にはるけくも我を慕いて母は来ましぬ

一九四〇年

金を得て早く帰らん事のみぞ大方の同胞（ひと）の願いなる  
べし

同

そこばくの金を老黒人に握らせて母のみ墓をたのみ来にけり

一九四一年

南 子 朗

戦場に散りし友もあり故郷ゆ届きし便りに心引緊まる

一九三八年

永 野 青 蛾

山焼きの煙こもれる夜の空に十五夜の月赤くかかれる

一九三九年

小さくとも我は地主になりにけり花木を植えて永久に住まわ  
む

同

長 島 かづを

日ならべて早るこの頃珈琲のほこりにまみれ蕾持ちたり

一九三九年

伸びのびと育ち切りたるアルファファ刈る大鎌の音のすがしも

一九四〇年

檜 崎 秋 鈴

邦人児童の教科書集めて警官が焼きたる噂聞きて憤るも

一九四〇年

仲 田 安 行

青々と茂れる棉の畑に立ち故郷に送る写真撮りたり

一九四一年

長 尾 猛

町に着かば熟きうどんを食うべかり棉の初荷を今日売りに行く

一九四一年

中 島 簾 子

マリアナとわが名づけたる乳牛も売られゆくとよ仔を残しつ  
つ

一九二六年

瓜の黄とりモンの緑ボーブラの赤きが飾るわがくりや棚

同

中 井 小 鴨

一九一八年渡伯移住の途次、三男滋死亡、印渡洋に於て水葬す。そ  
の十七年忌に當時を偲びて

水葬の水煙立つその刹那刹那の状は今に目離（か）れず

一九三三年

飛蝗峡（ガファニョット）の草生の空低くゆゆしく飛べり  
日暮るるまでも

同

焼き捨つる珈琲燃ゆる火は絶えず昼はひねもす夜は夜す  
がら

一九三四年

十年まり住みし我家をおきて行き新山拓き棉作らなむ

一九三五年

中 井 益 代

やわからかにマンガの新芽のび立ちて日々にぬくとき春は来向  
う

一九三二年

目に触るるものの悉皆（ことごと）亡き吾子を恋い思わせ  
て経つ日の遅き  
一九三三年

行方 正次郎

おのずから雨期明け近し珈琲の赤実ほつほつ目につくみれば

一九三四年

珈琲の間作に出来し蜀黍も生活の料に売らんとぞ思う

同

いまだ見ぬ我を頼りて此の国に遠くし来つる妻のいとしさ

一九三五年

移り来て幾日も経たず日に焼けし妻のおもわは見つつわびし  
も  
同

ゆびさして妻にぞ語る夕早く輝き出でし南十字星

同

珈琲の青実撓わに逝く春を我が子は育つ日々健かに

一九三六年

風吹けば即ちこぼす椰子の花かぐろき土に敷きて明るし

同

十字星の光さだかなる暁に起き出て草取る日数重ねつ

同

紅イペの花落つる見れば此の年も山焼きの時季の既に到りぬ

一九三八年



寄せ焼きの煙たゆとう森の辺に夜蟬は鳴けりとぎれとぎれに

一九三九年

棉畑の起伏はろけく真夏日は照り極まりて動くものなし

同

二ところ相呼ぶごとく梟の啼きつつ移る月の野原を

同

中江 克巳

訪ね来て崩れし土を盛りながらしむがに思う奥津城どころ

一九三六年

七夕も盆も祭らで外国（とつくに）に子等は日すがら牛追い  
真似る

同

天伝う陽光にぶくて地の涯はひすがら煙る春となりたり

同

たたなわる山はくぐもり州境の旅を行きつつ既に久しき

一九三九年

畑つものおおむね黍に限られて略奪農法ここに及べり

同

西原 義作

倒れ木をのりこえくぐり茨分けわが畑となるやまめぐり視ぬ

一九三八年

西田 季子

人の群静かに離り野に来ればムダンサの馬車揺れ揺れゆけり

一九三五年

マラリアの熱おさまれば起き出でて乱れし髪をととのえにけり

一九三六年

粉袋あけて作れる帽子をば吾児もかぶりてうち集い行く

一九三七年

母我は賓客（まろうど）らしも野苺を桑の葉に盛り饗応せらるる

一九三八年

喰い馴れぬままに捨てたるアバカテの今は芽ぶきて尺余となれる

同

雨音に似てもゆるなり七月の夜空明るく野火移り行く

一九四一年

産室の洩れ日に刻を計りつつかたえの吾子に授乳をなすも

一九四三年

夕ざれば気温忽ち低下してただに吹きなびく山頂の椰子

一九四五年

西原 豆泉

鰯焼くにおいただようこのあたり我が同胞の住みいるらしも

一九四〇年

西沢 栄

吾が父の育ちし国は非常時なりこの一鍬を励み振らなむ

一九三八年

沼島 志朗

遅蒔きの棉の小枝に残りたるカリマンの棉も吾が拾いつつ

一九四一年

オリンピアの近き路辺に同胞の移り住むらし日の丸立てり

同

霜枯れし赫きパストの吾が馬は四つならべて首を出しおり

一九四二年

冬晴れの赫土畑はあたたかく大地の乾く音の聞こゆる

同

この国も宣戦布告せしと言うラジオの声の震えてきこゆ

同

蒔付けの近づきにけり枯草を吾は焼きつつ月夜となれり

同

野崎 舟人

うら庭のバナナの枯葉かき集め足あたりよき草履つくれり

一九二七年

朝戸出のむそじの父も路すがらボンディア一つ言い覚えけり

同

山峡の瘠地をよりて拓きゆき飽くことを知らざるあれもんど

ちは

同

現身の命永らえウルタウを春のかたみと聞きにけるかも

一九三三年

野中 枯草

明けやらぬ市場の風は肌にしみ蜜柑並べる手の凍えけり

一九三八年

野々 庵

三年間の運の定まる日は今日と吾はつぶやけり山焼きのひる

一九三八年

初 実

しみじみと指の太さに見入りけり畑の中の一服の休みに

一九二八年

浜 津 正 夫

一葉の写真をそえて友の便り二月を経て着きにけるかな

一九三六年

パンがまの崩れ落ちたる赫土を取り囲みつつ百日草咲けり

同

移り来て新たに建てし家内に蕨は萌えけりこぶしをあげて

同

目標の棒の先なる白き布かすかに揺れおり棉を蒔く畑

一九三七年

金出すは兎角異議あり架けずにはおかれぬ橋に議論沸騰す

一九三九年

珈琲園の黍の除草を進めゆけば雛引き連れて鶏つきまとう

同

春雨の真昼を独り部屋に籠り足のうらなる砂蚤を掘る

同

二カ月を経て吾が手に入りし故里の音信はおもにみいくさの  
事

同

戦時下の故郷を憶う夜半にいてねむられぬまま蟋蟀を聴く

同

珈琲樹の波うつ果てにいらか見え森など見えて盆地ありけり

同

ペンソンの電燈の明りに借りて読む大衆雑誌も面白からず

同

マリリアの米の産地のアンブロジーナ眼下に見つつバスを捨てけり

一九四〇年

橋田悠春

すさまじい音ひびかせて山伐りの巨木朝より倒るる音する

一九三七年

はらだ つぎを

この旅のはじめての町ソロカバはつかれおぼえし目をばいやしぬ

一九二九年

夜の駅にむらがる子供おのがじし客の荷物を求めては叫ぶ

同

早川 千代子

潮騒に似たりと思う大陸の高原渡る秋風の音 一九四一年

危うくもかたむき立てる朽ちし木に燃ゆるが如き蔓草の花

同

常夏の国とは言えど桃の花開くを見れば春立ちぬらし

同

橋 浦 昌 雄

花ぐもる空にも似つれ悩ましき山焼く煙日毎に重し

一九三六年

春 朗

年々に所移りし借地農あばら屋に住む我の哀れさ

一九三九年

林 越 南

血の汗をしばりし錢であがないし吾が移住地はるか樹の海

一九四五年

広瀬 正雄

棉摘みも埒りたりと思いつつ残る畑を腰のばし見る

一九三七年

棉摘むと子等は朝霧に消え行きて見送る門に声のみ残れり

同

平野 遥秋

斧あてるその度毎に椰子の木の黄色の花のここだこぼるる

一九三七年

広瀬 富夫

泥壁に丸木作りの家なれど我家と思えば住み心持よし

一九三七年

東野 暁風

わが帰国楽しみ待ちし父は逝きさすらいの子は父となりたり

一九二二〜三〇年

焼山の灰押しのけて二三寸あたまも上げし早蕨あわれ

同



薄闇の墓に來たりて吾子の棺涙ながらに一人葬りぬ

一九三一〜四四年

吾子を葬りて來たりし吾は晩遅く産屋の妻に粥を炊くなり

同

職なくて過ごせし日ありぬいつわりて庭師となりしこともありける

同

畦（うね）たてて抔げし珈琲かすかにも陽に乾きつつ香に立ちにけり

同

そこばくの粃種子売りて軍患機献納資金にわがあてにけり

同

留守の間に猿の來たりて家ぬちに座りいしてう山にわが住む

同

小麦粉の値上りしるくマンジョカを日毎たきては半年過ぎぬ

同

日暮るればこの庭の辺に散りしける木棉の花は蟻の來て引く

同

サイパンの吾が守備隊は全滅すラジオ聞きつつ涙も出でず

同

浩

鈴蛇の鈴手にとりて秋の夜を一人さらさらふれば淋しき

一九三八年

萍

花

生か死かはしりける熱血の千代ゆるぎなき我が生きる伯国  
(くに) ―ブラジル独立百年祭― 一九二二年

平井 冬水

大江を荒海のごと鳴らし来て万林を洗うアマゾンの雨  
一九三六年

古山 暁子

大阪弁熊本弁などたわむれに真似て近頃我が癖づけり  
一九三九年

藤山 貴志雄

埋もれし棉掘り出しつつ起し行く砂にまみれて小さきその棉  
一九四〇年

藤 波 睦 枝

聖州の冬の最中を烈々と護憲の叫び湧き沸るなり

―護憲革命― 一九三二年

冷々と暁の風なりコロツテを負いて吾のみ高き靴音

同

藤 山 定 男 ―南歩―

凸凹の山道でグツと急カーブするバス！黒人娘の体息にむせ  
ぶ 一九三七年

決算した棉作者の生活に放浪性の悲哀があつた―冬

同

生活の魅力がなんであるかを独り反すうしている深夜

一九四〇年

夜目にも白いマモンの花は愛しいずんぶり野風呂に浸る

一九四一年

南国少女のこまっちゃくれた会話に春の日ゆつたりと暮れな  
ずみ 一九四一年

今日も単調な耕地に生きる俺この安易さをひそかに怖れる

同

夕焼あかあかと地平の果て―ざくざく馬車刈り込んでいる

同

古川 信子

就働の角笛の音聞きながらカンテラ点して厨に豆炊く

一九二六年

パイアの繁る木蔭に莫蔭敷いて幼子寝かせて畑の草とる

同

あるだけの銭をもたせて勉学にゆく子を駄まで送りてかえる

一九三四年

別府 森永

山々は白く時雨れて静かなりサツコ着て抜く棉のつめたさ

一九三六年

珈琲樹に立てかけ置きし鋏の柄をぬらして今朝はさ霧流るる

一九三七年

別府 二郎

ひらくのはもう真近よと妻は言うたのしく棉の玉を撫でつつ

一九三八年

手折り来し花珈琲の一枝を飾りて清し朝の食卓

一九三九年

薄れゆくさ霧の下に現わるる共同墓地は人影もなし

同

ゆるやかに共同墓地の霧うすれ白壁の御堂現われにけり

同

## 暮 山 人

トントンと初つく音の聞こゆなり時雨降る夜の同胞の村

一九二六年

夕ばたけ鍬を止めざる親の手を見入る子供に黄昏探し

一九二八年

## ま さ み き

一日のつとめ終れりよこれたる服ぬぎ捨てし軽きよろこび

一九一九年

決断の鈍き男がつくねんと思ひ煩い立てる山畑

一九二二年

正 子

此処に其処に誰が子が書きしあとかたぞ日本字を見て懷しと  
思う

一九二八年

松 本 高 信

種子とりに残せし裏のにんじんはわずかに咲きて風にそよげ  
り

一九二四年

秋蕎麦の丈低くして花つけぬ貧しき我に似たればいとし

一九二九年

松 林 静

ぎいぎいと牛車のきしり月の夜に牛追う声の澄みてきこえる

一九三七年

前 田 露 路

しとしととかや葺き屋根をうつ雨に牛車の音の遠ざかりゆく

一九二五年

眞 沙 緒

子を負いて棉蒔く妻の健気なる日焼けし顔に暑く陽は照る

一九三六年

茉 花

この国のナシヨナリズムは第一世日本人を目指せる如し

一九四一年

眞木泉 玉 彦

忙しき棉摘み時の村に来て一夜宿りぬ摘み棉の上に

一九四一年

家族らも枕並め寝し摘み棉の上の一夜は忘らえなくに

一九四一年

み どり 子

生きねばならぬ巳が家族を思いつつカマラーダする朝を出で  
ゆく

一九二二年

牛車逐う人はいゆきぬきしる音遠くなる野に陽炎の立つ

同

三室 映之輔

蜜柑むく妻と子供と友どちの顔くまどりて昏るる停車場

一九三八年

南十字星

幾日も日本語を言わず佗び来れば壁に向いてそと書いて見る

―コペイロの悲哀―

一九三〇年

十年の月日は過ぎぬ移住地も米買う人の多くなりゆく

一九三七年

箕輪 新七

サントスの港につけば迎え人黒人とまごう日焼顔して

一九三〇年

移民列車錠おろされて発ちにけり火の粉噴きつつ闇に入りたり

同



山伐りに力盡きたる重き足ひきずり帰り独り飯炊く

一九三二年

源 友二

森かげの日ざし遅きをかこちつつ塵掃き寄せて糲干しにけり

一九三七年

宮坂 国人

ペローバの王者の如く立つ下に家を造れる若人の群――

バストス移住地―― 一九三六年

カルナバルの街の騒ぎをよそにしてラジオ叫びぬシンガポ  
ル落つ 一九四三年

ブラジルの十月に咲く花菖蒲一と日に咲きて一夜に散れり

同

敵国に我生きており新玉の光を仰ぎ我生きており

一九四四年

硫黄島遂には陥ちぬ鬼神も泣くべき日なり弥生の十九日

同

スタリーンの写真飾れる町角に号外買いぬ八月八日

同

御詔勅のラジオ聞きいる人々の顔青み行きし朝の一と時

同

三 浦 敏 子

椰子の葉をひろいあつめて火をたきぬ水霜つめた  
き棉摘みの朝

一九三七年

ウルブーの大きく輪描く空の青みかわきし洗髪かろく頬うつ

同

霧晴るる丘に立てゆく目標の旗ひるがえる棉蒔きの朝

同

美 代 女

草分けの犠牲者偲びそのかみはエイトール レグルーと駅の  
名呼びし

一九三八年

水 原 夕 美

国防献金労働奉仕隊と書かれたる黒板に並びし無邪気なる顔

一九四〇年

ひいやりと夜気を背にうけ吾独り秋灯ともしてサボンたきつ  
つ

同

溝口 好美

住所書認めざりし慰問文の感謝は領事館の手をぞ経て来ぬ  
一九四一年

村岡 志津子

いささかと金子なれども姑上に送りしあとは心安けし

一九三九年

物想い寝つけぬ床に足裏の砂蚤のかゆみ堪えがたきかも

一九四〇年

骨粉のサッコもて服を作るにも慣れつつ今は佗びしともわず

同

母国のスフを思えばサッコもて作りし服も尊かりけり

同

トマテ作りに荒れし吾が掌よしみ深く染まりしあくの落つる  
時なし  
同

朝呑むカフェの湯気白々と冬に入りたる冷え著し

一九四一年

雨はれし今朝をカマラーダが一人刈る草の匂いの鮮しきかも

同

ひんがしに真対いて聳ゆるマルンビー朝な朝なを朱に染まり  
つつ

同

久々に半壇の石油買い得たりランプ点すと今宵たぬしき

年代不明

ビール壇に三本の石油買いためて心たらえりこの二三日は

同

窓ゆ見る向う小山の山なだりナカチロンはすでに盛りとなり  
ぬ

同

黄あざやかに盛り久しきアレルイアは豚小屋の辺に花散らし  
つつ

同

ひそかなる裡にも戦勝ニュース伝わりて心昂ぶる日本人吾の

同

陸軍少尉なりし夫がカボクロに受くる悪罵は耐えて聞きおり

同

祖国の終いの勝利は疑わず吾等生き居り敵の国土に

同

財をなさで只あくせくと働きて異郷に十年あまり経にけり

同

## 村瀬 峰 色

五百ミルたかなば妻を娶らんと真面目顔なるネグロ羨しむ

一九三八年

村上 康治

いくたびか思いまどいて遂に來しこの異つ国に幼子死せり

一九三四年

棕野 寿美

幾月の日照りに小川干あがりて炊ぎに汲むは青みどろ水

一九三八年

汗あえて坂道遠く水になうわが双の肩は血がにじみたり

同

身を骨を断つ思いにて立ちむかう己れ小さし原始林の前に

同

横たわる大木の枝を伐り払い三坪の広さに日は暮れにけり

同

明日焚かむ生木をあぶりいる夜更け雨やみし後の霜案じつつ

同

迷 羊 子

やがてこの巨木倒れん弟を遠ざからせて吾一人伐る

一九三六年

大いなる音して巨木倒れたり暫し憩わん斧研ぎながら

同

嬰子の柩を抱きて砂道を馬急がせぬ夕せまれば

同

嬰子の柩抱きて吾が行けば遭う人毎に帽子とりゆく

同

豆やきびの相場のよきを語りつつ馬を並べて町へ急ぎぬ

一九三七年

軍籍に身はありながらブラジルに住みて術なし日々棉を摘む

一九三八年

モ      ク      生

轟々とあたりのマツトゆるがして火の粉吐きつつ夜の汽車は  
進む

一九二八年

アバレーにてうすくらがり集う群を盗賊と断りてシリア人  
降りぬ

同

安   田      美世子

モジアナの配耕先はトランスバール狭い床板カンテラ明り

一九三〇年

山田 紫川

渡伯して三年経にければ妹の草取る術に馴れていとしも

一九二二年

山室 新太郎

摘み残せし向つ山辺の棉畑は灰白きまま雨にくれゆく

一九三九年

棉作りをいのちとたのむこの村に今年は晴天二日とつづかず

同

四個百レースのバナナを売りていくばくの銭を得るらむ土人の老母は

一九四〇年

山本 操

五年して帰ると言いし故郷にランプの光で書く文にぶる

一九三七年

山本 喜一

気をつけて読まねばならぬ程褪せし吾子の墓標に額づきにけり

一九四〇年

吾子と並ぶ隣の墓も邦人にておなじく線香の煙揺れおり

同

半年ぶりに来て今更に邦人の墓の多きに氣のつきにけり

同

## 山 本 孤 愁

はずみいし話とぎれしひとときの静寂に運動会の花火の聞こ  
ゆ

一九三九年

昼の暑さ未ださめきらぬ病室に襲い来る蚊のこえ夥し

一九三九年

病癒えず減りゆくはひとりカレンダーのみ今年も後を幾何も  
あらず

一九四〇年

一年振りに来し故郷の音信（おとづれ）を封きれば伯父の死  
のしらせなり

同

たえまなく大空に離合集散する雲をし見つつ臥しおり今日も

同

耳鳴りて夜をほとほとに眠られず此の頃とみに軀の痩せにけ  
り

同

祖国日本は真夏の頃か西のはての黄道光を觀につつ想う

同

振り仰ぐ空にさやけき天の川夜更けて位置の変りしを思う

一九四一年



膝の上に星図置きつつ冷えしるき夜更けの空の星座を探す

同

大きな望みもちて来しものを斯る病にたおれんと誰か思い設けし

同

いつかまたよき日もあらんと眼を瞑じつひとりうべない蒲団を被ぐ

同

あわれ世に金なくて病める人間のかなしさを思う街歩きつつ

同

我等の日本病院といえり然れども貧ゆえにはいれぬ邦人（ひと）幾人ぞ

同

行くところまで行きつきたりと感じつつ薄暗き施療病室の中を見まわす

同

教員の末路は大方哀れなるか就中病いに吾は斃れ

同

## 山田 禅 単

故国などさまで恋しく思わずと僅かに言いて口をつぐみし

一九二六年

朝起きて赤土に染みしシャツを着るこの百姓がいとしくてならず

同

山崎 浅子

立ちこめしもや晴れ初めて紅のイッペの花見ゆ向つ山辺に

一九三七年

山崎 幸一

あけくれを病み臥る床に只われは邦字新聞を待ちこがれいる

一九三九年

臥る身の午後は散歩のゆるされてのびのびと歩むパラナ松原

同

故郷に來たれるおもいす此の丘の梨の紅葉散りゆくさまは

同

裏山の齒朶のしげみにタツ―棲みて夜毎に畑を荒してやまず

同

山下 澄江

日伯の国旗をかかげて斉唱す君が代はいとおごそかにして

一九四〇年

体操終えて愛国マーチ合唱しつつ巡る校庭に朝日射しそめぬ

一九四〇年

日本語が解るかと問う一世に我は黙して「椰子樹」示しぬ

同

八卷 耕土

移住する吾を送りて来し友は交したる手に涙こぼしぬ

一九三〇年

ゆ き 子

錦きて帰るを待つとのたまひし母のおもかげまざまざと見ゆ

一九二〇年

男の子ならば水夫ともなりて奥津城の土古りぬ間に帰らむもの  
を

同

幽情 廃人

燃えさかる火付をしかと握りしめ見返る方は音たてて燃ゆ

一九三七年

夕陽 山人

つぶら実の珈琲園と隣して生いしげり立つ大原始林

一九三六年

月かくれ野はぬばたまのやみにして大平原を走せ行く我が汽車  
同

薪たきて走せゆく汽車の吐く火の粉やみを流るる蜚かに見ゆ  
一九三六年

吉 本 青 夢

畑中の立木を叩く啄木鳥の音のかそけき春の日の午後

一九三四年

牧原に群れいる牛を数えつつ我がものならばと思う愚かさ

同

子の好むマカウバの実を帰るさに草深き牧場の中に拾えり

一九三五年

我が汽車の車輪をしらべ叩きゆく音をさびしむ雨の夜の駅

一九三八年

ブラジル国歌をバンド奏ずればいたく酔いし我も椅子よりよ  
ろめきて立つ

同

金たまらばこのテラッソにふさわしき寝椅子を一つ買わんと  
思う

同

測量の助手の一人はかつて我がコロノ時代の監督なりし

同

熟睡（うまい）せし朝のめざめにきくものか厨に妻の珈琲ひ  
く音

一九三九年

工学士の肩書持てる我が友は此処に十年米作り居り

一九四〇年

いたく醜き服装したる邦人がカーザ アレマンに入り行きに  
けり  
同

葉 里 人

山深きこの移住地に五つ年を過ごして今は土の香に馴る

一九三七年

ほの暗きランプの灯かげに日本語を学ぶ妹をいじらしと見る

一九三九年

与世山 彦 志

ばなな熟れあばかし実る井戸端に水浴みすれば山の鳥啼く

一九三八年

かすてらや菓子を作ると子等までも立ちて騒げり庭のパン竈

同

米 沢 幹 夫

目路はるか風に波立つ棉畑はわだつみのごと蒼く光れり

一九四一年

吾が母が記しよこしぬ筆太に新体制下の生活の態を

同

土壁の隙ゆ洩れ来る冬の陽を現ともなく我は見ており

同

照りしげき枯生の原に緑なす甘蔗畑はきわだちて見ゆ

同

吉川 破 仏

リオ パルド、パラナパネマに注ぐ所波ひびかせて吾が汽車  
はゆく

一九三七年

り ら

百頭の牛ひきて行くバイアノは水乞うひまも唄えり恋か

一九二五年

れ い

きれぎれに日本の歌きこゆなり「とうふ」持ちつつ上りゆく

坂 ―コンデ街―

一九三〇年

魯 毛 生

うすぐらき大森林を貫きてゆたかに流るるピラシカーバ河

一九二二年

若 葉 美登里

雨上り強き日照りの珈琲園にプランタマキナの音の聞こゆる

一九三〇年

渡 部 南仙子 — 重 —

あらん限りの乳をしぼりて子の墓にささぐる妻の黒髪あわれ

一九三三年

暁け方の街のポン屋の鈴馬車は稲田はるかに近づきて来る

一九三八年

脇 坂 一

貧しけれど希望は捨てじ新しき村育（はぐく）むと来し我なれば

一九三六年

カンテラの油煙よけつつ子の足の砂のみ掘るが日課となりぬ

一九三九年

忙しくて手入れとどかぬ野菜畑のピツコンの若芽摘みて食う  
べぬ

一九四〇年

二人の児とその子等のことと思うとき日の本移民われは嘆かゆ  
同

きおい心うせしにはあらず移民われ夜ごとの酒につかれ疲る  
同

ひとわたり永住論を説き廻り永住論者は国へ帰りぬ  
同

去年のセツカいたくこたえし珈琲の梢は枯れて未だ芽ぶかず  
一九四一年

渡 辺 春 洋

山路来れば木実とるらしき児等の声疎き樹立の奥に響かう

一九四一年

馬糧買う錢も乏しくこの春は十頭の馬いたく痩せにし

同

ほほけ立つジャラグワイの原を下り来て疎き樹立に夜風とよ  
もす  
同



## 戦後

一九四六年以後

投稿作品

抽出作品

掲載誌紙

椰子樹 パウリスタ新聞 日伯毎日新聞 南米時事 サンパ  
ウロ新聞 まひる野 林間アララギ はちどり

私歌集

その他

青 木 只 男

長雨に若芽のびたる珈琲に光するとき午後の日の照り

一九五〇年

敗戦の憂いかなぐり捨てさせし水泳団は今日着きにけり

同

線路わきに小さき土小屋二三あるはインジオの家らしバナナ  
植えあり

同

煉瓦焼く煙かすかに消えて行く黄昏迫る谷の彼方に

一九五一年

シャファリスのふきあげて降る岩の上チコチコー羽水浴びて  
居り

一九五四年

薄煙はきつつ船はゆるゆるとグワナバラ湾に入り来たれり

同

十ミルの腸詰今日は買い求め親子六人のつましき夕食

一九五五年

手作りのアルファセあり白菜ありて乏しき我が家の食膳にぎ  
わす

同

青 柳 房 治

サルサの香漂う用水池（いけ）に年暮れのエンシャードの泥  
丹念に洗う

一九七八年

老眼鏡ずり上げ納屋の灯に寄りて明日かけむ農薬の解説を読む  
同

没り陽はや尾根にかかりて影長きトマテの支柱しつかりとさす  
同

木の蔭にかがみエンシャダを研ぎている老いしコロノのフーモが匂う  
一九七八年

裸灯を点して夜の静もりにひとり出荷の箱に釘打つ  
同

長雨の果てて星座の澄み深くトマテ撰る掌に夜気の冷たし  
同

母の忌の近づく夕べ赤々と燃えゆく野火に対してながしオリオン座頭上にいたく光る夜半ハウス廻りて温度気遣う  
同

転耕の慌しさも収まりしポルトンに十月の日照りており  
同

暖色を選みて住居の壁を塗る異国の血縁は親子のみにて  
同

不具の掌を湯槽（ゆぶね）に浮かべ開拓に身を打ち込みし昔を想う  
同

移民史の暗さを曳きて皺深き翁露天に野菜商う

同

妻が肩叩きて充つる日もあるか畑帰りの靴の砂振る

同

夕日射す室（へや）より見舞の客去りてシーツの白が病む瞳に痛し

一九七九年

風見鶏動かぬままに悲しみが又かえりくる通夜の明けを

同

倅はかかる象（かたち）か年の瀬を垣根のつつじ刈りこみてゆく

同

霜害の痕黒々と曝されて空しきものの臭い地に満つ

同

青柳　　ます

追憶も新たに夫の爪を切る不具となりたる指をいたわり

一九七一年

残業の続く夕べをほろ酔いて帰り来たりし夫の足拭く

同

故郷にひとり想いをつなぎつつ青瑞々しき紫蘇の実を摘む

一九七三年

眼を細め冬陽浴びいる老犬と並びて姑は里芋を剥く

同

農に生きて老いたる姑がときおりを坐る芝生の雑草をとる

一九七四年

継ぐ者もきまらぬ農を広げゆく夫に寒日の味噌汁を炊く

一九七五年

戦いの日の難渋を想いつつ寝しなに濾過器の水満たしおり

同

農に生き生姜のごとき掌の翁言葉たくみに商いており

一九七七年

経営の苦しきを云わず働きて通うものあり夫との夜道

同

農薬の害もテレビに映されて売れゆきにぶきチサを商う

一九七八年

肌の張り失せしを嘆く齡にて友と小皺の掌を見せ合えり

同

故郷の老いし母への便りには移民の苦しみ伏せて送れり

同

夜の更けをもの煮る音のひそかにてレース編む娘に嫁ぐ日近し

一九七八年

酔い酔わば足もちどりとなる夫を想いてズボンを短めに縫う

同

出来栄えを自負して市に並べたるトマトが初夏の陽射しを弾く

一九七九年

族らのいずれは冥るところとも高処に姑の墓地を購う

同

青柳 芳

尽すべき事はみなはたし充ち足りて老いしこの手に市民権う  
く  
一九六八年

青山 慎吉

忙しき日々の仕事にかまけては子を抱き歩くもまれとなりつ  
つ  
一九五一年  
すき間なく小草生いしく畑にしてかがめば初夏の陽は背に暑  
く  
同

ボルドー液に荒れし双手を湯あがりのあかりの下にしみじみ  
と見る  
同

二万本のトマトをうからと雨降るを気づかいにつつも消毒し  
終えぬ  
同

つよき風吹き次ぐままに日の暮れて落葉庭辺にあまた散りし  
く  
一九五二年

丘下の道に自動車見えずしてただにほこりの湧きたつが見ゆ  
同

活気あるトマト収穫期近づけば新聞の野菜相場欄もニュース  
の如し  
一九五三年

青山 たみ子

齒朶茂る門辺の鉢のその中に営む小鳥の巢をば見出でぬ

一九五四年

青山 雪子

人づてに我をそしると聞きしかど夫の友ゆえことには言わず

一九五〇年

たまさかの休日と釣りに行く夫に少しくすねてもみたり

同

赤穂 武

日本人かとまがうばかりのインジオが今朝から珈琲もぎに来て居り

一九七二年

ジャカランダ咲きはじめたる木の下を選挙運動の車忙しく通る

一九七三年

稲妻の遠く光れる闇空を眺めてベトナムの民らを思う

同

秋 口 流 枕 ― 滝井 康民―

幸うすき子等集い住むアブリゴよかな笑い隣室より伝う

一九六六年

訪日の楽しき日々の思い出も黙し語らぬこどくなる母

一九六七年

秋 月 清

貧しければ貧しきままに睦みあい小さき夢を妻と語れり

一九四九年

物質にのみ恵まるるを幸福と思い居る妻よさにあらず

同

秋 永 湖 舟

丘遠くかすむコーヒー園の果て真紅に燃えて夕陽落ちゆく

一九七八年

夕飯を終えて庭辺に佇めば季節外れの蛍がとべり

同



秋 永 三 郎

飛魚の話題巷にひろがれば煩わしき声また幾つ聞く

―日本水上団来伯― 一九五〇年

はらからの相せめぎ合う国に来て君等泳ぐは単純ならず

同

古橋を見に行く事は断念し産月近き妻を守りつつ

同

五人目のおみなを生めば友の誰彼よ皆ひかえめに祝いて呉る

同

飛魚が世界記録を樹てし日もひそけくおむつ洗いて居たり

同

白き光雲ににじませ登り来る日本の人が初日と呼ぶ陽

一九六五年

すべも無く記憶とぎるる日にあれば生身の吾をもて余し居る

―脳膜炎を病みて― 一九七九年

キリストが額の中より抜け来るを娘に何回も告げし夜なり

同

看護婦と妻との顔の判別がつかざるままにまたもまどろむ

同

秋 野 草 路

ああこれが母国の新聞か肉眼では読み難きほどの小さき活字

一九五一年

齢よりは若く見えますよと言う人に寂しく笑いて老眼鏡はずす

同

晶 本 重 二

忙しくとも正月だけは休まんと雨降る中をコーヒー植え急ぐ

一九五六年

青々とグラマ伸びたつブレイジョの切株に今日も馬をつなぎぬ

同

秋 本 純 三

葉は既にまばらとなりて枝高く梨の実いくつ風に揺れおり

年代不明

幼かるものの愛しさ牛の仔が吾が汲むバケツの水を飲むなり

同

秋 本 白 鳥

地の果てと思うマ州の奥にして人の住みいるともし火の見ゆ

一九六九年

谷間にピンニョの大木見えおりてパラナ路の旅も終りに近し

同

秋 山 　　る 　　り

季の移りわずかに見せて風寒きさ庭に藤の蕾ふくらむ

一九七七年

地平線つきたる所光りいて湖とも紛う空の彩り

一九七八年

浅 田 　　清 　　― 今 日 志 ―

あかあかと鋤きかえされし広野原一本椰子の花こぼしおり

一九四七年

夏めきて既にきびしき日ざしはも臥し居るわれの部屋に射し  
来る

同

酔いしれて呂律あやしき人々の祖国は勝てりと言挙げするも

一九四八年

トルネーラを漏る水音のかそけきを真夜の寝ぎわに聞きていにけり

同

もの蔭に昼をひそみて鳴くかえる短かく鳴きて鳴き止みにけり

一九四九年

大西洋の海のほとりにわれたてり思えば遠く来つるものかな

一九四九年

たらちねは幼きわれを伴いてこの海遠き国ゆ来しかや

同

しなびたる大根の葉のおえるが昨日と同じ黄昏の路

同

一人して珈琲もげばわが立つる音のさびしも広き畑に

同

半世を超ゆる月日を異国に過ぎしし母よ老いづき給う

一九五〇年

何時よりか帰国のことも口にせぬ母が心は思おゆるかも

同

日の落ちてなおしばらくの明るさよ空仰ぎ見つつ珈琲をもぐ

同

意志による行動もなき一日にて空腹にしむ一杯（つき）の火酒（さけ）

同

浅田 いね

くみ置きし厨の水に散り浮けるプリマベラの花の幾ひら

一九四九年

馬鈴薯のうら作りすると忙しけれ昼は落花生蒔き夜は薯選る

同

雨を恐れ旱をなげき二年を心疲れて薯作りきぬ

同

ことなれる思想の中に一人居て冷たき視線身に感じおり

同

浅田 孤舟

例年の催しなれど妻も子も入植祭を楽しみて待つ

一九五三年

夕風に一日の暑さやや落ちてかげり涼しき竹の一群

同

読む窓に夕陽かげりてユーカリの葉越しに遠く牛の群見ゆ

一九五五年

近隣にラジオの鳴らぬ静けさに聖金曜日の夕陽かげれり

同

夜をこめて踊り狂えるカルナヴァルかかる生きざまをいぶか  
るとなく

同

サントスの潮のしぶきの思い出が浮かぶ卓上の貝がら細工

一九五九年

アバカテのつぶら実を窓に眺めいる風邪病む妻の顔色冴えず

同

一しきりコンデの葉枝ざわめきて窓を鳴らしぬ雨含む風は

同

同僚と物の値上り嘆くまにはや巡り来ぬ入植祭典

同

朝 秀 進

稲刈ればトツコの見ゆる夕暮れの畑に来て啼く山鳩の群

一九七二年

冷えし手を焚火に温め老妻と明日の出荷の人参詰める

一九七三年

樹々芽吹くらゴアポランの森越えて妻と行く道幾年振りか

一九七四年

ゴヤーバの熟れて地に落つる墾の庭肥えし小豚が秋日に遊ぶ

一九七五年

夕立に小屋に憩えばひび割れし指に塗りたる菓が匂う

一九七七年

農薬の匂う体を湧水に洗う夕べの山に啼く鳥

一九七八年

豪雨禍に埋まりし牛を掘りている牧夫に夏の日射しは強し

同

客船の発(た)ちし大河を望む丘マ州の家々小さく見ゆる

同

芦 部 八州男

たまさかに来たるシネマに妻子らを行かせて独り留守居す吾  
は

一九四八年

安 達 梅 野

何の夢見て眠るのか幼孫吾のひざにてまゆ動かして

年代不明

安 達 太 良 — 黒沢光棋 —

煉瓦土採りたる跡の水たまり風吹けば波光りつつ寄す

一九六六年

大石の蔭の枯草喰みている老馬冴えし冬の瞳の色

一九六七年

ささやかに土をならして住みし跡ポインセチヤの朱今も濃く

一九六七年

待ちわびし雨に濡れ来て妻と吾着替うる時の声の弾める

同

看護婦の示すレントゲン映像のさびしきまでの細き骨組み

同

昼風呂に孫とつかれば湯槽よりこぼるる水は春の音して

一九六八年

幾山川打ち起え来たりイパチンガ鉄鉋熔かす焰を見たり

一九六九年

人肌の温もりもてるゴヤス路のいで湯にひそと真夜を沈めり

同

## 安 部 栄 子

わが得たる孫の幾たり混血のみどり児汝もそのひとりなる

一九六四年

明日も亦晴れつづく可し藍深くミナス連山残照の中

一九六五年

決断のつかざるままに日は過ぎて夏に入る日の粗き雨音

一九六六年

念願の叶いし安らぎ嫁がせて何か虚しきなかにわが居る

一九六八年



耳少し遠くなりりしと思う夫の横顔に浮く老斑一つ

一九七二年

知る人も少くなりし郷里（くに）に来て紅葉綾なす山に見  
惚るる

同

とびとびの記憶辿りて歩みゆく金木犀の匂う村みち

一九七二年

阿 部 喜久恵

道端の家の垣根に群がりて咲き盛りいるあじさいの花

一九五三年

読みさしの書物を閉じてい寝むとす静かにふけて雨の降り出  
づ

同

ピアノ弾くわが手の上にひらひらと蝶の来たりてしばしまつ  
わる

同

安 部 牧 宵

軍用機とんぼの如く並びたる広き枯野のカンポグランデ

一九五三年

アマゾンとラプラタとの分水嶺は草枯れて野火の煙がおちこ  
ちに見ゆ

同

ゴムの木の所々に生えているやま深く来て清水をくみぬ

同

七十キロ無人の山路をたどり来てマリオポリスにつけば犬吠  
ゆ

同

水清き森の中なる米搗き場樋の水掬み顔を洗いぬ

同

## 阿 部      パウロ

雲海の切れ間ゆ日光は垂直にイタチン山を縫う如く射す

一九五一年

浜すみれゆるる群生の道行きて赤きひとでを吾はひろえり

一九五二年

マリスコの附きし岩群遠くつづき吾が居る岩に夏日かげりぬ

一九五三年

コッコ    アノンの低き青葉に音たてて夕べの風ふく浜辺を帰  
る

同

磯岩に吾子が干したるカルソンに暮れ行く淡き日の光りさす

一九五五年

岩の間に残れる汐のあたたかく汗ばみし子の手足を洗う

同

蛇島のみどりにかすみて夕ざれば砂丘高く海輝けり

同

安部 義郎

上流にガリンペーロの住むというガルサの河は濁りていたり

一九七四年

屋根も壁もバクリー椰子の葉もて葺く原住民に豆の花咲く

同

阿部 玲子

君と会わむ悦び乗せてカンポスの山また山をバスは越え行く

一九五二年

組みし手を解きてネオンの灯の下に別れ来にけり何時ものように

一九五三年

朝日差す彼方の山の一所炭焼く煙は白くのぼりぬ

一九五五年

夫と子に伴われ来ぬ亡母の墓悲しみの日は少女なりしが

同

母と言う字を思う時亡き母の面輪に義母の重なり浮かぶ

同

氷雨降る夜を目覚め居て離れ住む独りの父に思い回らす

一九七三年

木洩れ日の差す石卓を囲み居て訪日の話題しきりにはずむ

同

天 野 八 郎

滾々と乳液幹にしたたりぬ印度素けいの花芽をもげば

一九六三年

闇の巷歩みて行けば家々の白き番号札が秩序示せり

同

体当りを扉にくるる如夜ふけて吹き荒ぶなり夏のあらしは

同

荒 秀 梯

幾百年の歴史は語るこの街のタイパ舗道の軒下に行く

一九六一年

開拓にいたわり合いしこの妻と今朝甲板に春の富士見る

一九六三年

冷えこみのきびしき故国を思いつつ跛鳴りせる除夜の鐘聴く

一九六九年

荒川 豊水

クワレーズマの林の落葉踏みしめて朝を来にけり炭を焼かむ  
と

一九四八年

トマテーロにて儲ければ又移らむという吾らはあわれ借地農  
にて

一九五〇年

山麓の駅はひなびて駅長が一人立ちいて汽車を見送る

一九五一年

ギプス重き脚ひきずりて乗換駅の高き陸橋をのぼり来にけり

同

日雇の吾らも寄りて観賞する温室咲きのベコニヤの花

一九五三年

荒木 千代乃

人ずれせぬカイサーラ優し道とえば吾も行かんと靴はきてき  
ぬ

一九六四年

荒木 八雲

臣連のテロなどありて忌わしき時世も今は過ぎたりにけり  
一九四九年

荒崎 三朗

はるばると兄を訪ねて来し君の何気なく出るコロニア言葉

一九七七年

日系の顔ばかりなるパカエンブー振り向き見れど皆知らぬ顔

一九七八年

早も一年美智子妃偲ぶ子守唄余韻聞こゆる森の彼方に

一九七九年

何処までも黄色く続く麦の秋数年前の珈琲園想う

同

荒崎 まる

十三年ぶりの海辺よ子も吾も刻を忘れて波にたわむる

一九六七年

どこまでも続ける渚か帰りゆく人ら黒点となりて消えたり

同

山焼の季となり朝の陽赫々と炎えて空より灰降りやまず

一九六八年

黄塵を巻きあげ馳けくる牛の群木蔭にひそみて過ぐるを待ちぬ

一九六九年

二十年経て帰り来しふるさとの駅の木椅子は昔のままに

一九七四年

古びたる駅の木椅子にかけながらまぶしきまでの青田みて居り

同

ひとすじに恋い帰り来しふるさとよ田畑も川も姿変えたり

同

安良田

済

この道の行く手に現わるる広告のおおかたは自動車 家具

酒類の看板

一九四九年

資本主義あるいは共産主義というもこの貧民等にはかかわりもなく

一九五〇年

荒 永 清 作

毒舌にて憎しみ合いし日のこともただ壊しく亡妻思う

一九七七年

有 北 羽 衣

在りし日の父が好みしミリン酒朝夕べに供えまいらす

一九五〇年

黎明の光ほのかに弥撤に行く声遠のきし後の静もり

同

有 田 市 治

余裕なき生活を持てど正月は郷愁ありて昆布あがなう

一九六〇年

遠き日はなつかしきかな古里の餅つき歌は今も忘れず

同

河一つへだてて見ゆるジャタイ町の精綿工場の気笛こだます

同

移民船むかえて賑わう港内に国の方言をなつかしみ聞く

一九六一年

手打ちうどんと肉太く書かれし食堂に居れば日本の如き思い  
す

同

裁かるる如く入り来し部屋ぬちに遅納の理由声ひくく言う

同



争いしこともなければこの国の離婚法案に関心うすし

一九六一年

外国に住みつきてより幾年か今宵も厨に味噌汁匂う

一九六二年

身重なる妻と連立ち移民寺の段上る時仏心わきぬ

同

中国人の女も居りて国境の渡船はゆるく水をきりゆく

同

有 田 花 子

子等い寝し後を静かに踏むミシン母なき子らのこと想いつつ

一九五三年

栗 野 はな子

病室の窓に虫とるつばくろを髪をすきつつ吾は見ており

一九五三年

乳しぼる音のみ冴えて白み行く牧場に風のやわらかく吹く

一九五七年

栗田部

清

点々と白き秀花は見えにつつりり才群れ生う道静かなり

一九五三年

本箱の奥にかくしておく。ピンガ宵々我はひそかに飲みぬ

同

一人して生き行くは難しと思いつつ居りし朝のいさぎよき雨

同

稀にくる丘の後ろの道のはた人は汗かき石を砕ける

同

混血の童が巧みに日本語を話せばしばし連れだちて行く

同

安藤

サキ

静かなる海面に夕日かえしつつ飛び魚の群遠ざかりゆく

年代不明

病棟も部屋も設備の整いて園の人等は朗らかなりき

同

飯田 静子

聖週間メーザに並ぶ魚料理食ぶることに慣れし移民か

一九六五年

ジョンソンの塔の灯りも地の涯にあるごとく見ゆ暗き野に佇  
つ

一九六六年

そのままに綴れば一つの物語り持ちたる移民ひとりまた逝く

同

寒々とベント スールの身に沁みるサンミゲール墓地君送り  
つつ

同

アマゾンの河辺に釣れる川蛇の事なども聞く雨昏き午後

同

飯田 益功

庭隅に吹きよせられし野火の灰又吹かれゆく季節の風に

一九六六年

わが都市の拡張進みユーカリ林伐られて見ゆる国際空港

一九六八年

パライバの流れもいつか澄みとおろ稲刈る音がさえぎえ響く

同

朝毎に蟻路探す草原にブラジル野ボタン紅々と咲く

同

飯田 義勝

史料館の一つ一つが息吹きいて星座煌めく移住祭典

一九七八年

葉隠れに小さき賑らみ見し日よりイペーの花は日々に色たつ

同

飯塚 アサ子

実家よりの写真と言いつつ訪日の香も移り来し風呂敷ほどく

一九六九年

五十嵐 末子

蝉しぐれ聞きつつ遠きふるさとの想い出をしばし心追いつく

一九七七年

冬の夜の街の灯青くまたたきて異国住いをしみじみ思う

同

日本語を孫に教える愉しさを生き甲斐として日々が過ぎゆく

同

鯉のぼり異国の空に泳がせて幼児たちの笑顔挑むる

同

カーニバルの喧噪も過ぎ青空はあくまで澄みて太古のごとし

同

ブラジルの銘木と聞くジャカラランダの鶴を購う日本みやげに

一九七八年

井 川 季 子

故里に唯ひとりなる兄のあり老い深みしか便りとだえぬ

一九六六年

すがれた苑の一すみ朱に染めポインセチアの花つる

一九六八年

冬枯れの苑の一隅黄イペーの咲けば青空一きわ碧し

同

草笛をふきつつわらべ去りゆきし丘の一つ家あかりともれり

一九六九年

サンジョンの焚火の余燼かき立てて落葉掃き寄す朝のしじま  
に

一九七一年

生 島 かおる

やどかりがメーザの上にくろがりて時おり海の匂いをはなつ

一九六二年

生 田 時 夫

銭持てる折りとして無きを知る友がダツタ売りなど連れて来に  
けり

一九五三年

ブラジル語不得手な吾はいらいらと長男がする棉摘みの交渉  
を聞く

同

邦字新聞に丸め送りし数粒のカフェー コツコは故郷に着き  
しとう

同

生 田 ひろし

昼餉告げてあちこちにひびく角笛の我が母吹くは低く短かし

一九五六年

薄青きコツコ椰子の実かじりつつはだしの童らののしり合え  
り

同

夕靄ははざまに流れカイエーラを守る人影は立木の如し

同

手遅れのトマテをいたく揺り居らん夜風の音をさめて聞きお  
り

同

カローサの轍しるけきぬかるみに蒲の綿毛が次々止る

同

池田 喜城

薪負いて山路をくだる童子ひとり小鳥の音いろに口笛ふきて

年代不明

谿ぞいの村の真昼のしずけさよ四方のひびきはこだまし来た  
る

同

嗽い塩たまえる母のたなそこのいたくもあれてかなしかりけ  
り

同

池田 彩雲

原始林の中を開きて一条に赤々として道はつづけり

一九五六年

池田 重二

バス中に語る言葉は甲高き邦語ばかりが我に聞こゆる

一九五三年

池田 夜詩緒

朝発ちの客ある故に朝起きも習慣となり二十四年経つ

一九五三年

池田 玲子

ジャニオの復帰願いつつ不安定に過ぎゆく日々の新聞を読む

一九六一年

ブラジルの救い主とも吾は頼みつつ投票せしが今ははかなし

同

不穏なる情勢続けば旅客機の爆音も絶えて久しくなりぬ

同



池 本 豊太郎

腑甲斐なき我を待みて妻子らはかそけき寢息たてて眠れる

一九五五年

生 駒 生

この朝を有りなしの風に揺れやまぬ花たわわなり街の並木は

一九四九年

神経痛起きしと今朝は買物に少し跛をひしきて行く妻

一九五三年

始発せぬジープを力み押している妻をあわれと今朝は思えり

同

行列の後端となりおもむろに票旗は進むS A L V E 7 D

E S E T E M B R O

同

古垣に添いて並み立つ杉の木は苗にて日本より来しものとい  
う

一九五四年

邦人のバール一軒残りいてさびればたるルテッシヤの町

同

石 切 男 ―吹本悠紀男―

主義に身を投ぜし程には強からず貧ゆえ左傾しつつありし日

一九四九年

暮れなずむ棉の畑に言いそびれ穂草を抜きて別れ来にけり

同

夕刊買うがならいとなりて真先に支那の記事など興がりて読む

一九五〇年

眼鏡かけた若きムラタが読みふける今日出たばかりの「グラ  
ンド ホテル」

同

巷にはF O G Oと大書の看板ふえてサンジョン祭もま近くなりぬ

同

朝寒のビルの廊下を掃きている薄き着物の掃除婦一人

同

レイロンの呼売人は息つぎのヴィーニョを飲むや亦わめきおり

同

果物の立売人が呼びたてるジレイタ街のひけ時に行く

一九五一年

村芝居幕あいとなり処女会の売店が又しばしにぎわう

同

伯人と二世乙女が恋語る石灯籠めぐる長きフィーラに

一九五六年

ナモラードにもたれて南京豆食べて居た乙女が降りし席にす

わりぬ

同

初めてのバイロに友を訪ずれしが会えず汚きボールにはいる

同

石井 衣子

娘をひとり嫁がせしあとのおもい深み藤の花房ゆらぐを見る  
も

一九六〇年

石井 くに江

高く低く蝶の舞いくる草々に山羊をつなぎて子等は遊べり

一九七三年

石井 ハツ

眼にしみる若葉の蔭に坐す昼餉列車は細く山間をゆく

一九六七年

綿かごに幼子と野瓜摘みてゆく赤き没り陽に山は暮れつつ

同

石 神 貞 子

税関のとがめもうけて持ち未にし琴弾（ひ）くとなく四年過ぎにき

一九五六年

竹と椰子張り巡らせる吾家にて弾く琴の音はこもることなし

同

ふるさとの庭に咲きしと金魚草のこまかき種は小包みより出づ

同

サラクーラ声すみとおり鳴く夕べ川面に魚は水しぶき上ぐ

同

石 川 濁

フエイラ立つ朝は早く起き出でて寒き街路に大根を買う

一九五三年

石 田 周 三（志村良一）

普請場に地均機重くひびきたつ霜害のバナナ押倒しつつ

一九五三年

うつつには関わりありて資格なき市長選挙の推移見まもる

同

服むさき新聞売子の像佇てり罷業者群がる広場来ぬれば

同

折々に歌認むる手帖より「物価指数比較」の切抜落つ

一九五三年

黒人の妻を伴う邦人が我が瞳を外らす罪ある如く

一九五四年

皮膚の色いたく異なる父と子を見較べて居り移民の吾は

同

車窓より見放くる限りの棉畑の斑（まだら）に白し秋深くし

一九五五年

数頭の馬をつなげるボテキンの庭の向日葵路に向きおり

同

モーターの音ひとしきり高まりて大河の船は進むともなし

同

日本より届きし雑誌につむ埃放射能あらずやと吹き払うなり

同

撮り終えしフィルム一つ巻くごとく暗黒の床に今日の眼つむ  
る

同

石 塚 重 蔵

故郷はパストとなりてイペー一樹鳥も鳴かずに花咲きており

一九五八年

イピランガの公園の空に一ひらの真白き雲が浮きている朝

一九五九年

陽にきらう記念像は高くして独立のことに思い及ぶも

同

辞職せるジャニオの話切れ切れに聞こえて階を昇り来る音

一九六一年

種子を蒔く人らせわしく見えおりて風にのり来る音の好まし

一九六二年

シャツペウに花の枝さす金魚売り昼の舗道をふれつつ来たる

同

石 塚 東 秋

街路樹の青葉の下に待ちおれば電車は音をきしませて来る

一九五五年

音立てて枝渡り行く山猿に木棉の花のパラパラと散る

同

いつになく鎮もり返る午にしてマモンの広葉落ちて音立つ

同

石 塚 や す

修理していたる工夫が声ひくく梯子の上にて通話をばはじむ

一九六二年

漁獲船いでてゆきたり光りいる海にひと筋の水脈を残して

同

政変の不安をよ所にサンジョンを祝う熾烈な焚火のうなり

一九七一年

言い得ざる心の重き日のはてに冷たき豆腐を掌の上にきる

同

生活の翳あらわる君の手につゆしたたりて桃むかれゆく

一九七三年

胸ふかく溜まりしものを吐き得ざる吾をつつみて雨季の夕映

一九七五年

脆くなりし齒のこと寂しむ陽炎のかすかに揺らぐ日溜りに居  
て

一九七六年

ひそやかに魂はなれゆくかたちにて紫陽花の毯をいづる黄の  
蝶

一九七八年

石 塚 幸 路

はなやかな花嫁の日ありし我が妻も労多ければ今はやつれし

一九五六年

石 戸 羊 我

道の辺の青草原もユーカーリの林となりぬ三とせ見ぬ間に

一九四八年

沖合に大漁合図の旗見えて陸に集える漁夫らいきまぐ

一九五〇年

石 橋 奇 峰

水素弾原子力よと騒ぐ世に我はカンテラの下に歌よむ

一九五三年

石 橋 テル子

宝石（いし）はめしブローチに似てフアベーラの山は灯りぬ  
街のはたてに

一九七三年

雪雲に似て空昏し移り来て雪降る街は遠きまぼろし

同

朝日の消ゆるばかりに儚きを眼にとめて編み機に戻る

一九七三年



枝剪りて奇型となれる街路樹のさみどり萌ゆるビルのはざまに

一九七八年

石橋 初穂

旱天の続きし畑に慈雨来たり土の湿りを掘りしめたり

一九七八年

飼い犬もさびしきものか扉を覗き妻が柩に項（うなじ）垂れて去る

同

亡き妻の遺影たどりてアルバムをくればやさしくもの言う如し

同

木洩れ日の淡き光に鍬を振る道路普請に声をはりつつ

同

夕暮れて蟻の巣探す叢に電灯向ければ螢群れ飛ぶ

同

ダム底となり行く荒れしわが畑穂草なびきて夕陽落ち行く

同

石橋 美津雄

暴落の悲歎をよそにコーヒーの花は香に立ちいま咲きさかる

一九七〇年

パウリスタの国道に行く自動車の三割は日系のものと聞きたり  
同

汽車の音間近に聞こえる朝にして梢をならす北西の風  
同

石 部 健一

夕なずむセーラ ネグラを見あぐれば宵空高く星のきらめく  
一九七二年

まゆずみの如山脈に煤煙がかかりてやがて空に消えゆく  
同

にが瓜の熟れ実ついばむ鳥ありて熟柿の如き しょう液こぼる  
一九七三年

井 尻 白 峰

あきらめておれども惜しき霜害の珈琲園に夕日あたれり  
一九五三年

泉 清

埋葬を終りて点す蠟燭の炎はゆらぐ夕日の中に  
一九五五年

粉ミルク ニンニヨと印せる空箱の中に座りて吾子機嫌よき

同

満開のコーヒーの花香に匂うおぼろ月夜をウルトウの鳴く

同

客一人髪刈られる部屋にして古りしビオロン一つかかれり

同

泉 皓一

たてつづけにアルカシヨフラをよばれおり料理法等教えられ  
つつ

一九六七年

縄煙草けずる手つきも板につきかにかく我も住みつきしなり

同

磯 部 勇

アマゾンに來たりて一年の日はたちぬ密林の中に今日も暮れ  
ゆく

一九五六年

アマゾンに住める同胞は貧しさに堪え居る生をつくづくと言  
う

同

アマゾンに三年おればマカコになると暗き灯かげにて語りお  
るなり

一九五七年

井 唯 澄 子

原始林に斧をふるいし父偲ぶ枯草原に火を放ちつつ

一九七三年

愛着と恐れいだきて仰ぎ見しゴムの巨木の伐られゆく音

一九七四年

老幼の墓碑の多きが物語る開拓史悲しき日系人墓地

一九七五年

出稼ぎに地球の裏まで来しものをいつしか移民と呼ばれて居たり

一九七八年

農薬禍言う人もなきか黒人等薬にまみれ荷を運びおり

同

此の国に四十余年住みつきて何処の民にも異和感もたず

同

浮き草の吾にはあらず訪ね行かば祖先の眠れるふるさとは有り

一九七八年

市 川 幸 子

対岸はメキシコと云う船べりに銀色の魚群なして飛ぶ

一九五八年

船今宵北回帰線のあたり越すマストの上の月はおどりつつ

同

ドラ鳴れば静かに湾を離れゆくキュラサオの灯は東京に似て

同

果てもなきみんなみの海くれ初めて吾が船一つ波をけるのみ

同

税金を負けよと言えばオルゴールよこせとせがむサントス税  
史

同

不安抱く移民の吾にキリスト像は優しかりしよ胸いたきまで

同

近づけばかじりつく児よ白痴なる故の汝が眼に引かれゆくも  
の

一九六二年

草を刈る老黒人の痩せ肩に聖祭日の夕日落ちゆく

一九六五年

たつきやや落着きを持つ昨日今日庭のバナナは日々太りつつ

同

ベトナムの民らは如何に生きつぐやユーカリの上に湧き狂う

雲

同

市 脇 ち か

内職をわがするかたえに子は座りたどしくも日本語を読  
む

一九五五年

四十路越えし吾にはあれど只二人夫と歩めば心ときめく

同

一杉 富美子

発ちましし夫を送りて帰り来し庭の松の芽伸びて撓えり

一九七四年

五瀬 延子

戴きし鉢の桜の咲きたれば風強き日は取りいるるなり

一九五五年

ゴヤーバの葉にて包みし餅食めば柏餅の香われに頭ちくる

同

電流の来るころなればアイロンを取付けて待つ布に霧吹きながら

同

井出 弘

川岸に山羊はつながれ啼きて居り細く音なき雨に濡れつつ

一九四八年

電燈のともらぬ町の家にして夕べはともす暗き油燈を

同

診療のカバンをさげて吾が通うリリオ デ ブレージョの匂  
う沢道 同

高み来る汐をかぶりて幾つかの岩はくろずむ朝かげの中

同

あさ汐の満ち来る河を渡らむと靴ぬぎズボンぬぎて君にした  
がう 一九五三年

吾がかたをもむ妻の手にまつわりて吾子は幼き反抗を示す

一九五八年

夜もすがら河岸明るく点りいて架橋工事に人影うごめく

一九六〇年

塀に添い妻の植えたるニラの花月なき今宵しきりに匂う

年代不明

ベビーベッドに子は深々と眠り居り細きカンテラ枕辺にして

同

稲垣 文雄

音読をこころみ稿に手を入るる車庫の片隅の夜の机に

一九七八年

移住祭をテレビで見しと東京の姉の電話を聞き出勤す

同

皇太子の声に泪ぐむ隣人に双眼鏡貸せば手が震えている

同

舌足らずの日本語にて反抗する吾子の思春期よ黙すほかなく

同

スモッグの無きあしたにて車窓より見ゆる新築のビル輝ける

同

壑家の窓閉めしことなく暁の冷氣に覚めてカンテラ点す

同

セラードの珈琲園の花の中「怒りの葡萄」の記憶が返る

同

春暁の街灯の下馳け抜けしマラソン選手の背番号読む

一九七九年

## 稲佐山路

此の街はもとの吾がまちナタールの前夜耀く舗装路歩む

一九六二年

うすれゆくコーヒー苗場の夕光を愛しみつつ憩う消毒終えて

同

酔い夫につながる暗き追想も幕閉（と）ざすがに消えよと願  
う

同

わら厚く敷きゆく若き胡瓜畑春は名のみにて夕冷きびし

同

## 稲野篤草



大豆の値回復の望みなくなりて家ぬち流るる風も冷たし

一九七七年

ひと本のイペーに花咲きたればわが家の庭も明るくなれり

同

ためらいもなく病雛を処分する冷たさ持てり養鶏家われ

同

つややかに黒く光れるジャボチカーバ含みて噛めば山の香の  
する

同

長雨のようやく止みて陽の射せば唐黍の花粉風に流るる

一九七八年

次々と農薬撒布せし棉になお平然と生きいる虫あり

同

青々と茂れる棉の葉をめぐり人と虫とのたたかいつづく

一九七八年

暮れなずむ残照の空背景に丘に一本のマンガ樹繁る

同

雨もよいの夜の空気をふるわせて気忙しくひびく耕耘機の音

同

新しき害虫トリコプリアと言うを記憶せむとして繰り返し  
云う

同

蛇口より迸しる水掌に痛くラジオは降霜のおそれを告ぐる

同

朝の窓あければ耕土すれすれに声をあげつつ燕とび居り

一九七九年

負債をば返済の目処つきし夜を聴きおり静かに降る雨の音

同

この郷も人等出でゆき鶏鳴の遠くかすかに聞こえ来るなり

同

印 南 裕 国

マンゴーのしるく荅をむすぶ頃おみなノ如く我抜毛しつ

一九四九年

井 上 豊 乃

遠々と地平の果てまで牧原の冬のみどりが目にしみてみゆ

一九七三年

久々に来しノロエステの古里の街をゆきつつ来し方思う

同

病院の四階の窓ゆとどきくる人声とおる寒き朝を

同

褐色の穂草野の面を染めつくす見あかぬままに街に入りぬる

同

井上 丈夫

蜜蜂の羽音もいつか絶えゆきて白きミカンの花散る夕べ

一九五五年

井上 詩章

酒なめつつ夜ふけの卓にペン執れりはるけき空の遠雷ききて

一九六三年

井上 房子

家々の壁に水跡残りいて深き所は吾が背丈こす

年代不明

井上 ふじ

祝宴に邦語挨拶の吾子の声隣室に聞きて胸痛みくる

一九六四年

わがものとなりし土地に育ちゆく稚苗に注ぐ水溢れたり

一九六七年

池の辺にふみ慣らされし道細く枯れしミーリオの株間縫いゆく

同

吐く息のまともならず面そらして棉田を渡る風に逆う

一九六七年

朝影に慣いとなりし一刻の除草を終えて鍬の土とる

一九六八年

期待せし雨雲風に流れゆき射し来る朝光赫土晒す

一九七三年

今日一日となりし休暇を惜しみつつ温かき冬陽に洗い髪干す

同

井 上      ま す

白びかり咲く珈琲の花の海今日の茜の空と照り合う

一九七〇年

井之盛      一 翠

色づきし稲のたり穂を眺めつつ降りつぐ雨に長々と寝る

一九七六年

井之盛      井 子

ガビオンは羽音するどく突込みて野焼き煙の中をくぐりぬ

年代不明

夕月はいまエンシャードの形して遙かな丘のユーカリの上

同

二十人の友ら電話で呼ばれ来ぬ牛の鞆丸料理とは知らず

同

土地主の移り去りたるこの屋敷マンガの花は庭一ぱいに散る

同

伊藤 安月

其のかみに王宮なりしムゼウの庭しげれる木々に青こけむせり  
一九五二年

いく年か希いしイピランガに来つれども店守る夫を思えばわびし  
一九五四年

伊藤 香椎

秋づきて病葉散りしフィゲーラの木梢に青き蘭の幾株

一九四九年

ひでり日の風にゆれいるマンガの実つぶらに青し朝の庭に

一九五三年

昨夜炊きてつめたくなりし辨当を持ちつつ子らは棉摘みにゆく  
同

有明の月の明るさ言いながら棉摘みに行く三人の子等

同

猛獣のすむ原始林ひと谷をこえて彼方にくろくねむれる

一九五六年

久々の雨は降りたり棉を蒔く播種機の音はおちこちに

一九五七年

茂りたるカッピン　ゴルズーラを分けゆけば葉のごとき匂い  
立ち来る

一九五九年

棉がらを抜きいる吾子の姿見ゆ畑をおおえる朝霧の中

一九六四年

只一日に革命軍の勝ちたりとラジオききつつ山辺静かなり

同

イペー　ロツシヨの花咲き終えてたちまちに枝々おおう青葉  
となりぬ

一九七一年

カイアブにゆく道の辺に清しかり水色朝顔あまた咲きつぐ

一九七四年

伊藤　掬　泉

おくられし父の戒名を仏壇の母の隣りにおきておろがむ

一九五三年

市長選挙間近になりて候補者が宣伝放送にしのぎをけずる

同

伊藤 次郎

雑木山西に背負えるわが家に四時を過ぐれば夕日あたらず

一九四七年

夕つ陽に真向かいにつつ青葉吹く風の涼しき山を下りるも

一九四八年

如何に言いて金借りんかと惑いつつ霧雨の中にバス待ちてた  
つ

同

思い煩うこと多くして眠れねばふたび起きてランプともし  
ぬ

同

へたさえにいばらを持てればジュアの実の赤く熟みしを喙む  
鳥もなし

一九四九年

野にジュアの花白き頃郭公は鳴きつぎしかも裏の林に

同

星光のさゆるこの夜は山脈の向うの海の鳴るが聞こゆも

同

共同便所の一つに入りてポケットより心細き金を出して数う  
る

一九四九年

河に沿う低き牧場の青めるを舐めつつ動くまだら牛の群

同

とめどなく舗道を濡らし降る霧に恃めなき思いの又蘇る

同

幼時より暗く貧しきを思うとき心に迫る或る主義の声

同

金にならぬ歌に命を寄する我の愚かさを義兄は会う度に言う

同

鳩時計の鳩が五声鳴く聞けば楽しき今日の会合終る

同

温けきみ声の前にうなかぶす吾の泪はとめどなく落つ

同

遠き記憶の日の如くにも靄はれし冬の峽に鳴く山鳩よ

同

仄かなる虹はしばらく立ちしかど朝霧はまた渦巻き流る

同

君の時間を妨ぐる悔いのなしといわねいそいそと吾は来てべ  
ルを押す

同

伊 藤 りわ子

汝が留守の間に蘭が咲きそむと夫の便りに記してありき

一九五一年

工大に入学せし次男がイガグリに頭刈られて幼く見ゆる

一九五二年

手にしみし紫蘇の匂いは一夜経て尚残りおりほのぼのとして

一九五三年



ある時は信仰を捨てんと思いたることさえありきありのすさ  
びに 同

カメラ班のフラッシュ浴びつつマイク通し爽やかにひびく吾  
が娘のポ語は 同

再びは訪うことあらじコパカバナ靄こめ来ればかすむ入江よ  
一九五五年

沿線は牧多くしくして駅ごとに牛糞尿の臭いただよう  
一九五六年

明け初めしソロカバナ路の冬空に鰯雲紅く染まれるを見る  
同

陽の温み残れる石に孫と座し五十年祭の花火仰ぎつ  
一九五八年

減収の故なる高値肯いて心すなおに豆代払う  
一九六二年

## 茨 木 烈 風

雨後の月微かに照らす茅屋に目ざめて聞けり妻子らの寢息  
一九四九年

鍬先にふれしインジオの土器の音かつては此処に住いしたる  
か 同

夜もすがら梢にさわぐ風ありて枯木の折るる音きこえくる  
同

ひねもすを風吹く中に黙々と老カマラーダはミリーヨもぎおり

同

病める子の水欲る声に眼ぎむれは壁の隙間ゆ下弦の月見ゆ

同

此の夜更け馬の咳き入る声のして荒仕事続きし日頃思おゆ

同

夜更けてふと目覚めたる我が顔に壁間を洩るる月光射せり

同

盗まるるを恐るるからに人の来ぬ畑の隅に西瓜を蒔けり

同

逃げし馬捕えて撫づるたてがみに怒りはなきて草食ませおり

同

悲しかる別れとも知らぬ幼きが汽車に乗らざる我をいぶかる

同

香りよきカネーラの木におのを入れにつつ薪にするは惜しと思いき

一九五〇年

井 本 惇

幼児の吾が子をみれば泪出づ汝が父の国は敗れたるなり

一九四七年

戦いて敗れしのちに思うちう悔しきことを吾らせりけり

同

匙とる手措くことありて温かき飯つつがなくなつたぶるを思う

同

大いなる時代の波にのるのみとひそかに思いうべなうべしや

同

夕餉をまつ間ひとときの明るさやこのくつろぎを許させ給え

同

身双つになれりしものを目守り来て玻璃窓遠き朝焼をみる

同

泉なし湧き出る乳よみどり児はむさぼりのみて飲み足りて眠る

一九四九年

この国に四半世紀はすぎしなりいとけなかりしふる里の土

一九五一年

時計塔まれにとぼらぬ夜がありて吾が帰りゆく頃おい寒し

同

小夜ふけし壁の中より聴こゆるはビルが落せる水のせせらぎ

同

弟が住まなくなりてペニヤ区も関りのなき街となりたり

一九五二年

み墓辺に今日新しき供華はあり安ろう魂のいづへなるべき

一九五三年

十年は互みにすぎし思いにて雨しぶく扉を宵に閉(き)した

り

同

大いなる乳房をもてりこれの世に生れ合せてその皮膚黒し

一九七〇年

あなただけ帰るくらいの金ならと言ひ出る妻にもだしいにけり

一九七二年

あかつきは僅かに冷ゆるならわしの目覚むればながきこの国の朝

一九七七年

篡奪かあるいは知らずひたすらに仿けるもののあらかたは亡く

同

吾が建てし家も古びぬこの土地も売り払われる運命にして

同

日本語が少しは解る幼らとこの昼おりぬ淡々として

一九七九年

この国に吾の残せるものとして四人の子らが行末のこと

同

入江みつ

子のことに一途に過ぎし日も杳く寄りいる窓に射す夕茜

一九七七年

かにかくも生きる喜び描きつつ夕光の中黄なる枇杷の実

一九七八年

冬眠の醒めたる如きまな裏に脹らみてゆく畑の黒土

同

寒々と茜うすれし雑踏にほぐるる如くビルの灯ともる

同

遠き火の明滅の如く去りし日と真昼寂しく記憶をたたむ

同

入 矢 武 一

苗植えて齡重ねしパラナ松の初実を拾う幼き孫は

一九七三年

色 川 献 次

破れたる無住の家を守る如立てるバナナに秋の風吹く

一九五三年

マルゴーズの穂波の中に立ちている一株の蜜柑の実はうれて  
あり

同

くちなしの実を集めきて孫のためクレヨン色の欠けしを補  
う

同

雨の中を子らはひねもすいそしみてバナナの若株今日も植え  
つぐ

同

色川 公羽

山峡の杣の細道たどりゆけばかのもこのもに人の住み居り

一九五五年

リンゴ祭の後に来たりてわが友とリンゴ畑をのぞき歩けり

同

昨夜の雨朝の道にきよらけし吾より他にゆく人はなし

同

岩井 梅

病む夫に心ひしがれ幾月かやさしくものを云いも得ず来し

一九六二年

パラナ松伸びゆく様もおのずから健やかにして雨期に入りたり

同

手術室に運ばれゆきし吾が夫の夜着をたたみぬ暗き思いに

一九六三年

この国に移りきてより二十年今年はじめてナタール祝う

同

春くればプリマベラの咲き咲きて我が裏庭の花あかりする

一九七一年

朝日さす珈琲畑にたつ虹を出て来て幼き孫と見ほるる

同

笹鳴りは雨降る如くきこえる病みふす独りの夜半の寢床に

一九七三年

つぶらなる珈琲の実が赤々と日に日にうれて秋ふかむなり

同

昨夜（ゆうべ）いたく風ふきたりと思う朝の庭にマンガの青  
実落ちたり

一九七三年

さきわいの未来を約す如くにも丘はなやかに夕焼けきたる

一九七四年

病みおれば忘れてありし故郷がにわかに浮かび涙わききぬ

同

岩井 久雄

起き出でてアイロンに火入れる日課クリーニングを業とする  
われ

年代不明

娘らが時折り放つ日本語二世の娘とはおもえぬばかり

同

岩城 春枝

雲間より富士の姿を見きわめぬ四十年目の郷帰りの日

年代不明

旅をゆく窓に果てなきカンナ園雨雲晴れてくつきりと見ゆ

同

岩 佐 一 歩 ― 静雄 ―

望郷の想いに仰ぐ秋の夜のこぼるるばかり星多き空

一九六〇年

旱に哭き雨を憂いて重ねたる移民となりてながき年月

一九六四年

椰子の花散り落つるひそかな音ありて静けき朝の陽だまりに  
居り

一九七七年

移民なる心虚しく居る夕べ岩の風化のあとを見て佇つ

同

アイヌ語にマツカリヌプリてう故里の羊蹄蝦夷富士遠く恋い  
つつ

同

パイネーラの花季めぐり来て還らざる四十年歳々移民老いゆ  
く

同

価値修正に粉飾されし決算書は抽象画に似て理解しがたし

同

岩 崎 義三郎

ウバツ―バの海辺に立てば沖遠く小雨に煙る初夏の島見ゆ

一九七七年

魚の名をつけしと言えるウバツ―バに昨日も今日も雨降りつ  
づく

同



朝明けの静かなウバツバの島影に漁師の舟が遠近に見ゆ

同

岩 下 松 枝

ボ語のほか語る者なき淋しさに一人ならぶる百人一首

一九七七年

此の地にて果つる命と思うとき恋しさまざる遠き故里

同

国を出て四十年は過ぎ去りぬ故郷の山河も今はおぼろに

一九七八年

岩 下 清 子

枯れし葉も青葉も落とし終日を吹きに吹きたる秋のから風

年代不明

すき焼きを囲みて母を祝いくるる子供等あるをただに感謝す

同

岩 田 要 一

子等はグワラナ我はビールを買い飲む墓参了えたる寛ぎに  
して

一九六八年

朝市に野葉など妻と需（もと）めつつ移りし町に漸く馴染む  
同

幾度か野火をのがれし冬木にも似てかくしやくと薪を割る父  
年代不明

落つる葉は落ち尽したる山ふかくトーラ伐る音おりおり響く  
同

ほろにがきリーマ野にもぎすすりつつ売る外はなき畑の辺に  
佇つ  
同

懸念せし雨後の寒さもなく晴れてマンガは多く花をもちたり  
同

## 岩 波 菊 治

椰子の葉ゆ垂れ落つる露はしとどにて月寒々と澄み渡りたる  
一九四七年

桃畑に来鳴くカナリヤ数増して朝々寒くなりにはけるかも  
同

肥撒きし畑に降り来て餌をあさるサビア チコチコ 百舌  
ビンチビー  
同

カローサを御しつつ封切りて拾い読む今着きしアララギ三月  
号を  
一九四九年

禁煙のライト消えしかばおのおのおのバンド外して煙草くゆ

らす

同

ニテロイ通いの渡船がのろのろと走る見ゆ高度五百米のわが  
機上より

同

波の秀マの白きも既に見え難き昏れ行く海の上を飛びゆく

同

空を行かば十日足らずにて日本に着くといえど誰も彼もが叶  
うことにあらず

同

天皇誕生の日という言葉なじめざり天長節と言ひ慣れし我ら

一九五〇年

我の名を歌に詠みしことある君故に樋口作太郎氏の名をば忘  
れず

同

パイネーラまたクワレズマの花咲きて今年の雨期の終り近づ  
く

一九五一年

一タレファは日本の反別にして幾許かと今宵思い立ちて計算  
始む

同

南回帰線を越えしあたり目に立ちて原生林の林相変る

同

如何様にして食うべきものぞと問い給うシユラスコの串を手  
にせる吾が師

同

既に朧となりし記憶をたどりつつ旅券紛失届に理由をしるす

同

イタペチの山の頂に雲なびき雨期明けし空澄みとおりたる

同

八十八の母よ一目だに逢いたきに遂に行き難きか遠きふるさと

同

大風呂敷をひろげて得意なる政治屋に軽々しく移民問題を扱われ度くなし

同

只一つ歌詠むことを據り所としこの国に生きて貧しかりし二十幾年

同

池の水が落つるところに青々と日本の芹が伸びてはびこる

同

## 岩波　とめ

霜にやけ霜にうたれしゴヤバの木一葉残らず落ちつくしたり

一九五六年

今日の日の如き歌会を願いつつ遂に果たさざりし吾が夫菊治

一九五八年

わが夫のかつての声がレコードより伝われば哭かゆ思い切なく

同

三十年ぶりにサントスの港にわが見たるああなつかしの日本の船

一九六〇年

我が亡夫の歌集を日本へ発つ友に託して遂に願ひかないぬ

同

岩 渕 史 津

ビルに翳る雲動かざり髪を梳く我が四十代は今日にて終る

一九七三年

我を降せしタクシー空車の灯をかかげ烟るガロアに吸われゆ  
きたり

同

辻占をインコにひかせて笑い合う少女二人のブロンド揺れる

一九七三年

灯のいろも夫子の声もやさしくて抜歯終えたる躬はたどきな  
し

同

土民が持つ歴史に触るることもなくて厨に煎薬の匂いを充た  
す

同

いら草に似たる青葉を喰めば齒に舌にまつわりて甦る戦中戦  
後

一九七四年

岩 本 錦 川

開墾の土地に來たりて寝る夜をこおろぎと蛙鳴き止まぬなり

一九六一年

晴れやらぬ空を眺めて愚痴多しコーヒーは未だ半ばも穫れず

同

北は水害南は旱に悩みつつ国都移転の日が迫り来ぬ

同

クワレズマ花咲く季なり厨から鱈の匂いす受難節の今朝

同

涯しなきこの草原の夕暮れに牛追う人の声透り来ぬ

同

寒風に朧ぶるいしつつ一群の北伯移民駅にひしめく

同

北伯の干魃のがれ来しと言う男馴れぬ手付きでコーヒーをむしる

同

露深き季節となりてチバジの朝霧白く河を蔽えり

同

黄昏の道を急げり香にむせぶコーヒーの花はてしなければ

一九六一年

帰化なして安らぎたれば毎月を孫とつれだち幼稚園に行く

同

岩 本 秋 月

秋雨の煙るさ中を頬被り裸足もありて葬い一つ行く

一九六五年

花珈琲香りあふるる樹の下に病父（ちち）を連れ来て共によろこぶ

同

夫の墓詣で来つれば雑草の中に花咲き夕蟬の鳴く

一九六七年

鳳凰樹炎（も）え咲く下に土工らが土にまみれしままに昼餉  
する  
一九六八年

夫逝きて耐え来し吾の半世紀古びし日記ににじみて居りぬ  
一九六九年

夏菊を供える川辺の無縁仏に夕日一刻明るく照らす  
一九七一年

独り居の静寂の中古里の妹らの声を空耳にきく  
同

これと云う重荷もなくて春秋をくらげの如き吾の生きざま  
一九七五年

古里を訪うこともなき現し身かせめて魂のひとたびはゆけ  
一九七七年

長らえて夫にすまぬと思いつつ八十八歳の誕生日来つ  
一九七八年

老いの身に沁みてきこゆる鐘の音かえらぬ刻を告げて鳴るな  
り  
一九七九年

移り来て年は古れども古里の紅葉の秋が目に見え浮かび来ぬ  
同

上 口 誠一

なつかしき友が住む国パラグアイと言うことば聞き耳傾けぬ  
一九七一年

上 田 エイ子

国境をかくれるごとく移り来てこの郊外にいきつぐわれは

一九六五年

永住の覚悟出来たり移民船に生れし長女の入学迎えて

同

マンジオカ植える間隔教えられわがわだかまりとけてゆくら  
し

一九六六年

神秘なる樹海の中のわが夫の斧のひびきに耳かたむける

一九六七年

同船とただ言うだけにはるばると一千五百キロの旅の来客

同

万博に帰り来ぬかとうながせる吾が師のたより幾度も読む

一九六九年

検閲の包解かれて日本着の柄がいかめしき空気なごます

一九七〇年

署名終えうけとりしこの日本の母よりの包み抱きしめて行く

同

上 田 き よ

ゆるやかに昇る煙の線香を吾子ら持ちゆく野辺の送りに

一九六三年



星の夜は兄弟四人徹夜して父亡きあとの珈琲とり入れる

一九六四年

上田 鶴代

ひたぶるの子育ての頃過ぎたりき孫に向いて唯円かなり

一九七〇年

上田 ひさし

牛追いの角笛高く野に渡り厳しき世相にかかわりもなく

一九六四年

上田 幸音

いねがたき帰郷の一夜明けそめて整いし荷物またつめかえる

一九七六年

東京という実感ほど遠くしばしタラップに立ちて戸惑う

同

唐突に富士山に見える一声に機上の人等総立ちとなる

同

みちの辺にわずかなバナナ並べいるしわ深き老人しきりに手を振る

一九七七年

上 地 弘 英

二カ年の不況の底にあえぎつつ育てしバナナ吾が家を救う

一九七四年

若き日の子供背負いて稲刈りし妻の姿よ瞼にひそむ

一九七九年

上 出 草 路

送り来し吾子の写真を幾度か人なき時に取り出して見つ

一九五〇年

再びは帰る日無けん吾が職場片づけ終りて事務室を出づ

同

上 出 チエノ

山深く生れ育ちて汽車さえも見ずして逝ける吾子のあわれさ

一九四七年

上野 紅陽

音もなく山焼跡に降る雨のその中に白く煙はあがり

一九四八年

シーカラのふれ合う音を聞き乍らボールにおそき午の飯食む

同

吾等を背負い育て給いし母の背の暫し見えつつ汽車去りゆけり  
一九四九年

週に一度の朝市を待ち簡単に喰べられる物を選びては買う

同

壁をへだてて住み居る彼も出稼者にて或る日は鰯焼く煙をあぐる  
同

理解ありて若き吾等を許したる我が妻の母今は亡きかも

同

日のひかり薄くなりつつミレの花ゆれ静まりし丘移りゆく

一九五〇年

椰子の葉を引きずり来たり焚く子等と炎あがる庭に照らされいたり  
同

夜をかけて山焼くあかりが谷ひとつ距てて暗きさ庭を照らせり  
同

移り来しスザノの駅の食堂に独りうどんを食みつつかなしも

一九五五年

棺に向かい帽を脱ぎにし南米時事の社長の髪も白くなりたり

同

浜木棉の咲くペルイベを吾が友は故郷の海に似ると言うなり

一九五八年

同

ペルイベの海岸を走る汽車の音朝焼けの峽にこだまを返す

同

クワレズマ咲く山深く登りきて定めなく降る霧にぬれ居り

同

おくれ来し旅客機一機り才湾の夕日の島を廻りつつ着く

なびき伏すコルシヨン草の平野にて没日に赤く穂を染めており  
一九五九年

同

燕とぶコルシヨン草の秋の野を牛積み夕べ帰りくる汽車

同

病みあとの衰えしるく歩みゆくコンデの坂に動悸して居り

上野 武夫

はればれといま訪日に発つひとの中に小さき吾が母もあり

一九六九年

上原 知水

はだしにて来たる土人が気前よく値段の張れる鳥籠買いぬ

一九六六年

吾が店の秤検査をするにさえ官吏は三人つれだちて来る

一九六八年

儲からぬ農かこちいしが工事場に煉瓦を運ぶ老いしカボクロ

一九七〇年

吾がバスをひととき止めてまるまると肥れる小豚みちを横切る

同

さからいし日は遥かにて義父われの手をとりて娘は十字路わたる

一九七一年

健康をほこりし従兄のミサの席にひよわき吾の生きてつらなる

一九七二年

牧添いに吾がバス行けばあるなしの風にも牛糞の匂い流るる

同

夜も昼も病み臥すに倦みふと起きて仏像のごとく坐し居り吾は

一九七三年

混むバスに立てる異人の女童を膝に抱けばいつしか眠る

一九七五年

「二コント」と云う死語もなお使用して老婆はチシヤの種子を買いたり

同

隣席の母に抱かるる幼子はほのかに甘き乳の香匂わす

同

リヤカーを押し行く吾に街路樹のアカシヤの花やまず散りくる

同

老移民夫婦相寄り自殺せし新聞記事が吾を離れぬ

一九七六年

膝の上に歌語を開けば隣席の乙女の青き瞳がそそぐ

同

## 植村 かず

移り来て鋤持つ術を知りてより農婦の仕種（しぐさ）いつか身につく

一九五七年

吾が漬けし福神漬の味良しと今宵の夫は酒量過ごせり

一九五八年

子沢山少し誇りに思う日よ五人の子それぞれ投票に行く

一九五九年

投票に出でゆく子等に「田村さん忘れないで」とくり返し言う

同

遁るるが如くに去りし古里が美しく顕つ夕映の畑

一九六一年

夜の祈りポ語にて誦する幼な声移民の裔の翳はなかりき

同

己れ捨てむ思いに嫁ぎし日も遙か師走の街に夫と手を組む

一九六二年

釣人が捨てゆきし餌に群がりてウルブー傲岸なまな光らす

一九六四年

網繕うカイサーラの背に拡がれる海の藍にこころ染めゆく

一九六四年

この国の慣いに従い肉食を断ちて籠れる聖金曜日

一九七〇年

街角の電柱に縛されしユダの像聖金曜の陽に晒されて

同

カルナバル終えたる空の広き碧雁一列に海へ翔びゆく

一九七八年

移民史の哀話神話となりゆきてかく逞しく移民の裔ら

同

火焰樹の緑濃き葉と緋の花と秋陽の下にえがく明暗

同

実を持たぬ南天繁る菊治の墓黝ずみし碑にしばし手を置く

一九七九年

遠き日のかなしみを寄す海棠の花揺れ揺れて墓の鎮もり

同

古里を恋いつつ逝きし母の墓ブラジル人の墓に並びて

同

上村 登志行

向つ沢ゆはい上り来し朝霧はユーカリ林に入りてひろがる

一九四八年

波音の絶え間なきこの海岸を青き電車が笛鳴らして通る

一九五〇年

樹々青く茂れる向かつ島の上にウルブー舞いて遠くへ行かず

同

雲ひくく霧雨しぶく山峡にこもりて鳴くはサビアの声か

同

一ところはトマテ畠となりているこの草原を雨渡り行く

一九五〇年

灯を消せば心みじめになりゆきてこの幾夜をいねがたく居り

同

穂草なべて枯れ伏す岡のところで紅きはサンジョアンの花咲けるなり

同

旅人木茂れる岸につながれし青きボートが折々揺れる

一九五一年

秋ふかみあらわとなれる沼杉の幹に片差す陽のやわらかさ

同

もののひびき徹りすがしきこの朝セードロが俄かに落葉を始む

一九五三年

「ブラジルの声」放送しばし聴きいしがあたふたと鶏舎の戸じまりに行く

同



上坊寺 青雲

町角の屋根越しにみるパイネイラが葉かくれに咲く花の乏しく

一九五一年

暑き午後畠の下のわき水に喉をうるおし棉つみ続く

同

上本 ひろし

訪日のことはむなしく父のあと継ぎし弟に年賀状出す

一九六九年

牛草 茂

いまだ見ぬ吾をうたがわずはろばろとサントス港に着きし妻はも

年代不明

日暮るれば山すそ谷の遠蛙ききつつ妻は涙こぼせし

同

産院とて無き原始林のただ中に長男うむを我は助けし

同

急性腹膜炎の妻をベッドにゆわえつけ耐えよと言いぬすべきわまりて

同

いとけなき男の子二人の手をひきて獄舎に向う我を見送りぬ  
――開戦―― 同

故里をひと目見んとて肝癌に耐え旅ゆきぬあわれ吾が友――  
内木君―― 同

あまかけりもとめゆくとも故里に一人の母はついにいまさず  
同

肉親の人々あまた御仏となりてならべる故里の家  
同

しんしんと冬陽は照るも目路の限り霜枯れ果てし珈琲樹林  
同

花開き裏白にうねる珈琲樹海は遠く茜の空につづけり  
同

ひと日こもり夕餉にくだる梯子段に窓よりもれて夕陽うつれ  
り 同

牛 窪 星 泗

戦死せる弟の忌を来てサントスの潮の高鳴る音ききており

一九四八年

都会への帰心いやます日もありき土にまみれし吾子を見しと  
き

一九四九年

戦争の長き間の扶助料が積まれあるとの郷里の便り

同

乙女子が死ねば婚礼衣装にて葬らう国のならわしを知る

一九五〇年

祖国の物資は豊かになりしならん今朝つきしキングの厚きを見れば

同

珈琲で三千コントス儲けしてう話聞きつつ本読みたり

同

今宵わが泊るときめし伯人の小屋は体臭と尿の臭いと

一九五一年

幾人か逢いたき友に逢わずして旅の終りの夜汽車にいるも

同

遙かにもわが来しものか州境の山の奥がに樹々ならず風

同

乾からびし牛糞もあり枯草の秋の牧場の風は冷たく

同

帰らなん家すでになきふるさとの下野国と思うさみしさ

同

牛 尼 陽 子

我が知れる人あらぬかと新聞の日本だよりを丹念に読む

一九七〇年

灯にうるむ湖のさざなみ目にしみぬ祖母の逝きたる報せ聞く  
時

同

わが知らぬ楽しみ多くあるらしく雨の日吾子は積木に飽かぬ

一九七〇年

歌声と共におさな子帰り来て冷たき水を一息にのむ

同

宇多賀　　よし子

幾度かの霜をのがれてこの雨にのびふとりたるオブリンニヤ  
いくつ

一九五四年

内　川　　愛　李

街灯が一つ一つと消えてゆく鎮もる街に朝焼けのして

一九七七年

静かなる杜の小径に溜りいる冬の光りの中を歩みつ

一九七八年

竹むらの暗がり  
に冬の日の洩れて朽葉のしめりあたたためてお

同

段畑を一気にのぼり汗ばみし吾児に血縁濃ゆき体臭

同

内 城 は な

母と子の語らい優しく匂わせてるてる坊主ゆるる夕暮れ

一九七七年

地平線一と日けぶりて夜に入れば点々と見ゆ山焼く遠火

一九七八年

訪日の話題はわれに遠くしてたんばぽ一株残し草取る

同

内 田 笑 子

沈み行く夕陽に映えて赤土のジョン デ バーロの巣が燃える色

一九六六年

湿りたる路乾きゆく午後の陽に梅檀の実の踏まれいてにおう

一九六七年

道草は錆色をして道標の百キロを指す潮風の中

同

花椿音して落ちぬ旅人となりて故郷の土踏みし時

一九七〇年

キリストの巨像を吞みつつ下る雲にヒマラヤ杉の重々と立つ

同

頂上に立つキリストの像をめぐり無色の風の音は高なる

同

薬湯のにおいに倦みてたつ窓の遠き夜空に十字架ともる

同

出生地いい当てしより共にする旅路にやさしき訛りのまじる

一九七二年

遠く来し療養の身に刺さる如霜害のアバカシーのそそけたつ  
白

一九七五年

行く水に紛れて行きぬ放ちたる無色のチラピア雫の如く

同

滴らすマラクジヤの汁冷々と運命線の深みをなぞる

同

牛追いの唄透りくる霧中に記憶にうすき小径をたどる

一九七六年

内 山 豊 一

歌びとの集りへ行くと云う妻が乏しき中よりブルーザを買う

一九七七年

梅 木 袈裟雄

老インジオ昼は滝下の小屋守り観光みやげの弓矢をつくる

一九七六年

梅 川 智真子

のんびりと大陸的な気性にて丈のみのびぬ吾子のひとり

一九六五年

ヘッド ライト浴びつつ砂塵の中をゆくシネマ帰りのトラッ  
トール列

同

漉されゆくコーヒーの音のさわやかさ今日の仕事の張りとも  
なりて

一九六六年

梅 崎 嘉 明

飛ぶ鳥もあらず薙がれし荒山に日々の早は地を焼く如し

一九五八年

焼け残りし木の枝は網の目の如く遠く続きて斧の音きこゆ

同

蜂のとぶ音さえあらず咲き盛るマンガの花の風媒しずか

一九六〇年

限度こす酒にはあらず別れきて踏む音冷たき夜の電車路

一九六一年

煤煙は日々重なりて芽ぶかざる街路樹のした唇乾きつつ

一九六四年

父といて雁の渡るを見し日より三十年過ぎぬ移り住みつつ

一九六五年

輸血終えて眠れる妻の頬の上に窓のマナカの影はゆれつつ

同

亡き汝を想うとき糞尿の臭気たつあわれ人間の生命のはては

一九六八年

行く水のかえることなし州境の橋のたもとに集い昼餉す

一九七〇年

にんげんの絆うとましく思う日に出でて吾が寄る樹の肌温し

一九七四年

夜の底の静けさにして人去りし宴のあとに黒猫ひとつ

一九七五年

樹々を吹く風音うちに潜め持ちあわれある時独り

一九七六年

心一途に逢いし日のあり面影を喚びてくちなしの匂う

同

裸木に鳴る風寒しいでて来て思うひとりの行末のこと

一九七七年

梅 山 悟

ブラジル語遂に覚えず御母の柩は降さる異国の地に

一九六七年



浦 恵 樹

千頭と短く答えし牛追いも黄塵の中に消え去りにけり

一九五二年

昼を灯点（とも）すこの工場の奥深く深海魚の如く乙女ら働く  
同

札拝堂に朝光さしてひた祈る少女の頸の白く輝く  
同

浦 川 つぼみ —志牟田一重—

未明発のオニブスの外暗くして灯がすれちがう霧雨の中

一九七七年

墓守を己の仕事と語り居し人もみまかりて其の墓淋し

同

浦 川 久 義

シヤレッテの老伯人は今日も亦口笛ふきて前の道行く

一九五三年

浦田 光馬

供花ささげ笠戸移民の姑の墓に詣づる二世の嫁女

一九七八年

コンクリト調合計る板柅に群れ居る蟻を小石と盛り込む

同

物置の隅に忘れし山芋に尺成す蔓と細根延び居り

同

八十キロの時速で走る吾が先を危く横切りし兎ありたり

一九七八年

江頭 末一

怪鳥の渡りて暮るるアマゾンの裸族のカヌー闇（やみ）に消え行く

一九七四年

密林のあるじを斃せし蛮族の血祭の喊声よもすがらきく

一九七五年

惜別のつちくれ堅く握りしめ湖底に沈むこの地去り行く

一九七七年

江口 寿一郎

日本を訪いし緑の使節団記念の植樹育てといのる

一九六九年

江口 八重子

ゆるやかに迂回なしつつ出でてゆく郷愁のせて日本船は

一九六九年

紅に筏かずらは燃えつぎて養老院の昼は静けし

一九七一年

滝谷 儀助 — 江尻 潤 —

時代感覚の差をおのずから認めつつ週間おくれの邦字紙を読む  
一九六二年

日本人同士ということが通じない相手に怒りがこみ上げて来る  
一九六二年

雲低く迫れる連山を背景にバーレ デ パライーバの稲田ひろる  
一九六四年

政変の急を告げたる日々でさえ移民の悲しき沈黙におり

同

ポン デ アスーカルの麓に住まう弟の暮しむ容易なものに  
はあらぬ

一九六六年

ところどころ忘れし歌詞を思い出し思い出しうたう故里の唄

一九六七年

水害に死の町と化ししカラグワの磯打つ波は未だ濁れり

同

四百年前に奴隷が敷きしという石岨道を下る静かに

同

青き田の中に墓一つビオロンを掛けあり風雨にさらさるるま  
まに

一九六八年

江 藤 政 太

蔬菜騰貴(ママ)とラジオ放送を聞きてより吾灌水に力を注ぐ

一九六〇年

十五年吾と共に働きしブーロは日に日に衰えて行く

一九六二年

日雇いの親子は小屋の片隅でカルデロン一つの弁当食いおり

一九六三年

山火事の中突き抜けて振り向けば煙はあおる如く吾等に迫り  
来

同

野焼きして若草萌ゆる家の裏仔山羊が糞を落しつつ行く

一九六三年

わたさねばならぬ吾が娘の手をとりて神の前なるきざはしの  
ぼる

一九六五年

幾年か芋を運びて山奥に朽ちたる牛車史料館に移す

一九七八年

遠藤 タミ子

鯛買う我が劣等感を吹きとばし子等たくましく育ちゆくなり

一九六七年

重ねきしもののあわれを思うとき夜の海遠く潮かえりゆく

一九七四年

赦されし思いに髪を梳きて居り病癒えにし幼なの側に

同

入江抱く山々暗く夕さびて沖より潮のひたに満ちくる

一九七五年

火祭の煙澱める海の街掌暖かき幼なとあゆむ

同

昼の月白く浮かべる冬の野に赫き穂草の風に波打つ

同

貝類の死いちじるしき岸壁にバルサはくろき波しぶきあぐ

一九七六年

人影の無き夕浜の拡がりにウルブーのみが餌あさりおり

一九七八年

祈りもつ吾にうつりて霧捲ける湖の御堂にあまたゆれる灯

同

遠藤 浩

晩秋の入日短かく庭に射し石榴は朱き花塀を落とす

一九七一年

貨車の音短かくすぎし裏庭に干大根は冬陽にかわく

一九七二年

昼の陽のぬくもり地より還るとき残照赤く雲を染めたり

一九七三年

黒き水淀みし濠に重々とバナナを積みし舟の入りくる

一九七四年

草叢に干されし魚網秋の陽に乾きて潮の香りたており

一九七五年

にんげんの短き命を想いつつチューブに残りし齒磨きしぼる

同

つぎにくるもの待つごとく流木は潮のとどこかぬ位置に黝ずむ

同

夏の陽にヒマの葉輝くその側を戦中派の妻傘さしてくる

一九七六年

寒風に枯ることなく水草は水より高く芽生えていたり

同

生くるものなべて傷あり裸木の瘤より出でし樹液の光る

同

芽吹く木の匂う夕べに僅かにも吾が寢室に弱光の射す

同

風車より錆びたる水の雫おつ歴史の跡を残す家並に

一九七七年

岩一つつつみし青海苔彩冴えて汚染には遠き香を放ちおり

一九七八年

追 藤 鉄 坊

夜業する工員の打つ鋸の音夜の街路に高くひびこる

一九四九年

奥 羽 山 人

齢はや晩年になりしを思うとき夕べの風のひたぶるに吹く

一九七八年

丘 悠 子

裏山のプリマヴェーラの花赤く夕べ静かに霧たちこむる

一九五一年

小笠原 富 枝

原始林を墾きし記憶に繋がりにてしなやかならず吾の十指は

一九六三年

止めどなき思索の中を転ばする石ある角度となりて動かず

一九六六年

生活の底より生るるものの如小手毬の花は霧を透きつつ

一九六八年

日々を遙けきものとも衰えてゆかむ極みの赤さを野火は

一九七〇年

芽吹くもの泡だちて来る想いして再生林の低き日かげに

同

さしあたり播くべきものもあらざりき陽にほぐしいる土の  
塊々

一九七三年

生きの身を罪とし思う夜の渦に巻かれつつ白く汝の墓標は

同

茶の花の咲けるを言えり唇に触れゆく風のようなしばらく

一九七五年

死の序列ふと想いたりよぎりゆく人等に淡く夕べのネオン

同

終の日のまぼろし白く陽のありて狭間の土の微かなる照り

一九七六年



黒鳥の羽に染みいる朝茜はるかなる地へ繋ぎてゆけよ

一九七七年

入りつ陽を印（し）るさむと眼（まなこ）とじいるに茫々と  
暦の数字がめぐる

同

遅れつつ石多き峡おり来れば水藻の叢を水くぐる音

同

一面の陸稲の穂群撓めいる風吹きかわるときに鋭し

同

遠景とならざり真陽をかえしつつ畦きわやかに土盛られいる

同

遠く続くジャカラランダ今し夕映えて人あらざりし想いの中に

同

陽の熱気ようやく衰え街音の濁りに浮きつつ蝶ゆるやかに

一九七八年

剥製となれる小鳥を草叢にかえして土の息ききている

同

はらからも還る土なり散り敷ける木綿の朱を根に寄せいつつ

同

ひとの塊の石にもなれざり街音の及べる草より湧く虫の声

一九七九年

小笠原 政雄

幾年か子等へつづけし仕送りもようやく終えて心安けし

一九七六年

サンジョン祭廻り来る度思い出す大焚火せし耕地住まいを

同

裏庭に植えし珈琲の残り実を拾い集めむ雨過ぎし朝

同

教会の尖塔をゆるく鳩舞えり独立祭を祝うが如く

同

霜害より二年経たりしマンガ樹に青き実なれり枝もたわわに

同

移住地の泥道ゆけばおちこちに王冠樹の花色冴えて咲く

同

久々に訪い来し家の道端にパウダリヨありて仄かに臭う

一九七八年

樹の間洩る冬の朝陽の柔かく鋤引けば肌微かに汗ばむ

同

其の昔の移住者の多く逝きませる墓標の文字はすで見え難

く  
同

夜詣りの終りて出されしもてなしの熱き甘酒は味わいて飲む

同

小笠原 正好

物言わぬ壁に目あるを感じつつ落選の画を担いて帰る

一九七八年

苑の池の木下は暗く水動き上れる家鴨赤き足して

同

園に坐し往き来の人を見てあれば首に飾れるものの光れる

同

僅かなる木叢が下に草あれば心静まりそこを離れる

同

ジャカランダ並木は花の時雨なりきいずこの街や思い出せ  
ず

同

与え得る物など吾に何かある土偶の目より暗き目をもち

同

園の風に面撫でられて逆らわず木偶らが並ぶ次に並びて

同

土に書き泪を落とす吾ながら水亀の甲乾くを見て居る

同

向き向きに個を守り来し大小の牡蠣の痕ある岩肌乾く

同

若きらに見られているを意識して桃色貝をわれは拾いつ

同

椰子の実と貝と繋ぎし首飾り優しく動く掌の上

同

口笛は鳴らず唇を風通り茫々として思い出は無し

一九七九年

広告板貼り替えている春日中わが乗るバスの赤きが止まる

同

## 緒方 紫 邑

手を振りてボリビア国境に別れたる移民列車の夢まどかなれ

一九六一年

バルコニーは大王椰子に守られて国境の河に没陽哀しも

同

成算なき技術移民と言われつつ今日も工場へ売り込みに行く

同

子等と乗るローダ ジガンテ沈む陽を吸う如き町大サンパウ

ロ

同

転落のドルの相場も底をつき給料小切手泣き泣き売れり

一九六三年

呆気なくジヨフレに敗れし東洋のチャンピオン青木テレビに見たり

同

この細き川が水害くりかえし恐れられているタマンヅアティー

一九六八年

緒方 新男

見はるかす地平を超えて追いかたり五千の牛と吾等疲れぬ  
年代不明

クワレズマの苗培いて十年目花盛る庭惜しみ移れり

同

尾形 天涯

さすらいの果てに吾が来しこの国を子はふるさとしつつ育  
ちぬ  
一九六二年

ぎりぎりの生活を子らに強いており農村不況の声の久しく  
一九七七年

子の幸を思い言いし事すでに古き思想とそしられて居り  
一九七七年

小川 貴美枝

遠くより野火の煙は流れきて黄昏どきの靄ととけあう

一九六八年

異邦人と夕餉の卓を囲みけりつたなきポ語で話さねばならぬ

同

母の日に貰いし香水娘が甘く匂わせバイレに出でて行きたり

同

インジオがうちし穴も苔むして修道院を囲む石壁

同

ブラジルの民とし育ちゆく吾娘にせめても習わす生花などを

一九六九年

アバカテの揺るる大樹の秀をかすめ秋の燕は腹かえし舞う

同

亡びたるインジオの砦にはびこりて野朝顔の花白々と咲く

一九七三年

グワラニ族の名残りの砦と記したる白き碑の文字声たてて読む

同

州越えて続く霜害のあと巖し芽ぐむきざしなきコービー樹海

一九七五年

六十路近くポ語の夜学に肩こりぬサイレンに息づきながら背伸びす

一九七六年

奴隸等の手枷足枷など置ける部屋冷えびえとしてうす暗き

一九七七年

街角に尼僧ら二三人集りてロテリヤ札を選びておりぬ

一九七七年

小川 春江

ゆくゆくは渡伯希望の少年をペンフレンドに吾子は持ち居り

年代不明

善良なる伯人達に交り居て異郷にあるを時に忘るる

一九六三年

山焼きの白き煙におおわれて太陽の光にぶく照らせり

同

群がれる人かきわけてのぞき見る日系初の田村連邦議員

同

相次いで政変おこるこの国に不安定なる心地にて住む

一九六四年

両隣り伯人の住むこの家に日本語話しはばからざりき

一九六五年

地下道は人いきれして異人種の体臭われになじみがたしも

同

岡田 一美

九十の母が書きたる便り読み吾は訪日の心をきめる

一九六九年

岡田 北斗

「よみもの」誌の川柳欄の秀逸に入りし我が名を暫し見つむる

一九五一年

皿に飯もりて家外に出でて食うカマラーダの真似をしたがる  
幼ら

一九五一年

珈琲の欠株植えつぐ我にして六十路の坂を越えんとぞする

一九五二年

山焼きもようやく終り降る雨にこめしけむりも今日のはれた  
り

同

州境の山なみ高み我が泊てしカルロポリスの朝ごとの霧

同

月末の土曜日毎に出すカミニオンに群れて乗るコロノ達その  
女たち

同

岡田 みどり

公園より歓声聞こゆ芝中にグライダー追う幼子の声

一九七九年

夕焼けの燃えいる空ははるかなるタボンの家並を封じいるが  
に

同



岡田 深雪

入宮と決まりて吾子のたくましく育ちし体今更に見る

一九六九年

暮れなずむパラナパネマの湖にゆらぐ灯は釣りする人か

一九七八年

移民祭も待たず年の瀬越しかねて老いし知人の幾人か逝く

同

野良に出るわれを慕いて泣きし子等もそれぞれ技師となりて  
巢立ちぬ

一九七九年

岡野 卯三郎

高々と積みあげし棉の荷の上に裸の吾子がたくましく居る

一九六六年

道端にこぼれ落ちいる棉大豆豊作にしてしげきトラック

同

蜜柑の花雪降る如く散り敷きて視界がなかに豊かに匂う

一九六七年

黙々と農夫一人が棉を蒔く西空に湧く雨雲早し

同

菜園に草取りおれば遠くより朝餉を告ぐる孫の声する

同

黄塵にまみれて帰る旱り道心も体も疲れはてたり

一九六八年

新しき収穫機買えど採る米は日毎に枯れて支払いがたし

同

一日の疲れも消ゆる思いして嫁が注ぎくるるビール飲むなり

同

剃りあとの顔を写すにいたいたし皺は年輪の如くにふえる

同

イッペーの花咲く下に車停め憩えば花の限りなく散る

同

同郷の人との対話いつしかに国の訛りとなりてはずめる

同

古里の山も描ける一幅の絵画を今宵買い求めたり

同

岡野 でん子

二カ月余夫をみとりし病棟の点る窓べをひとりみてたつ

一九七〇年

帰省せる吾子をかこめる夕餉にて炊きし新米匂い豊けし

一九七六年

五十年夢にのみ見し故郷の畳の上に吾は眠れる

同

幾度も人を送りて来しものか今日は吾が乗る飛行機を待つ

同

笑う声みな亡き夫に似通うを聞きつつつどえる子

一九七七年

父の遺志継（つ）ぎて農事に励む子に足らいて花の咲く

同

混血の孫三人をとりあげるすでにこだわるものもうすらぐ

同

重ねきし苦労も今は夢にして牧に増えたる牛群を見る

一九七九年

枝豆を肴にビール飲みし亡夫の口許今も颯ちてくるなり

同

岡村 武

夏も早や過ぎんと思う更けし夜の椰子樹に高き南十字星

一九四九年

岡村 滴露

片なびく椰子立つ丘を耕せる人は夕陽へ耕馬をまわす

一九六七年

岡村 優子

久々に朝より降り出づる雨の中カリンニヨ押して朝市へゆく  
一九七七年

岡本 喜代子

母となりてわれにやさしくなりし娘がときには姉妹の如くも  
の言う  
一九六八～七〇年

ねじ巻けばベルソの上のつり玩具廻るよ孫の在りし日の如  
同

鳳仙花虚しき音にはじけたりあわき冬日の陽ざし受けつつ  
同

プラタナス黄葉没り陽にかがよえば一瞬われの心ときめく  
一九七一～七四年

目的を持てる如くに草原をとぶ白蝶の一途なるさま  
同

海苔焼けばほのかな香りの満つる朝雪降るといふ空を想いぬ  
同

眼を閉じし人みな寂しき貌もてり車窓は朝の白みそめゆく  
一九七五～七八年

ここよりは立入禁止の札ありて戻る車内にりんごが匂う

同

梨の花咲きぬと告げて来したより生きて会いたるえにしのひ  
とり

同

朝よりの心うつろにいるひざに乘せくる犬の頭がぬくし

同

臨終のさまを聞きつつ生きの身はフェイジョアードをかきま  
ぜるなり

同

## 岡 本 早 実

霧雨に濡れた枯草踏みて来し小径はつきて焼跡に向かう

一九五〇年

竹垣の中なる甘蔗穂に出でて寺院の塔が夕焼けに染む

同

黄昏るる街に四角な煙突がその片面を暗くしており

同

吾が服地の古きを染めて幼子のズボンを二着妻が作りぬ

同

新婚の友を訪ないついにして貸金のことには触れずに帰る

同

目にしみるもしびのもとで適切なる手当てなきかと医書を  
めくりぬ

同

岡山 波津子

菊香る我が室にいて母の日に吾娘がくれにし靴はきてみる

一九五三年

教会に捧げし余りを各部屋に活けし小菊の香る母の日

同

大垣 堯

まなかいの原生林の高きより湧き水ひける君が生活

一九七九年

夜くだちてバナナを渡る風音と原始林より梟の声

同

樹の蔭にレモン二（ふた）株茂りいてここだ熟実の落ちて散  
りばう

同

大釜 七 蔵

つるし柿軒に吊られて霧深き朝の空に鳥の声きく

一九七六年

薄荷会社の壁そいゆけばもれて来る強き香りにくしやみつづ  
けり  
同

沖 山 白 兔

五十幾年か住みしノロエステなつかしき六男二女を育みし故  
郷  
一九七六年

八十となりたるわれの祝杯をたかだかとあぐる子等に囲まれ  
て  
同

セボーラ作りに精魂こめしラビニアの昔の夢に思い深めり  
同

奥 田 無 岳

郷愁は吾一人のものでなし満たざるままにフエイジョン喰い  
おり  
一九六四年

身に潜む野生を当然の事として生ける土人の悔なき童顔  
同

山手より限りなく蝶の翔び来たり不吉な兆と思い視つるも  
一九六五年

ひび割れて赫くかわける土の面を風ゆるやかにポエラたてゆ  
く  
一九七三年

長々と列をなしゆく牛群の周辺に湧く大陸の風は

同

奥田 葉吉

焼け残る巨木一本頂きに黒くそびえて丘は暮れそむ

一九四八年

素枯れたる原の向うは霧白く流れてイタペチの山脈見ゆる

一九五三年

智恵いまだ足らぬ十一の子のために守護にならばと聖像を買  
う

一九六一年

悉くポ語書となりし書架隅に木彫りの達磨を一つ飾りぬ

一九六五年

奥野 精一

定年後は世界旅行を気負い居し友は訪日の旅にて逝けり

一九七八年

客の来ぬ時見はからいバルコンに二人暮しの米を選ぶ妻

同

我が店になじむ雀ら店内の落ち米あさりひとめぐりする

同



支那文字のネオンかがやくパラグアイの国境の町は赤土の街  
同

銀行の会計の乙女が煙草吸う酒場女の姿態を見せて

同

落ちたぎつ澹の飛沫にきらいつつあたりの草木の絶え間なき  
揺れ  
同

遠く来て遊覧船にてさか上る伯亜国境の河は探しも

同

バルコンに並べる卵盗られしを店閉じて後妻の告げたり

同

奥 平 慎

嘆願は遂にきかれず凶作の肥料代にと農具売らるる

一九六七年

ゴベルノの肥料代払うとジープ売り露の夜道を吾子と帰来

同

大久保 淡 通

転業の荷をも片づけ出聖のバス待つ朝の霧晴れやらず

一九五三年

憶い出になりゆく蒼き山峡よセンフィンは低く鳴きやまぬかも  
同

山脈を越えて海鳴りのとよむ夜は育雛器の掩いを掛け増して  
寝る  
一九五七年

大熊 秋楓子

そびえ立つ大王椰子に吹く風の葉鳴りさやけく梅雨上るらし  
一九四八年

まずしかる我が家の生活思いつつ夕づく畑に耕し居るも  
同

朝な夕な菊培いて老い父は此の頃故国の事を語らず  
同

移り来て幾年経にし此の国につたなき歌を詠み続け来し  
同

口癖に故国に帰ると宣える父はこの頃とみに老いにき  
同

秋雨のけぶれる丘の木の間路を小さき柩の下り来る見ゆ  
同

奥村 たけし

何もかも去りゆく如き淋しさにたまりかねては煙草吸うなり

一九五六年

奥村 敏江

唯一の生甲斐として育てたる子の卒業の席につらなる

一九七九年

灌木の発動機音単調にひびきわたりて農園の秋

同

夕方の雨あたたかく街路樹の青葉はあまき匂いを流す

同

夜の霧に口笛ふきて現われし夜警の姿闇に消えゆ

同

奥村 富貴子

日本着を着たる吾が娘の立ちすがたおどろくほどにしとやかに見ゆ

一九五八年

日曜も機上勤務にゆきし娘にすまなく思う午睡の床に

同

投票を終えて帰りし長女は州統領にカルバリョピントを推したりという

同

大 倉 正 友

蒼茫とくれゆく丘の彼方なるピンダの町の灯はるけし

一九四九年

飛沫あげて今先頭を進みゆく水上日本のホープ古橋

一九五〇年

チバジの瀬の高鳴りの鳴るなべにインジオが住む嶺そそり  
立つ

一九五一年

取りあげし受話機の声は息荒くりオに革命起こると告ぐる

一九五六年

着飾れる人等寄り添いて漫步するジャカランダ茂る夜の公園

一九六二年

赤土の埃風吹く街に来てシャレッタ傭いホテルに向かう

同

このあたり工場多き地帯にて電車は黒人等で鈴なりとなる

同

サンタレン革命の情報を語る君と編集室の階のぼりゆく

同

この国に生れし娘等にさげすまれ夕餉は妻と味噌汁する

同

この国にウルブーとよぶ鳥がおり群がり競いて死肉を喰らう

同

厳重な警戒のなかに花火あがりアデマール デバーロス氏空  
港に着く 同

片言に日本語話す鸚鵡いて時には場末の食堂に行く

同

同胞の一人も居らぬ街に来て宵を公園のベンチに憩う

同

大倉 芳子

未だ見ぬ人ゆ贈られし味の素メイド イン ジャパンの文字  
もうれしく 一九五〇年

尾崎 貞良

アマゾン河アグアブランカ生き生きと今日も下りぬ白波たて  
て 一九七〇年

夕暮れのイガラポの中迷いつつカノアを漕げば蘭香り来る

同

尾崎 都貴子

たわわなる柿の朱実が郷愁の灯りとなりて裡につらなる

年代不明

夕茜その一瞬の儚なけれどいさぎよくして吾を佇たしむ

年代不明

大沢 愛子

日本にては忘れ去られし教科書に日系の子等片かな学ぶ

一九五六年

一人覚めて日本より荷を包み来し新聞延べて読む憩いあり

同

帆の如く木の葉かかげて行く蟻の行列ありて陽の真上なる

一九五七年

ベル押して雇われたしと戸毎訪う黒人女足曳きて去る

同

車繁く行き交う舗道を山羊引きて乳売る老爺とぼとぼと行く

同

贋紙幣の製造機買いし邦人あり童話めきたる新聞の記事

一九六〇年

ウルブーの群れ舞う下の屠殺場が異臭放ちて静まり立てり

同

大島 進

市長候補はマカロン工場の親爺にて宣伝カーの声聞きつつ眠る  
一九五五年

州知事を非難していし狂人の頭上に淡く街灯つきぬ

同

シポーにて結わえし道端の十字架にからみて咲ける昼顔の花  
一九五六年

残照は白亜のサイロにかかり居て風冷えびえと牧を吹くなり  
一九五六年

山深くアレルイアの花盛りにて流れにつづく貴なる花びら  
一九五九年

山深き溪流に釣るランバリーは胴長くしてなべて痩せおり  
同

四十万の移民の怒りがわかりますか外交官の特権に依る不正  
外車購入事件  
同

新来青年と言わるる中の一にて理路整然たる彼の「パトロ  
ン批判」  
一九六〇年

バランスセッテに十日近くを過ごし来て今宵はいたく疲れはて  
たり  
一九六一年

限りなき君が援助に得し店と心素直にバルコンを拭く

同

茨生うる原を区切れるタイパ塀崩れしるけし奴隷市跡

一九六二年

一本のピタンガ熟実小さけれどその実香に立つ奴隷市跡

同

真夏陽に並建つ十字架耀えり奴隷市跡の彼方なる岡

同

奴隷商人が手にせし鞭の音かとも茨に鳴りて風は鋭し

同

白人優位の因襲なおも根強くてなべては貧し黒き人達

同

謝肉祭の喧噪恋いて気負いゆく奴隷の裔の黒き一団

同

大城 俊子

トラップを降りてゆくときふるさとの風が満身に吹きかけてくる  
一九七五年

逢うまでの予感重たく訪ねきて甥と生ぬるき味噌汁すする

同

ゆきずりに起重機の響き聴きて過ぐ埠頭となりし生家のあたり  
同

戦いに逃げ惑いたる島びとの果てたる岬の切り岸に佇つ

同



建ち並ぶ慰霊碑が一斉に向く思い参道に吾が靴の響きて

同

干涸びし水道の栓「英霊に捧げる水」と記されてあり

同

目を凝らす遺品展示場生き別れしたる父母の影が添いくる

同

おみな等の商人多き那覇市場見覚えのある人も老いいる

同

霧ふかき山路くだりてわが街の灯になだれゆくごとし睡りは

一九七七年

クーラーより落ちし雫が頬に触れよび戻す戦後われの少女期

一九七八年

貝あさる児等の足泥に黝ずみて日なか日暮れのごとし干潟は

同

夕昏れになずみて瞑し屋根屋根の炎えいしことも儚くなりぬ

同

にがき想い出掠めては去るひと日なり掴みし物を屢しば落とす

同

六月のわが定めたる父母の忌にさきがけて丘に白き花咲く

同

定まらぬ父母の死の場所夢にさえ濛々として摩文仁のあたり

同

慰霊の日に友が作りし折鶴の一羽よ翔れ亡き父母が辺に

同

乾きたる涙のごとき黴ふきし樹根は深く土に垂れいむ

一九七九年

大隅 純

南聖の陽ざしは強くかがやきてミラカツの墓地に義母を葬る

一九七五年

凌ぎよき夏と思うに二十余年生らぬマンガが実を結びたり

一九七七年

太田 孝吉

四日前ブラジルの土を踏みてきて今北海の雪をたしかむ

一九七七年

夢抱き移りきたりて七十年祭むかえしこの地子等のふるさと

一九七八年

織田 真弓

泥靴の脱げそうな道ひとり来て花明りする傘にぎりしむ

一九七二年

葉もれ陽に児のおさげ髪光りいて母吾の歩も小きざみとなる  
一九七三年

軋みつつしきりし尿にとざされて部屋ぬち広くただ独りいる  
一九七四年

葡萄葉の括（くく）り終えたる濃淡が綾なし初夏の風に吹か  
るる  
一九七八年

織田 糸音

深霧の空鳴き渡る山オーム パラナ大河に声を落として

一九五八年

たよる子のなきを淋しむ老妻のカンジヤ焚きつつざれごとを  
言う  
一九六一年

小田 美代志

うつそうと幾代経ぬるや親子杉繁りて県社の門を狭める  
一九七五年

小田切 剣

汝故に命死にける母なりと言わで止みにき母知らぬ子に  
一九四七年

ユーカー山棚引く白き雲に似て淡き記憶の亡き妻の顔

同

幼子に乳ふくまする妻の傍帰り来て我が靴ぬがんとす

一九五三年

父を知らぬ妻の末子が義理の父我を父よと今日よびそめぬ

同

木履の音ひびかせて妻が来るそれすらも我の心にしみぬ

同

桃の花咲く山寒く立つ風の二日つづけば妻とこもりぬ

同

道の辺の湧き水くむと立ちよれば谷越えて遠くサビア鳴きつ  
も

同

まことには死にたる君の幻の目には笑みつつうかび来るかも

同

再婚をよろこびて歌を賜わりし君なりゆめの如く思おゆ――

岩波菊治百首中――

同

大津 白川

大人菊治 歌友小田切 富吉も今亡し作歌に競いし日ありき

一九七八年

大塚 清

昼の陽はまぶしく照りて山の樹に姿も見せずせみ鳴きつづく

一九七一年

見渡せば山のみどりの続くはて遠くに白き雨うごく見ゆ

同

池の面は澄みて真白き夏雲をうつして昼をものしずかなり

同

大月 達磨

たばこ買う銭なきときに子が来たりいくばくかの銭くれてゆ  
きたり

一九五五年

呼び寄せし姉の子供は親に似ぬ猛き気性の若者なりき

一九五五年

霜枯れの珈琲に肥料を施しぬ土地を買うべく溜めし金にて

同

大月 澄亮

移り来て人の情にすがりつつ子の八人を我は育てつ

一九五三年

故里の写真をみれば生れたる我が家のさまもそのままにあり

一九五五年

競演に吾子の唄える独唱の調子合わずに鐘一つ鳴る

同

雨もりの修繕を終えし家主より家賃値上げの通告を受く

一九五七年

引越しの荷物をおろす時もはや孫は近くの子供と遊ぶなり

一九六七年

窓開けて向うさ庭に朝顔の花の四五十が目をうばうなり

一九六八年

降る雨に前の石段ぬかるみて客足とおくなりゆく日々に

同

大 月 博

電算のマイナス数字が指す負担養鶏経営の帳簿を合わす

年代不明

大 坪 千枝子

命日に花束上げてぬかずけば瞼に浮かぶ母の笑顔の

一九七四年

大鶴 清太

くれてゆく地平はるかに只一本のファイデーラの巨木たくましく立つ

一九五〇年

霖雨のはれ澄み渡る大空に薄荷穀焼くけむりたなびく

同

巷間に夜逃げの話も伝わりて凶作続きの村に住み経き

一九五一年

路端に埃をかむりて棉つみつつ仰げば空を渡り鳥行く

同

大友 東風

アメリカへの依存経済断たざれば何時までもクルゼイ口貨は  
値の薄からん

一九五五年

訪日の途に就きし吾子の飛行機を月夜の空に祈り見送る

一九六三年

大西 阿哲

果たし得ぬことのひとつが躬の裡の痼となりて年は暮れゆく

一九六九年

入植の目あてとなりしパラナ松吾が哀歓の日々に連なる

一九七一年

帰伯の日迫る朝をつばくろの番は還り軒に巢籠る

一九七二年

台風に耐えて実りしどん栗の異国の地に芽吹きそめたり

同

夜鳴鳥の妖しき声を開拓の仮家にききし杳けき記憶

一九七三年

開拓の土地の広きに怯えつつピカードあけし遠き思い出

同

哀歡を語るスザノの移住碑のほとりに山茶花ひそと咲きおり

一九七四年

喪にこもる部屋に一つの救いとも万両の実は朱く耀う

同

打ち鳴らす櫓太鼓に踊る輪の氣負い騒めく邦人祭

一九七七年

移民祭踊る太鼓の遠鳴りを斧の研の還るがに聞く

一九七八年

大 西 天 児

我留守になりても豚を屠りうる程に育ちいたりしよ子供等は

一九六九年



ゆくゆくは牧場となすか墾の畑椰子樹あまた残しあるなり

同

珈琲樹を切る政策のあとを受け植付けすすむ融資のありて

同

豆は熟れ黍は穂を出すその中に棉あり米ありひとつの畑

同

一世の意外に多きこの土地よ戦後移民の家族もありて

一九七〇年

日本の総領事誘拐さるるニュース ラジオよりきく朝餉のとき

同

遠山にイペーの花は咲きにけり霜のおそれも去りしか今は

一九七二年

葡語にては覚えきれざる主の祈り我ら夫婦に洗礼日は来ぬ

同

第二次の道路拡張はじまりて珈琲抜かると言う人の声

同

大 西 美 子

声のみが大人となりて事毎に反抗する子の寝顔幼なし

年代不明

大野 延 寿

夜を込めて人と車の雑踏するメルカード附近は戦場の如し

一九五九年

牧場は豪雨に湖水の如く化し彼方の丘に牛は群れ寄る

同

大野 みつえ

リオ パネマをバルサに渡りし頃のこと吾子に語りつつ弁当  
を食む

年代不明

パドリンニヨの眠り給えるモジの墓地詣でしことのなきを寂  
しむ

同

鉛色のパネマの河面乱しつつ大粒の雨ふりそそぎおり

年代不明

ポマールの中の枯草踏みゆく春たつ色に陽はあたたかし

同

初咲きの紫イペーのささ枝を手折らんとせば脆く散りたり

同

小野 聖穂

蝉の声遠くなりたる夕暮れに吾がいとし子は神に召されぬ  
一九四七年

小野 政子

学校に行かざりしこと自らに言いて蚯蚓のごときかく

一九七五年

鶏の首いと無造作にひねりいて省みるなき墾の明けくれ

同

無盡数の花ひしめけるマナカ樹のしろしろたてり暁の光に

一九七六年

電球に掌かざし透く色の余りに赤し老いそめし身も

同

移住せし親が故国より持ち来しはこの古行李のみにはあらず

同

わが裡に散り敷きやまぬ珈琲の白き花卉とその甘き香と

一九七七年

病み夫が心を満たす一つにてテレビを見つつおちゆく眠り

同

祈り持たば癒ゆる日ありや紅映ゆるプリマベールは門辺にゆるる

同

なか空に風ははげしくゆれ泳ぎ果つるともなしわれの惑いも

同

生活に理想失せたり草に埋もる空の鶏舎に風鳴りている

同

悲しみの果つる日は何時鏡面に眉を拡げてわが顔を見る

同

鈍色の空に圧されて静もるやユーカリの梢そよりともせぬ

同

様々の形に動き雲流れ止めどもあらぬ孤りの思い

一九七八年

小野 まち子

なけなしの金にて買いし蝶額を叔母に託しぬ訪日土産に

一九七二年

四十年の苦勞みのりて訪日の旅ゆく叔母はすでに還暦

同

飛行機の整備技術を持つ夫がポ語話せずと鶏などを飼う

同

小野寺 養太郎

乏しくも牛売りて得し銭のうち子等にももの買えと分ち与えぬ

一九四七年

人よみな移らば移れわれ一人この村守りて牛飼わんとす

一九五一年

萼卵火酒を飲みつつ顧みる移民となりて過ぎし二十一年

一九五一年

小野寺 郁子

指紋採る墨を素直に塗られいる移民の父母をかなしみて見る

一九七四年

大方は素朴な身なり訪日の両親（おや）を見送る準二世群

同

水漬く樹の梢にわずか残りいて夕べは祈る如く閉ずる葉

一九七五年

数々の人の願いをうべないて木彫りの女神のおとがい円し

同

石像の裸婦は春陽に輝きて息づくとも見ゆ豊かなる胸

一九七六年

伯人を愛する娘も一人いて吾が銀婚の年暮れんとす

同

地の起伏に重なり枯れし一望の草原染めて冬の陽が落つ

一九七七年

穏やかに冬陽あつめる石の上腕にくい入る手提げを下ろす

同

街角を曲れば不意の明るさに風車を廻す子等の群れいる

同

積まれたる角材赫く陽に映えておが屑こぼるる時に匂えり

一九七八年

人波の絶えし舗道に薄陽差し鳩は汚れし首のべ歩む

同

たてがみを風になびかす馬彫りつつヒッピーはおりふし鋭き  
眼を上ぐる

同

静かなる炎の如き茜雲磨き終えたる吾が窓に充つ

同

ゆうぐれの厨に剖（さ）けば光りつつ白き二枚の葉のごとき  
魚

同

父母の故国を娘は新婚の旅にす選びて翔（た）ちゆかんとす

一九七九年

大場 時 夫

野の鳥の声冴えざえしこの夕べ翠ゆたかな羽ひらくべし

一九七八～七九年

うてば響くはがねの色の翹しずめ夜の天幕のうちにいる蟬

同

ひろごりて水照りうつりゆく方に田畑失うダム各村々

同

零細な移民農夫の追わるるさまつたうるダムに水滴ち満てり

同

水中の草木はしろく陽をためて生き抗うにダム満ちきたる

同

草くぐる小魚も見えて新しきダムは南の海思わしむ

同

荒々と稲刈り筏組みし日もそのおもかげもダムに沈みて

同

年々に機械化されてゆく農業を言いつつ夢の褪せゆく齡

同

涙もろくなりしを言える便りにて思い出さるる齡のことも

同

華やかな過去などはなしかえりみて移民は多く傷つきたりき

同

おそろいの赤きハッピも身につきて移民七十年を祝う数日

同

大橋 松 寿

かりの屋に遠くオンサの声きけば夏も身にしむ夜半の山風

一九五七年

板屋根の壁ぬらぬ小屋に夕けぶり誰が住みつるやゆらぐとも  
し灯

同

除草費のかさむをおそれ緑肥うえて持久を計るゴム栽培者ら  
は

一九五八年

熟れ過ぎしピメンタ見かね老い吾も畠に出でて採集を手伝う

一九六三年

若人にまじりピメンタ採りおれどいつか疲れてひとりおくる  
る

同

ピメンタの採集おくれ居る時に連休なせる労働者たち

同

大 原 久兵衛

朝風の河面波立て漕ぎ出づるカノアの主は猿又ひとつ

一九七二年



大原 太一

コーヒー樹の合い間に植えし飯米の稲明るくも芽吹き揃えり

一九四九年

植え付けて三年に足らぬコーヒー樹今年はいたく花をつけた  
り

同

戸を繰ればしみみに霧の流れ入る厨の朝の珈琲ひく音

同

霧深き朝の庭辺に佇ちおれば香りするとき菊の一叢

同

我が住家谷に面して低ければ朝々霧にしばらく覆わる

同

大原 友重

中央市場の裏の汚ききどぶ川に突き出でて老いし柳繁りぬ

一九四九年

生き難き世の苦しみを言う友よまた転職の話きり出す

同

領収せし札束いくつ数えつつぎこちなきかな我が手さばきは

同

正確に今日も六時に帰り来て屋上に立てばビルの日映え

同

電車路に添い行く朝のアラサ墓地石塔みがく人夫が一人

同

灯ともせる満員電車が徐行して高台くだる午後六時半

同

草原の彼方に囲む棟いくつ此の世を逐われし癩者の村か

同

バス待つ間の僅かの時間をボックスで左党の君等が立ち飲み  
をする

同

狭苦しき一室に父母を泊めおきて二日にあげず吾が訪ね行く

同

## 大原 初美

病む頬に乱れかかるを切り取りし此の母の髪遺髪となりぬ

一九七六年

コーヒー移植今一息と励む夫の手許に満月の明りがとどく

一九七七年

コーヒー移植ようやく終えし此の夕べ爪の間の泥落としおり

同

霜害も早も試練とうけとめて今朝も耕馬に首枷はめる

一九七九年

小原 睦子

言葉少なく広島被爆とのみ報じ荒城の月の曲流れ居る

年代不明

隠れ聞き居しラジオに終戦玉音の放送も確かに捉えて惑う

同

小休止のバスより降りて飲むコーヒーの味にも馴れて一人旅する

同

庭に植えし松の根付きしをよろこびて兄は帰化せし国に老いゆく

一九六三年

ジャカラランダの並木の街に住み着きて又めぐり来し花季に逢い得し

一九七八年

大平 綾子

設計図夜の更くるまで引きたりし吾が家の煉瓦今積み始む

一九六八年

整地終え蒔きつけを待つ農吾等何時迄続く異常セツ力は

同

幾年ぶり逢いにし友と老斑の手をば互みに見せて語れり

一九七八年

父母も吾子も葬りし此の国に愛着深む七十年祭

同

大 峰 深

野の草のはだらに枯れし柵ぞいにほのぼの咲ける牧草の花

一九四八年

窓際の芭蕉青葉は濡れそぼち灯に光りつつ雨のそよげる

同

背戸庭の青葉がくりに乏しらのアバカテいくつ実をつけにけり

同

馬鈴薯植えの漸くすみしこの夕べ雷凄じく雨降り出でぬ

同

大 森 祥 子

一つ灯に語らい合いしが母逝きてわが日々は独り言多し

一九七七年

もの言わぬ軽きみ骨となり果てし母が待ちいたる誕生日来ぬ

一九七七年

大 山 定

長病みの吾にやさしき老妻のみとり疲れはきわだちて来ぬ

一九五五年

尾 山 恵 昭

朝の野の露ふかくして帰り来る馬の脚毛のいたく濡れおり

一九四九年

雨乞う如シリエーマおりて鳴く畑の霧に朝日のほのぼの射せ  
り

同

物干のアラメに余る児のむつき乾かずありて雨降る気配

同

カンテラをつけて夜毎に草履あむ山家なりけり何鳥か鳴く

同

炊事場の流れに物を食む犬の今朝は来たらず霜ただ白し

同

寒に入れどこの温ときや陽の照らう板橋の上に埃風たつ

同

山裾のアロエーラ林にやわらかく霧はれて冬の光りのこれる

同

水かれし水車の小屋の片隅に真昼しずけく向日葵の咲く

同

旅の宿に親しくなりし犬の仔の尾を振る見つつこの朝に発つ

同

大和田 房子

はろばろと二つの洋を渡り来ていましふみしむブラジルの土

年代不明

水平線はるかにしるけし蒼空のもと豊かなる河のひろがり

同

ムダンサの車の上に猫いだく幼き孫よ何想いいる

同

鶏痘の接種していつ仄かにも手に通いくるひなの体温

同

咳けばひたと鳴き声ひそませて寄り添うひなの黒きつぶら眼

同

軋轢音高くきしませ牛車ゆく雨雲低くたれこむる中

同

霧深き峡の朽家に這いのぼる南瓜のつるに花一つあり

同

一世と二世のギャップ埋むるなく実らず終る吾娘の縁談

同

いまだ見ぬ祖父母を恋いて假名綴る二世の子等の文たどたとどし

同

恩村 実記

硝子戸の外はさ霧のこめる見ゆ寒々としてカフェーすするも

一九五〇年

吾が病癒ゆるを信じ嫁ぐ日の来るをひそかに待つと言う君

同

放し飼いの隣家の鶏が土搔くを気にながら花種をまく

一九五三年

山頂の牧に夕日はうつろいて夕せまりつつ日照雨降り来ぬ

同

開沼 貴代

幾度も早りに枯れしコーヒーを雨降ればまた競い種子播く

一九五〇年

汝が泪幾とせぶりと夫はいう心鎮めて和ぎゆく時に

同

いかような未来展くやわが腕に頬バラ色に眠る幼子

一九五六年

子の一人兵教練にいそしめば軍決起の報道に心ゆらぎぬ

同

機影一つ孤独の魚の如く浮き冷たき藍に透る朝空

一九五七年

裏庭に熟るるゴヤバのこと言いて入院ながき児は家を恋う

一九六三年

活きいきと響きし革命も褪せゆきて狭められゆく自由の範囲

一九六三年

反論の言葉たたみて移す眸に澄み鎮まりて白き山茶花

一九七四年

開 沼 松 治

秋日和風静まりて近き森の山伐るらしき斧の音聞こゆ

一九四八年

日毎通る森の梢も秋深み木の間がくれに啄木鳥の音

同

過ぐる年ニグロの小屋のありし所新開地の町は建ちつつ

一九五〇年

朝々を底冷えしるく冬めけばかまど辺に寄りコーヒーを飲む

同

冷ゆる朝はかまどの櫓火に温まりてコーヒー飲むも習慣となる

同

加江の 源 氏

ほのかにも人恋う心は胸に秘めやもお清しと我は言いたり

一九四九年



香川 歌子

訪えば御手植えときく松ひくく建築校舎は形整う

一九六四年

角藤 忠雄

幾ばくの未来につづく夢もちて汚れし作業の服まとう朝

一九六二年

着なく一日の業もなし終えて蘭の芽生えに心明るし

同

静かなる朝の舗道に腰曲げて馬糞を拾うは邦人らしき

同

こと毎に政治ののしる民衆の不満の声も徐々に強まる

同

鹿毛 正護

銀杯を伏せたる如き「コモーヴエ」のサイロは光る夏陽を浴  
びて

一九七五年

角笛に曳かれるごとく牛群は赫きポエーラ上げて着きたり

同

降雪のニュースを持ちて南より大豆種子積みトラックの着く

同

棉蒔きの季節となりて書棚より義父が残せるメモ帳を繰る

一九七六年

野草馬の群は駆けゆく高原の牧場の草の花盛りなる

同

亡き父の渡伯きめたる日の日記みだれし筆跡なつかしく読む

同

乳しぼる牛舎明るくともされて仔牛に語る牧夫の声する

同

錆びている鎖は並べあり床下に奴隷をくくりし昔のままに

同

奴隷らに食を与えし飼桶（コーシヨ）とか壁には黒き鞭もかけあり

同

パイナの実下る並木をくぐり抜け古きジュンケーラの耕邸に着く

一九七七年

父親の職業欄に農業者と誇りをもちて娘は書き入れぬ

同

牛買いのまだ腰上げぬ日暮どき刻むフーモの小さくなりぬ

同

寒き夜も土耕にはげむニグロ等に熱きカフエーわかし持ちゆく

一九七八年

もう一雨欲しい大豆の畑広く殺虫剤を飛行機で撒く

一九七九年

棉摘みて指の荒れしを気にしつつ娘はタイプライター打ち始

めたり

同

葛西 妙子

暈させる月の下びに青みつつ明日たち行かん街ひそまれり

一九四八年

道端に散りてたまれるジャカラダの花今朝ふる雨に皆汚れたり

一九四九年

折々は部屋を飾りしコツポ デ レイテ其の一叢もおどろに伏しぬ

一九五〇年

腐りたるトマテ列なし流れ行く中央メルカード裏の濁れる街川

一九六〇年

月ロケット飛ぶも飛ばぬも身にせまる物価騰貴にたじろぐ吾は

同

風 早 峻

氾濫する河の大渦見てあれば水漬く稲穂を音たてて喰む魚

一九六一年

移民てう言葉もおろかこの国に父子三代を生きつぎて来ぬ

同

日はいたく北に傾き暮れそめぬ棉殻を焼く煙のこして

同

ブラジルの冬のさ中に咲く藤の房短くて風にも揺れず

同

歓喜樹の花散る下に鰯節干しひろげたり邦人の八百屋

同

コーヒーを撰び採る埃り拭いあえず日本よりの客を迎えぬ

同

母国より送り来たりし鉢植のその鉢にある日本の土

同

冬のなき国に移して植えられし銀杏よ風に彩らず散る

同

ふるさとの土に還るをひたすらの願いの老父を故国に発たし  
む

同

土地や買わん訪日やせんコーヒーを売りたる錢を握りつつ思  
う

同

現実と神話のさかい分つなくカボクロ媼受難日を哭く

同

埃りたつ路の木蔭に椰子の葉を敷きて西瓜を切り売るニグロ

同

桧葉垣の桧葉の茂りの一ところうすれて秋の蝶を翔たしむ

同

笠原 くに

ナタールを明日にひかえて今年また閉店間際に子の玩具買う

一九六二年

新来の甥も慣れたり跣足にて鶏舎を歩き鶏飼いをする

同

血を流すこともなくして帰りくる機動部隊を我も迎うる

一九六四年

移り住みて三十四年過ぎ来しに我に未だなき肉親の墓

同

金婚の祝いに幼き其の孫の日本語の祝詞胸にしみたり

一九六六年

十字架を作ると板を削る音通夜の夜更にためらう如く

同

逢いたしと繰り返し言う姉の声録音テープの声若くして

同

風間 慧一郎

空サツコ開いて作りしわがシャツは肥料のマルカあり胸のあたりに

一九五一年

ランプの灯ゆらぐメーザに頭寄せて夕餉する子等を妻と見守る

一九五二年

フエイジョンもろくに食べぬとカマラダは劇しく憎悪する物  
価騰貴を

一九五三年

砂道をゆきなずみいる自動車の吾を追いつ越す一群の牛

同

小農にて一生を終えむ我等かと今宵しみじみ妻と嘆かう

同

トマテにて儲けたりとの噂立ち支払い請求の人等相次ぐ

同

バイヨンの曲に合わせて尻を振る子等をば最早われは叱らず

同

隣家も夜業にトマテ選りおりて咳きの声時折りきこゆ

同

パステスを揚ぐる匂いが腹に沁む職を捜して歩み来ぬれば

一九五四年

風寒き巷にソルベツテ売り歩く老爺の背はいたく曲りて

同

背後より J A P O N E S という声しきりにて聴覚とがらすオ

ニブスの中

一九五六年

わが友は口髭などを生やし居りサラリオはわれより上かも知  
れぬ

同

ノルチスタ移民乗せて列車着けり窓よりしきりに唾吐くひと  
り

同

片言の葡語まくしたてて警察署の階下るとき冷汗を拭く

同

賀 沢 朋 子

身に籠る想いひとつに掬いたる掌よりこぼれて白き砂落つ

一九七〇年

花散りてさやのみ残る火焰樹の揺らぎを見つつ行く墓の道

一九七八年

梶 田 き よ

忙しげに去りては来つつ蜂鳥のあわれセツカの乏しき花に

一九六三年

母が生れし国の良さなど解し得ぬ吾娘らは所詮この国の民

一九六四年

散りしけるレモンの花びら清しくて箒とる手のしばしためら  
う

同

牛の尾の料理も覚えこの国に住み経し年月想う厨に

一九六五年

犬よりはいくらか敏き眼して芥箱あさる黒人少年

一九六六年

暁をどよもし初めし祝砲に市制記念日の朝明けてゆく

同

開拓者に扮せるもあり日本着の子も練り歩く市制記念日

同

子の葡語に従いてばゆけず曖昧な会話が吾の負目とはなる

同

忘るるほど遠き祖国よ春菊の香りが今朝の食卓を占む

一九六七年

デプタードの写真貼りつけ勇みゆくコンビは吾に関わりもたず

同

ビーラ ベーリヤにかかりし時に思わざる仔連れの山羊の草食むを見つ

同

柵盗まれし野球場にて試合中に入り来る牛を選手らが追う

同

柏 原 愛 紫

さし昇る朝日をさ霧包む頃イバイー河の橋を渡れり

一九六四年

イバイーの河面は霧に閉ざされて水の流れも定かに見えず

一九七三年

牧場に降りし薄霜に草枯れしひと所ありて白く目にたつ

同



片岡 けい子

くろずみて昏れなむとするユーカリの山にナンブーの声沈み  
ゆく

一九五四年

扉を上ぐれば果物の熟れし匂いして吾の生活の一日始まる

一九五五年

傷みかけしバナナは別の箱に捌く靴みがきの童等が買いてゆ  
くべし

同

暇を惜しみ本読む吾の隙を見て童はマッサンを盗りて逃げゆ  
く

同

賑やかな女客等の語らいもつづまりは生活の苦しさに落つ

一九五六年

幾ばくの儲けにならむと朝々を並ぶる蜜柑が吾が手に匂う

一九五八年

病む夫に代りて今日は仕入れすと吾のみ女の始発バスに乗る

同

父母の感傷は知らず混血の児を妊りて娘の眸明るし

同

いずくより寄り来し芥ぞ黒々と一すじなせり海のさ中に

一九六〇年

怠惰なる逃避などあらず赫々とひと日の果てを陽は燃えて落  
つ

一九六四年

葡語のみにはずむまどいの様みれば吾には遠き子等の如しも

一九七三年

木杯の選に洩れしも知らずして君は鋏打つ昨日も今日も

一九七八年

片桐 睦子

魔除けよと娘が呉れたるオパールの指輪に今日も護られてお  
り

年代不明

この世には在さぬ夫と知り乍らふと声聞こゆ秋の日暮れに

同

ふくらみし梅のつぼみを手に囲み春を感じおりひかりの中に

同

桂 本 謙

栗色の髪のみ見ゆる後姿赤きカンナの花にかくれて

一九五三年

大勢の女の中に君おりて我は聞きとむその声のみを

同

栗色の髪毛ひとすじ我が胸にからみてありぬ別れ来ぬれば

同

加藤 かをる

雨あとに見廻る畑のしずけさよ夫のかたえに動くわが影

一九六三年

幾年の思いのこして去りがたき人手に渡すコーヒー園を

同

日雇に負けじと編みし玉葱の強き香りがわが手を去らず

同

かつてわが所有でありしコーヒー園を振り返りふりかえり車窓より見る

一九六五年

立ち並ぶ墓標の一つは日本文字同胞まれなるこの島の墓地

一九六九年

早ばつの牧場の草を渦巻きて野火移りゆく夜空こがして

一九七二年

谷を埋め山を覆いて紫のイペーの花目にしむばかり

一九七四年

海に続く椰子の林に点々と土民の住家灯のゆらぐ見ゆ

一九七五年

枯色のつづく牧場に青々とマンガの一樹広がりを見す

同

双の手に抱けば母に触るること今は遺品の吾が縫いし服

一九七八年

浸水に埋まる水田青みきて伸びたつ稲の匂いを放つ  
一九七九年

加藤 喜代子

緑なす草木は萌えずミナス路の山肌砂鉄の光放てり  
一九七四年

もどかしく辞書ひもときて一語ずつポ語綴りゆく  
一九七五年

夜の教室いさかいて昂ぶる心に快し鍋打つミーリヨのはじけ  
ゆく音  
同

箒持つ手を止め暫し耳すます餅搗きの音流れ来る庭  
同

彩色の墓標に百花盛られて花園の如きこの国の墓地  
一九七七年

胸せまる脱耕のさま運動会の仮装行列の一こまなれど  
一九七八年

開拓の祖父母の労苦偲びつつ記念日を綴る三世の子等  
同

故国にてあげつらわれている君が代を三世の子等と襟正し歌う  
同

両殿下迎えし感激さめやらず打振りし小旗をサーラに飾る  
同

加藤 武男

うず高く積みし丸太にかがまりて火をいれている少年裸足

一九六七年

騒音はそのまま夜に入りゆきてサンジョンの火はあかあか  
燃ゆる

同

小さな営みに似てとろとろとバロンの中の灯はともりつぐ

同

加藤 ふじ

ガジマルの剪定屑を拾い来て稽古日今日の花材とはする

一九六九年

パラナ川港にもやう渡し舟船頭二人ビオロン弾きて

同

子供等のおやつの時のアルミ皿渡伯三十年の歴史を語る

同

麻州路に狩猟の車と出逢いたり屋根にオンサの皮張りつけて

同

マラクジャの紫の花咲き下り吹く朝風にかそけく揺らぐ

同

加藤 政吉

葡語字典その字のかくも細ければわが目を皿のごとくして読む

一九五〇年

風なくて静かなる日や山伐りの斧の音澄みて天にきこゆる

一九五二年

加藤 松子

終日（ひもすがら）野焼く煙に陽は赤く破れ芭蕉のさゆらぎもなし

一九五五年

加藤 操

コーヒーに栄えしコロニヤの跡どころ牧場となりて残るマンガ樹

一九六六年

斯く消ゆる吾が血か伯人娶る子の宴に吾の位置の小さし

一九七二年

子と繋ぐものの淡きを思う日も日本人形姿崩さず

一九七五年

あるが俣に生きんと思う気楽さに夕光に透くブーゲンベリヤ

一九七六年

煩わしき物の一つも付けざれば空に浮きたつ大王サボテン

同

孤独なるおもいに帰り点す部屋水石一つ鈍き光（かげ）ひく

同

歩み寄る術の無き俣別れ来て河の瀬に見る小さき渦巻

同

同業の宣伝カーの高声が吾が店先きを揺さぶりてゆく

一九七七年

相容れぬ世相に生きる子と思う身をひしぐごと夜の蛙鳴く

同

水煙たち籠むる滝に打たれつつ岩に縋りて生きる水草

同

栈橋の脚に掛かりて疲れたる態に干涸ぶ芥の幾（いく）つ

一九七八年

パラグアイを連絡（つな）ぐ渡船（わたし）の古びいて重た  
く水を分け分けてゆく

同

崩れんとする商魂をかきたつる吾が眼に鋭くたつドラセーナ

一九七九年

加藤 まりゑ

手紙読み涙こぼれぬ無理すなと母はかな文字に繰り返えし書く

一九六一年

ナタール用に貰いし仔豚はさながらに耕せし如空地を荒す

一九六二年

夕餉あとを選挙のうわさに賑わいぬジャニオ帰伯をラジオは伝う

同

手触れみてまこと冷たきキリストの立像に吾子ら十字切りいる

一九六三年

夫に似し気短き子を見送るに庭のマモナは夏陽にはじける

一九六四年

いくつかの噂のこしてカルナバル終えたる街の雨に静もる

一九六五年

コーヒー樹はしきりに花を散らしいて義弟の棺今し出で行く

同

金井 治郎

豊かなる草を喰みつつ放牧の牛が時折り鳴くが聞こゆる

一九六六年

名も知らぬ路傍の駅に一株のパイナ盛りて旅の目うるおう

一九六八年



淡雪の降りたるに似て薄白くコーヒー園は今花盛りなり

同

金村 孝一

枯牧となりし耕地に佇みて夢多かりし若き日を追う

一九七七年

殷賑をきわめし耕地荒れ果てて媼の如く精選場たつ

同

金谷 治美

日だまりに昼寝せる子の玩具あり我が誕生日静かに過ぎゆく

一九七七年

熱高き吾子抱きつつ医者に告ぐる言葉さがして辞書を引きおり  
同

この国の国歌うたえる鳥飼うはスペイン訛りの古き移住者

一九七八年

朝日背に影絵となりて来し少女パンの香りとボンデイアの声

同

移り来て覚えしことは多かりき陽燃ゆる朝はかんぴようを干す  
一九七八年

野を馳けることも知らざる馬車うまは優しき目をして野菜荷  
いけり

同

襤褸干す我にみどり児の安否問うポルトガル語のひびきやさ  
しく

同

金子 お利

朝帰りの馬の立髪露にぬれ振り分けを背に酔い痴れし夫

一九四八年

勉学に都市へ出でゆきて苦学する若き吾が子の身を案じおり

一九五四年

金子 八十八

新築の記念に植えしクワレズマの花咲き盛り池の面に映ゆ

一九七九年

子と二人寒夜を風呂に浸りつつ日本のことを話し聞かせる

同

幼な児がレンガ掘りあてインジオの家のあとよとまじめに言  
うなり

同

夕暮れを道ゆく車の警笛にたむろする牛徐ろに起つ

同

「美田」など遺し得ざればせめてもの親心にて日本語教える

一九八〇年

展けゆく街に関りなきがごと子育て地蔵は昔のままに

同

故郷の小包みなれば包装紙も空函もむげには捨てがたく居り

一九八〇年

再びを訪ない難き父母の墓前の土を持ちかえるなり

同

金 崎 漂 泊

移民妻背に子を負いて引く鋤の炎熱の陽光鋤に光れり

年代不明

湧きき出づる泉に似たる故郷の吾が思い出は果つる時なし

同

金 崎 正 利

朝の街に靴音ひびかせ老妻と腕組み合いて教会に行く

一九七八年

遠近ゆプラント機の音冴えざえと四方に充ちつつ雨後の朝明  
け

同

上別府 みすえ

丹精のウーバ イタリヤ垂れならび房みずみずと朝日に映え  
つ 一九七〇年

甘き香のあふるる葡萄の園に佇ち早や来年のプランをたつる  
同

収穫の後と解かれて佇つ園に葡萄の残り実かすかに匂う  
一九七二年

上村 正吉

老いの身のすべての希望薄らげど祖国訪問の望みは募る  
一九五〇年

移り来て農を営みし二十年今年珈琲を植えて落付く  
同

使い減らし捨てて置きたるエンシャード我が瘦腕に程よく叶  
う 一九六〇年

移り来て三十余年この土を耕したれば愛着深し  
一九六一年

移住地は牧と変りしたただ中に季節たがわず咲くパイネーラ  
一九六二年

郡ざかいの分水嶺を越え来ればアヌーの群の青葉に羽ばたく  
同

ブラジルを寒波の襲う夜にして二十三夜の月の冴えたり  
同

大方の移民がたどり来し道をたどり来たりて吾も老いたり  
同

訪日をなし得ぬ吾と思うとき母のおもかげまぶたにうかぶ  
一九六三年

上村 正治

明星を仰げば杳きフアゼンダの起床の鐘がよみがえりくる  
一九七九年

バスの客にパモニヤ呼び売る娘の訛り秋立つ町の駅にひびかう  
同

上村 唯市

スコールに吹きあおられてアマゾンの青色青光山蝶の群  
一九六七年

神山 忠雄

ブラジルのたつきに慣れしわれなれど時に望郷の念やみがたし

一九五三年

亡き父母の冥福を祈る登壇にマリアの像は朝な光れり

一九五四年

酔いどれし邦人なれど伯人等に罵らるれば何か義憤を感じず

同

神山 広志

一叢のあじさいの花咲くみれば逝きにし友の面影しのぼゆ

一九五六年

栢野 桂山

牛の飲む水を揚ぐると高原の牧の風車の廻るたそがれ

一九四八年

瀧しぶき幾とせ浴びしつり橋の鉄のロープの錆びたわみたる

一九四九年

粥川 行雄

コーヒーのいろづく秋の日暮時番のペリキット高く飛び行く

一九七四年

嘉陽 照映

インフレはきびしけれども新移民は暮らすに易しと父母に書きやる

一九六二年

新聞の伝うるところ焼けし機体のその下にアエロモツサありきと

一九六三年

霧の中を工場に急ぐ乙女らは暗き街灯のもと歩みゆく

同

夜学終えて事務所出で来し霧の街ビルの表情も物憂げにみゆ

同

久々の慈雨ありたれば邦人の馬にむち打ち鋤くさまの見ゆ

同

唐沢 英津子

祖父母も汝がちちははも此の海を越え来しと吾児を抱き指さす

一九四八年

貝殻をえらぎ拾える子らのさま見つつマリスコの味噌汁を炊く

一九五五年

磯山に湧く岩清水汲みに来て蘭の類を子とあさり採る

同

盲人ホームに居る妹をたずねんと朝市にそこばくの果物を買う

同

寂しさは影のごとくにそい来ると洗いし皿を拭きつつ思う

同

歩道より見ゆる地階に並べたる蝶細工店の角に子を待つ

同

丘径を疲れて帰る日雇いの父子を染めてやさし夕日は

一九六〇年

紙ナプキンをくばり置く卓ジャズミンが今宵見合いの一组を待つ

一九六一年

唐 沢 弘 直

見遙かす麻州の空に夏雲の競うが如くにせりのぼりゆく

一九七四年

季ならぬ雨降りつぎてパイナ樹の若芽は花に先立ちて萌ゆ

同



リオ グランデにダム成りてよりわが町に吹く北風も雨を伴う  
一九七五年

北伯に雨呼ぶ花と古きより親しまれいるマンダカル咲く  
同

新しき選挙チツロを手に並ぶウルナに吾娘の大人びし顔  
同

相次いで逝く先駆者の埋葬を囲みて老いの肩が重なる  
同

ウルタウの鳴く音に深む黄昏を湖畔の釣場に釣糸を巻く  
一九七六年

黄のパイナ咲くとう南大河州われの旅情を誘いて止まず  
同

旱天に花芽立ちたるマンダカルに秘かな希みをよせて雨待つ  
一九七七年

旅券取る書類整う帰化をして訪う日本は外国にして  
同

軽部 孝子

日本着など着しこともなき乙女らに舞踊の夕べの帯整うる  
一九六九年

プラタナスの朝の並木に彩そえて山羊車を引く邦人一人  
同

カンビリの双子の峰の夕茜葡萄摘果に疲れて帰る

一九七一年

旅の身を意識して立つペレイラの街のフエイラのにぎわいの  
中

一九七二年

川 合 芳 水

婚礼の祝儀に鯉をもち行くとはぬるをおさえて簞に入れたり

一九四九年

敷島の大和の歌を詠みおれば勝った負（ま）けたの論もあら  
ざり

同

今暫く待てば船も来るならんと想いて既に四年を経たり

同

このままに旱天つづけば飢饉ならむ米もミーリヨも蒔くにす  
べなし

同

背戸庭の実生桃の木生い育ち乏しき花の咲きそめにけり

同

古橋の顔を見たしと押しかけて押すな押すなともみ合けにけ  
り

一九五〇年

河井 美津子

白穂出しし稲株起こし涙ぐむ日々にて不意に兆す胎動

年代不明

泣き疲れ眠るみどり児背負い摘むコーヒーの樹海染める夕焼け

同

子の寝顔時おり視つつ棉詰める吊しランプの暗き小屋内

同

アラポンガの声こだまする山峽に夕べ細ぼそ炊煙のぼる

同

傷心を抱きて耕地去らんとすパイナーラの花乱れ咲く日に

同

故国まで続ける海ぞ足裏の痛くなるまで熱き砂踏む

同

せめてもの馳走と椰子の芽を刻む裾にまつわる子をあやし  
つ

同

原色の回転木馬停止して風に耐えているかすかな軋み

同

抱きあぐる童女仄かに汗ばみし髪より赤き花びらこぼる

同

昼の月うつす水面を乱す鯉去就に迷う目にて追いおり

同

通夜の席一人外して出る庭に犬は冷たき鼻すり寄せる

同

久々に見る汝が顔という声もうるみて夫の視力戻りぬ

同

退院の子を待ちて立つ夕ぐれを羽蟻の群はゆるくとび交う

同

川 上 大 作

阿蘇山の火口のほとりに育ち居り濃桃色のミヤマ霧島

年代不明

川 上 千代三郎

ふるさとの土再びは見ざるべし我が眼裏に雪降りしきる

一九七〇年

郷愁もうすれる程に住みつきてこの草原にひそやかに生く

同

手離さんとする草原に佇ちてみる光り失せゆく落日のいろ

一九七一年

剪定も後れしままに芽出している葡萄園も人手に渡らんとする

同

窯肌もわかたぬほどに煤ぐれしアランビツケのかまどふるび  
ぬ 一九七七年

なかば朽ちし冷却槽の樋口より火酒の雫は生るるがに落つ

同

敗戦を哭きしも遠く日本語を知らぬ混血の孫を抱くなり

同

川 上 美 枝

事故死せる夫に続きて疎遠なりし兄を逝かしめて一人佇つ丘

一九七一年

冷えしるき朝のフエーラの空高くガス風船の離れとぶ見ゆ

一九七六年

朝陽をうけて亡母の衣類のほされいるもの云う様に風に動き  
ぬ 一九七八年

新しき亡母のみ墓に射す淡き冬陽久しく温もりてあれ

同

窓の灯のともりて来れば目覚めゆく如くにビルは黄昏に佇つ

一九七九年

河 上 美 津

連れだちて君とし行ける彼の牧場今は人家の建ち並ぶとぞ

一九五一年

牧原を共に歩みし彼の日より妻と呼ぶる運命なりしか  
同

川 口 久 蔵

荒廢地年に拡がりこのあたり乾季到れば野火を氣遣う

一九五一年

訪日の新聞挨拶羨しめどわが境遇はそれも叶わず

同

惜しみつつ売らねばならぬ棉あわれ待てば高値となると思え  
ど  
同

ラバペーが背戸に現われ子供らに追いたてられて逃げまどい  
おり  
一九五二年

同じ年ごろの人は大方死にはてて友達はみな我より若し

同

十キロの山道越えてシネマ見に行く我が娘等に月照り始む

一九五三年

この国に子孫をふやしなごやかにまた新しき年をし迎う

一九五四年

川 口 南緒子

雨降りてひと日かじかの鳴き居れば心痛みて日本を思う

一九五四年

月 口 は っ

幼子に皺の手を添え移民祭に手作りの旗を振り行く老婆

一九七八年

太き指もて髪すきている弟は異常セツカを深く嘆きぬ

同

ひび割れし白き唇固く閉じひとり鍬振る老いしわがとも

同

絵の如き友の農園を訪ね来て胸の鼓動は波打ちやまず

一九七九年

ふるさとの民謡となり宴いま湧き水の如声湧きつづく

同

川久保 タ ミ

箕の中の米の花つぶ踊るがにツンの花々ゆりて風吹く

一九七四年

諍いて出で来し街の日はくらくウインドーの顔いびつに写る

一九七六年

引潮は今変るらし濱砂の中の貝等の小さき息吹き

一九七七年

緋葵の花鮮やかな鄙の家ガラニー語のみ話す人住む

同

岩窪に水を求めて研ぐ米に蟹が鋏をふりふり出で来

同

茹卵石の机に割る音の小さく聞こゆ朝の仕事場

同

寒風の中に一すじ縞なして風が焚火の匂い持ち来る

同

海の面をゆるく廻れる施餓鬼舟ゆ風の間に間に読経聞こゆ

一九七八年

朝夕に旱の畑を気づかえる夫に冷たき水割をつぐ

一九七九年

## 河崎 節子

訪日の父母は今頃成田空港に下りたつ頃かと時計見ており

一九七八年

旅人木と教えられし樹見上げまた眺めて遅きバス待ちており

一九七九年



縄菰喫いっつバスを待ちいるは異人らしきが日系人か

同

河岸に住むグワラニ女鉄坐（あぐら）かき話しながらにマテ  
茶吸いいる

同

今年こそ今年こそはと霜枯れしコーヒー園に厩肥ほどこす

同

川崎 拓人

よべの月仰ぎし階の窓にして今朝しめやかに雨の降る見ゆ

一九四九年

川下 伯愁

夏草の繁りたくまし久々に鋤ひく畠に小鳥巢くえり

一九四九年

家建つる余裕今年も与えられず落葉を踏みて桃畠をうつ

同

生活の苦しさは言わずニッポンへなにがしかの物我は送れり

同

如何ほどの重量積みしかカミニヨンは牛歩むごと坂のぼりゆく

同

いささかの土地あがないて果樹を植えわがものといえは心安  
らぐ

同

一日中街頭に立ちて芋を売る疲れて帰る今日日曜日

同

ユーカリの樹の間を洩るる朝かげに蟻が列なす長くつづきて

同

百本の桃にかかれる八人の生活思えばおろそかならず

同

歌人の楽しき集い偲びつつ暁の街に葉野菜を売る

同

川 田 幸 子

たしかなる形とならぬ愛抱き胡椒若葉の萌ゆる李も過ぐ

一九七二年

浄化さるる想い出ならず原爆と終戦そして遠き夏の日

一九七三年

陽の光りオレンジ色に窓染むる夕べは遠き子の影の顕つ

一九七九年

移民妻と蔑（な）みさるる事に抗いて歌詠む吾か裡なる願  
いは

同

皇太子御夫妻の来伯も二度目にて移民は天皇制に触れず旗振  
る

同

「乳と蜜の流れる大地」 求め来て涙の谷もようやくに越ゆ

同

エホバの僕モーゼはモアブの地に死ねり吾のモアブはこの地  
アマゾン

同

河 田 末

吾が前に立てる四人の制服の乙女子は皆邦人の子ら

年代不明

川 田 千葉路

フエイジョンの安値に負債は払い得ぬと知りいて又も算盤を  
もつ

一九五〇年

試験ひかえし子が気負い読むフランス語解せぬ我も傍に耳た  
つ

一九五一年

邦人の多き此の地は伯人の商店広告に邦文の見ゆ

一九五二年

椰子壁のすき間洩れ射す日をさけて妻はミシンの位置を置き  
変う

一九六七年

山の辺に光る稲妻気にしつつ豆引きおれば遠雷きこゆ

同

河 田 由 美

切れしテープいまだ打ち振り岸壁に人立ち去らず小雨降る夜

一九五六年

声上げて呼べばとどかん間近くをイギリス船は通り過ぎたり

同

船室の窓より見ゆる燈台の光は水にうつりつつ過ぐ

同

河 原 梅 子

豚を呼ぶ童の-high 声きこゆインジオの住める川添いの家

一九五六年

ビニールのカーテン透きて陽影さす厨の窓にアベンカを置く

同

かつて我が住みしあたりに白壁の織物工場棟並べたり

同

朝の庭掃けばサビアの声すがし未だ日のささぬ山峡の家

一九五七年

吹きあれし夕べの風に散りしける淡紫のジャカランダの花

同

サントスより持ち帰りたる浜桐の根本に薄き塩水そそぐ

同

フエイランテの邦人夫婦が帰り行く空車押しつつパンかじり  
乍ら

同

## 川 原 比露思

ふるさとのきびしき世すがはおもえどもわが回想は在りし日  
のまま

一九四九年

亡びゆくインジオの記事読みし日の夕べ悲哀の如く夕焼け満  
てり

一九六一年

めぐまれぬ過去像といえど美しく綴られゆかむ老いづく時に

同

昏迷を経たる記憶も遠くなり冬日の庭に文殻を焼く

一九六七年

わが裡に轍の音は鳴りながらそこに絶え間なし棉のはなびら

同

冬越えしすずかけの実の寂かなり離職の不安に堪えつつ来れ  
ば

同

塵埃の粒は光りてたそがれのビルのくぎれる影より動く

同

西日遠く射しわたるとき匂いたつ乾農場の珈琲の実は乾きつ  
つ

一九七〇年

挽歌のごと牛車の軋む音きこゆ移り来て杳き記憶の中に

一九七二年

心よぎるものの象を逐いいるに光りつつ海は膨らみを増す

同

散漫になる夜の心まどろめば裡よぎる翳よたれとも知れず

一九七三年

季節感情性のごとく蘇るジャカラダの花の澄む日に

同

海を聴く形にしばしまどろめばひとでは匂う日に乾きつつ

同

郷愁のかすかにうづく岩壁にうごく夕べの潮光りおり

一九七五年

頌ち合う歓びのごと身に沁みてしずかにあつし青葉の照りは

同

透明に飢餓感ふかし鷗とぶ海面はただにひかり風ぎつつ

一九七七年

汝逝きて幾日過ぎけむ冬木立に耳寄せて立つ孤りに堪えず

一九七八年

息切れを堪えいし妻の表情があわれ目に顕つ逝きたるいまも

同

死亡届のことも終りて階くだるにいま汝の死が実感となる

同

河原　　みつる　―山路瞬―

カイシヤ　ポスタールの蓋ひらきたるままひといきに我が読  
み終えぬ母の便りを

一九四九年

男の如き字を書き給う母なれど吾をいたわる幼子のごと

同

病棟の花壇に夏日おし照りて群がり咲ける百日草の花

同

十馬身離して楽勝せる騎手が後ふりむきてゴールに入れり

同

外柵にそい疾駆せる白き馬我が馬を抜く一瞬にして

一九四九年

ハブ草の青くさき茶を飲みなれてわれの胃痛も持病となれり

同

砂糖不足より道義頽廢を痛罵せる母の手紙はなにか明るし

同

一週間余り降りつぐ雨に軒下の里芋あまた芽をふきにけり

同

たまさかに田舎に行きて朝早く棉つみに出づ甥らに交りて

同

朝霧に濡れたる棉を手にとりてひとしく楽しむその冷たさを

同

川 辺 築 紫

真昼中の一所窪む草かげに親を離れし子豚らがいる

一九五三年

河 村 敬 喜

眼を病めば朝の光のまぶしくて黒眼鏡して地下鉄に行く

一九七八年

八十八翁の音頭さやけく万才の声はサロンにひびき渡れり

同

河 村 哉 太 郎

かつがつにこの日の業（わざ）も終えにしと波布草の葉の閉  
じしに対う

年代不明

南風吹きおさまりし夜のくだちしばらく啼きて去（い）にし  
ふくろう

同

菰の芽の寸程抽（ぬ）きて伸びたるが撒きたる灰の中に青め  
り

同

炭疽病のトマテ抜き捨てし跡々にバージエンを播くたのめる  
となく

同

黒々と立つ竹群（たかむら）に入りゆきし螢はしばらく経  
（た）ちてともしぬ

同



夕ぐもり寒けき裏の竹の下落葉を焚けば妻も寄り来る

同

声とおり夕蟬一つ啼く山にたまたま風の吹き過ぐる音

同

粗（あら）壁に映る裸形の動けるをいぶかる吾子と長き湯浴  
みす

同

叩きたる小豆の穀をふかせおり吹き定まらぬ朝風の中

同

けんぽなしの若木の青葉ゆるがせてああいさぎよし今朝のこ  
の雨

同

ドラム缶の黄に塗られしが積まれたる工場裏に夕日あつまる

同

風ぐ空に煙あがれり山焼くと春を間近かに人は働く

同

菜園に低き音なき風ありて朝光うごくもの皆青し

同

紅く燃ゆる八重仏桑華揺れやまず昏れゆく遠き山に鳴る雷

同

吹く風に小豆の花と蜜蜂と重なり落ちてしまらくまろぶ

同

河村 武雄

クツピンの塔は鋼像に似て立てり広き牧場に幾つもならび

一九五四年

伝え聞くパラグアイ戦の偲ぼるる野に傾ける限りなき墓

同

行きずりに振り返り行く土人等の日本人に似たるその顔

同

遥かなるマツト　グロツソの草原の起伏は行けども果てなく  
続く

同

名ばかりの小屋に住み居る土人等と我と並びて写真をとりぬ

同

川本 柳風

添えざれば世になき人と諦めし我とも知らで夢に来る君

一九四九年

神田 笹浪

霧雨に駆虫剤かけるをはばまれて茄子の害虫を手にてつぶす  
も

一九五〇年

雨しげき路見てあればレイテリアの二頭立ての馬車走りて過ぎぬ  
同

下戸なれば無駄口きかねくだけたる歌もうたい在す瀬崎先生  
同

チバジ―河の岩礁に鳴る瀬の彼方綱を打ち打ち近よる四五人  
同

珈琲園の利益うらやむは嘗て農を厭いて町に去りし人々  
同

車窓より見上ぐる急坂の珈琲園ふと浮かぶ表土流失のこと  
一九五二年

牛売りし代もメザ―ダの足しとする珈琲取る前の我が家の経済  
一九五五年

金借ると人群にまじり銀行のバルコンに立つ昨日も今日も  
同

野に茂るピツコンの小さき黄花にも蜜蜂の羽音絶ゆることな  
同

北斗星仰ぎし頃は若かりき老いて今見る南十字星  
一九五六年

関 東 忠 吉

病む吾に代りて野に出る老妻のズボン姿がぬかるみを行く

一九七四年

雨毎に陸稻ゆたかに色付きて朝夕しげし野の鳥の声

一九七五年

菊池 尚史

空暗くラジオの雑音しげき中に大統領の辞職を報ず

一九六八年

今日も亦値上りせしを主婦二人高声に語るキタンダの店先

同

棉摘みのカマラダ待ちてオニブスのポントに群がる邦人地主  
ら

一九六八年

革命の再び起きるとささやきて町より帰りし人ら告げゆく

同

寒風に吹かれし丘の棉畑の黄色く枯れしを呆然と見る

同

木口 正功

此の国に移り来たりて三十余年帰化人となりて心落ちつく

一九六二年

ゆとりなく六十年を過ごせしが悔いはあらぬと鶏飼う我は

一九七〇年

雨雲の迅き海岸山脈の緑の中にクワレズマは咲く

一九七七年

街路樹にハイビスカスの花咲きて小雨の中を自転車行けり

同

海賊を迎えて撃ちしと云う建物の壁厚くして草の茂れる

同

ゆるやかに流れる潮の黒々と深きに小魚の群泳ぎいる

同

午後の雨静かに降りて筆先の墨の香りはほのかに匂う

同

合掌の形に立てる記念碑は交通安全をこめし祈りか

一九七八年

岸 かおり

食堂の明るき灯下に吾が価値定まりし如結納を見る

一九五五年

貴 志 美智子

原始林に挑み茶の種子うえ終えし夕かすかな胎動おぼゆ

一九六二年

期待せし事あざやかに裏切られ夜半の厨に無精卵割る

一九六七年

煉瓦建の窓に風鈴なる朝待望のブラジレイロ産声あげぬ

年代不明

汗にぬれしボルソに父母の便り秘め除草に暮れし今日の平安

同

岸 本 一

洋々と濁り流るる大江の水に揺れいる未来を見つむ

一九六六年

移民小屋揺らんばかりに吠え猿の声密林の闇にどよもす

同

胡椒もぎと歓声上ぐる労働者満載なしてトラックは出づる

一九七六年

鷹揚に大王椰子の葉は揺るる雨季明けの空に陽を弾きつつ

一九七七年

奉迎に賑わう街を思いつつ伸び遅れたるマラクジャを結ぶ

一九七八年

奉迎に行けざりし夜の食卓にサン ジョアンの花火打ちひび

きたり

同

とめどなく諸物価高騰する中にピメンタは暴落す収穫を前に

一九七八年

北 秀一

時として盗人の如く木の枝に止まりしウルブーが我を見て居ぬ

一九五三年

仕事終え手洗いおれば川向うの森にこもりて山鳩きこゆ

同

北 竹 治 志

屑牡蛎をマモンの下で丹念に剥きしが肉はいくばくもなし

一九七四年

父の日に家族留守なるサーラにて故障のテレビの前で酒くむ

一九七九年

ふくみたる酒は口内にひろがりて楽しき独りと思う父の日

同

独言いいつつ朝の陽に遊ぶケリーを芝生に坐して見守る

同

北 谷 まがた — 桜井 正己 —

変貌の跡荒々しく草原となりし耕地を染める朝焼け

一九六六年

群なして働く人ら登りゆく畑は朝霧の中に青みぬ

同

雨雲の低き夕暮れポン柑の青実梢にしきりにゆるる

同

無造作に受取りたりし錢箱の錢整えて商い終る

一九六九年

新豆の一つ一つが光りさし秤るコンシヤに軽き音立つ

同

埋葬も交際にして一本の香を手向けていづる夕墓地

一九七〇年

打ちおろす鍬に付きたる底土の赫は息吹く如く色さゆ

同

濡われし枯牧の溝に一筋の靄がかかりて白く動かず

一九七二年

膝折りてセルカの外の草を食む牡牛の角の未だ幼なし

一九七三年

移転などもはやあるまじ住みつきて移民七十年祭今祝うなり

一九七八年

つなぐもの只血のみにて子も孫も移民七十年祭にかかわりも  
たず

同



北 鶴 左 門

巢につきし鶉のために摘み残す棉ほの白し夕暗の中に

一九五八年

木 谷 広 次

インジオ棲み居たりと言える森の中吾が子とパラナ松の実拾  
う

一九七二年

北 原 し の ぶ

真夏陽の野路を小さき棺守りて男ばかりの葬列行けり

一九六四年

冷氣ふくみて朝風の吹く墓地にしてかざりの花輪がかすかに  
鳴れり

同

郷愁の目にとらわれて展示さるるどじょうは瓶の底に寄り合  
う

一九六五年

止り木の己が罅をついばみてアララは空の広きを知らず

一九六九年

銀色に葉うら反してさざめけるラミー畑の風は穏しき

同

薪にするペローバの木片積みまれいて旱りの庭に朝より匂う

一九七〇年

手入れよきコーヒー園主は邦人か空地に牛蒡の葉群さやげる

同

密輸せるスリルもありて柔かき毛皮またとえば身の汗ばめる

同

北指して昨日流れし蝶の群今日もそこばく後追いてゆく

一九七三年

雷鳴に追わるる如く日の暮れを雲垂るる方へ人等急げり

同

木村 都詩夫

月さゆる夜更けを風の渡るらし目覚むれば椰子の葉ずれ聞こゆる

一九五五年

たくましき道路工夫が帰るとき夕焼け雲は空にひろがる

一九五五年

北村 梨月

塗りたての壁の黄色が遠くよりすがしく見えて我が家に帰る

一九五四年

兎に追われ馬が四五頭街中を蹄の音をたてて駈け来る

同

昨日とりしシャツパの事を気にしつつ施薬院に行くあつき日  
盛り

同

ペンソンをやめて働くといえる人遺児多ければ思いあわれむ

同

下宿屋の主婦にはこばれ食事する癒ゆるなき我と思いながら  
に

同

たのみなき注射器を我はととのえてしびれし臀にビタミン  
打つ

同

木下 和 樹

椰子壁のすき間より射す月光の忘れ難かり移り来し頃

一九七〇年

道の辺に捨てられし小犬なきおれば見すぐし難し抱きてかえ  
り来ぬ

一九七六年

久々に晴れてのどけき秋の日のパルケを孫と連れ立ちて行く

同

木下 緑 陰

見はるかす青一色のバナナ園のつきし処に山そびえおり

一九四八年

あたりみな霜にやけたる畑中のレモンが赤く夕陽に映ゆる

一九五三年

一株の桜の苗を貰い来て校舎の前に心して植う

一九五四年

儀 武 息 良 ―三郎―

旅先の人の話せる国なまり聞き居てひとり心安らぐ

一九五〇年

カンテイロの除草終りて暫し立つ耳元近く群がる薺蚊

一九五一年

ここに来て最後の水を呑みし人の十字架立てり道の片辺に

一九五七年

照り返す敷石道に蔭をひく帝王椰子の幹たくましき

一九五八年

クヤバーの眞日照り返す石道をはだしのネグロ音立ててゆく

同

起伏なく拡ぐる牧場は冬枯れて沼のあたりに牛の屯す

同

千頭に満ちしと笑まう友の顔苦難を皺に刻みて探し

同

牧草の乏しき牧場に満開のイペーの大木は夕っ陽に映ゆ

同

北麻州の行手遥かに横たわるセーラ アズール雨に煙らう

同

黄昏の広野は遠く朱に染みてキャンプの上をアララ鳴きゆく

一九六四年

心なきラジオ高鳴り郷愁を更にそそりて日本の声

一九六五年

常食のマンジョカ バナナ霜枯れて常に貧しき土民等哀れ

一九六六年

木村 茅里

この朝はイタペチ峯に雲たりて麓の木立黒く間近し

一九五四年

登校する我に真向かいイタペチは朝な朝なの表情を持つ

同

木村 正和

父の帆もしかりき子等の帆も朽ちき帰郷の風をはらみたりし  
が  
年代不明

年輪の歪みのごとき持たざれば鋼の蒼き断面匂う

同

底いなき酔に沈みていくばくのち陸封の吾が魚に逢う

同

アラジンのランプ湖底に点らねば魚らは睫毛ぬらすことなき

同

狩猟期のまぼろしわかき神ありて従うは野の山のけものら

同

ちちははを焦点として描きゆく楢田太陽系を超えたる

同

砂時計砂こぼさねば落日の砂漠らくだのまぼろしも消ゆ

年代不明

イブとアダムの腰おおいけむ葉がくれに紫くらく熟るる無花果

同

アジアの果蒼海に朱をちりばめてもはやふるさとならぬ列島

同

あるは鋭きあるいは鈍き線描の準二世像たりしそれのみ

同

いにしえは山のけものも濁り酒木の実草の実もて醸したる

同

サモンピンクの漿果マモンの熟るる夜は散りしきて匂うその  
はなびらも

同

フェイジョア―ダ土鍋にたぎる密封のまま朽ちむ吾が徴兵忌  
避は

同

星くらき夜空にマストはためかせ航かば還らむ安き睡りは

同

木村 湊

サンジョンの祭り近づく宵々を揚ぐる花火の音しきりなり

一九四八年

油草の銀のうす毛におく露は霜かと紛うこの朝寒し

同

ナカチロンと称ぶ可憐なる野の花を取りて活けしが幾日保たず

同

ミモーザの葉を銀色に濡らしつつ雨は降りつぐ市立つ今朝は

一九五一年

安静時間終るを待ちて訪い来たり明け放つ窓より君に声かく

同

赤々と燃ゆる焚火を囲む輪の中に靴屋のバスチオンも見ゆ

一九五六年

あえぎあえぎこの坂道をのぼりきて行商の荷をおく投ぐるが如く

同

岩の上にいこいてしばし見はるかす南部ミナスのかすむ山々

同

今朝見れば失火に焼けし家壁に選挙のビラが隈なく貼らる

同

清 沢 弘 貴

族に立つ朝のひととき惜しみつつ熱きカフエー立ちてのみおりおり

一九五二年

ひともとの花咲くつつじを見つついはるか吾が家を恋いおり吾は

同

チバジ―の河面に映える夕焼けに旅行く憂さを忘れ見て居つ

同

満開のイペーの花は散りており白砂清き雨後の道の上

同

清 谷 勝 馬

唐胡麻の爆ぜて昼空ひた淋し日本のことも思えり今日は

一九五九年

日本人と過去に持ちたる愛のこと話して耳朵の赤き人妻

一九六一年

スクリジュの噂の沼に水増して浸す一人の水死の十字架

同

箱に詰め移り行く時五指に余る手製の位牌枯れし音たつ

一九六一

どの牛も臀部に焼きし極印のありあり痩せて枯れし牧原

一九六三年



悪童らが嘲けるジャポン彼らより永く住み居てなおも異邦人

同

縄煙草刻むしばしの休息を木蔭に取れば来る蜂雀

同

コンゴの餓死の蹠（あなうら）TVに写りて焙らぬ乾肉  
（ジャバ）塩からし

同

コロツテに水を満たして擔い行く形もすでに土民に似つつ

一九六四年

家族より他に人見ぬ日も続きコーヒーの花咲きて実となる

同

灼け砂の上を揺らぎて行く蜥蜴吐くその赤き舌なま生まし

同

小さき棺抱き替わりつつ数人の葬列にして固まりて行く

同

鳥を撃つ如くうたれて何もなし奴隷の風習残るフアゼンダ

同

草白く乾ける牧の柵に牛の角のままなる頭蓋晒さる

同

万の蟻出入り止まざる蟻塚の空拡がらぬ雲ありて燃ゆ

一九六五年

飛翔おえ己が重みに落ちて来て意外に太きイサの下腹部

同

誰一人知らぬ街にて護符の如くオウムの嘴にひかす辻占

一九六六年

草蔭に揺らぐ燈火マクンバの呪縛も饒えて深き夜靄

同

片塀を残せるのみの壘の跡茶褐のサビア一羽来て鳴く

同

倒産の後永けれど祖父の日に帰す力なし国籍喪失

同

清谷 益次

戦いを捷ちぬとなしてこの年の明けを祝えるはおおかたなら  
む ―コロニアの戦後混乱やまず― 一九四六年

―不在地主土地強制買上げ―

二十年国の歩みの外にありし我等なり土地失うとも何をか言  
い得む 同

みごもれる気配覚ゆと眸にこもる笑まいのひたむきにあわれ

同

或る時は街ゆく人におのが業（ぎょう）を恥じしこともあり  
き野菜車の上に 同

生いたちてやがては人間（ひと）の嘆かいをする日はあらむ  
この幼きも 一九四八年

大西洋の波まともなるこの磯の高潮鳴りは劫初より永劫に

同

やみの底に海は鳴りつつ押し寄する波の頭は遠目にも見ゆ

同

同胞を見るは稀なる浜の町に友の長女のおとめさびつつ

同

風蝕されやがて壊えゆかむ時を思うそびえたつこの高層建築  
の群

同

七年の時を経ぬれば日本の雑誌に川田順 吉井勇も翁（おき  
な）と稱ばるる

同

いまはの際とり参らす母の手の節くれだちて我のよりふと  
き

一九五〇年

今ふるれば陶磁のごとき冷たさの母の額（ひたい）を撫でて  
嘆かう

同

虚しさの極みに覚むる夜々の癖母の息絶えし二時二十分前後

同

南回帰線ここらあたりとききて過ぐ旅人めきし心となりて

一九五一年

人ひとり悼みつつ行く高原に盛りならむとする油草の花

一九六〇年代

フアベーラは地苔のごとく色彩のなき拡がりに傾斜地おおう

同

夕ぐれて点らぬ区画 銀河系暗黒星雲のごときフアベーラ

同

れんげ草ほのぼのと野を染め初むる頃おいに来ぬここは正に  
ふるさと

一九七〇年

四十余年を距てて故郷訪うわれと誰か知らむやこの汽車にし  
て

同

「大雪」に残れる雪をかき掘りてふみしを一生の奢りといわ  
む

同

―大雪は北海道の大雪国立公園―

清村 卓史

樹海の中国境の河をさかのぼり現地調査の舟を進むる

一九六八年

訪日より帰り来たりし伯父をかこみ血縁の安否こまごまとき  
く

一九六九年

桐本 虎一

あかつきは起きて日の出をふし拝み天長の佳節をことほぎま  
つる

一九五三年

草野 しげる

小夜更けて一人物洗う厨辺のタンケのかたえに鳴くきりぎり  
す

一九五〇年

いたつきてこやればわびしうから等の早死にせしにこだわれ  
るなり

同

十年を蔭膳すえて吾が安否気づかいましたけんたらちねの母

一九五一年

鯨岡 梅司

紹介状握りて遠く療養に旅立つ庭に無心の向日葵

一九四六年

手綱取る吾子のカリンニヨゆられ行く日傘明るく村の女教師

一九五三年

楠木 むらじ

ミナス路のイパチンガ鉱山陽の下に赤錆おびて草木育たず

一九七二年

乱獲に少なくなりしマリスコが高値よびつつ市場に売らるる

同

影ひきて歩める我を見おろせる未完のビルの夜の暗き窓

一九七九年

ピポカ炒る匂いただよう広場にて孫らをつれてシルコにはい  
る

同

葛原 竹男

惜しみつつ払う家賃のレシーボが抽出しの隅に月々たまる

一九五三年

久世 修三

秋探しバロンの色もあざやかにサンジョンの日も間近なりけり

一九六二年

昼さがり奥ソロ街道はてしなく牛の群れ見ゆ原木の間に

一九六七年

急坂をのぼりて仰ぐキリストは朝霧の中にいとも静けき

一九七二年

工藤 勘一

パラグアイと亜国も見ゆる秋山に友と交々松の実拾う

一九六一年

開墾の整地を終えし新土に太きわらびが首もたげ伸ぶ

同

古はインジオの住みし土地と聞くカンポ モロンの冬の草原

同

椰子屋根の荒壁洩るる灯の縞に白き穂草の幽かなる揺れ

一九六四年

花びらの芯に湛えし蜜の香に魅かれて花粉こぼす蜂鳥

同

工藤 信平

生れ出でし仔をいとおしむ親牛の啼き告ぐ声の夜氣に徹れり

一九四七年

父祖の意にそむき移りしブラジルに妻みまかるも今は悔いなし

一九七三年

工藤 善子

此の傍に吾がいこうべき場所ありと心やすらぐ夫の碑の前

一九七九年

生産に吾がたずさわる何もなく夕べの窓に孫と雲見る

同

白き米夢に見ることいくたびか吾がふるさとは米どころなり

同

小さき室に羊齒の一鉢ゆれ居りて独身の娘の落着くらしも

同

ようやくに二日を生きし嬰兒のひつぎ宝石箱の如く小さく

同

とげとげと物言う人等の輪の外に涙流せし移民妻われ

年代不明

国 兼 まさ恵

元旦の朝を降る雨あたたかくマーブルの墓石明るく光る

年代不明

一束の線香を焚きて供うるにブラジルの人らいぶかしみおり

同

丸餅の黴を落として正月の三日の夜を娘と食わむとす

同

インジオの女人像にて生臭きほどにまるめる乳房垂らせり

同

朝やけが湾を焼くがに広がりて釣の小船がただ一つあり

同

砂浜をさくさく歩む久々に娘と連れだてば心あかるく

同

夕焼けの雲につながる巖山のポン デ アスーカル明るく見  
ゆる

同

どこまでも晴れし空なり高原は見渡す限り巖山にして

同

こともなく暮れ行く今日の高原よ動くともなき雲の峰立つ

同



潮風の通う道なりコルコバードの展望台に続く巖山

同

国 松 英 輔

露ながらかがやく走りの西瓜もぎサンパウロにむけて出荷を  
急ぐ

一九五三年

モジアナの木を焚く汽車の火花美し夜霧に映えて闇に消えゆ  
く

同

世をまどわし人を欺きししれものの加藤拓治は捕われにけり

一九五四年

雨乞いの歌の余韻の哀れなり陽は灼熱の眞昼の野路に

同

電燈も点らぬ小駅の構内をあやに織りなし螢飛び交う

一九五五年

二世彼が年賀を述ぶるアクセント切口上も可笑しとはせず

同

気まぐれにローダ ジガンテに乗りて見つ高きより見る都美  
し

一九五八年

故郷に似しモジの山々霧降りてこの藪かげにわらび生いたり

一九六〇年

父われにポ語にて抗う子の顔を寂しく視入る老妻の眼と逢う

同

故郷の鳥海山脈思わするミナス州境の山現れぬ

同

窪田 金枝

州境を越ゆればミナス　ゼライスの広き牧場に牛の群見ゆ

一九六八年

生酔いにカリオカを誇る運転手陽気に我等を導きくれぬ

同

久米 峯子

整地されし区画の畑の赤土にやがて蒔かるる芽生えを思う

一九七五年

校舎の燈すでに消されて更くる夜を最終バスの過ぐる音する

一九七八年

山が持つ樹々の匂いにひたりいて遠き未開の森憶い居り

同

久米 光春

炎熱の最中に祝う正月にも慣れて移民ら餅を搗きおり

一九六一年

妥協する貌などもたず過ごしたる写真の中にある青春期

一九六二年

なごみゆく思いを子らとわかち合いジングルベルの鳴る街を  
ゆく

一九六三年

家業継がぬ子の進学を祝う部屋いで来てひとり工具をみがく

一九六五年

距離ふかめゆく思想には触れあわず吾子らと煮立つ鍋をつつ  
けり

一九六六年

移り来し異国の街に声あげて朝霧の中魚をあきなう

同

山焼きの余燼くすぶりいる沢に開拓小屋の棟を上げたり

一九六八年

訪日の一団の顔晴れやかに朝陽あまねく機と撮られいる

一九六九年

パイネイラ咲く校庭にふるさとを偲びつつ運動会の白線を引  
く

一九七〇年

離農するほどの決断つかぬまま霜枯れしコーヒーの抜根はじ  
む

一九七五年

更けてゆく夜の病棟にひびかいて遠くより来る硬質の音

一九七六年

知らぬ間に空地少なくなる墓地に日本文字の十字架多し

一九七七年

うめがたき溝の深さを諦めて紙一面に断絶と書く

同

艶めきし臆測瞬時かすめつつ後部座席にへアピン拾う

一九七七年

報われず逝きたる父母の墓を吹く乾期の風にかえり来る声

一九七八年

久米川 牧陽

沁みとおる夕蟬のこえ聞きおりて日本の夏の山路おもえり

一九五〇年

久米川 照明

未だ視ゆる病眼みはり見渡すに枯野は更に寂しきさそう

年代不明

働かむ意慾ある日よ剃刀の如く鋭く鋏を研ぎいつ

一九五六年

子等の耳みなうすくして恵まれぬ生活は次の代にもつづくか

一九六四年

若葉匂う公園の中より出でて来し少女が眩しきまなざしをせり

一九七二年

このあたり大蛇の棲める噂あり川辺の暗さすかしつつゆく

同

終の日の吾が安らぎのあるごとき気配がありぬ海に向かえば

年代不明

こつこつと土耕しいて少しずつ借りを払いいる錯覚をもつ

同

無造作に投げ出されたる土管ありそれぞれ個々の影おとし  
つ

同

雲野 去来

生まれ来て二十日もたたぬ幼きが飛行機の音に目ざめて泣け  
り

一九四九年

大根を並べ終えたる台の上にさ霧ながれてほのかに明ける

同

栗野 葉奈子

紫のクワレズマの花咲く峡の道を黙して葬列はゆく

一九七一年

名の知れぬ小鳥らつどい来て啼けり残り実つけしアバカデの  
木に

一九七二年

黒木 フク

船迄は見送りせぬと今は亡き母の言葉が今も胸打つ

年代不明

初産の近き吾には告げるなと父は逝きたりはるかなる日に

同

毎日の雨に予算が崩れゆき師走の風は冷えて迫れり

同

夕陽をば浴びて野菜を束ねゆく夕げの仕度氣に掛かりつつ

同

黒木 松巳

ゴヤス路を走る路辺にニグロの子子猿差上げ買えと誘う

年代不明

ゴヤスより購入来たりしチャボつがい可憐な声に朝の刻告ぐ

同

友の死の悲しき知らせ聞く夕べくちなしの花真白く咲きおり

同

秋なかば蔵王の峰に降る雪を手掴みに日本の冬を味わう

同

黒沢 允晴

パイネーラ花散る毎に思ふかな移りて過ぎし遠き日のこと

一九七八年

黒田 鶴子

さびしさに堪りかねつつ手作りの草花携えて奥津城にゆく

一九五五年

不馴れなりし薪割りも我が身につきぬ夫を葬りて百日過ぎし

同

ルス駅よりバウルに向かえば暑さ増し客はおおかた上衣ぬぎ  
たり

一九五七年

争いが昂ぶればポ語となりてゆく二世夫婦のどちらからとも  
なく

同

小池 誠

洗いても牛臭匂う身の愛し文化に遠く牛飼いて生く

一九六三年

小池 美佐子

眞夜中のリーマ空港の待合室に飛行機の給油待ちいる吾ら

一九七九年

国際線の乗りかえを待つ夜のロビーにおかれし熱帯樹の縁日  
にしむ

同

事故死せし父の墓前に泣きながら母は我の帰国告げおり

同

小石 茂行

双手ひろげおぼつかなくも近づける吾子をし抱けば乳の香た  
だよう

年代不明

乳色のこの時の間の朝明けに我が吸う息の音を聴きおり

同

フエイジョンを煮る要領を時々声かけて聞く臥床の妻に

一九四九年

気根垂るる並木の蔭に入りて来つサントスの町の暑きを言い  
合う

一九五一年

潮風も自（おのずか）らなる形なし岸边の樹々は蘭つき居た  
る

同

朝の窓開けば香り豊けくも印度素馨は花散るもあり

同



きりぎしに霧らえるしぶき磯臭き香りを持ちて眼鏡を濡らす

同

童達駆け去り行くに其の中の黒人の足裏白きが目立つ

同

白きまでに褪せしマナカの香を保つふじ紫に咲ける日よりの

同

船籍をリオに有せる船にしてゴムの素材を捲き下し居り

同

コロア デ ビウバ今を盛りと咲くなべに日本の藤を又思う  
なり

一九五二年

平原を駆け行く駝鳥の群を見るサンパウロ州にも駝鳥住み居  
し

一九五三年

かまびすしき劇場に居ていつわらぬ孤独と云うは身に沁むご  
とし

同

小 石 ひろし

教会の塔越しに見る新しく開けしヴィーラの赭土のルア

一九五一年

フアゼンダ建築様式ときみ言えり廻り縁ある階段の上

同

我が行かねばただに遠しと思うのみ二人の姉が住まうパラナ  
を

一九五二年

ボンバ フルツアンテ据付けし日より娘や妻が風呂水を汲  
むを喜ぶ  
一九六三年

君の住むビーラ意外に近かりき鉄路を越せばすぐ続く街  
一九六四年

小 泉 青二郎

あらたまの年さわやかに緑たつ珈琲園の朝明けの雨  
一九七一年

さながらに培う者のものぞみこれ珈琲園に虹たちわたる  
同

椰子樋の垂水にぬるる羊齒むらをまばらに林泉の月照らしお  
り  
同

そよ風に珈琲の実を篩う娘が空たかだかとほうり上げたり  
一九七二年

吾は葡語子らは日本語が異邦語にて意思の疎通なかなかなら  
ず  
同

牧の露いたく降りたる朝にしてパラナに向かう友が靴はく  
同

小 浦 清 生

パラナ路の夜を徹して旅ゆきぬ君は父の日を祝うべくして  
一九六一年

郡山 鉦太郎

細々とのぼる煙はくれ沈む向う丘辺に棚引きそめぬ

一九四九年

古賀 みつか

友も吾も憧れ語りし国境にはるけくも来ぬパラグアイの橋

一九七四年

茶の花は白く咲きつぎ流れゆく雲の寒さもすでに冬なり

同

うす暗き谷の細道物音も人も無視した岩のするどさ

一九七五年

通信の絶えて久しき故里を初夢に見て便りしたたむ

一九七七年

不具者かと哀れむ人の目にも馴れ病む足かばうゆるき歩みに

一九七八年

一束の父の便りを読み返し形身となりしが唯に口惜し

同

紅 月 伯 舟

我が先に行く人ありて火のつきし煙草おとせり朝の峠道

一九四九年

電燈のともらぬ町のアルタイの駅に降りしは我等のみなり

同

幼きがゴヤバをもぎに通いたる細き小径も草枯れにけり

同

穂に出でしマルゴーズのみ白々と黄昏さむき小径を行けり

同

酒呑みの兄が刺身にとりし鶏肉の残りをわれらは汁にして食  
う

一九五〇年

汗たりて働く日々はいとわねど我等穫るもの皆安かりき

一九五二年

蒐集の切手いくつか貼り終えし午後にてきようも微熱さしく  
る

一九五四年

たまさかにやすらえど我は所在なく木履繕いいち日くるる

一九五五年

蜂雀軒つたいとぶ日もありて四月ひそやかなる明け暮れとな  
る

同

出荷期はすでに至れど値下りて摘まざる茄子が黒々光る

同

午前と午後の風の方が変りいて隣りの風車陽にきらいたり

一九五六年

明日の出荷の茄子摘む我に従い来る妻は文盲ブラジル生れ

同

肥料を購わんと町に出で来たり肥料のどれも五コントスをこ  
ゆ

同

小坂 康平

二世の妻と夜更けて幼な吾の記憶とぼしき祖国を話す

一九五一年

引越しの車上より見れば吾が住みし家より塵焼く煙が見ゆる

一九六七年

珈琲の値を語り合うを何げなくわれはききおりバールの隅に

同

年ながく棉作りきし過ぎし日を二十余年と一口に話す

同

小坂 治一

旅客機を降りし菊治と「老けたなあ」と骨ばった手と手を握  
り合う

一九五一年

「おかぼ」誌を卓に開きて語り合う菊治もわれも入歯の口で

同

膝にはさむ馬穴に満ちくる牛乳の重さに堪えて乳搾り居り

同

産月の近づくらしももみほぐし搾る牛乳黄に濁りきし

同

ペン字太き菊治の手紙開きたる古き「おかぼ」にはさみてありぬ  
一九五三年

蕎麦食いに来い 歌会にも面出せと手紙よこせし人今はなし

同

珈琲焼く煙こもれる夕空を火雫こぼしバロン流るる

同

ユーカリの秀にかがやける星ありて胎臭匂う産湯をすてる

一九五四年

相続のことには触れず兄とわれ霜に焼けたる珈琲見廻る

同

提訴価値なき契約書を友の手に戻して飯店に連立ちてたつ

同

出荷査証受けんと来たる税務署の夕づく庭に小鳥群れ鳴く

一九五七年

農に生くる誇りは自負か噴霧器の肩に食いいる作業つづける

一九六三年

鋤疲れ残れる手にて書き記す営農日記の貧しき数字

同

牛追いに旅立つ朝牧夫等は焚火囲みて鞍締めて居り

同

一握の土なき家に移り住みアルプス堇の鉢置く窓辺

一九六七年

パラナ松黒くしずめる高原の空鳴きつれて渡る鳥あり

同

ふたたびは来ることあらじ国境の滝音とどく宿に泊れり

同

手を振らるるオープン　カーの皇太子面浅黒く湧く親近感

同

児島　勇

さらさらと静かに落葉する木立一声高く鳴くはサビアか

一九四八年

会うことも遂に得ざりし師なりけり歌碑を訪い来て悔い新たなり

一九五五年

小島　正徳

雲海を遠くとびきてレアル機はバウーの山に今しま向かう

一九四六～一九五六年

しかすがに涙わきくも君が病むマンチケーラの山を望めば

同

コパカバーナの海べにいでて華やげる夜の舗装路をひとり歩  
めり

同

四千年この貝塚に埋もれし石斧かこれ手にとりて見る

同

貝をもて骨を埋めしその古（かみ）の土人部落は住み絶えに  
けり

同

ウルグワイ河の遠き岸边ゆ舟夫（かこ）たりの唄声きこゆコ  
ルンバの町

同

草枯るる丘あり草萌ゆる丘ありて渺々とひろしマ州の原野

同

十字架は赤くぞ錆びてかたぶけり森の聖者の此処に棲めりと

同

低湿地帯にさむざむと日は傾けりボリビアの空に雲は焼けつ  
つ

同

## 香 島 一 郎

街灯をつつむが如く霧こめて遠くより聞こゆ夜まわりの笛

一九七九年

霧こめる水銀灯に浮き上り庭の棕櫚は影絵に似たり

同



アカシアに似たる黄色き花群れてガウシヨ高地の春をバス行  
く

同

越村 定雄

藁帽子ふかくかむりて烈日のもとに気味よき身の動きかも

年代不明

日のあたる椰子壁に身をもたせつつ病みあとの妻の今日のや  
すらぎ

同

南十字の星ありという空仰ぐ移り来て寡婦の位置は変らず

同

眠らむと抜きしピンガの塚の栓夜更け厨に淋しき音たつ

一九五〇年

われ一人の愉楽にふけることもなく重き鞆を提げ帰らんとす

同

精彩の乏しき生に点す灯をもとめて遠く渡り来し海

一九五七年

移民船のハツチの中より見し星は妻に不吉を囁かざりしか

年代不明

手作りの紙花などにて飾られて移民の妻の多くが逝きぬ

同

さすらいの果ての移轉に馬の背の吾が荷が音する人絶えし道

同

完全に山男となり吾が瞳かがやきたりし炭がまの前

同

弁当を運び来し子に木ぎれもて地に書き教えしふるさとの  
文字

同

轟きて倒れたる樹に吾がのりて斧ひた振りぬ子らと生くべく

同

越 村 由紀子

朝靄の立ちこめし庭に一株の白百合の花しずもりており

一九五一年

包装せる外国行きのバナナ積みてトロツコはゆく音きしませ  
て

同

山腹よりバナナ積みおろすケーブルの鉄線が夕日に鈍く反射  
す

同

日本より送られて来し楓の葉亡母の写真にまず供えけり

同

山腹に棚引く靄の切れ間よりバナナを積みし馬下る見ゆ

同

庭隅に捨てし空缶が木の間よりさしくる夕日に時折り反射す

同

短歌大会より帰りきたりて亡き母の写真に供う高点歌賞

一九五二年

寒々と汽車待つ夜明けかがまりて人はしわぶく暗きベンチに

同

みほうりに幼き吾の持ちにける母の墓標は重たかりにき

同

スイナンがひとときわ赤く咲きて居り塀のかなたの青葉の中に

一九五三年

古 関 俊 枝

半生の越し方想いつつ臥す夕べゴムの病葉音たてて落つ

一九七三年

雑草と蟻に荒らさるる我が畑が離農久しき吾が夢に顕つ

同

愛憎も杳き過去なり亡骸に合わす両手に偽りはなし

一九七五年

はや常の貌して商談するがあり埋葬終えし日暮れの墓地で

一九七七年

古里の山河が友が不意に顕つ訪日するとういとこの電話に

同

ほぐれ初めし椰子の若葉のうす緑徐々に扇を開くに似たり

一九七九年

夜もすがら雪降り止まずと書き添えし賀状に冬のふる里か顕  
つ

同

海老獲りの焚く篝火がさざ波にゆらめき夜の海の明るし

同

眞向いのベンダの鎧戸巻き上ぐる音より吾の一と日始まる

同

友もなく通う編物教室に日系生徒は吾一人のみ

同

光 田 寿 男

瞳孔を次第に開きゆく猫を見て居り吾のかすかに酔いて

一九六六年

風化せし獣骨の光るまぼろしよ土葬より遠き風葬の歴史

同

皮剥ぎし毒蛇の白身吊されてのたうつ様が幻にたつ

一九七六年

再生林の中より伸び来し廢道が湖心に向かいのめり消え込む

同

地下舗道登れば午後の風ありて人群の中吹き寄せられゆく

同

ガビローバの花一斉に匂い立ちいまより草魚の抱卵期とはな  
る

同

椰子の実のたわわに成りいし島を想う童画の如き明るさにし  
て

同

泥酔者死せる形に横たわり朝の陽射しは移りゆくなり

一九七八年

足裏の「魚の目」をかばい歩むなり思えば二十年の永きかわり

一九七九年

光 田 満喜太

移り来て四十路を経れど飛ぶ鳥に思い出づるは故郷の山

一九六七年

光 田 八千代

親しめる異国の子らにかこまれてむかしながらの紙の鶴折る

一九六四年

ジャカランダの薄紫は夕闇にいつしか溶け去り月影淡し

一九六五年

小 平 美那子

送り来し灯かえしてしばらくを闇に馴れんと眼をつむる

一九五〇年

上妻 博彦

この土地に住むべく子等にさとしつつ赫土ふかく果樹の穴ほ  
る

一九七〇年

コツパ ド ムンド 歓喜の子らと共にいて未だ異邦の我が  
疎外感

年代不明

子等といてジョン デ バーロの巢をあおぐかかる安堵のた  
まゆらに居り

一九七一年

離農など妻は語りていたりしが結論もなく眠りたるらし

一九七五年

この国によもぎはあれど見るのみに草餅にして食うことはな  
し

一九七六年

現身はかくすこやかり在り経つつ糖きびの火酒を夜毎飲みつ  
ぐ

年代不明

この国の人等蕨をくわざれば豊かに萌えて妻子摘みくる

同

マンジヨカの苗のそこばく隣りより貰いて妻子が植えいるき  
こゆ

同

道べりのバールの軒につるされて南瓜は紅し秋の陽差しに

同

歩をとめて我は見ており宙づりの架線作業の鉄塔のもと

一九七七年

上妻 泰子

母の背も少し曲りしと書かれている父よりの便りに目頭うるむ

一九七三年

小竹 清子

熱きカフェー啜るボールの卓の上に青き飼鳥の羽根舞い落つ  
る

一九五五年

埠頭倉庫の長く重なる棟の上にクレーンの尖端がむきむきに  
動く

同

数條の鉄路挟みて巨大なる小麦積み下し機は移動し来たる

同

港湾に今し入り来るブラジル丸の船足にゆるく立てる小波

同

水上署のランチ近づけば停止せしブラジル丸右舷より下がる  
タラップ

同

廻廊にめぐらす厚き布ありて船底に積荷の影沈みゆく

同

ガラス器に水藻浮かべて幾種かの金魚遊べりブラジル丸廻廊

同

港湾を出でゆく船の右舷寄りに赤き誘導のランチ添いゆく

同

後藤 静

重たげに実るマンガの影うつし隣家の壁は月に明るし

一九七三年

挙手の礼して去る吾子よ戦いのなき世をひそかに我は祈るも

同

荒れ果てし耕地に今もパイネーラ並木のこりて花散りしける

同

暮れなずむ河面すりて飛ぶ鳥は麻州より来て麻州へ帰る

一九七四年

どの人も貧しげにして土産物売る店並ぶ国境の町

同

白雲の湧くが如くに千頭の牛現わるる地平線より

同

四十年来の霜害という黒々と続くコーヒー園に声もなく佇つ

一九七六年

スペイン語の会話も聞こゆあちこちで賑わいて居り畜産展は

一九七九年

ビンテビー鳴くを聞きつつめざめいて朝の気温の下がりたる  
冷え

同

遠くきく野鳥の声も寒々と霜にやかれしバナナ伐りゆく

同

ゴヤーバの実をつつきおり山鳩は枯葉の匂う朝の窓辺に

同



後藤 蔦子

風あると見えぬ庭辺に小刻みに風船かずらの実の揺るる見ゆ

一九七一年

気負いつつ帰国願ひし戦前の焦りも杳く住みなじみたり

同

小西 吉雄

駝鳥二羽白牛群の中に見て望遠レンズの操作もどかし

一九七二年

水草の花をわけては漕ぎなやみ吾が身はゆくアマゾン上流

同

大麻州五千籽をば往き来せし車を点検す家の軒端に

同

改良の牧場グワラプアバ平原に白牛の群とところどころ見ゆ

一九七三年

河野 扶叟

卒業生三十余名中ただ一人の日系二世なりし吾が娘よ

一九五一年

先生となりて吾を看くると言いし娘よ六十キロ山奥に勇み  
赴任す

同

小林 鶉尾

一雨に油桐の畠の青みたり木末に白き花は見えつつ

一九四九年

落花生出荷期となれば幼等をかえりみる事もなくすぎゆく

同

積まれゆく籾倉庫に満ち来たれば不作憂いしことをも忘るる

同

肋膜を患い居つつ年経たる義妹と会いぬ言葉少なく

同

人影もなき今朝来たり吾が妻の墓辺に拾うパイナの花弁

同

墓の辺の水仙幾株芽生えそめ妻の逝きたる季ぞ近づく

同

いつしかに陽光うつりし墓のべに散りゆくパイナの花の幾ひ  
ら

同

風呂たてて洗いやりつつ吾が子らの話すを聞くも愛しき一つ

同

おのが手につくりしものを父我の食せば喜ぶ九才の吾娘よ

同

小林 憲一

聖ジョンの祭の炎しずまりて灯風船（バロン）のかげに十字  
星見ゆ  
一九六九年

小林 寂英

樹は半ば素枯れかかれるコーヒー園を窓外に見るパウリスタ  
線の旅  
一九五三年

相抱きて生けるが如き像の立つアモール デ フローレスに  
我は来にけり  
一九五五年

行末は異人の嫁と暮らすこと想えば既に悩みとなりぬ  
一九五六年

あきらめの果ての重たき面上げてしずかに嫁の碧き瞳を見る  
同

伯語にてあやす孫どち我が身には重荷となりて口をつぐみぬ  
一九五七年

秘薬なるグワラナ少量伝説を信じつつ朝のカフェーに呑むも  
同

何事も黙していれば異人嫁気に入らるると思う無邪気さ  
同

編物に倦みしひととき陽当りのよきテラスにて小犬と遊ぶ

一九五八年

昨日今日健康勝れぬ夫案じ日語ニュースを聞きもらしけり

同

吾がそばで日本語ラジオを聞きいたる夫死にませり遺言もな  
く

同

伯国に移り来てより四十年故郷恋いつつ夫逝きませり

同

今日も訪うN事務所には集い居てマカコベーリヨが将棋指し  
いる

一九六〇年

## 小林　その

服を売りパンに替えんとかつての日おずおず立ちしパン屋の  
店頭

年代不明

キャベツ三つアルファツセ数個売れたる日塩と石油を買い  
戻れり

同

はるかなる彼方に去りし思い出をたどりて歩むかつてのこの  
町

同

小林 良子

人形を送りてくれし日本の叔母にしきりに逢いたき夜なり

一九六三年

大豆粒かつぎては落とす蟻もあり葉をかつぎしは足ばやに過ぐ

同

マンジオカにわきたる虫が鋤の柄に当たりてにぶき音立てて落つ

一九六四年

呪を書きし父の怒りの十字架が木諸盗られしあとに立てらる

一九六五年

アンゴラの玉子を盗りて肥りたるトカゲが今日の夕餉の皿に

同

棉運ぶ車を強く照らしつつ秋天の日はかたむきそめぬ

同

小林 百合子

売りに出す未練に悩みし日も過ぎて契約サインのインク新し

一九七五年

一と月をアマゾン視察するという人の眸の生き生きとして

同

小鳩 黄夢

無駄口をきく異人らの中にいてクリスマスカード買う異教徒  
われも

一九六三年

小堀 歌川

訪日の心定まる日々にして遠筑波嶺が夢にたちくる

一九六九年

小堀 行雄

ほつれたる衣まといて夜業せる妻に耐えよと言うはいたまし

一九六三年

屑トマテ売りて吾子らは購えりクリーム一個を今日は母の日

同

背丈なす薪の山は火となりてくぎれる夜空の一角を突く

同

黙々とつぎたす薪を運びこむ妻の姿が炎に映ゆる

同

土地持てる人の生活も質素にて食卓にみる塩ひき鰯

同

吾子らみな抱きあい眠る夜にして霜のいたるを憂いていたり

同

我が家によくこそ男の子生まれたり幸いみなぎる産声高く

同

木洩れ陽のさし入る中を黒蟻の行列が静かに通り過ぎゆく

同

小松 久作

戦災にあい給いたる故里の老母の如何に在すと妻と語れり

一九四九年

小松 修水

ブラジルに所詮は果つる身と思う夕べほろほろ鳴く鳩の声

一九五三年

転耕し去りて其の後は会い難し移民の流離常と思えども

一九五四年

原中に建ちて名もなき十字架にこのバスの客みな帽を脱ぐ

一九五五年

どうしても泊れずと言う友のためマカロン三把土産に包む

一九五六年

移り行く者の批判をするなかれ残りし者が守るバストス

同

枯ミーリヨ荒蓼と鳴る革命に慣れて久しきこの国土に

同

干鰯をバカリヤオというブラジル語面白ければすぐに覚えつ

同

売れ残るカルネ セツカに塩がふきブラジルの冬六月来たる

同

カルナバルの乱痴気騒ぎ開放の一夜明くれば移民に戻る

一九五七年

わが辛くふみとどまりしテロ事件臣聯移民史中の一とこま

同

今の客何か言い捨て怒り去る後よりボ語の辞書索きはじむ

同

帰るなき日本こおしく寄る窓のアバカテ青葉夕かげりして

一九五九年

かつがつに食べいる生きをいつまでもたどる移民の一つの系譜

同

文盲を恥ずるともなき少年の珈琲もぐ手が固まりてゆく

一九六〇年

聞くとなくきこゆるパラナ民衆のカフェ政策を罵れる声

一九六一年

堀り当てし土器亡びゆくインジオの裔をあわれむ念いに佇てり

同

## 駒場 賢次

年老いし盲と子供と座しており日暮れの町の辻の石の上

一九四九年



五味 さつき

座り込み一人考え居る夫の髪の毛の白きが殊更目立つ

一九七九年

軽やかに背筋伸ばして予備校へ急ぎ行く息子の靴音高し

同

近 昇

朝のルアゆきめぐりつつ呼び売りのベルズレーロの声甲だし  
一九五九年

移民てうあかしのモデル デゼノーベふところにして順番を  
待つ  
同

ブラジルに渡れば開運必定と姓名判断も眞に承けて来し  
同

靴下の穴をかがりて思うらく裸足に過ぎしわれのコロノ期  
同

あかときの小暗きポイントにひとりして待てば日本語の声がち  
かく  
一九六〇年

鈴蛇の粉末をひそかに服みながら精気をつけて明日にそなう  
同

孫守りて風呂を沸かせりドミンゴも老年前期は単調ならず

一九六一年

当然のごと捨てられて猫の仔の泣く声はポエラにまみれて渴く  
同

カミーズを透せし汗のそのままにかわきておのれの体臭となる  
一九六二年

カローサで密殺のポルコを売りに来しニグロもインフレと歩調をあわす  
一九六三年

屋台にてシユラスコを焼けるところより朝市は膠質の雑沓となる  
同

紺野 幸水

雪降らぬ国に住み古り三十年いまだ見る夢故里の雪

一九六五年

虫喰いし日の丸の旗見るときにこの国情のうつりを偲ぶ

同

パトロンの日毎に変わる日傭人夫（パウ デ アララ）未明の町の端にたむろす  
同

高層建築並び建ちいる新開地日系人の町名もあり  
同

ジャボチカバ黒々熟るる木の下に悪童二人今日も学ばず  
一九六六年

雷鳴に神を信ずるニグロらが雨に濡れつつ棉蒔きており  
同

土の香の匂う手にして君が弾くギターに我ら酔わされており  
同

斎木 智恵

陽ざかりに手折りし芙蓉色あせず君に似たりと母の宣らすも  
一九五〇年

斎藤 ケイ

夕ぐれとなれば寂しく独りいて手製のランプに燈をともしな  
り  
一九七六年

アマゾンの夕陽見たさに訪ね来しこの岸壁に吾子とたたずむ  
同

アマゾンの夕陽美し黒人の小舟こぎゆく背に赤く映ゆ  
同

斎藤 貞子

裏道を通る荷馬車のきしる音我が病室の窓にひびき来  
年代不明

雨蛙鳴く病室の空遠く夕焼雲は南に移らう  
同

退院の友に贈らん写真帖感慨こめて我が名を記す

同

ピンダ平野を見さくる丘に友と来て遅れ咲きなるりんどうを  
摘む

同

人の世の幸を友等はあげつらうかたえに我は靴下を編む

同

夫の墓に我が植えて来しすみれ草今は降る雨に根づきてあら  
ん

同

プラタナスの木蔭に吾子とバスを待つ若葉が吾子の顔を染め  
つつ

同

夕暮れをかつぎて帰る賤女の薪に一本の蘭はゆれつつ

同

霧こもる山裾道をめぐり来る駄馬の鈴の音近くなりたり

同

編み終えし吾子のチョッキを枕辺に置いて今夜は眠らんとす  
る

同

離れ住む吾が娘の今日は誕生日野菊を活けてひそかに祝う

同

朝靄の中を漁より帰り来るカノアに銀色の鰯が光る

同

斎藤 裕之

友情は人種を超えて伯人の君との交りも十年ちかし

一九五九年

踏切りにこの国人と交りたち日本製列車をほこらかに見ぬ

一九六〇年

斎藤 信也

山峡の深き谷間を縫う如くクワレズマの花咲くパラナ路をゆく

一九七七年

枯草を浸して流るる小川あり羊齒を集めて登る山路に

同

没つ陽に遠く映えいる西空を巨象の如き雲流れゆく

一九七八年

澄み徹る空あり蒼き海見ゆるイタバリカの街並をゆく

一九七八年

海沿いの白壁の家並み暮れそめて岬の果てに灯台点る

同

水蒼く波静かなるイタバリカのホテルに響くサンバの曲は

年代不明

斎藤 武雄

金鉦の華やかなりし遺物にて奴隷をつなぎし高き石垣

一九六五年

移民去り珈琲枯れて石山に野性大根の花は小さし

一九六六年

さまざまな移民の運命を運びたる薪焚く汽車が残骸を曝す

一九六六年

牛糞をくすべて土民等憩い居り古びしギター今宵も弾きつつ

同

路端の古き十字架に巢をかけしジョン デ バーロの澄みし

鳴声

同

餅ちぎる如くに牛を去勢する牧夫の顔は無表情なり

同

鞍上で縄煙草（フーモ）を刻みつつ街道にミナスの牧夫は牛を商う

同

ガリンポの掟の厳しさ語り合う「バンデイランテは今も残れる

一九六八年

蹴球のルールに疎くも時にふれ「ペレー」を語るも商わんため

同

丘一つなく広ごれる大豆畑雨後の夕陽をうけて青濃し

一九七五年

呪うごと不況を語り離農する友は五十年農に生き来し

同

レジストロの地名の起源を語る人三世にして日語のみなり

同

久々に乾きし野道を列なしてサントレースの合唱団がゆく

同

伯人もK A K Iと言うなり濁りなき空に映えつつ秋を深く  
す

一九七六年

サマンバイアの珍種探して谿を行く昔はダイヤを堀りし地と  
言う

一九七七年

斎藤 広志

ブラジルはやさしき国よパラナ路の溪谷のおどろにたんぽぽ  
の咲く

一九五〇年

坂 寿一

降りつづく雨に小川の水ふえて今宵流れの音の聞こゆる

一九五四年

霧深き朝の谷間にバナナ切る人等呼びあう声のきこゆる

同

バナナ積みしトラック左右に揺れながら雨降る中を駅に出で  
ゆく

同

前山の谷間の空に一筋のバナナを運ぶケーブル線見ゆ

一九五五年

霜枯れのバナナ畑に夕べ吹く風にふれ合う葉の音さびし

同

嫁ぎ行く日の近づける妹がムラサキ マモンの種を蒔きおり

一九五六年

遠吠えに似てカボクロの唄の声山にこだまし日曜暮れる

一九五七年

坂 光 男

バナナ積む貨車を待ちいる夜の駅に冴えざえと鳴る電信器の  
音

一九五〇年

工事場の鉄骨の上八日月に高炉の煙が時折りからむ

一九七六年

地の果てにある寂寞を埋めくるるまでには遠し麦の青さも

一九七七年

煙るがに低地の靄の凝りいつつ模糊として白き牛ら立ち居り

一九七八年

生きるための抵抗示さぬ母が眉わずかにひそむ注射するとき

同

秋の陽の輝けるもと楮土にペカンはまろき影をおとせり

一九七七年



遠く去るわびごと言に出さずしてきびすを返す吾子の墓処に

同

うろくずら流るる方に頭向け泳げり遠く発ちゆく朝も

同

逃げ水の移りはげしき道をゆく息保ちいむ母念いつつ

一九七八年

脆く逝きし君と思えり燈台の遠火はゆるき旋回をなす

同

晴天に一塊の煙はじけつつ広場にコミッショの声はずみ来ぬ

一九七九年

## 酒 井 繁 一

井戸端に血を吹きし手を洗うなり移民の悲しさ言うこともな  
く

一九五一年迄

足元にとぐろを巻ける毒蛇をも殺して今日も原始林を伐る

同

時々の父が帰心は我が家を旋風（つむじ）のごとくゆすぶり  
てすぐ

同

我も生くるこの国なれば一人の言うべきことは胸底にもつ

同

一代かけて我が幸福は妻運のよかりしことに止どめておかむ

同

あげ潮に乗りいし如き日本の移民を拒む厳しき日は来つ

一九五三〜一九五六年

椰子の葉を編みて囲える小屋に住み夜は銃器を身に寄せて寝る  
同

生きて来し命ながくして漸くに妻を心の底に敬う

同

遺言を読みゆく時に「外人を嫁にするな」という箇条あり

同

過労死をいましめ合いて生きたれば宝のごとき日のめぐり来ぬ  
同

沼べりに隣家もあらず住む土人鰐を魚族の如く恐れず

同

庭に立つ椰子の樹下に張り広げ宴に屠りし牛皮を乾せり

同

空港に降り立ちしとき地底より日本の温もり伝わりて来ぬ

一九五七年

天皇を罵る声もあらわにて帰り来て見る日本の肌

同

熱き血にほてれる頬を手もて拭き生れ故郷に我が帰るなり

同

島に寝せ育てあげたる子なりしがこの国の政治も知りてたくまし  
一九五八年

教会にちぎる二人よ父母の生まれし国に連想もなく

同

喘息に苦しむ妻よ足病みてわれの動けぬ時に死ぬるな

一九七九年

石のごとく冷たき部屋に坐りいて妻亡き吾は生きて居るなり

一九七九年

吾になお芽吹かんとするものありて朝の雨の中に勢う

同

酒 井 祥 造

手をあげて叫ぶ子等あり野中なる道べに立てる草ぶきの家

一九五八年

夕あかねそむる広野に幾すじか黒煙立ち野火もゆる見ゆ

一九六五年

風呂に入りてしみじみ聞ける雨の音取入れ終えしやすけさに  
居て

一九七八年

酒 井 風 生

山並はりベイラ河に迫り来てつづら折りの道バス喘ぎゆく

一九七八年

何時頃の崖崩れならむか肌寒く谷深くしてカベルナへの途

一九七九年

切り石の崖迫り来る峠道リベイラ河を西に望みて

同

酒井 雪江

日暮るれば夫と吾子とが鯉池に一日使いし鍬洗うなり

一九四九年

炊事する手をおし拭い古里の兄の便りは走り読みたり

一九五五年

塵芥車に聖樹も積まれて捨てらるるナタールの後の一日は寂し

一九五五年

霞草にバラをあしらい活けたるを厨の窓に置きて炊事す

同

日本着は縫うことあらじと思ひしが今日金襴の振袖を縫う

一九六二年

磨（と）がむとて計り入れたる米の中貝のボタンが一つまじれる

同

街路樹の保護柵の中に一本のトマト実をなすまでに伸びおり

一九七五年

「母の日」に帰らざりし子が二日後に生蟹を土産に海より帰る

同

坂下 嵐山

三人の子を寝せつけて毛糸編む燈下の妻はうす化粧せる

一九五三年

移り来て過ぎし来たりし二十年をうたかたの如く思うことあり

一九五四年

坂本 清人

卓上にこぼれし水に指つけて無心に書けり大正五年

一九六一年

順応の性もつものの倅せか飼われて籠の中に鳴く鳥

同

しとしとと降る雨音になごみ来て語らうことのなべてやさしき

同

木の椅子に言葉尠なく待ち居れば閉ざして長き手術室の扉

一九六一年

高原の冬陽に麦の畑青むわが血族も健やかに住む

同

負わされしものに気弱くこの朝をわが一張羅の服まとい居り

一九六二年

病む親を見舞えぬわれの貧故に幾日妻を不機嫌にせし

同

ふところを見せ合いながら酌み交わしたくまれてゆく話題明  
るし

同

この土地を購わむ心に岩間よりか細く湧ける水も飲みみき

一九六三年

掘り上げしトツコの上にうちまたぎわれ勝利者の如き一時

同

見境いもなく吠え出す犬の如き群衆の中にわれもいたりき

一九六四年

坂 本 雅 子

相次ぎて去りゆく人の多き日よ霜枯れの牧に風吹きやまず

一九六六年

突風に高き樹枝にまつわれる素枯れのへチマ打合いて鳴る

同

炎天の帰路歩みきて草の実の弾ける音のしげきを聞きおり

一九六七年

地割れせる棉畑に佇ちて雨雲の北に流るるを術なく見ていぬ

一九六八年

ゴヤーバの熟実が落ちて匂い来る雨雲低き風なき庭に

一九六八年

最下段の死亡告知の年齢に先ず目がゆきぬ病みて三年

一九七二年

生きる術あらば生きたし病める目にあかあかとして火炎樹は  
燃ゆ

同

坂 本 美代子

屋根よりも高く電柱に競いたつ椰子我が庭に位置ゆるぎなし

一九六八年

昨日発ちて明日は日本へ着く人よにび色の陽が丘に傾く

同

肥沃なる土地にめぐまれ一族が一村なせるアチバイアの里

一九七三年

癒ゆる日を露疑わず訪日のプランなど練りしこともはかなし

同

坂 梨 文子

薄紙に押しし花びら色あせて悲しき離別をまた思わする

一九七四年

桜 井 健 三

木ごもりにサビア鳴くなる畠中に一本抽き出しひまわりの花

一九七三年

尿して吾は眺めきクルージアの鳴く樹に低きオリオン星座

同

畑つ物とり入れ終えし一ところカルル伸び立ちはびこりにけり

一九七三年

ビンテビーの明るき声を聞き居たり黙して枇杷の袋かけつつ

同

雨期に入る兆の雨にラランジアの花白々と散りてたまれる

同

二世等と働く日毎新しくポ語の単語をいくつか覚ゆ

同

フォルミシーダ購いしことに関りて吾は裁判所より呼び出しを受く

同

渡伯して転々とする若者が時代のちがい簡単に告ぐ

同

通り行くガルボン ブエノの朝たけて犬をつれたる女に出会う

同

捨てられしシュシュたくましくつる伸ばしゴヤバの枝に青実をたらす

同

桜井 静江

枝々に艶あせてゆくコーヒーの実は黒ずみて雨降りつづく

一九六五年



早咲きのマンガの花にさす光り吾が足もとにこぼれて温し

一九六六年

豌豆を摘む少年の口笛にこたうるごとくサビア鳴きおり

一九七一年

耕やせし赤土に並ぶ新植のコーヒーは根づきぬ雨しぶく中

一九七五年

青空につづく広野の収穫機見る見る消えゆく大豆畑に

一九七六年

## 桜井 よし子

読むこともかなわぬポ語の子の手紙移民に老いし身を思いおり

一九七〇年

自負一つ一途に支えて菜園に夕陽を浴びてチサの種子まく

一九七三年

暗きより今朝売る野菜束ねおり凍えし指に力はいらず

一九七四年

モンジローの咲きいる道をほがらかに幼き子らが呼び交しく

一九七五年

茜雲浮かぶ夕暮れ祈るがに鳴く蛸をききいてかなし

一九七六年

なが雨もいつしか晴れて裏畑のたわわになりし蜜柑色づく

同

何事もなき日続きて物置を心ゆくまで掃除をしたり

同

故郷の駅に降り立ち照る月を眺めて一つ深き呼吸す

同

樟脳のしみたる古着身にまとい俄に寒き朝を商う

一九七七年

うるおいのなき吾が庭に風立ちて落葉の上に又落葉する

一九七八年

あいまいな<sup>ろ</sup>語にて云えば若き医者吾が顔のみを見つめていたり

同

## 笹岡 愛海

仕事了え夕べ水汲む井戸端に菊の初花咲きて匂える

一九五一年

夕餉終え夜につどえる子供らと船形雲をしばし見ている

一九五二年

布団綿少し足らねばいそいそと買いに出て行く朝のバスにて

同

たまたまに訪い来し僧がケルメツセに要る家畜をくれと言いたり

同

笹岡 敏恵

この日頃色づき初めし葡萄の房夕べは白く目立ちて見ゆる

一九五三年

さらさらと葉ずれ涼しきユーカリにチコチコのいて鳴く山の  
昼 同

佐々木 めみ

トマト畑の支柱の立ちし一割が雨晴れし今朝はきわだちてみ  
ゆ 一九四九年

佐々木 古雪

初成りのコーヒー畑の山立てて一粒の実も捨てまじと思う  
一九六一年

佐々木 繁治

遙か彼方にポエイラあげるボヤデイロ角笛の音徐々に近づく

一九七二年

何処まで伸びてゆくのかカツペーラの十字架に糸瓜は花咲か  
せつつ 一九七九年

牛群は草喰みいたり夏の陽はひた照りいたり雲流れつつ

同

笹波 北陽

光澄みし朝の若葉のさやけさに木葡萄の苗ためらわず買う

年代不明

頻繁に棉荷の車往き交いてせまきアサイの町を賑わす

同

逆光の人影誰か手をあげて過ぎたり高き棉の荷の上

同

朝光をさやかな黄に捉えつつバナナが露台に並べられゆく

同

冬庭に衰え見せず君がくれしピタンガの苗すがしく青し

同

笹野 瑞枝

幾年の労苦の実りカフェーの色付き初めしを夫とてゆく

一九七二年

妻もなく子もなき運命を自らにえらびて神父と吾子はなりたり

一九七四年

家族連れ恋人連れにて集う子等神父となりしは一人帰らず

一九七八年

佐竹 ちえ

後慕う吾子に土産を約しつつ今朝も勤めの靴をはきおり

一九五三年

貞野 雅子

原爆の被害を受けし広島は我が生い立ちし故郷なりき

一九五六年

波止場にて添う影もなく独りなり今出帆の船を見送る

一九五七年

佐藤 いち

皇子来ませる感激も裡に沈めつつ厨にひそと芋の皮むく

一九六七年

鳳仙花のしおれ実はじかぬままにして長きセツカの風吹きつ  
ける

一九六九年

諭すには半可な吾のポ語なれど娘の眼は真撃にうべないて居  
ぬ

一九七一年

僥倖など在于る筈もなく瘠土地の黍は小さく実を結びたり

一九七二年

細り居てなお冴えわたる月の下油気のなき髪に掌をやる

一九七三年

かつて実をもたぬマンガの樹も古りてそここ朽ちしが目立  
つ吾が家

同

珈琲のはだか樹鳴らし霜跡のかわける落葉片寄せる風

一九七五年

実はすでに取りつくされしゴヤバ樹のかたき葉に射す薄き夕  
つ陽

一九七六年

異質とはすでに思わぬマモンの樹見つ着るなき日本着を干  
す

一九七七年

佐藤 卯文

反芻の牛の背に乗る黒きアヌー声なく翔ちて暮るる牧場は

一九七一年

佐藤 花情

見はるかす青一色のバナナ園のつきし処に山そびえおり

一九四八年

佐藤 一英

風邪の子に添い寝をすれば与えたるペニシリンがかすかに匂う

一九六三年

苦しまず逝きたる事を救いとし貧しき中に母を葬る

一九六八年

馴れぬ旅に疲れ帰らむ妻と子に早々に風呂を沸かし待ち居り

一九七四年

幾つかの漢字も混え新婚の様をこまごまと娘は告げて来ぬ

一九七六年

ブラジルに帰化して初の投票日国旗の前に胸迫るなり

一九七九年

佐藤 閑人

白壁に夕陽の影のたゆたいて遊びつかれし子等の寄りそう

一九六七年

移り来て三十七年ブラジルに骨埋むるに悔ひとつなし

同

故里は遠くなりたりブラジルに子等を育てて今日安らげば

同

証書手にほほえみて立つ吾娘の顔夢かとまがう亡妻の面影

一九六八年

パラナ川濁れる水は満々と動くともなく白く光れり

同

一本の直線を引けるさまに似て長橋は真直ぐに麻州に入る

同

逝きし子の年令を数える愚かさを知りつつ数え数え経にきし

同

野の道をゆけばすすき穂頬にふれ君のかなしき歌を思いぬ

同

貧しくて何もなくなるとも生きている空の青さが目にしみる日よ

一九六九年

能のなき己れと知れば今更に夢もなきまま平凡に生く

一九六七年

佐藤 静枝

帰国する知人送りぬいつの日か吾も此所より発ちゆく思う

一九七三年

佐藤 貞一

此の原始林（やま）の奥にも人が住むと云うひそけき朝は鶏  
の声聞こゆ

一九四七年



牧場の除草する朝時雨きて電柱のうなり寒々と聞く

一九四八年

豚の腸洗う小川に春たけてうらら陽の照りて水温みたる

同

原始林を流るる小川に水禽の餌漁りいる眞昼ひそけく

一九六四年

佐藤 節子

雨風も遠くに去りて陽の光さしくる今日ぞ移民五十年祭

一九五〇年

木の間もる夕日をうけて白かべのうらの井戸端今あたたかし

一九五九年

荒れし手に老いを見つめつつ嫁ぐ日もせまれる吾娘と今宵語らう

一九七九年

ミサのかね聞こえてきたり朝もやに包まれし街を通り過ぐ時

年代不明

香ぐわしき桃の節句に生れたる孫に名付けしタチアナ マリア

同

佐藤 天涯

高樓のむらがりたてる峡街をおのぼり我の唾々然と行く

一九五四年

佐藤 博 三

地平より風媒花はやき風にのり森こえて白く西にひろがる

年代不明

白き穀さらして売らるる炎天の牡蛎のむき身に海がおえる

同

黒鶏の生血灼かるる紅き火にゆらめきて暗呪かないゆく夜

同

ひろき野に焼けのこる巨木いつまでも獣温のごときかなしみ  
消えず

同

胎乾して赤とうがらし魂の髓まで灼かるる日をひたに恋う

同

こんもりと湿った森の空間にほの白い蝶がいちめんに翔ぶ

同

魂は陽炎となりて駈けめぐる逃れようなき砂漠のひろさ

同

蒲公英（たんぽぽ）のあおき茎にがく噛みすてて悔恨は饅え  
てながき畝道

同

項上の枯草原よりひびき来てユーカリの葉に白く輝る風

同

陽のささぬ内側くらく風吹けば落葉を縫いて冠毛のとぶ

同

沈黙の黒き岩床に花ひとつ鋼のごとく匂いたつなり

同

創ふかき心のひだをえぐりくる濁水のなかの白ききらめき

同

魂焦げる匂いはげしき岩のうえ追いつめられし絶叫をきく

同

断絶のことば噛みいる真はだかの岩床に白き花ひらくべし

同

灼けている黒き河床のわがうしろ血まみれの女の立つ気配する

同

交霊の肉のきずなを絶ちたればさわやかにくる死後の夜明けは

同

佐藤 みつ子

病める身を気遣われつつ初めての歌会の席に吾も連なる

一九六三年

嬉しさが言葉とならず口ごもる吾が娘の声が受話器に聞こゆ

同

麻醉にて無痛となりし肋間にメスの入りゆく感触伝う

同

外出の許可得し一日帰り来て子の好物のすし作り居り

一九六四年

面会の子等と療舎に夕餉摂る吾が漬けおきしきゅうりを添えて  
同

手術して薄くなりたる吾が胸よせめて優しき妻になりたし  
同

空箱に小物詰め了え漸くに吾が退院の実感となる

同

朝の厨整え乍ら移る陽を追いては移す子の乳母車  
日本は吾には遠し癌を病む老いたる母に一目逢いたし

一九六八年

小遣いを出し合い子等が買いくれしナイロンブラウス清々と  
着る  
同

陽にきらうサボンの泡をすくいつつ執拗に吾子の質問続く  
一九六九年

ビニールを透して射せる陽に映えて植え了りたる松苗匂う  
一九七〇年

佐藤 三つ農

残暑なおきびしき朝を柿並べ唐黍並べる露店市場に

一九七七年

露店市の人等の頭上をたおたおと花に寄りゆく白蝶一つ  
同

静もれる住宅街に捨てられしハイビスカスの赤き一輪

一九七八年

草原に腰を下して取り立ての柿を喰み居り手を汚しつつ

同

緑なす木々切り拓かれて分譲のプラカード立つ墓地の周辺

一九七九年

チエテ河にて漁なして生活する人等の小屋が点々と建つ

同

佐藤 迷夢

底抜けに明るき夏の野の道をピオンが一人影おとし行く

一九六七年

雨煙るユーカリ林そぼろ立ち傘かたむけて人通りゆく

一九六七年

佐藤 義男

七夕の飾りを映す灯を見つつ芭蕉の辻の黄昏に佇つ

年代不明

蛇行して辿りつきたる高原の道べの若木に咲ける桜は

同

未知の町一人旅来し佗しきも「桜園」なる邦字に安らぐ

同

池の面に花影映す「揚貴妃」のほとりに佇む人静かなり

同

あでやかに揚貴妃桜咲き競う療院の庭人影もなし

同

池の端にひそかに咲ける小桜の細き幹より黄昏は這う

同

山なみは雲に薄れて肌寒く木の幹ぬらし夕霧流る

同

山峡の夕霧にぬれ別れむと握る歌友の掌はほの温し

同

佐藤 緑 苔

三十年苦斗の果ての報いかや碧眼の孫膝にだきしめ

一九六六年

吾はひとり黙して歌を作りおり妻は踊りの稽古にはげむ

一九六八年

アラマンダ咲き盛る庭に蜂雀きたりてしばし羽休めおり

一九七四年

伯人の嫁にてあれど温かく吾の病いを看取りてくるる

同

フランボヤン咲くを待ちわび一人行く水銀燈ともる靄のなか  
同

落花せしフランボヤンを踏み行けば朝霧の中ビンチビー鳴く  
一九七六年

真 田 喜之作

独活膾賞でつつ食せる老父は故郷の香りがするというなり

一九五三年

透かし見る川面は暗く友の打つ網音思わぬ方よりきこゆ

同

佐 野 拓 治

畜産の町に移りて幾年か話題おのずと牛にふれゆく

一九六五年

荒らくれし牧夫等拍車を鳴らしゆく畜産展は彼等の日なり

同

転耕のトランクさげし日傭いの片手にギターを大切に抱く

同

日帰りの用終えくつろぐ飯店の卓上のクラブは淡き香に立つ

同

佐原 信男

死ぬまでは働くだアやれと畑に行きし母思いつつ独り病み臥す

一九四九年

月の夜に菜洗いおれば棺のふたに釘うつひびき遠くきこえく

同

家族みなマラリヤ病にて死にしよう同航者に会いぬ眩野の街に

同

高原のまばら林に路終えてそこよりつづく此処の墓原

同

佐伯 さと子

五年たてば帰国するよと別れしに再会ならず母逝きましぬ

年代不明

火をつけし古着の煙り庭にみち二十五年の移民の匂いす

同

整理する古着の中の仕事衣は別れし夫の匂いを残す

同

アマゾンのリングと云われしジャボの花ぼたん色して今咲き盛る

同

佐伯 シズエ

小夜更けて出荷の胡瓜並べおり和む思いに虫鳴く聴きて

一九七二年

目ざむれば母の寝間より細々と念仏唱える声洩れ聞こゆ

同

寒川 生男

七十才を越えたる伯父の待つ日本何時の日母を帰し得べしや

一九五六年

日本より今し着きたる移民達それぞれ高価なる写真機をさげ



て  
ピキニツキに来る如き表情の移民達苦しむならん 五年ぐら  
いは 同

堆肥をかつぎて立ちし吾が影のふらふらとして成功しそうに  
もなし 同

日本人の穫り荒らしたる土地を牧場となして樂々財をなすイ  
タリヤ移民 同

原水爆に亡びる世とは思えざり子のために購う原始林七十五  
町歩 同

### 猿 島 要 三

ブラジルの所詮は土となる運命例えば吾が師菊治の如く  
一九六一年

### 沢 万須子

不平なく日毎働く子等のため予算にもなき本を買いたり  
一九五二年

遠くより合図のベルを鳴らしつつ自転車ふみて吾子は帰り来  
同

旅に出でし夫を案じて編みつづく毛糸の玉のほのかなぬくみ  
一九五二年

帰省せし子等のはずめる声ひびき胸あたたまる今日は母の日  
一九六一年

山藤 伝

おちこちの路辺に薪を積める見ゆサンジョン祭は近づきにつ  
つ  
一九七二年

椎 名 千代子

街の路イツペー暖かく散りおりて春の日和はつづきゆくらし  
一九六一年

パイネーラ再び咲きぬ住みつきて塵埃の都はや苦にならず

同

独り居の明け暮れつづけば時折りの夫の居る日をわが落ちつ  
かず

同

因習に満てると聞きしこの街にスカート短かく行くよ女等

同

養国に描く子孫の未来図よ日本語解さぬ孫育ち居て

一九七〇～七五年

家一軒建てしのみなる一生かと夫の眩き黙して聴けり

同

アンデスの山越えし日の去来せむ病み臥す父の辿る夢路に

同

永住の心決めいし亡父なりしが望郷の想い秘めいしならむ

一九七六～七七年

椎 野 トノエ

このたつき支えむ支柱立て急ぐなだりの畑夕かたまけて

一九七六年

クワレズマ咲き後れたる山蔭の道を辿りぬ一人楽しく

同

夕暮るるなわての径の水明り一列に帰る素足白かり

同

事故死せる訃報に傷む心もて無数に垂るる豌豆を摘む

同

歩み寄ることもなくして終らむか淡々と夕餉の箸運びつつ

一九七七年

夕焼けの名残りの丘に風絶えて椰子の数本黒く立ちたる

一九七八年

離れ行く蒲の穂綿に茜映え我が帰り行く道をよぎりぬ

同

種落ちし穂草寄り合い伏し合うを慈しむ如入陽が包む

一九七九年

## 志伊良 二世

小さな土地いじりつつ胸底にフアゼンデイロの夢をたやさず

一九六六年

豆売りしわずかな紙幣手にしつつ黒人夫婦はジャバーの値問う

一九六七年

此の国に生まれ育ちてジャボネースと呼ばれる事も憎く思わ

同

こわれたるグラフオンまぶしく光りいて畑に十時を知らず汽笛鳴る

一九六七年

四五日も帰らぬ牛を諦めてはるかに群るるウルブーを見る

同

落花生再び作る意志なきや畑のマルゴーズ風になびけり

同

いくらかの利益あらんと思いつくぼ地を打ちてアーリオ蒔きおく

一九六八年

昨夜見し夢を頼りにロテリアを買い来ておけり誰にも言わず

同

アメンドイン引き終え帰る人らあり腰の痛みを撫でさすりつつ

一九六九年

ここに生れここに終ると思うゆえ流失の表土痛く目にしむ

同

八十年来のセツカと聞きつつ夕暮れを珈琲の苗床に水深くやる

一九七〇年

雨の後ジョン デ バーロが巢を作るアバカテの木の青葉の中に 同

日本人の無きサンタリータの山奥にて義弟は伯人の妻をめとれり 同

十文字 明

とどろきてかかれる滝の上はるか炭やく煙は雲につらなる  
一九五〇年

十文字 大風

耕せるモンペ姿の新移民みな口ひきしめ鋤をひきおり  
一九六三年

塩 崎 しょうじ

草は伸び搾乳量は増したれど水より安しと言いつつ出荷す  
一九七六年

塩 沢 春代

汝とただ歩くのみにて心足る園のユーカリに鳴る風の音  
一九七九年

ゴムの木の深き茂りの並木道落葉はあらき音に吹かるる 同

今日は父の三十三年の命日と息子に言いてわれは五目寿し作る 同

東京もサンパウロもわれに変わるなし老いては子等に養われつつ 同

赤飯の一粒を口に入れてやる食い初めのアンよ幸く育てよ 同

小冊子わずかを地べたに並べ売るありバンディラの雑沓に一日坐りて 同

重川 晶

母よりのモンペ着きたりうきうきと久々にはき偲ぶ故里

一九七三年

荒れ果てし掠奪農のその跡に山小屋の如き蟻塚の見ゆ

一九七四年

重川 房子

黄緑旗たかくかかげて日系児独立祭の先頭をゆく

一九七五年

重松 恵美子

バラ色にあしたは焼けて山脈を越えてつめたき風は吹きくる

一九五五年

黒人の老婆まずしく働けり歌える声もつぶやくごとく

同

重松 純造

ほろほろと枯葉落として巻き風の行方に遠く穂草原見ゆ

一九四九年

霜枯れの後いちじるし棉の葉のさび色淡く夕日落ち行く

同

重松 千代子

眼帯を取るという子をなだめつつ久々に抱けば我が手に重し

一九五五年

花つけずなりて久しき紫陽花の新芽萌えそむ我が庭隅に

同

コーヒー樹の緑をくぎり穂に立ちし玉蜀黍は片なびきおり

一九五六年

心して我が掘りゆくに百合の根が意外に深く子を附けている  
一九五七年  
夏雲のひろぐる牧に少年は馬駆りゆけり鞭を上げつつ

同  
山の上の聖像に手ふれぬ遠く来しこの現実をたしかむること  
同

茂村 よしの

農業の経験もなく需め置きし原始林をさして渡航せし我等  
一九五〇年

やや癒えし夫に幼等托しつつ女吾ひそかにマッシャード揮う  
同

聖市に来て味噌まで造らんでもよきものにとうから声揃えし  
きりに止むる  
同

降りて来し雨にぬれつつはせ来れば遙か彼方ゆボンデ来る見  
ゆ  
一九五五年

滴草 ひろし

珈琲樹枝もたわわに色づきて静かに秋は深み行くなり  
一九七二年

姦しくよしきりないて故里の休耕田にあしは茂れり  
一九七三年

日本の技術を見せてがっしりと広場に懸かる鉄の陸橋  
一九七五年

うねる如ゴヤスの丘陵は果てもなく地平遙かに首都は霞めり  
一九七七年

かつて吾住み居しあたり牧となりいま幾本か椰子は残れり  
一九七九年

信 太 千恵子

報わること無くして老いし母細りし指の爪切りてやる

一九六一年

野火の音ま近に迫り牧のなか声をからして吾が馬を呼ぶ

一九六六年

幾千の雛のいのちにつなされる温源の灯の点滅やさし

一九六八年

鶏の水流るところ帯状に小草しげりて冬あたたかし

同

たゆたいて移動つづくる蝶の群わが佇つ視野の陽射し華やぐ

同

三州につながる湊布ふたびを来て感動の想い鮮らし

一九七七年

一日の蒸発の量も説かれゆくビンニヨ工場が誇れる蔵に

同

井戸用のボンバ修理に下りし子を覗けば暗く汗の匂いす

同

選挙権持たず過ごしている日々に一票の価値つよく言わるる

同

歳月を共に重ねし蜜柑樹を伐りて陽の射す広場さびしむ

同

五十年思い出の碑の文字太し根強く生きし姿顕たしむ

一九七八年

南部忠平氏を迎えし記念写真にて逝きにし父も若く居ませる

一九七九年

志津野 華 絵

昨日の疲れいまだ残れり朝ぎめの床にいて聞くベネジツトの  
声

一九五〇年

州道の木棉並木が明るみて風なき日にも落葉しつづく

一九五一年

家内に飼われて慣るるマリタカにこのごろ教えぬ遠き子の名  
を

一九五四年

篠 沢 遊花泉

星月夜漏れる仮屋に莫蔭敷きて眠る川の字新移民われ  
一九六一年

篠 田 真佐子

後継者定まらぬまま老いぬれど夫は新墾にかけて生きゆく  
一九七六年

抗いて出でて行きたる子の部屋に激しくゆれいる首振り人形  
同

移住して農一筋にかけている友の短歌は魂を打つ  
一九七七年

故郷に寄する想いもうすれつつこのごろいくらか身の肥りた  
同

養鶏に一生をかけて居る夫に只おろおろと吾は従きゆく  
一九七七年

夜の更けを夫待ち居れば寄りて来る犬の眼は青く光りて  
同

ブラジルには住めぬと愚痴て居し友が帰日迫れば涙を流す  
同

突きつめて思うが程のこともし飯ふつくらと炊きあがりた  
同

通夜より帰り来たりて熱き湯に生きねばならぬ体を洗う  
同

労りの言葉やさしき子と並び若草萌ゆる野の道をゆく  
同

死にしを聞き生れしを聞きし夕べにて金木犀は香を放ちおり  
同

篠 原 岳 川

たそがれの新はり近き田舎道塩魚やく臭い漂う（ママ）



一九四八年

音もなく太古の樹海暮るる時野鳥の鋭声森にこだます

一九七一年

オンサ鳴く樹海の中の一家に住むとは告げず父母に便りす

一九七七年

音もなく樹海に夕日沈む時鳴くあの鳥が今日も又鳴く

同

## 柴 倉 知 余

いくつかのテストを終えし末の子の部屋より今朝はサンバ流  
れく  
一九七五年

欲りて来しわらびは見えねど見渡せる山はマナカの真盛りに  
して  
一九七七年

いつしかにフットボールのフアンとなり夫子と共に声上げて  
見る  
一九七八年

きらめける川面をゆする朝風に釣人舟のいかり下さず  
同

冬の陽を浴びて動かぬ老姑に守宮は近ぢか寄りて首上ぐ  
同  
ユーカーの秀に止りしベンテビーの一声吾の心にしみる

針先に夢頭たせつつ人形の服ぬいおれば心くつろぐ  
同

ようやくに根づきしらしも露苗の親葉の先は土をはなれぬ  
一九七九年

## 柴 田 和 彦

いつしかに秋深まりて高原の空気は沁みる我が痛む胸に  
一九五五年

柴田 道子

胎動のはげしさに家事の手を休め母となる身をしみみ思う

一九四九年

棉つみがすまば来なんと云いし友来ぬは棉の値さがりし故か

一九五二年

わが庭の洗濯物のま白きを人ほめて行く垣越しに見て

一九五二年

わが顔の一番みにくき角度より撮らるるを意識して向きをか  
えたり

一九五三年

言いにくき事は互いに葡語で云う二世なる我と準二世の君

同

忙しき日々に教うる日本語を子等はいくらかおぼえ行かんか

同

仕事場に夫をたずねて見出せり未だ知らざりし夫の一面

一九五四年

ようやくに寡婦の文字にもこだわらず記入し終りぬ納税申告  
書

一九七三年

嬉しきのみと言うには遠し金色の産毛光れる孫を抱きて

同

こだわりもうすらぎにけり混血の孫等と祝う移民七十年

一九七八年

伯人の親類も出来ほほよせてあいさつするもなれしこの頃

同

島田 きくえ

かたわらに生後九カ月の子を寝せて妊娠徴候の身を嘆きおり

一九五三年

出産もあと四五日と思いつつ今宵しみじみ糸編みおり

一九五五年

二本目の煙草くゆらし歌を書く夫のかたえに産着縫いつぐ

同

嫁ぎきし日に持ちて来し服ほどき生れ来る子の産着を縫うも

同

島 田 普

遠近にプラント機の音聞こゆるに心忙しく吾は馬耕す

一九四九年

久々に裸足となりて珈琲摘む足裏に親し冬の朝の土

同

向こう丘の牧場の草の一際に色立ちて見ゆるはカツビン  
ゴルズーラ

同

終日を野良に働く吾等にはサン マータイムのかかわりもなし

一九五〇年

準二世の圈内に居て此の国の言葉解さぬは怠惰と言うか

同

フエイジョンの花実とならでしばみゆくひと月降らぬ畑を見  
廻る

一九五四年

早にて米穫れざりし此の年はそのわら敷きてアーリオを植え  
ぬ

同

生計の支えとなして飼う豚が健やかにしてミーリオを食えり

一九五五年

天理教ブラジル支部長と言う人の酒に酔いたる醜態も見き

同

羨むには遠き気持ちに見送りぬ借金をして訪日する天理教徒を

一九五六年

霜に逢い又葛に遇い六年目今年ようやく珈琲実りぬ

一九五八年

受話器とれば常に変らぬ長男の明るき声がリオより聞こゆ

一九七九年

末の子が学べるモジのたたずまい妻に語りつつ夕飯をとる

一九七九年

島 田 広

西降りの森の樹々みな傾きて日ぐせの雨がまた降り来たる

一九五〇年

自信なき我が葡語故に伯人との交際は自然と消極となる

一九五一年

コロツテの口にまつわり飛ぶ蜂がとき折り笛の如き音たつ

同

得意の頃飲みたる酒が原因にて不遇のさなかに父は逝きたり

同

稲はやがて穂に出づるべし濡れながら帰る野良路を吾は急が  
ず

同

産月の迫りて肩で息をする妻が編みおり小さき靴を

同

結婚に反対されし御母が妊る妻をいたわりたまう

同

## 清 水 才 光

雨合羽まといて午後を甘藍の収穫手伝う老いに日長し  
一九七六年

## 清 水 さかえ

この部屋に命死にける夫を思う再び嫁ぐと家いづる時

一九四九年

よびかけて共によるこぶ人在らぬ朝をひらきてカトレアの花

一九七六年

暖かく冬も終るかめぐり来し夫の忌日に藤の花咲く

一九七七年

高らかにサビア鳴きつつ渡るこえ高原の宿の朝の眼ざめに

同

高原の雨は寂しも鈴懸の緑に沁みて夕べしずくす

一九七八年

墓石の上にたまれる砂埃今日は来たりて吾が手にぬぐう

同

木蓮の白き蒼がふくらめば夫の忌近し木下に仰ぐ

同

綿雲は動き静かに移りゆく白き木蓮の花ひらく上岡

清水 節子

あきらめることに馴れ来て混血の孫をせおいて夕焼けに立つ

一九六九年

観音経誦しつちにぎるひとくれの土暖かし冬日しみ居て

一九七八年

埋立ての迫りし低地に咲き残るカンナは燃ゆる夕光の中

同

ユーカリの林を渡る夜の風を遠潮騒とききて目ざめぬ

一九七九年

夕べ焼きし芥のあとが黒々と冷たき朝の庭に残れり

同

仏桑花の幼木の花ゆさぶりて雨ひとしきり強まりて来る

同

エンジンのとまればバルサ打つ波のひたひたきこゆ朝の海峡

同

清水 そとえ

帰結なき思いただよう夕ぐれを椰子の葉末に風立ち騒ぐ

年代不明

踝のほてりはさめずうす紅のゴムの卷芽の尖れるに佇つ

同

菜をきざむ厨の窓辺荒れし手に結婚指輪のにぶき金色

同

川床に冬陽透りて息づきのごとひそやかに小石のゆらぎ

同

触発の懸念かすめて少年の指笛鋭く青樹を打てり

同

燃え残るこころ鎮めて謝肉祭過ぎたる午後のもの憂き斜光

同

丘の背に小さき家並みひしめきてそれぞれ甕に水満たしいむ

同

下田 稲子

幾ばくか嫉妬の声と思うとき音たてて雨は降り出でにけり  
一九五五年

下田 商葉

婚約の成りたることを告げんとて詣で来たりし亡き父の墓  
一九五三年

下田 学

夕闇に捨てし廃油の淀むなか汚染監視のランチすぎゆく  
一九七四年

下津 てる

軒下の古巢に寄りし初つばめうかがいながら羽根を伸ばせり  
一九七九年

人生の盛りの如くあでやかな黄バラ活けにき娘の誕生日

一九八〇年

子等の住む街の灯あとに帰り来る闇深まりて来たる小道を

同

故国よりみ霊招きて焚く香のさゆらぐかげに悌偲ぶ

同

霜村 寒作

鉄橋を今渡りゆく夜の汽車の火の粉は河面にまいて落ちゆく

一九五三年

早咲きの庭の白菊咲きそめて天長節の日も近づきぬ

同

白井 敬二

胎動のこの頃はげしと言う妻の腕細くして静脈目立つ

一九五二年

白石 倭文子

豊作のトマテ出荷にきおいつつ夜毎夜業にはげむ吾子らは  
年代不明

白石 俊水

薄寒く降る秋雨の公園を急ぎて過ぐる新聞売子  
一九五三年

白石 信一

雨あとの山の緑の鮮麗に点綴なしてジャクチンガ咲く  
一九七四年

白川 雨村

山のよく焼けたる朝未明よりふりつぐ雨に一日寝にけり  
一九五六年

城田 つたお

はきはきと物言う嫁よ無口なる息子とは良き合性ならん  
年代不明

打ちつづく日でりよ赤き夕空をせつなくながむ百性我は  
同

平凡なすぎ去りなるも四十年きおいはげみし事に悔いなし  
同

城取 素月

重なれる岩山の上そこにのみ陽のさす如き山のきびしさ  
一九七六年

溪谷の底に設けし四カ所の発電所大きく動きて電力をうむ

同

さまざまのうす紅に野はいぶき遠近もなし桃のさくころ

一九七八年

窓そとは夜更けて風のおさまりてほしいままなる雨の音する

同

果樹園の消毒せんと待つ日ごろ南あらしのやむひまもなし

同

年ふけて知りゆくことは皆寂し吾が拓友は大方逝きぬ

同

冬の日はまともに照れり今しわれ北亜七州を駆けめぐりつつ

一九七九年

## 新宮 晋作

久びさに子の墓訪えばジキタリスやせたるままに花をつけた  
り

一九五三年

曇り空ようやくうすれ子の墓に午後の日差しは暖く照る

同

病む孫の快癒祈りて雨の降る小川に願いの人型流す



十字架のイエスの像を枕辺に仏式の通夜いとなまれいる

同

(新宮 晋作)

斧音の高く研する山峡ゆ霧噴きあがる暁近く

一九七九年

柿の木に刻みし亡き子の幼文字今日はからずも木洩陽に見る

同

秋風に耳澄ましいん子の墓に落葉ひとひらひとひらと落つ

同

夢に來し軍装の兄は若かりき茫々四十年我は老いたり

同

陣内 しのぶ

棉の花薄暗に咲く畑の径吾が前を行く母の小さし

一九六〇年

溢るるごと不意に思いの強まりて耐え難ければ箸を置きたり

一九六一年

自虐にはすでに遠かり乾きたる想いに枯れし桜撫でいる

同

ジャカランダ何時しか小さき実をつけて自らに強いる誓約長  
し

一九六二年

夢の中の葬儀車ひとときわ光りつつわが前に来て乗らぬかと言  
う

同

形よき頭蓋のまろみ生前の激しき声はいずこより出し

亡父再葬――

一九六五年

限りある水槽の中巡りいる破戒を知らぬ魚とわれの眼

同

骨抱きて深夜の汽車に眠らねば亡霊のごと寄り来る車掌――

亡母再葬――

同

重なれる羊齒群に来て問いつむる或る一瞬の記憶喪失

一九六六年

取り除く術なき肉腫育てつつ払暁眠りの深きカジマル

一九六七年

憧憬の眼差しに来る神あるに双手をわれの開きかねいつ

同

ひとひとり失い難し喪いし月日卵形の菓子に積まれて

――復活祭――

一九七一年

打ち起こす土鮮烈に陶酔の稚きわれを問い詰めてくる

同

禁猟の森に聞きたる罅ゆえ背向け難し心盲いて

同

褪せたと云え一束の紙が持つ忽ちわれを引戻す声

一九七二年

曖昧な印画の如き故郷に伝説のごと誰彼が生く

同

一語言えば一語返りしその夏を軸とし巡る幻惑の日々

一九七四年

やりどなき疲労銜（くく）みて灯の下に終うる藁紙校正の束

一九七五年

雁渡る秋の夜空の記憶など畳みて何時か過ぎし四十年

同

想念に畳み置くべしスイナンの古木の棘の光りいたるは

一九七七年

末岡 芳三

雨期を待つ畑拓きつつベトナムの日々の爆撃が話題となりぬ

一九六五年

農夫らの目覚めぬ早朝大蟻（サウーバ）は露に重たき棉かつ  
ぎゆく

同

地図の上寒冷前線迫る朝次々群れて蟻飛びたちぬ

同

日本語の解らぬ吾が子に淋しくて愚痴るがごとく邦語を使う

同

忠魂の額縁かかる部屋隅に移民等並びて通夜を営む

同

黒き顔かたみに寄せ合いこそそと異邦人の如く迎う県知事

同

農薬の空袋ところどころに残りいて安値の棉を摘み終りたり

同

二世等に囲まるる異和感抑えつつ乾杯のビールほろにがく飲む  
同

移住者の住み絶えたる白き壁覆いしマンガ陽に染まりいる  
一九六七年

身に耐うる病い自ずと馴らされて刺草分けつつ残り棉つむ  
一九七〇年

園に立つ拓人像の担いいる彼の日の苦渋を語る水樽  
一九七五年

日本移民の去りたる跡に大根は取り残されて広々と咲く  
一九七七年

末吉 美佐子

牧場が続く林に秋陽濃くシユラスコの会の煙が青し

一九七四年

必ずしも悪からぬ予感ふくらみて来る日々なべて鰯雲濃し

一九七五年

クリスマス カード選ぶと声高な少女等細き指先撓う

同

謝肉祭も激しき夏も終りたる街を仔犬が耳垂れて歩く

同

内側より灯をともすがに取るみてイタリア葡萄熟れ極まりぬ

同

霧雨の河口の町に入りゆきて蟹売る子等の光る瞳に逢う

一九七六年

蜂の巣の銃眼も鳴りをひそめつつ白き秋の陽ばかりなる庭

同

菅井 正子

年毎に移り移りていつまでも落着く家を持たぬ哀しみ

一九五二年

写し絵のわが子の瞳今朝もまた母をあわれむ如く見るなり

一九六〇年

一と月も遅れて届く新聞をむさぼり読みき移民の子われ

一九六五年

野菜籠にないて戸毎商いし月日もありて子等は育ちぬ

一九七五年

菅原 あき ―小野 恵世―

生きることは戦いと思う若き師が汗しつつわれにポ語を教える  
一九七五年

菅原 一 貴

若き等の見学旅行と共に来しカンポスは夏の花盛りなり

一九七〇年

カルトンのケリーダ ママエの稚文字ただそれだけを母は嬉しく  
同

杉田 月 船

奴隷の血つぎたる裔ら貧民窟いでざるままに灰色の冬

一九六五年

ソルベツテ舌に溶けゆく過程よりひとりの存在影を深める

同

よりどなき怒り分けあう者もなく踏み入れば荒野の如き異人街  
一九六八年

須木田 建 郎

後頭部椅子によせつつ暮れなずむ雨の旅路の遠景を追う

一九六三年

紙凧を空にあやつる伯人の少年おりて貧しき地帯

同

海岸山脈ちかき高地に執しつつ新世帯君ら貧しく住めり

同

疲れつつ戻り来たりし食卓にピンガをあおるわが孤座の影

同

杉田　マリオ

ムダンサの自動車の跡はあざやかに雨後の道路に残りていた  
り

一九四九年

黄にぬりしモジアナの汽車その昔日本移民をあまた運びし

同

雛鳴くを彼方此方に聞くしげし田舎町なる宿の夜更けに

同

杉本　君江

悪天候気にして干瓢剥きたれど戸外は赤く夕焼けのさす

年代不明

新道を眺めてカフェを飲みおれば通る車の硝子が光る

同

日本より帰りし母と元旦をアルバム開き時を志るる

同

高々と茂る屋敷のユーカリを伐り倒しゆく鋸の音

同

杉 本 千 代

猩々花流通税に苦しみて嘆く農家に華やぎて咲く

一九七三年

眼路はるか霞む山なみその果ての聖市より帰る子を待ちており

同

薪焚きて走りいし汽車廃線となりて線路に野花咲きみつ

同

芹 十 平

文通を続けし乙女と逢い得たるこの新年のイタケーラの丘

一九六六年

旅にあれば心休まると思いつつ聖州の山河越えて来たりぬ

同

山壁の嶮しき道をいく曲りして保護領の部落の人ら

一九六七年



千田 信

洗い場の近くの枇杷の熟れそめて小鳥らはやも啄みに来る

一九六七年

ガローアの日々降りつづくタピライは農作物の病害絶えず

同

岩の間に湧く真清水をトラックより降り来し人ら口づけに飲む  
同

仙田 ます子

我が思い子のことのみに関りぬ時にうるさしと子は思うらし

一九四八年

ただならぬ世界情勢の記事読みて想うは海の彼方の祖国

一九四九年

めまぐるしくゆき交う自動車さけ居りてようやく渡りぬプラ

ツサ ジョンメンデス 一九五五年

わが遠くリオに來たりて娘ら想うキリスト像の真下に立ちて

一九五九年

朝八時バルコンに立つとりあげてよきこともなき一日なるべし  
一九六二年

仙田 美根子

私のまだ幼き頃の椰子樹誌を今宵もひとり読みふけり居り

一九五〇年

谷一つへだてて向こう山腹のラミー畑に風渡る見ゆ

同

千代 都

吾子に似るつぶらなる瞳と混血の孫の写真に夫はみいりつ

一九七六年

家鳴りしていかずちは過ぎ活花のドイツイリスはなお震えお  
り

同

まちわびし人こぬ部屋に揃えたる毛のスリッパに秋日しずめ  
り

一九七八年

ブルドーザに拓かれてなりし尾根の道生々上して夕焼けに染  
む

同

裏町の陽だまりにピポカ握りいる黒人の子の眼澄みたり

同

添田 天童

月見草咲く沢深く人住むかランプ点して入りゆくが見ゆ

一九五三年

雨もりの跡筋つける壁越しに聞こゆる父の愚痴のめめしく  
同

年々にしげくなり来る父の愚痴聞きいつ生きて不惑に近し  
同

酔い居りて歌詠む吾をけなしいる父と向かいて食卓につく  
同

忠告を突っぱねて帰る坂の上にいたくゆがみて月が懸かれる  
同

園 下 仁 久

ふつふつと嘲笑う神あり目のまえにつるみし蠅を憎みてあれ  
ば  
一九七四年

酔い酔いて飯を焦がしている友の孤独おもえり目覚めて不意  
に  
同

瑞々と白桃一顆夜の卓におかれて闇は熟れてゆくべし  
同

白桃一顆むさぼり喰みてぬばたまの闇に堕ちゆく平安のあり  
同

園田 敏子

幼き日別れし弟の肉声を長距離電話にてもどかしくきく

一九六二年

今更にひとの生活のきびしさをうべないて読む菊治歌集を

同

ルス駅まで見送りくれし老いし父階の手摺にしばし手をふる

同

弟にみちびかれイピランガ丘のぼる銅像のゆかりなどもきき

つつ

同

悪夢の如一夜の霜に枯れはてし珈琲樹海に強き陽の照る

一九六三年

呆然とわが佇つあたり霜枯れに焼けし珈琲樹の葉の匂いして

同

咲き誇る蔦サンジョンに容赦なくなめるが如くに野火の這い

行く

同

閉鎖せる病院の庭にもみじする「太陽の帽子」に冬風荒らし

一九六四年

娘に習う葡語の発音我が舌になじめず独りまたくりかえす

同

園田 弥一

蟻の如仂きつめしすぎ去りも智恵とぼしくて今に貧しく

一九六七年

移り来て疾くすぎ行きし半世紀同邦それぞれ地歩固めゆく

―移民の日―

同

知人らの祝儀の噂きくたびに吾子の齢を思いかぞえつ

同

染原 静暁

野火遠く見ゆるカンポを一すじに車は馳ける月寒き夜

一九五五年

牛を追う小道はうねり続きいて牧の野末に夕日落ちゆく

同

染原 やすよ

卓上に真白き菊の匂いいて今日母の日の灯あかし

一九五五年

大丸 吉雄

今日きけばかの幸うすきやもめ人はかなき恋に身を入るるて  
う

一九五〇年

田 植 錦 秋

農厭う子等を次々育て来てたのむものなき老をかこつも

一九七〇年

ダムとなる日も迫りきし村道に出荷の旗は今日もはためく

同

移りきて早や三代の農守りて老いづく今も畑を見廻る

同

ブラジルを源流となすラプラタは岸の巨木を倒し流るる

一九七三年

野苺に染みし手を振る山の子と声交しつつ別れ来たりぬ

一九七四年

田 丘 良 子

夫逝きて五年の月日過ぎゆきて黒衣にしみし傷跡ぬぐう

一九六三年

銃向けて去らねば撃つと迫り来し限りなき侮辱の日々なお続  
く

同

高　　ひろゆき

叢林の野に果てしなく続きゆきてフアゼンダの名残りにとどむ  
柵跡

一九六五年

街路樹もネオンもなべて濃霧の中長距離オニブス旅立ちゆけ  
る

同

インジオと名乗りて双手さしだせる忍従の過去慣れ遣（う）  
けし指

同

清掃車を三頭のロバ引きゆきて一様に首を曲げて歩めり

同

バナナ園の中進みゆくブルドーザーの其処だけ赤き地肌さら  
さる

一九六六年

ペトロブラスの送油管部落を横切りて新しき道南を示す

同

高　尾　季　巳

訪日のわれを囲める兄弟と鯉の刺身で酒を味わう

一九八〇年

高　木　　時之助

うかららは皆出でゆきて今宵ひとり柱時計の音を楽しむ

一九五二年

高 木 富 代

椰子の木の丸木小屋から裸の子ラジオかかえて得々と来る

一九七七年

皺深き八〇路の姑の化粧する優しき仕草を遠のきて見る

一九七八年

豚殺め聖夜の馳走をととのえるカボクロ小屋に煙り立ち居り

同

縫い上げし財布がわりの腹巻をしかと巻きしめ夫は旅発つ

同

つゆ深き道のほとりに今朝も来て立ち去り難くせせらぎを聞  
く

同

夕陽さす土手に火花を立て乍ら草焼く夫は汗にまみれて

同

高 木 政 明

五十年を農一筋に生き抜きて土地なきことを嘆き給わず

一九七五年

中支那の戦場かけし若き日の破れて古き写真なつかし

一九七七年

朝霧にあえぎつつ上る鉱石車の車輛かぞえて孫と佇ちおり

同



食鶏を高々積みてトラックは羽毛を散らし風まきて過ぐ

同

山合いに暮色かかれり煉瓦焼く二つの竈赫々と燃ゆ

同

収穫機に掘り起こされる種蒔がころころ転び朝陽（あさかげ）に映ゆ

同

近路も藪となりいて故郷の山は冷氣に静もりていし

同

高 木 美津子

風強き宵の雨縫い光弱く蛍が一つ草に落ちゆく

一九五三年

切れ縄を首にさげたる放れ馬萌木の下に草食みていぬ

同

あかねさす夕べの雲に真向かいて軍用機は行く黒く小さく

同

夕まけし整地の畠にくきやかにユーカリ並木の影の伸びたり

同

夏草の乱れし中に木苺の赤く熟れしが鮮やかに見ゆ

同

木棉咲く大木の下に車よせてアバカシ売りが客を呼びおり

同

紫蘇の花匂いこぼれて雨後の土を彩るうす紫に

同

子がさげしテルテル坊主は小雨ふるバラの小枝に一日ぬれおり

同

バラの葉を切りつくしたる蟻の道小事の中に我がたどりゆく

同

高 須 きみ子

どの雲が運べる雨か濃き薄き雷とどろける空見上げいつ

一九七三年

かつてわが途方にくれし地に似ると石山の椰子のそよぎに見入る

一九七三年

倒木のぬくみに寄りて久々の違いに足らいて聞く鳥の声

年代不明

唇を結びて背を向け歩む児の既に少年の反抗を見す

一九七八年

街並をのぼりつめれば広がるひと日の終りの暗きくれない

同

噴き上ぐるかたちに霧のとどまれるわが向かいゆく釣場のあたり

同

溪谷を埋めプリマベールの咲きさかるダム守る村は人影もなく

一九七九年

夕立の再度にありし僥倖と豊作を告げ満面の笑み

同

高 田 千 草

マタラゾの織物工場の煙突よりひねもす煙の昇りゆく見ゆ

一九六二年

高 田 薦五郎

試歩道を小石蹴りつつ語り行く共に二人は片肺にして

一九五八年

手術にて除りし吾が肋或る日ふと人なき時に出して見て居り

一九六二年

カラカラと吾の肋の骨四本掌の上に乾きし音す

同

妻のむく一つ一つの馬鈴薯が政治ボス等の貌に通えり

一九六四年

舗装路を改修せんと敷く砂利を踏み砕き来る軍靴の列が

同

軌みつつ戦車の列が通る宵月の斑点濃度増しゆく

同

二年余を降雨なき地に陽を返す沼あり女らよりて濯ぎおり

一九六九年

この微風求めて遙々来し如く娘と吹かれ居りムリッペの浜

一九七〇年

高 田 恒 子

鞭打たれひねもす畑を耕せる物言わぬ馬を時にあわれむ

一九六五年

須臾にして一年すぎぬサンジョンの花火うつ音遠くひびきて

同

日本へ帰ると君の便り来ぬ卒然として血の退くおもい

一九六六年

炎天の街ひそかなりソルベッテ売り来る声の遠くよりして

一九六七年

歌ごころ湧かぬこの午後取り出せる料理ブックは日本のもの

同

掌のぬくみ移りし木の実のつややかな一つを吾は持ち帰りたい  
り 同

冬枯れの庭木々の中そのみが春を装いてマンガの花咲く

一九六八年

高 田      てつお

この街の十七年祭という今朝の空暗れ渡り風やや強し

一九六三年

裏庭に捨てありしシュシュが芽をのぼしやがて垣根にのぼらんとする

同

新山を焼ける煙が黒々と遠くの空にひろがりゆけり

同

霜にあいて葉は焦げたれど梢には花をもちたるコーヒー樹あり

同

高 田      蓮 女

古着とけば一センチ余の縫代に和藍の匂いかすかに残れり

一九五二年

高 達      つゆじ

見覚えはなけれど同じ航海の友と思えば皆なつかしく

一九七三年

勉学の為にと一人帰りたる少年の日の面影は顔つ

同

移民の子の常とは言えど跣にて学舎に通いし昔しのぼる

同

音住みし思い出の家はなけれども今も変らぬタイパスの山

同

移り来て農一すじに生きてきし長き生活があきらめ難く

一九七四年

高野 愛子

築きたる土手も古りたり排水溝を覆いてへちまの花は明るし

一九七五年

嵐止み洗いし如きこのあしたマナカは咲きぬ匂い放ちて

一九七六年

久々に眉を整え爪を染め吾がつつましき装いとなす

同

マラクジャの花咲きつぎていつしかに秘めたる如く青き実の  
みゆ

同

星すでに光りそめたる中空に円盤の如く凧一つ見ゆ

一九七八年

乾きたるタマンコの音もまじりいて今宵は人の往き交いはげ  
し

同

硝子越しに入り来る朝日温かく庭木の影を壁にうつせり

同

野菜売る媼が声かけ来る度に土の匂いが籠より流る

同

朝光の淡くさしいる墓地裏のマモーナ紅き実をつけており

一九七九年

高 橋 青 沼

今宵また人逝きたるか村人のアベマリアを唱うが聞こゆ

一九五一年

高原へ友は療養に旅立ちてあとにつつじの花咲きており

同

木の香しるく家の建ちゆくこの町よ二世の市議も出でて来に  
けり

一九五二年

講和なり大使来るてうブラジルに住みてことほぐ新たなる国

同

下りたてる北伯移民の一団が夜半のホームにしばしさざめく

同

高 橋 圭 甫

嫁がせて三児の母となりし娘をたより来て病む八十の姑

一九六七年

かつて吾が苦役に泣きしモジアナの地獄耕地と言いたる起伏

同

風上げて遊ぶことなどあらざりしかのフアゼンダの少年の日  
は

同

長髪を肩にたらし若きらがなだれ乗りこむ最終列車

同

八月の空はにぎりて大旱のきざしを孕み鳴りわたる風

同

渺々と風吹き来たり吹き去りぬ惜しまれて人の逝きたる夕べ

同

連れたちて苑の芝生に撮られいる笑顔は常の仮面にあらず

同

耐え難きをたえいる如くアバカテの実一つ枝に残る僧院

同

鎧いたる心重きを耐えて行くこの晩春の細き畦道

同

一冊の歌集残して吾が書架をポ語の本にて埋めゆく吾子ら

同

支えなきバロンはややに確かなる浮力をもちて夕空にたつ

同

草枯れしミナス路ゆけば人も牛も飢えたる如く眼鋭し

同

移民史の裏を血塗りて果てし人の墓は孤独に耐えて影濃し

同

混血の処女を生みしロマンスも歴史に秘めて古りし移住地



同

初孫の名付け祝いも日延べして棉蒔きつぐとパラナ便りに

同

ボアビアジエンと言ひし吾子等のまなざしをうす面映ゆく妻  
と旅立つ

同

今日かぎり消えゆく電車をなつかしみ市民らが歌うアデウス  
の歌

一九六八年

高 橋 静 治

芋の値の安きを嘆き移りゆく人々の群停車場にみゆ

一九四九年

高 橋 忠 次

赤字のみ増ゆる田舎を見限りて街に移りしをよろこびている

一九七六年

公害の此処にも及ぶ絶え間なく製鉄所の赤き煙吹き来る

同

泣きながら語りつづくる遠来の兄は四十年前と変ることなく

一九七六年

高橋 三左右

麦の粉は乏しくなりてパン窯の欠け崩えたれどつくろいもせず

一九四九年

海辺には野生すというこの花も捨て難く思うデード デ  
モツサ

同

海遠きここに住めれば小川にて捕るるランバリを珍味といわ  
む

同

訪日の人のもたらせし樺細工のこの莚いれ今日も撫でおり

一九五三年

蠟燭を手に手に点し歌声をあげて雨乞いの人ら行きたり

同

まよ中に風吹きたちてこちこちとガブルービーの実は家根に  
落ちたり

同

ボリビアの国境ちかき兵舎へと今日を出でたつ二世の君は

一九五四年

新井戸の水は豊かに湧きたれば餅つきて今日祝いをなしぬ

同

アレルイアうたいて今日のパスコアを祝う吾が家の朝の平安

一九五七年

祇園坊の今年はじめて生りたるを盆にならべてながめていた  
り

同

優良種と折紙つきのマモン種蒔きて落ちつく吾の心か

一九五八年

高橋 元吉

雹害に全滅と見えしミーリヨ畑若葉たわわに光る玉露

一九六三年

除草機の馬ひく吾子も疲れてか掛声もなし馬にひかれて

同

古びたる日本書籍の数々に郷愁ありて手離しかぬる

同

高橋 やす

朝の間をにんにくの皮むきいつつフエイジョンの値下りを母

言いたまう

一九四九年

朝寒くかがみて茶の葉えらみおれば息温かく犬は寄りくる

一九五〇年

庭すみに芽生えたりしが日にたけて立木となりしマモン花咲く

同

高橋 よしみ

ラッシュより降りこめられし軒下に人種混淆の異臭がむれる

一九六五年

奔放に思想しがたき黄の肌の膠化なしつつエトランゼ老ゆ

同

聖約の一句一句をきざみたり浄化にとおき思惟をもつとも

同

唐突に幹よりいでて巨き実のジャツカ無謀にふとりて熟れる

一九六六年

町の灯がふくれつづれる後側ころされている人魚 貝等

一九七一年

父系図を持たぬ黒人少年のえがくは暗く悴る母子像

同

一掬の塩熱湯にこぼす夕茅屋の城にランプがともる

一九七二年

出荷せむトマトを木箱にとざす釘夜ごと不屈の熱こめて打つ

同

剥落のいたみを負いて激湍を泳ぎつらぬく群の中なる

一九七四年

亡父亡母の悲願でありし訪日の旅へ遺髪をたずさえてゆく

同

不測事も考慮にありて常ならぬ整理を済ます訪日前に

同

あでやかに瑠璃蝶貼られ死後もなお虫ピンにその胸を貫かる  
る

一九七五年

吹きめぐる風偏りに鳴りながら都心にバナナ痩せつつ立てり

一九七六年

一杯のピンガにあがるニグロ等の会話に祖国も文明もなく

一九七七年

揺藍に相ならぶるに紛れなし日系の血を享けしうま児は

一九七九年

いとけなき命にながれ継がれつつ漂渺と日系血統（すじ）の  
行方  
同

高 橋 渉

かつての日移民となりてこの海の沖ゆきし日夜が脳裡をよぎ  
る  
一九四八年

学校に二里あまりありて登校児の呼びあえる声暗闇に透る

一九四九年

雨あがる兆か冷えて来し夕べ豌豆もぐは掌にこころよし

一九五〇年

炊煙はバナナ畠になびきゆき薄雲り日の夕暮れとなる

一九五一年

旅し来て寝足らわぬ眼に朝の陽のさしそむるリオの海がまば  
ゆし  
同

高 林 明 雄

朝市にトマテを売りて生きるというも吾にはたやすき業には  
あらず  
一九五三年

椰子の葉の若きは巻きて空を指す時雨すぎたる午後の公園

一九五五年

ガビローバ甘く熟るるを採る児等の灌木林に見ゆる夕ぐれ

一九五六年

夕映えてプールの水の揺るとき誰が忘れしトアーリヤ白し

同

朝月の淡き光の中にしてサビアは啼けり高き木末に

同

日本語の指導のすみし夜の道明日のバナナの値を決めんとす

同

池を出て歩む小鰐の上に散るパイネイラの花はかそかに音す

同

日本種の金魚買い来し末の子は水換えるなり長くかかりて

同

雲の動き遅くなりたる午後の空白き夕立西より来たる

一九五六年

木綿の花つぎつぎ落つる音のして峡の沢水日にきらめけり

同

絲瓜もて背中を流す妻ありてブラジルに過ぐ二十五年を

同

高林 優子

訃報うけて急ぎ旅ゆく車窓より見るパイネイラ色あせいたり

一九六四年

高原 阿久里

妊りて食欲のなき娘の来ればメロンにレモンかけて食べさす

一九七三年

検ガンの結果待つ日々せつなくて今日庭先に花種子を蒔く

一九七五年

夕づく陽浴びつつ急ぐ帰り道屈みがちなる吾が影長し

一九七六年

ほうほうと鳴く鳩笛のなつかしく立ち去りかねて一つもとめ  
ぬ

同

ポエーラに深き足跡のこしつつはだしのニグロ炎天を行く

一九七七年

行き逢いし子供は蜜柑のほのかなる匂い残して通りすぎたり

同

高原 ます子

揺れやまぬ梢の風に見入る時どこかでゴムの焼ける臭いす

一九七四年

廃船の一つが浜に傾きて日射さぬ海に思ふはかなごと

一九七六年

再びは訪う事なからむミナス路の丘陵墓地を見返りて去る

一九七七年

千体の菩薩の中に亡き母の似顔探せり暗き御堂に

同

## 高原 万里

田舎より移り来し子が草笛を独り吹き居り蜜柑のかげに

一九五九年

自（おのずか）ら早まる足を制しつつ身弱き夫に歩調を合  
す

一九六六年

人等みな帰りし市場のうすらやみ黒猫一つ走りて消えし

一九六七年

帰省（かえ）れぬと便り寄越せる娘の部屋の聖樹の球にゆれ  
る吾が影

同

青畳清しみ座る禅堂の窓に移らう一片の雲

一九七二年

砂浜に朽ちし刳舟ころげいて満ち来し潮もとどかずに引く

同

転りのまろやかなりしサビアの声聞きつつ山の畑土おこす

一九七三年



あたりみな緑乏しき冬の日にみずみず育つ菜園の青

同

注射器のふつふつ煮ゆる窓の外風にたわみて裸木が鳴る

一九七四年

赤き旗風になびかせ入りて来る漁船を人等走りて迎う

同

年古れば墓標のクルス朽ち果てぬ縁者も遠き友が奥津城

一九七五年

雷一つ戒めのごとくとどろきて年の始めの宴会終る

一九七六年

子の毛布着せてもらいぬ逝きてより一年経ればうつり香もなし

一九七七年

高原 良一

病む吾と入院の吾子と雨雲の去来はげしき空眺めたり

一九六二年

高松 とも

久々に姉と夕餉を囲みつつ近くにかわずなく声を聞く

年代不明

終日を土に打ち込む義兄にしてその太き掌の皸れている

同

田 上      みづほ

王冠樹の黄花一つ音もなく舗道に落ちて昏れゆく晩夏

一九七〇年

吾が命きざむが如き秒針の音を夜更けの部屋にききおり

同

吾が失意さらすが如く野に佇てば残照淡く照り翳りする

一九七二年

日光浴に吾が坐す前を次々に蝶流れ来る朝のひととき

一九七三年

渡舟場に蝶もつれいたりしがたちまち一つは河を渡れり

同

花傘をひろげし如き鳳凰樹の咲き盈つる一樹バス停留所

同

見も知らぬ伯人娘に手をとられ横断歩道渡り来たりぬ

一九七五年

高 山      一 枝

髪洗うたらいに残る赤き水パラナの土地になじみて吾も

一九五七年

朝露にしめれる赤土あざやかにニラの切株白く芽吹きて

同

高山 哲夫

伯人に供養と言える言葉をばときあかせしがついに解せず

一九四九年

滝 秀一

井戸の辺のバナナ樹にかけしくもの巢はあした清しく風をは  
らめり

一九四九年

山峡の幾曲りせる坂道をタベ牛車の音にたちつつ

同

夜のふけて業終えにしか街空ゆどよもしくるはフアブリカの  
どら

同

一日の我が業終えて畑の辺にしばらく空の夕雲を見る

同

眞昼陽の晴れたる空に羽うたずウルブの群は移りゆきつつ

同

生活に追われ追われてきし我のきびしき面輪時に思わゆ

同

向つ沢夜毎に霧の立ちこめてひそけき山家に冬は過ぎゆく

同

朝の駅のホームに立てば彼方なる二筋のレールに陽光まぶしも

同

夏草の茂りの深きブレイジョンに今日もビンテージヒタ鳴きており

同

窓をあけて雨晴れの空に高々と妻が子のラッパ吹きならしおり

一九五〇年

雨過ぎて薄陽のもるる棚下に拳ぐらいのシュシュがさがれる

同

たまさかには町に出さねば私独りカイピーラになると妻がまたいう

同

すでにして日のくれはてし山道を音のみ高く牛（うし）車ゆく

同

試みに小箱に蒔きし玉ねぎの種はよく生え青くしげれる

同

今日も早昏れかかりつつ冬の日のユーカリ山の立ちの静けさ

同

滝 ふみか

夏の日の強き日差しを浴びながら夫と二人でフレイジョンたたく

年代不明

老い姑は時折り指をかぞえつつ過ぎし月日を偲ぶことあり

同

荷を積みてリベロン市場へ急ぐ朝ピラールの山脈は霧に理もる

同

滝 夕起緒

冬の山くきやかに見ゆる朝にして移民の我の四十路となれり

一九六九年

この国をひたに愛しみ老母は四十五年を土に親しむ

一九七六年

移民せしはるかなる日を顧たせつつ参りし墓地に乾季の風吹く

一九七九年

多 菊 ふ み

厨事手伝う吾娘の純粋な日本語聞けば手もとは軽し

一九七三年

一枚のカルトンを頼りとして来たるビルにて柔かき日本語を聞く

同

芝草の枯れたるパルケに一人来て遠くに聞きぬ物売りの声

一九七五年

純粋な日本語はなす少年より余分に買いぬ青きレモンを

一九七六年

ユーカリの香れる小道を辿りつつ老女は語りぬ移民の逸話

一九七六年

滝口 和歌

パラナの町に移り来たりて十年経ぬ人もポエラも慣れて住み  
よし

一九六二年

霜害にパストの草も枯れ果てて肋の高き牛の目哀し

一九六九年

瀧沢 正

おぼつかな足ふみしめて立つ我によりそう妻と顔を見あわす

一九四八年

いたわりつつよりそい歩む吾が妻よいつの日癒えてかえりう  
べしや

同

たまゆらに耳鳴りうすらぐ時ありてさわに聞こえ来る風騒の  
音

同

あわれ吾がねはんの像とひねもすを病床にいて物を思わず

同

日毎吾が衰えゆけどこれの世に病いやさん手だてはあらず

同

物言えば声ふるうべし妻といて衰えはてし身をば嘆かう

同

ふた年を吾が病みおれば子を守りて生計の業に妻やつれたり

同

つきつめて思えばはかなきものながら現身生きてあるは愛し  
き

同

人の世のはかなき言わず起き出でて没日の色に目をしばたた  
く

同

咳きに咳きて汗にまみれし吾が肌に夜風は沁みて冷たかりけ  
り

同

滝 沢 庵 水

今にしてガラニ一族の住むという山脈幽く雲に閉ざせる

一九五五年

ジユキア線の小駅ゆ積み出す汽車の薪山蘭あまた付きてあり  
たり

一九五六年

群衆に交りて開票読みており選挙権なき移民なれども

同

亡びゆく末思いつつ黒人のサンバ見ており夜雨の中に

同

引込線に群牛積みし輻二つ捨てたる如し雨はふり降る

同

滝 藤 たかみ

フエイジョンに舌慣れてゆく昨日今日あすの旅路はイグア  
スーの滝

一九八〇年

田 口 愛 子

灌木の林に斧はこだましてはるかに小さく見ゆる人夫等

一九六七年

竹 井 蘭 譜

いささかの金蓄えしが得意にて準二世とあなどり我をのし  
る

一九四九年

ひたすらに金儲けを目的に生きている此の同胞が我をのし  
る

同

審判の誤審を弥次る観衆の声どよもしてグラントを圧す

同

吾が買いし薯の値とみに騰りしを生産者にすまぬ如く思いぬ

一九五四年

うず高く棉を積みたるトラックがバルサに乗りぬゆれつきし  
みつ

一九六二年

竹 内 千枝子

軽やかに長き裳裾を腕にかけ夫と手を組み踊る吾娘はも

一九七〇～七五年



母国語を話せぬ三世の幼らに辛棒強く発音教う

同

うつ蒼と青葉繁れるマンゴの葉かげ見上げつつ果実を探す

同

末の娘の嫁ぎゆく日を故里の母にしらせむ蟬鳴く夕べ

同

還暦の父を祝うと娘らよりて宴の手筈ととのえ居りぬ

同

イグアスーの滝のとどろき枕辺に聞きつつ眠るホテルの一夜

一九七九年

## 武 田 一 淋

吾が背丈しのぐばかりにテキサス種の棉は伸びれど棉実はずにつかず

一九五二年

秋たけて尾花一面咲き満てる土人部落の昼のしずけさ

同

育ちゆく子の学資にと苦しかる生活の中の三コント差し引く

一九六七年

老いたまう母の写真を見ておればあらたにわびし国交杜絶を

同

武 田 京 風

村道を歩むは我の日課にて空気澄めれば心洗わる

一九七八年

武 田 五百子

二月を留守にせしかば裏庭の菊の盛りも過ぎておりたり

一九四八年

鋤き終えて放ちし馬は真直ぐに家にもどりて門にたちおり

一九四九年

争いしことも懐しき思い出となしてそれぞれ子等巣立ちゆく

一九七五年

武 田 桂 城

あばら家に訪えば無言で泪ぐむ新移民の労苦は偲びやらるる

一九六四年

炎天に枯葉運べる蟻の群吾子がかがみてあかず見ている

同

携帯のラジオ振り上げ抱き合いてペレーのゴールは歓喜を湧  
かす

同

武 田 公 平

伯人の妻と五年を住み経れど悔なき生活と云い断（き）りかねつ

一九四六年

ほろ苦き渋茶の香賞づる我と砂糖かきまぜ呑む妻と相容れず

同

二人の子の親となれども我と妻の民族の血は争いやまず

一九四七年

異なれる人種間のある距りを想いつつ妻の罵詈に耐えおり

一九四九年

混血児吾が子が少し内股に歩いて行くを見つつ佇む

同

逝きしものを想いつたてば潮騒の音にさえ今は耐えがてぬかも

同

ある年は妻子等率い海に来むかかる小さき願いも難し

同

吾が子等の歌うサンバ　ルンバの類その歌詞すらも我には解らず

同

故国に物を送るを阻みたる妻には妻の言い分があり

同

どうしても日本人の産婆は嫌だという妻の感情を肯わむとす

同

パステイスを作り揚げ十六時間働きて売上げは日に五百ミル  
以下 同

窓ゆ射す朝の光やわらかく草の絮一つ浮きてたゆたう

一九五〇年

光箭の中をたゆたう草の絮追いつつ思念なし朝の床に

同

光箭の区割の中を浮遊する微塵の動き見つつ飽かなく

同

光箭よりはずれて見えなくなりし絮がしばらくにしてまた現  
われぬ 同

国語もて心を述ぶるたのしさと云う語にふれて想いはめぐる

同

臥してみる窓の外には三本の萱の穂がゆれおりて碧い空ばか  
り 同

昨日ひと日こめいし雲の今朝は晴れてすする卵の色も冴えた  
り 一九五一年

武 田 知 子

相次ぎて帰国移転の友去りぬ一期一会の身にしみる今日

年代不明

垂れ羊歯の伸びし葉先の渦塊（うずくれ）をほぐすがに見ゆ  
蝶のたわむれ 同

片言のポ語で教えし吾子今は片言の我がポ語をひやかす

同

ゆるすまじ原爆哀歌流れ来る会場ゆすり二世等の声

同

竹田 ナカ

パイネーラの緑もいつか繁りつつ吾子逝きてより一年は過ぐ

一九五一年

竹林 光

濡れる毎に質落ちゆくを悲しめど棉摘み半ばに亦雨に逢う

一九五一年

揺れつづく車内に吾は小さく居て黒人の体臭に耐えていにけり

一九五三年

イタペチの山吹き下し来る風がアメリカ松の梢を鳴らす

一九五四年

久々にシネマ観るとていそいそとうからら行きぬ我を残して

同

赤色のすすけしランプの明りにて書読みつげばまなこ疲るる

同

雑用に一日追われて過ぎたりとランプの下に卵ふきつつ

同

雑草をなぎ払いゆきて樹を切りぬ背戸の井戸わく造らんため  
に

同

幾度か鶏の緑餌に切り与えしアルメロン　ラルガは薑たちは  
じむ

一九五五年

蔬菜畑をせばめて繁る刺草にほのぼのと白き花咲きいたり

同

武　本　由　夫

集中する銃弾の下に一族九人毒あふりて死にせしよ日本人

―吉村一家―

一九五二年

うす明かき朝の小床にこぼれたる朱の小鞆なすスイナンの花

一九五四年

桜組を喰う巷の声のかげ失う立場のおびえひろがる

一九五五年

ひとの心ためししメスもてむく蜜柑悔恨の果皮膝に垂らして

一九六二年

酒に耽りて眼尻渋きあかときの窓にさやけき寺鐘のひびき

同

蒸るるとき商魂臭う街またぎ傲然として朱塗りの鳥居　―

ガルボン　ブエノ街―

同

転生を希わん言葉想えればサビアの声さえ口説の如し

同

審くもの誰にかあらん黄に誇る菊が悖徳（はいとく）の涙流すに  
一九六三年

空手にて入りにし冬の木原より裸形となりし我出で来たる

同

野の草に低く流るるガロアゆえ地虫の声々々べ死したり

一九六四年

おぼろ夜の記憶の如く廃に咲くアガパンサスの紫くらし

一九六八年

うなじ垂れて聖典黙読の後姿は朝の渚のウルブルー三羽

一九七五年

海岸の廃屋低く陰惨なる伝説に巢喰いて蝙蝠眠る

同

水浅（あ）せし河口にて釣る日本人よりベイラ流浪の終（つ  
い）なる形  
同

砂丘にまろびて韜晦（とうかい）を愉しめば海よりそよぎて  
朝は流るる  
同

ふらここに斑陽（はだらび）おちて林間のそよ風土の香にた  
ちにつつ  
一九八〇年

竹 山 伊知呂

故国のインフレを暗示するごとく六十円の切手を貼りてある  
手紙  
一九四八年

洋服の寸法取らんと黒人のその体臭にしばしたじろぐ

同

此の所右に曲ればマリリアと指さす方や青き牧原

一九四九年

十年を一つの町に住みおりて移民の子吾もやや落ち着けり

同

自らを黒人故と蔑みて日雇労働者に落ちて行く者等

同

職人らがストを起こせし仕事場にほほけし如く一日を過ごす

同

幼らが何か叫びて走り去る中にまじれる吾子の黒髪

一九五〇年

朝まだき梢さやかに吹く風に熟れしマンガの又一つ落つ

同

竹 山 益 己

夫を待つ町の夜更けにフアゼンダの鐘の音一つかすかに聞こ  
ゆ

一九四九年

多 胡 一 蚪

パイナふく小駅の裏に暇々に鶏を飼う駅長なりき

一九五〇年



多湖 太公望

酔いざめの水を求めて寝静まりし宿のサーラに我はたちゆく

一九五二年

多湖 優吉

椰子の壁釘利（き）かざれば目張りする南に面した窓を塞ぎ  
て

年代不明

マルゴーズ絮飛ぶ荒蕪の地平線なべて掠奪農業の跡

同

多田 邦治

うち振りしこの日の丸を船室に小さくたたむ出港の夜

一九七三年

ゆたかなる陽光あつめて濃緑の色にうるおう遠景の森

一九七七年

足場はや取り払われて完成の真近き橋を夕陽つつめり

同

黒き液黒きながらに澄みとおり静かに次の工程を待つ

一九七八年

この暑き睦月の昼の静けさを裂きて鉋石積む貨車がゆく  
同

みずからの重さにたわむ鉄管の太きがあまた工事場にあり  
同

いつになき静けさにある竹群をかたえに歩む初霜の朝  
同

花期終えてみどり育む桃畑の丘わたりつつ吹く今朝の風  
同

たそがれを貫く路に沿いながら杭をつらねてのびる鉄条  
同

雨あとに陽の差しくればいちめんに白き光のあそぶ草原  
同

動力の音みな止まりいつせいに新鮮な貌がもどる作業場  
一九七九年

立 沢 節 子

留学の決まりし吾娘に日本を語るすべ無し二世の母我  
一九七四年

橘 秀 子

綿つみの女が連れて来し童倦かずペルーに声かけている  
一九五八年

聖市より来し封書には移民五十年祭の記念切手が貼られてありぬ  
同

ポ語夜学生の母につき来し幼等が月の下びに影ふみ遊ぶ

一九五九年

近道を選びて通る牧中に牛糞拾う老に会いたり

一九六〇年

春菊の香りが嫌と言う子らよ我にかなしき郷愁湧くに

同

母の日に二人揃いて訪い来しが日本品の茶碗をくれぬ

同

夕映えの明るさ頼みてつむ棉はほのかに雲の紅をうつせり

一九六一年

安定感示す大樹の程よきにジョン デ バーロの巣が二つあり  
同

B H Cの臭いが強く鼻をつく移転の荷物運び入れる時

同

蟻の害ややおとろえて色冴ゆるジャボチカーバの若葉萌え始む  
一九六二年

## 立 花 操

はるばると海越えて来し同胞は此のブラジルに根を張りて伸び  
一九七七年

伊 達 三十里

荷車の音忙しくひびき来て野菜市場の夜は明けはじむ

一九六三年

土間の子に時折り声をかけながら妻はミシンを踏みつづけ居り

同

茜さす夕べの空につち音のひとときわ高く棟あげ終る

同

立 石 義 夫

わなかけてユーカリ樹林にささ鳴けるピンタシルバの声ききいたり

一九四九年

立 筋 智 充

下りゆく夜のリベイラの船に乗れば窓の明るき席をくれたり

一九六〇年

スイナンの匂うリベイラの土手に待つ学童ひろいてカノアは下る

同

夕焼けを映して流れるリベイラを塗装まぶしく機動船は航く

同

仲人の挨拶けいこをしつつ見る節くれだちて荒れし吾が手を

同

父と母が他人となる日末の子はジスコ ボアードール飛ばして  
遊べり

同

あまりたるコロツテの水流し捨て協同作業の道普請終わる

同

ビラ配るとき手付きのモツサより反対党のセーヅラ貰う

一九六二年

田 所 君 子

昼餉時若き工夫等が風にゆらぐガス火に寄りて手をひろげお  
り

一九七六年

日溜りの草むらに咲くあじさいの色褪せながら影落としいる

一九七七年

冬晴れの舗道に弾みいる娘らの声急救車の音に吸いこまれゆ  
く

同

並べ売るバザーの木箱に匂いつつひしめきて咲くベゴニヤの

花

同

若き等のポ語はずみいる声を背に暮れゆく余光につつまれて  
佇つ

一九七九年

田中 愛子

家を離れて画業に仂く末の子が母の誕生日に贈りし靴下（メ  
イア）

年代不明

アマゾンの濁流に浸る首都ベレン大樹の下に長き息吐く

同

田中 朝子

ものものしく兵車は市民の目をひきつつ曇りて暗き午後  
の街ゆく

一九六五年

見ゆる限り見つめていたり故国向き発ちたる飛機の赤き  
尾灯を

一九七四年

無限なる夢はらませし日々もあり夾竹桃の花盛る下

一九七五年

疑わぬことも救いのすべとして信じゆくべし夕光のなか

一九七六年

田中 恵美子

ペルイベの橋渡りゆく冬の旅流れの杭は貝殻を抱く

一九七二年

オニブスに乗れば親しき眼差しを投げ合いてわれら未知の日  
本人 同

吾を呼ぶ父を埠頭に佇たせいていま出航の鐘（どら）鳴り渡  
る 一九七三年

船酔いのあまた出でたる食堂のまばらが中に夕餉とりおり

同

黒人の群れいる港の朽ちかけし家並に合歓木は鮮かにして

同

茫々と流れの速きアマゾンの河上に秋の落日をみる

同

運転の免許をとるとて五十路過ぎし夫はたどたど語にて学  
ぶ 一九七四年

黒き蠅の飛び交いていし商店に一キロの肉を手真似にて買う

同

訪日の旅より帰れば錯覚の如くに映ゆる庭に咲く藤

一九七八年

後れ毛を風に吹かせて大根を蒔く眼に遠しイタペチの山

一九七九年

田 中 繁 穂

一日分の飯を夜明けに作り終え露けき畠に薯堀りはじむ

一九四八年

田 中 眞 介

旅人は雲と思わん霞とも大アマゾンのはなべて山焼く

年代不明

田 中 他 郷

日照雨眺めておれば女子療の窓に患者が微笑みており

一九五三年

田 中 都 南

繙きし週間誌読み果ててなお飛機は大アマゾンの河越しきれ  
ず

年代不明

果てしなき起伏につづくコーヒーの樹海は霞む地の平らに

同

田 中 正 実

風吹きてしらしら乾き行く道を見つつし居れば患者来たりぬ

年代不明



田 中 八 重

厨辺に洗うべき皿を寄せ置きてしばしかまどに双掌をかざす

一九四八年

漸くに明るみそめし牧の涯に乏しき草を食む牛の群

一九四九年

小雨降る径の小草のまばらなる蔭にこぼるるゴマの花びら

同

丁々の斧音止みて我が視野をさえぎりし大樹倒るるとするいま  
一九四九年

親子三人生くべき業と思いかえし醜のチリリカイそしみて堀  
る

同

明けくれを此処に送りて故里のきびしき様は時に忘れつ

同

火の燃ゆる炉辺去りがたく厨より枯麦に鳴く小鳥みている

同

百機編隊の古き邦画に少数が何思いてか拍手しにけり

同

執達吏は道具屋の中に跌坐（あぐら）かき箆笥や琴を小声にし競る

同

葬らん手だてもあらで幾月か子の骨壺と共に暮らしぬ

一九五〇年

何もつけずにポン喰ぶるたつき久し沁々と厨の火に手をかざす  
同

高々とつみあげし薪の頂きの陽ざし永きをたのみ瓜干す

一九五六年

ミナス境へ孫帰りてより幾日経し玩具のかけらが陽に光りいる  
同

田 中 和香枝

松林のうすら淋しき山道を唄いて来るは父の声なり

年代不明

病院の窓にさし入る月光に母はわが幸を祈りますなり

同

金色に光る川をば眺めつつ秋枯れの草を踏み歩むなり

同

棚 橋 秋月

山焼きの黒煙高く渦まきて夕空に雲の一群となる

一九六七年

音響の交錯はげしきセラリヤに終日吾は板ひきでおり

一九七三年

ふるさとを忍ぶよすがとなる香り松茸ならぬ椰子茸の味

一九七七年

撒水機の霧は苗場にふり注ぎ風になびきて虹ふきあぐる

同

田 中 夏 子

茫漠の海とも紛うアマゾンの濁流分けて我が船は行く

年代不明

アマゾンに古稀を迎えし我も亦七十年の祭寿ぐ

同

はるばると日継の皇子のアマゾンに炎熱冒して訪れ給う

一九七八年

田 辺 重 之

バルバ デ ボーデ穂の咲く頃となりにけり歌詠まずなりて  
幾年を経し

一九五〇年

田 辺 つる代

帰らぬ娘さびしく偲ぶ雨の中に犬の遠吠えはるかに聞こゆ

一九七六年

塩いわしに舌つづみ打ちし移民われら子持ち家持ち迎える祭  
典

一九七八年

田 辺      みち子

深夜にのみ咲きて香ればいみじくも名づけしものか  
ダーマ  
ダ ノイテの花      一九四九年

抜けいでし稗草の穂に草ばたる淡く光れり動くともなく  
同

平安の暮らしも久し夫と居て事なき今日のランプを点す  
同

朝市に走りのキヤボを買う事も小さき奢りとわが思いつつ  
一九五〇年

油煙たつランプの下に記したりし農婦十年のわが歌日記  
同

イペー咲く岡の彼方も牧場にて煙曇りの春の日の暮れ  
同

田 鍋      八重子

ひた走る車窓にいでし半月を見とれつつ行くミナスへの旅  
一九七五年

思いやりこもる優しき一言が明日の希望に灯をともしゆく  
一九七七年

澄みとおる空の碧さに消えゆくと静けき昼を蝶高くとぶ

同

谷 佐稚子

たわいなき話を姪として居れば柳の枝がしきりにゆれる

一九四九年

傘もささず雨水ちらして活潑に我を追いつ越す碧い目の少女

同

窓の外で蛙がひくく鳴きはじむランプを消して寝むとする時

一九五一年

雑草の名前を夫に教わりて夕べ一時秣刈り居り

一九五六年

嵐去り日暮れの山に蝉の声微かなり子供らと栗拾い居れば

同

留学の娘より初雪の便り来ぬ此所ブラジルは四十度の暑さ

一九七九年

日本への留学の娘より元旦に和服姿の写真とどきぬ

同

谷 ひろし

指さきに冷たくしみる朝露に少し濡れる棉を摘みゆく

一九五〇年

四百米の最後のターンのたまゆらに古橋ガンバレの声わきお  
こる 同

トッパン行のジャルジネーラのブジーナがはつきり聞こゆ霧  
の中より 同

谷 玲 児

末の子がフット ボールだ野球だと吾になかりし幼年期もつ  
一九六三年

薯の値の暴落せしを思いつつ堀らねばならぬ薯畑に立つ

一九六四年

買手なきよりはましだと暴落の薯に未練を断つごとく売る

同

谷 川 光 子 ―長谷川 美津子―

竹藪はひっそりとなりて小鳥らの明日刈らむ稲畑にざわめき  
ている 一九七七年

寒き朝窓を開くれば蚕らは陽の差す側に片寄りいたり

同

手にしみる桑の冷たくこの夜の寒さ気づかう冬蚕生れいて

同

蚕室の蚕思いて霜あとの緑失せたる桑畑に立つ

同

霜害の犠牲となりし蚕らが焚火の中にあわれ消えゆく

同

土ほこり重くかぶりし桑の葉が朝よりの雨にぬれて青みぬ

同

町住まいの姑にと掘りし人参の手に障る瘤はとりつつ洗う

同

短かめの髪形変うることもなく町に住み居る還暦の姑

一九七八年

繭取りも漸く終りてわずかなる余裕をもちて聞く除夜の鐘

一九七九年

平常と変りなくして元日も蚕養うべく蚕舎に向かう

同

ぼきぼきと草梅もぎたる指先にふるればかすかな痛み覚ゆる

同

谷 口 貞 子

うずくまりマテ飲みかわすパラードの夕日の中の土人らの笑  
顔

一九七一年

パンパスの夕映え長くいろどりてたたずむ鷺の姿浮き立つ

一九七三年

ずり落ちる眼鏡あげつつ客足の跡絶えしひまに紙幣繕ろう

一九七四年

谷 田 典 子

雨あがりの教室の中に浜木綿の花の香りがみちみちている

一九六四年

谷 本 トヨノ

兄も知らぬ此の町に来て幼き子家に残して我仿きぬ

一九五五年

玉 木 一 桜

目交の山壁深くたむろせる霧動きつつ晴れ行かんとす

年代不明

迫りくる夕立雲を背景に送電塔の鉄骨白し

同

こぼれたるボルドー液は貯水池の水底あおく広がりにつつ

同

腹空けば生の人参嚙りつつ辨当からを鳴らして帰る

同



山焼きし煙漂う地の涯の今宵の満月血の色をせり

一九五〇年

かわきたる落葉踏む音ひそかなりユーカリ林に吹く風もなく

一九五三年

イタペチ風わがかこちつつ師の墓に懇ろに蠟燭ともし参らす

同

剪定のすみし葡萄の棚毎に三条のアラメたるみて並ぶ

一九五七年

サンタ カーザ出でて処方薬買う我の野良着は今氣にかけぬ

一九五九年

よべの雨にしおれし葉色よみがえりアルカシヨフラの紫冴える

一九六二年

アルカシヨフラたべつつ思う逝きし児の好みしもの一つなりしを

同

久しかりしセツカも雨にうるおいて木葡萄の蕾幹に膨らむ

一九六三年

## 玉 木                  梅

未明より丈なす草を刈り急ぎ堆肥つくるともはらなる夫

一九五一年

愚かにも老いし我かと省みて夜半悔い居れば虫鳴き止まず

年代不明

一日おきにもぎても未だ秋茄子は籠に溢れて厨辺にあり

同

わが生きる證に伸びるわずかなる白髪うるさく頃（うなじ）  
に觸るる

同

貧しかる生活経につつ十人の子等育て来し過ぎ去りはるか

同

心より喜ぶときに老い夫は声ふるわせて泪ぐむなり

同

## 多羅間 絹子

年毎に花は咲けども並木路ともに歩みし人はかえらず

一九四九年

## 壇 政治

渦巻きて流るる低き雲の下牧童さけびて牛を追いゆく

一九七一年

夏のひかり薄らぎゆきてあぶら草のたくましき茂みに秋は来  
向かう

同

茜ぐも牧夫の肩に流れつつたそがれを牛三頭あゆむ

同

昂ぶりて声荒くせし一日なりたそがれの風に乾草匂う

一九七五年

堪えている痛みのゆえに夜醒めて火酒飲まんとすところ脆くも

一九七七年

忘れいしことのみ多くサルビアの紅さに見ゆる季節の移り

同

近松 栖風

先生の計はパラナ路の旅にきき帰りて短冊に花たてまつる

一九五三年

バナナの葉風にはためく音ききつ風邪氣に我は独り臥りて

同

流るる汗を幾度か互いに拭きながら青夢と桃蔭山房を語る

同

この籤が当たれば行けるかも知れぬ地球の裏のふるさとの家に

一九五四年

知念 良子

落日は漣のごとき雲を染め向かつカンポは昏れそめにけり

一九五四年

朝霧の海辺の山の頂きにかすみて立てる家二つ三つ

同

知るだけの郷里のことども話したる友よあなたはボリビヤ移民

同

踏みゆけど靴の音なし若草の芽生え初めたる春の山裾

同

茅 根 哲 子

父知らぬ娘いざない訪ね来ぬ汝の生れにし山かげの家

一九五〇年

亡夫掘りし井戸そのままに人住みて白き椿は散り初めていし

同

水鏡写せば胸に去来する父亡き子らと越えて来し道

同

階段をのぼる音さえ軽やかに嫁ぎいく娘にまとう明るさ

一九七〇年

山脈も荷馬車に薪を積む人もひとりになりて昏るる丘の辺

一九七二年

知恵うすき児らと冬陽の縁にいて電線の雀共にかぞえいくなり

同

朝明けの玻璃戸を透かし紫のリラの花咲く冬のさ中に

同

白椿咲き初むることも独り居のわがよろこびと君にしたたむ

同

思うこと叶わざる日の空の色ものの芽立ちのひそやかにして  
同

千葉 一美

訪日より持ちて帰りしささにしき稔り豊けき丸やかな米  
一九七九年

千葉 美夜

椰子ぶきの小屋に住まいて炭焼くと知らば故郷の父母はなげ  
かむ  
一九七〇年

移り替りはげしき村にとどまりて樹海に綴るわが植民史  
同

葉のひとつなき棘きびし裸形にてスイナンの花炎と燃える  
同

極端に切りつめられし街路樹をいたわる如く春の雨降る  
一九七八年

まわりつつ夜の海てらす燈台の光芒遠く潮に流るる  
同

千葉 都

山は山に重りあいてつくるなき海岸山脈に沿いて走りぬ

一九五三年

山峡の霧たちこめし町にして弱き光りに電灯ともれり

同

知花 清

土に生きる清しきなりき降る雨に濡れつつトマテのうるる匂  
いす

一九六六年

酔いしれてカンナ畑にねむりたる暗き過去もつ故に淋しき

同

あどけなき少女のはらみしうわさきく貧民部落に遠き落日

同

祖国復帰のデモくり返す沖縄の幾行の記事よみてねむれず

一九六九年

移民史の挿話の一つ冬山に少女めとりし祭りのランプ

同

堪え難き郷愁ありて瞳にいたし海こえて来し青き切手が

一九七〇年

長生堂 兼有

青白く光りて動く鰯群の小さきは見逃して船進めゆく

年代不明

佃 千鶴子

マンゴーの大樹の蔭より初日の出大きく呼吸す老の幸せ

一九七七年

作道 禎子

亡き母の賜いし時計今もなお息づく如く掌にぬくもりぬ

一九七九年

辻本 つぎ

外国に在れど思いは日本の本の国の歩みの安かれと祈る

一九七五年

土屋 伊豆夫

幾百の牛と家とを呑みつくし水は流るる陽にきらいつつ

一九六五年

氾濫をみて佇つ吾に風つよく今の現に遠し妻子は

同

土屋 春雪

棉摘みの季節となりて町中にノルデスチーノの顔ふえてゆく

一九六四年

夕ぐれの水面をひくくかすめ飛ぶするとき声の水鳥一羽

一九七三年

水死者を運ぶ兵士は声ひくく祈りの言葉くりかえし居り

一九七五年

ダム工事成れる暁は水底に沈むセツテ ケーダスに入り陽は

赤し

一九七八年

土屋 哲子

それぞれの想いに娘らは父の日に黙して墓標に花かざりおり

一九六八年

亡き夫の好みし魚をさきおれば在りし面輪のうつつに顔ち来

同

明の星仰ぎて夫と棉つみしすでに還らぬ若き日想う

同



公害の語韻重たしゆくりなく見るクバトンの並立つシヤミネ

一九七〇年

送りきしおけさ人形妹の面輪頭たせて手招きやまず

同

悔いのなき一日の昏れて佇つ視野に幼ら群れるピポカの屋台

同

ひねもすを降りつぐ雨にこもらえば想いはなべて嫁ぎゆく娘  
に

同

娘ら集う要の位置を自負しつつ昆布の匂う厨に佇てり

同

唐突に逝きたる友を悼みつつ遺詠となりし歌読み返す

一九七八年

水注ぐ友の形見のサマンバイヤ囁きのごと垂葉さゆらぐ

同

## 土屋 風 春

落葉して木だちの中を透くひかり蟻塚の土しずもりて見ゆ

一九六〇年

イニヤンブーは声甲高く啼くものと思ひ聞きおれば野良くら  
みゆく

同

在りし日の菊治に会いしはただ一度歌詠まざりし三十年前

一九六一年

帰化せんと思いなやめる時ながしマンガの花茎日にけにのびぬ

同

センプインの枝移りする声きこえ若葉の山の目近に迫りぬ

一九六二年

イペーの咲く日の来たり食い惜しむフエイジョンの種子を土に埋めおく

同

はじけ墜つるマモナの莢のひびく庭人の不幸にかなしみて立つ

同

敗れさるもののあらかたはみじめさを捨台詞として離農してゆく

一九六四年

くまどりて雲かげ走る傾斜地にひかりの中を牛群れてあゆむ

一九六八年

雨季到る若葉の山に踏み入りて斧一振りを武器のごとくに

一九七九年

土屋 ゆかり

濯ぎ物煮るらし川辺の朝かげに青き煙の暫したゆとう

一九六三年

立ち枯れの桃にのぼりし朝顔はおのもおのものの位置しめて咲く

一九六四年

芝の花白きを摘めばわだかまる心の隅に兆すやすらぎ

同

ユーカリに衣打つ音のこだましてようやく烈し夏の陽ざしは

同

烈日を吸いてかげろう立つ畑に草取る人の動き遅々たり

同

金蓮花ダリヤとはなやぐ庭隅にひとりたくまし葱坊主の青

一九七三年

ようやくに春めく宵よ鉢植えのもくせい匂う窓開け放つ

同

目の限り焼野と化せし牧中に化石の如き牛の群見ゆ

一九七五年

起伏多きわが来し方をおさめたるアルバムひもとく訪い来し  
兄と

一九七六年

常 本 直 央

いさかいて帰り来たれるこの小路冷たくはげしく頬うつ雨は

年代不明

ユーカリのトンネルぬければ目の前にま白き家あり赤き花咲  
く

同

坪 内 広 代

わが母は生きて在せりまことにも生きて在せり遠き母国に

一九四八年

信濃なる我が古里の面影が紫蘇の実かめばまみにひろがる

一九五〇年

みすずかる信濃山辺に我が母の古い住み給う恋しくてならず

同

髪なびけ乙女等高きコルコバードの御像の辺りひるげを食すも

年代不明

空飛びて雪降る国のふるさとへ帰らん我が夢にかあらず

一九五三年

障子打つ秋風寒しはるか来て今日ふるさとの母の辺にあり

同

老いませる母に仕うる雪の日や空来しことのかりそめならず

同

老いてここにしずかに語る日のありて二十年ぶりの国の秋はや

同

別るるを又いいでて母の泣く雪降る宵ぞ発つ日間近く

同

カトリックのこの国親し乙女等はロザリオ持ちて教会に入り行く

一九五四年

日本人の誰も居らざりポツソスのクリスマスの夜を会堂にすわる

同

ふるさとの信濃の山よ雪積みて母が墓辺は寒けくあらん

一九五五年

母が墓標雪に埋もれてふるさとの冬深み行く二月とおもう

一九五五年

日語学ぶ素直な子等と相睦び三歳を経れば愛しきものか

一九五七年

子等が皆この社会にたずさわりいつしかうすらぎぬ移住者  
のおもい

同

坪 田 義 雄

民話なき山といえども入日射し肌あかあかと燃ゆるを見たり

一九六〇年

農に生きん吾が感慨の一つとも手に牛糞をほぐしつつ思う

一九六二年

焼き跡に早も芽吹ける牧草を肯うごとく春の土踏む

一九六四年

暗黒のカンポス線をくだりつつときの間高く燃ゆる野火見ゆ

同

年毎に餅（もちい）をつくる事さえも郷愁として異地に住み  
古る

同

ペードロ帝泊まりしと伝う壁厚き家なり街の裏に残れる

一九六五年

泥煉瓦厚らに積みし奴隷期の家にも住みき逆境に居て

同

カンポスの山ふりさくる此処にして苅田も森も夕映えの中

同

時折りに客呼ぶ声の聞こえつつ午後のフエイラは静かなりけり

同

昨夜焼きし谷田をとぎす朝靄のうえ一筋のけむり立つ見ゆ

一九七四年

積田 幸子

鈴かけの並木黄ばめる三月の夫の命日を吾が詣で来ぬ

一九五五年

来ましたよと吾が言ってみぬ一人来て夫の墓標に水たむけつつ

同

出口 律恵

窓よりの落日の影を永く曳きて聖（サンタ）マリアの像がし  
ずまる

年代不明

朝露を重くまといて花パルマ風吹けばふるる粗き地表に

同

暖かな色に替えたるカーテンの裾の辺重く秋風ゆする

同

制服に替えれば心晴れ晴れと夜学生の吾となりたり

同

在りし日の如語りつつ父母を祀れる棚のほこりを払う

同

より添いて君と佇む散歩路にたまゆら雲間を出でし月さす

同

寺尾 芳子

若き等は古き荒地を切り開き学資にせんとマンジヨカを植う

年代不明

新しき耕転機の音高くして若き等の影朝靄に溶く

同

早春の風の冷たき丘畑に淡々と木蓀の芽はたち初めぬ

同

反抗期をあらわに見する末の子がペキネースの仔を抱きては  
なさず

同

曲りたるままに剥きたる干瓢が夕べ真直ぐに垂れて乾けり

同

このつぎは菊見に来よとのたまひし母が菊咲く朝逝きませり

同

嫁ぎ来し日の想い出はミモーザを手折りてくれし夫のこわき  
手

同

寺岡 晃児

校庭の女教師の声透きとおるスイナンの紅鮮烈なる真昼

一九七七年

瞳に入るもの枯一色の山裾に春さきがけてスイナンの咲く

一九七八年

遙か来て州境の河の岸に佇つ総身に浴びる没日の反射

同

乾きゆくアポゼンタードの判みつむ三十年勤めし職業手帖に

同

ジャカラランダのむらさき空に溶け入りて懈きまでの午後の時  
とき

同

唐突にサラクーラのこえひびき来る乾季つづける野の茜空

同

訪日もし得ず「木杯」に年足らず老母の猫背に冬陽が薄し

同

寺田 賢明

夕ぐるるチバジー河の土堤の上呼ぶものもなく牛佇てる見ゆ

一九六五年

秋の蝶群れて飛び交う昼さがりパラナパネマは白く光れり

同



寺 田 新茄子

木の芽だつ霞にも似し朝もやのこめたる山辺に人畑をうつ

一九四九年

正月もすでに近づく日曜日子らが手になるパンがまはなる

一九五二年

野菜畑に施す堆肥土嚢に運びゆく我を妻の待ちおり

一九五六年

ナタールも一日晴天に暮れゆきて夕べブーロに餌飼う我は

一九五七年

しばらくを木蔭にありて憩いおれば甘き西瓜を子らがくれた  
り

同

寺 田 雪 江

訪いくる人もまれなるわが畠はつか大根ひとつずつ赤し

年代不明

暮れてゆく地平にしばし佇ちてありふりむけば太き宵の明星

同

寺 山 博

しのびよる秋の気配を伝えくる赤き柿の実初霜近し

一九七九年

土居 賢太

真夜中に電車をひとり待ちおれば風吹く空に星かがやけり

一九五四年

暖かき春の日ざしに水ぬるむ壕の浅所に小魚の寄れり

同

知らぬ町に今朝を着きけり日本語のラジオきこえて心明るむ

一九五五年

ブラジル語の話せぬ我は店に来て物をも言わず棚のみのぞく

同

竹椰子の葉をゆすぶりし風やみて牧原とおく時雨ふる見ゆ

一九五六年

雨宿りの時ながくなりてうみし時伯人がわれに物をいいかく

同

裏庭のくまどに枇杷の花咲けり冬あたたかき夕陽を浴びて

同

宵月は山にしずみて高原のマモナ畑はくろぐろと見ゆ

同

土居 はやし

睦じく生きよと父の声にして遺品となりし時計の鳴れり

一九六六年

海越えて来たるテープレコードより吾が名呼びいる老いたる  
母よ

一九六九年

弁当にコロツテ担ぎ通いたる野路舗装路となりし移住地

一九七八年

新時代の伯国社会を築くらむ日系市議等の顔ぶれ頼もし

同

視野はただ原始林にて怯えつつ少女の吾も小屋建てに通う

同

幾日も空の見えざる山焼きの煙に吾が小屋包まれて居り

同

うから皆斧ふりあげて開拓に干魚ばかり食べて励みぬ

同

小屋に住み野風呂を浴びてカンテラを点せば移民の哀しさ募  
る

同

買い置きの石油も乏しくなりたれば薪火にかざし読む故郷便  
り

同

浴衣をば解き縫いたる野良着より紺の紺の匂う郷愁

同

一瞬に湧きて流るる山の霧たちまち消えてまた湧きあがる

同

遠山 湍水

紅のブリンコ デ プリンセーザ風に揺れ夕立雲の拡がりて  
来る  
一九六一年

此の町に州知事が来るといふ今日を我はオルタのレーゴ掘り  
居り  
一九六二年

遠山 実

燃えつづく山にはいりて黒人と声合わせつつ火止め切りゆく  
一九七二年

徳尾 溪舟 — 垣寿 —

上るバロン子に示しつつ見る空の澄みたる青は冬の色なり  
一九四九年

体格よき伯大女が小さく居る我が隣席にどっかと座りぬ  
同

慰問品送れなくなりてより目に見えて郷里の便りは疎くなり  
ぬる  
同

教えもせぬブラジル語何時か覚え来て吾子等かたみに悪口言  
い合う  
一九五〇年

今朝よりは夏時間なり出勤する路辺に匂うボアノイテの花

同

サンジョンも暖く過ぎしと思ひしが七月一日雨降り出でぬ

同

罷業に入りし一団が屯せるところ早くもジヨガボーラに声挙ぐひと群

一九五二年

ポルテイラ過ぎれば広き畑となり列青々とさやぐもろこし

一九五三年

同胞のアマゾン移民も船出すと昭和二十八年新春の話題

同

年五割のインフレと聞けば小市民吾が設計などは果敢なごとなり

一九六〇年

つぎつに白紙貼り来る電車見れば今日より五ミルの乗車賃通告

同

断り兼ねしぶしぶ請合う県人会事務吾の気弱さよ死ぬまでなおらぬ

一九六一年

子にかけし望みも失せつ異国に働き疲れつ老い行く我が

同

腕組みて行く二世等のカップルよ移民のすえのかげりなど無し

一九六二年

朝五時の起床の鐘を憎みつつ起き出でし思い出も遙けくなりぬ

同

徳 永 悦 子

果てしなきアマゾン密林拓きつつ棲む吾が小屋の夜空は狭し

一九五五年

斧振りて休めば清し鳥の声アマゾン鶯と人は言うなり

同

水脈に達せし井戸は石灰の多き水にてまた無駄なりき

同

川水が一番うましと水の味アマゾンに棲みて始めて知れり

同

トメアスーより胡椒の苗木届きたり五本の母木をしみじみと  
見る

一九五七年

夕映えに清しく並ぶ胡椒園故国に老いゆく父に見せたき

一九六八年

乾燥場は陽光あまねく降りそそぎ胡椒の香り厨まで漂う

一九七一年

ピメンタの乾燥場に一粒のゴマは育ちて実をつけており

一九七六年

装いて嵌めたる指輪は節高き指に馴染まぬ光放てり

一九七八年

徳 永 マツ

霜にやけ陽にかわきつぐ珈琲樹の枝葉尖りて手は傷つきぬ

一九六三年

土産にと友の賜いし銀杏はほろ苦きなりふるさとの味

同

娘と孫と心豊かに茶をたてしあの四畳半よブラジルになし

一九六四年

徳 永 京子

驢馬が引くカロツサの鈴たちまちに消されて赤き砂たちこめる

一九六三年

霜害の異臭に明けるカフェーの耕地に赤き陽は昇りたり

同

土荒れし手のしわ深く二年目のブラジルの冬ひたすら草刈る

一九六四年

珈琲樹の起伏に続く路ありてそのみ赤き陽炎はたつ

一九六五年

悔多きわが過去なりしブラジルに老いて一人の安らぎに住む

同

骨も皮もとかして今は形なくポルコ一頭は石鹼になりぬ

一九六七年

少しずつ人間の生地のぞかせて今日賑々し日本人集会所

一九七三年

事足れるくらしと口に言いしのみ屑にんにくを掌にもみてい  
る

一九七四年

戸崎 清 作

父吾に似しか好き嫌い子等はいわず納豆も食うとろろ汁も食  
う

一九五三年

クワレズマの散る山峡の下道を人に後れてしばらく歩く

同

アポゼンタドリア受けんと舗道にはみ出たる列に僚友も幾人  
か居る

一九五四年

窓の外は霧雨となりジャカラランダの花はしきりに雫をおとす

同

この辺りに見慣れぬ黒人の子供等がまだ青き梨を噛みながら  
ゆく

同

うす濁る水もおだしきパライバ河このへん日本人の田作り多  
し

一九五五年

たがやしているありすでに植えしあり坦々と田どころピンダ  
平野は

同

柿いくつ高き梢に残りおりこの空日本に続くと思えり

一九五六年



オウム樹のいろどり多き町にしてバス降りて熱き珈琲を飲む

同

皺づきし農のこの掌よ移民という感慨もすでになくただ明け暮るる

一九六一年

末の娘が稀に日本語読みておりたどたどとしてその声愛し

同

農薬がいずこともなく匂い来る晩夏のひと日にんにくを播く

一九六二年

日本語のみの狭き範囲にある日々を折おり淋しと思うことあり

同

敗れたる老移民とみずからを君はいいて行商の荷を振り分けに持つ

同

## 冬至 とし

蒲干せる庭につづきて焼野より出でし茅花がまばらにゆれる

一九六二年

鋤きおえし畑夕映えて棉の花月見草をも想わせて咲く

同

マラリヤの熱又来しと佇つ夫に赤き月出づ今焼きし野に

同

廢耕の丘に見付けし花マモン吾子の命日は花なき季節

同

寄り合いて香上げる墓樹海より夕陽は遠く畑かげりつつ

同

樋田陽莊

妻と居て児等も寝たればのびのびと電燈低め酒のみにけり

一九四六年

雲間より射す陽明るき丘の上のアンテナ塔は天に迫れり

一九五〇年

殿岡照郎

独身の四十の日語教師にて学科なき日を花植えており

一九五七年

セー寺院の壁に小便をたれし汚点白日の下に吾は視て過ぐ

一九五八年

独立像のきざはし登り街の灯を吾と見し娘も嫁ぐと聞けり

同

子供らとサンペードロの聖火焚く背後にするとき冬の月照る

同

朝の窓あけて交せる「ボン ジーア」少しはにかみ少年答う

一九五九年

別れ来てオニブスを待つ陸橋下濃度を増して夜霧流るる

同

コーヒーの熟実いくつかポケットにしまいてパラナの旅は終らん

一九六〇年

言葉かけて墓石に酒を注ぎいる君も墓石も雨にぬれつつ

同

少年が靴を磨きて銭数うすでに大人のごとき貌して

同

板ガラスきしきしと拭き清めいる昨日の指紋もあれば消すべし

一九六一年

チョコレートなどは好かねば割るまでの楽しみなりきオーボ

デ パスコア

同

密売の黒きピストル ヴアルガスの如くにジャニオ死ぬなと思う

同

秋風は夜に生れぬ細々と吹けば愛しきBATMASTESOM

一九六二年

夕焼けて童画の如き街ゆくに神を讃える合唱おこる

同

富 尾 増 一

茶畑のどこに巢を持つ鶏ならん鳴く雛あまた連れて餌あさる

一九五九年

ブラジル語通ぜぬ客に笑みかけて煙草とり出し喫えよと指さす

同

富岡 清治

わが影を紫色に地にうつす午后の陽暑し山を焼く今日

年代不明

C・A・Cと縫取のある白き上衣借りて屠鶏場の見学者われ

同

さかさまに吊られし鶏の腹を割く人間の残酷に馴れし乙女等

同

生き死にの分らぬ一人の子をもてる涛声に逢う老目立ちたる

同

見舞いくれし友去りゆきし扉にゆるる二ツの鍵をしばし見て  
居り

同

桃蔭山房久々に来て庭の辺のささ濁りせる池はなつかし

同

庭に切りし印度ソケイの花重く墓地の花瓶に危く坐る

同

二重国籍の長男の死亡届書く私の署名に捺す認印の朱

同

マンジュバ漁る小舟舫いあり布袋草咲く入江の岸边

同

一生を貧と歌とに終始せる菊治は歌碑をこの国に残す

同

富 弥 す き

教員に還りたかりしと言ひし人のうすよこれせる位牌洗えり

一九六一年

霧の冷え身に沁む夕べ湖水よりとり来し鱒を塩つけて焼く

同

内職しひそかに得たる紙幣にてしわをのばして孫のもの買う

一九六三年

富 吉 好 人

ポケットにブラジル新聞さしはさみ酒のむ溪舟は今も変らじ

一九五一年

長雨は晴るともなし百姓の不作は直に我におよぼす

同

アジア風邪に妻病みふせば騒がしき子等を叱りつつ飯炊く我  
は

一九五八年

聯日会の為に盡せし甲斐ありて奨学舎教師に推されし我か

一九六一年

二十五年前に建てられしこの邦人の広き奨学舎にわれ移り来  
ぬ

同

総領事手植えの松が二階より大きく伸びて二十年経つ

同

日語にて又伯語にて交々の辯論聞こゆ夜の寄宿舎

一九六一年

寄宿舎の生徒が三人風邪ひけば医者のごとくに注射などうつ

同

全伯の歌会に出づると新調の服着て旅立つ二十年ぶり

同

二十年前に住みたるサンパウロ昔のごとく人に酔うわれ

同

竹筆を作り墓標を認めぬ老いし移民の葬いに来て

同

友 谷      きく子

化粧してP L音頭踊る時娘のように胸のふるえる

年代不明

内 藤      力 三

棉つみの彼方に聞こゆるバイオンに脚をとどめてしばし聞き  
いつ

一九六二年

自動車の修理終らぬ黒き掌を洗いて母国よりの手紙封切る

同

幾日か寒波つづきし霜の朝まぶしの上の蚕は動かず

同

かにサボテン咲き盛りたる鉢植の花をめぐりて蜂雀とぶ

同

芽ぶきたる桑の畑のそこに殺蟻の煙白くあがりぬ

同

リツシヤの花咲くべくなればカボクロ等言い伝えのまま稲播  
きはじむ

同

邦人の鍛えし鎌の切れ味のよさをたのみて桑切り競う

一九六三年

車中にて黒人の弾くビオロンに視聴あつまる旅のつれづれ

同

釣り舟がしずかに下るチエテ河樹海のかげを水に砕きつ

一九六七年

## 直 木      新

一むらの甘蔗たか穂の目にたちて丘のなぞえの夕日明るし

一九四七年

芋植えて見さくる牧のパイネーラ見るが楽しく木株に上る

一九四八年

麻州より牛渡す舟ようやくにま近くなりぬ太笛なれり

一九四九年

暴落せし薯売りすてて村人のユダヤ商人を声にののしる

同

手に布を巻きてミリーヨの皮をむく人は四か月職なかりしと  
いう

同

押して言う張合もぬけ異邦人とここに決めて馬鹿話する

一九五〇年

雷落ちて焼け伏している雑草にこがらしめきし夕風の吹く

同

五年前に借りしことある荒土地をふたたび借りてその草を焼  
く

同

一年を賭けて棉蒔かん野を焼いて戻ればしたたか腹減りいた  
り

同

ひと通り棉の間引きもすみたれば年越さんとして豚を屠りぬ

一九五一年

仲 美好

日本語を教え日本に留学させんと思えど子らは好まず

一九六八年

送り来し箱を開けば椎茸は故郷熊野の香りを放つ

一九六八年



中 込 良 子

焚火して花火の揚がるサンジヨンに郷里の祭りの宵が頭ちくる

一九六九年

中 井 秋 葉

自動車の通るたびにヘッドライトの明りが部屋を照らしゆくなり

一九五三年

中 井 小 鴨

酒瓶の栓をし抜くやちちのみの位牌に捧ぐそのひとつぎを

一九四七年

グワラニーが造りし猿の髑髏（されこうべ）木の実の眼玉睨める如し

一九五一年

わが友よ鄙のパラナ路訪い来ませ太古の杜にアラポンガ鳴く

一九五三年

中 井 寿美代

心急く仕事を終えて何時になく安けく居れば宵雨の音

一九五〇年

細き雨静かに降れる窓の辺に今宵も独りミシンに対かう

同

向つ山のゆるき傾斜の一ところ白く枯れ立つ黍畑の見ゆ

同

出水して汽車も通らぬこの日々よ街には既に買うポンもなく

同

冷々とき霧こめつつ朝明けの薄ら明りにサビアしき鳴く

同

何時の日にもまた来む海か遠く去る吾らは遊ぶペルイベ浜に

同

## 中 井 すみれ

家裏の垣に沿いたる芋畑いよよ繁りて畦間ふさげる

一九四六年

古橋が顔の滴を手で払うたまゆら君が愛しき面輪

一九五〇年

ユーカリの岡に続ける峡の空虻の輪の下バナナ貨車行く

一九五一年

鄙に来て板家に住めば今宵しも鳴く蟋蟀に心寄り行く

一九五二年

猩々花の紅葉映ゆる墓どころ夫逝きてより四年経にけり

一九五六年

亡き夫の今年は早も七年忌移りて遠き墓處を思う

一九五九年

孫が作りし小型ラジオの透る音は心に沁みて老いを慰む

同

薄き眼に街路樹見れば何の木か若芽吹き居りみ冬過ぎつつ

同

中 井 鉄 男

中ほどにアゼイテ河の水光る蕉林盆地の町しずかなり

一九五〇年

イタチンスの裾辺ただよう霧雲はこごし岩根に寄する波のご  
と

同

海鴨はかたみによりつつ沖つ辺を磯島さして鳴き渡る見ゆ

同

朝嵐雨を含みて吹き来ればアゼイテの嶺に雲たちさわぐ

同

ムダンサは母のいれ歯のすむまでと心定めて銭数え居り

一九五一年

木洩陽のゆらぐ岨道苔匂う山の深处にアラポンガ鳴く

同

帰り来て街を歩めば好況のパラナのさまを誰彼が聞く

同

ユーカリの林ひかえし山房の白壁映ゆる桃園の中に

一九五九年

古郷のふりに作らす蕎麦の味胡椒ふりかけ幾椀を代う

同

桃の木の蔭に廣葉の蔭あれど春浅ければ臺見あたらず

同

営々と接木する状見ていたりやがて實らむ国産オリーブ

一九六一年

## 中井 益代

辛うじて吾子らに教え来し日本語いつまでかここに保ち得べきや

一九五二年

日本につながる歴史つづり行くひとりと思いややに慰む

一九五四年

閉ざされし未来明かるむ思いにて入試合格の電文を読む

一九六二年

薄明を孤つ蝸の声透るひたすらなればきざすかなしみ

一九六七年

何を聴かむと佇ちいる吾か人間の終の棲処の夕寂まりに

一九六八年

ひびき合うものは互みに持ちながら会話乏しき子との日々

一九七一年

旅遠く行かば心は鎮まらむ国籍喪失ににかなしみも

一九七九年

中井 廉二

一列に並ぶ牛蒡の廣き葉の葉裏白きを煽る川風

一九五一年

窯の中に火と土と藁は混沌と火拳の壺は焼き上らんとす

一九七九年

土肌に温かみあり膝の上に撫で慈しむ無釉の壺を

同

焼き締まりし無釉の壺に手を触れてその荒肌の素朴さ思う

同

技を磨き子らに遺さむ火拳の壺を焼かむともはらなり我は

同（注・拳はネ偏に拳）

世に拙なく生きて来たりし七十余年残年をかけむこのすえもの

同

火拳の湯呑に茶をば注ぎしとき手に持つのみに心はなごむ

同

積み藁のにおい漂う畑に来て農に生きいし日を思い出づ

同

中 江 克 己

群れなして植物講義は移り行く蚊張吊草の丘に向かいて

一九五一年

女子の告げ得ぬ嘆き言う妻よ吾娘の初潮の始末を終えて

一九五四年

珠はじきあまくなりたり算盤に寄りし生活の既に久しき

一九五七年

埒もなき事にこだわり居たる時門に娘ら華やぎ戻る

一九五九年

卓上を片付け終えて帰らんよ融資査定は明日に持越し

一九六一年

葬り来て心いびつになりて居り既につながる何物もなし

一九六三年

バラの芽の伸び止りたり庭土の乾きかわきて雲も動かず

一九六四年

白き花許多つけて軒低く泰山木は昏れを占めおり

一九六五年

孫の掌を取れば温くとし寄りて添うこのいとしきに溺るる可  
しや

一九七六年

河一つ越えればパラナ赫々と大豆畑は陽を吸いて居り

一九七七年

仏心と言うには遠し生き残る者の務めと参り来にけり

同

要塞の遺跡に添いて景をなす立木サボテン海に傾く

一九七八年

草の穂の絮づく季か風白く市街地区割は丘に展がる

同

庭隈のベゴニアの葉の色づきて日影かそかに移るとすらし

一九七九年

鰯雲未だ動かず大よ所に奥地乾季も定まりてゆく

同

長尾 猛

物置きに壁に吊るせる玉ねぎの青く芽ぶきて降りつづく雨

一九五六年

吹き通しの夜の電車で戻りきて靴脱ぐ時にたるる水洩

同

地下室の職場に日々を暮らしてわが手のひらに弾力のなし

同

書き上げし家出の記事にかかずらい裏窓によれば昏き冬空

同

乾きたる唇なめて冬に入るわが給料に小銭の多し

同

郊外は桃のさかりと聞きながら誤植を探す昼の灯の下

同

眉下げし金貸しの面憎むなり鉛筆の屑吹き飛ばしつつ

同

父の病む隣の部屋にわれも病みて小さき庭に枇杷熟るるなり

同

日本語を知らぬ吾児らの育つなり戸を打ち閉ざし仏具を磨く

同

帰国する日のありやなしや草履はき大切株の年輪を撫づ

同

長き箸ゆるゆる使う支那人の丸き肩見るわれ疲れつつ

同

繭景気の村が迎えし入植祭今年は新移民もまじりて踊る

同

雨期に入る雨暖かし隣り家は貸家のままに桑の実熟るる

同

泥つけし長靴のまま酒をくむ明日はミナスに発つべき君と

同

二十年やもめ暮しを守りきし父よすこしは愚かともなれ

同

州境の町に入りきてとりし宿夕となれば暗き灯のつく

同



## 中川 荒記

移り来て三十年を重ぬれどわが家の風呂はドラム缶なり

一九六四年

一色に生え揃いたる旧耕地等高線のうねり際立つ

一九六五年

忠魂の二字を彫りたる額一つ主と共に古びていたり

一九六六年

聖堂の前を発ちゆく学生のデモ行進に降る雨の冷え

同

立枯れの白穂に触れて米作に賭けし期待のまた崩れゆく

一九六九年

十字架に藻草まつわり湖底より死者が脱けくるごとき泡立ち

一九七〇年

水道の蛇口ひねりて掌(て)に掬う日中の水はしばらくぬく  
し

一九七一年

釣る人もなき午後の湖ふくらみてカヌーはゆるる繋がれしま  
ま

一九七二年

幾らかの不満を持ちて来し席にもの言うわれをうとむ眼があ  
り

一九七三年

アラポング啼きしパラナ路向日葵の黄が残照に向きて傾く

一九七四年

畑中に伐り残されしイッペーの一本を照らす冬の陽があり

一九七五年

宵迫る湖上を低くたゆたいて黄の蝶一つ渡り来るなり

一九七七年

段畠もある集落の背景にバルバ　デ　ボーデの山脈が連なる

一九七八年

諍いしこともありたる由縁にて君が名前の墓文字を書く

同

やせ細る姥を見舞いて「木杯」の選に洩れしは言わずに戻る

同

旅を来て疲れし者の眼に優し手を広げ立つキリストの像

一九七九年

商いもなく日の暮れを帰り来て古き鞆のほこりを払う  
同

中　河　　信　　― 佐々木　新 ―

漸くに上回りたる産卵よ母が記帳の鉛筆くれという

一九四九年

たった二つのレポ―リヨを売るために往復二十分の山を下り  
ゆく  
同

食欲の無きカマラダに酒飲ませ卵二つを握らせ帰す

一九五〇年

胎盤を捨てに出でゆく親父あり一つの井戸に汲みに来し時

一九五三年

エンシヤーダのくさび締めんとユーカリに打ちつけている妻  
と夕日と

一九五六年

新しきトラトル買いしが乗りて来る村の日本人会総会の会  
場

同

日本人会に入会を拒否する一人いて日本語教育学校なきを理  
由とする

同

軒なめてホテルの多きアパレシーダ街坂をゆくわれら日本人  
の一団

同

日本人遂に見かけず通り過ぐるピンダの街に潤魚を思う

同

二十余年農に過ぎ来て転業の商人となる心かなしも

同

中川原 正子

かさかさとガジュマルの落葉の音きこゆようやく長き夜も明  
けそめて

一九六一年

話している間にも商談成りたちて友は手早く苗包みいる

一九七四年

誰も居ぬ芝生の中のブランコは風のまにまに揺らぎておれり

一九六七年

何時よりか手荒くなりしことなどを思いつつ温き鶏を割きおり

一九七七年

フランボイヤン今を盛りに園に燃え黄昏どきの空を彩る

同

隕石の落ちたるらしきたまゆらの青き光が厨にあふる

一九七八年

キリキリと目覚まし時計巻きつくる気負いの程の事も成し得ず

同

主婦吾の負目のひとつ返り来し寒さに指のあかぎれ痛む

同

山鳥の声澄み透りしばらくは喘ぎて登る岨のほそ道

同

見下ろせば杜の麓に杣家ありてか細き径を降りる人あり

同

中川原 実

秋雨の冷えて続けば工房に仕上げし卓の抽斗軌む

一九六八年

築山の石の間を沁みて落つ水一様のひびきをもち  
て

一九七六年

幾起伏いまを盛りに珈琲の二番花咲きて遠白く見ゆ

一九七七年

古稀近き吾に職持つ自負ありて除草姿の移民像彫る

一九七八年

畜産展の青芝を刈る人夫等は牛舎のかげで大鎌を研ぐ

同

天井裏に小猫さわぎで気が散ると妻は手荒くピアノを閉ざす

同

入賞のフイツタを掛けし乳牛の鼻づらなでて吾子は引き出す

同

中 沢 綾 子

グレーベにて児等の影なき校庭に鳩の一群れむつみて居たり

一九七八年

故郷とやさしく呼ばむに吾が身にはしるき記憶の山河は無し

一九七九年

かじかみて表情もなくバスを待つ人を包みて陽は和かし

同

静もれる家内に鍵音一つして夜学より娘の帰り来たりぬ

同

寄り縋る術なきまでに冴えざえと凍れる月に冬の声聞く

同

仲 地 良 子

放課後となりて車に乗る我にいつまでも子等は手を振りやめぬ

一九五五年

朝の日は車内にさしてあたたかに遠山脈を見放けていたりき

同

名 沢 康 子

病院のジャカランダしきりに散る舗道今日も会いたり犬連れし人に

一九七八年

買物にこの坂ゆけば塀越しにレモンの花がほのかに匂う

一九七九年

雨雲を追いて牛馬は走ると言う大旱魃のニュースに聞き入る

同

牛群れる牧の流れに濯ぎたる遠き乾季の思い出が顕つ

同

中 島 正 男

新墾の太き木立の影のある珈琲園に伸びゆく珈琲樹

一九五四年

中 田 武 男

希望もち闘病続けて居る我に自殺の記事が太く目につく

一九五三年

ブラジルを母国と決めて生くる我に帰化する心いまだ熟せず

同

大霜の朝にて療舎の下道をはだしで歌い行く土民あり

同

ジャニオ旋風のあおりを受けて療養費に我も悩める一人となりぬ

同

二十五年馬車馬のごとく忸きて病み臥せしまま五年も過ぎぬ

同

蝶一羽舞い来て病める我が腕にとまり水色の羽を閉ざしぬ

一九五四年

クワレズマは森に満ちおり療養の明るき歌を我は詠みたし

同

空洞の位置などひとり思いおり痰の出やすき横むきに寝て

同

草の実のつくが嬉しく長病の足をはこびて深くも来たり

同

窓を射す日にすかしつつ我が手相変り来しかと思いつつ見る

同

束の間に君死にゆきぬ命あるものことごとく偽りに似て

一九五五年

夕立に打ちひしがれしけしの花今朝は光りに頭をもたぐ

同

外国系の療院多きカンポスに日本移民の貧しき療舎

同

山頂に十字架立ちてひとすじの道が通れり帰するがごとく

同

仏像の如くにニグロはたちて居り梨の紅葉の燃ゆるが下に

同

これ以上生きる望みは更になしはげしかりしよ三十年は

同

中津井 紫 露

此の町は我が同胞がたてしゆえ街路の名にもはらからの名あり

一九五六年

雨あとのつよき夏陽に庭の辺に落ちしピツタンガはあかあかと映ゆ

同

久方の母の便りは仮名書きにて基地闘争の事もつたうる

同

萌えそめしさ庭の桑の枝うつる小鳥の群れにサビアまじりて

一九五六年

物思い静かに浸る風呂の面にカンテラの油煙は音なく浮かぶ

同



月明き湯殿の窓に妻は佇ち細々告ぐる留守中のこと

同

強制支払いの通告受けてこの朝公務所の木椅子に順番を待つ

同

声ひくく述ぶる釈明をタイプする若き公証人はガムを噛みつ

同

荒々しく品選る街の娼婦らも何時か馴染みて顧客となりぬ

一九五七年

けばけばしき娼婦も店の顧客にて心安けく応待にたつ

同

蒔き付けの整地を終りし百姓が棉種代借りに幾人も来る

同

銭なくて購い出来ぬ週末も習いのままに集いくるカボグロ

同

くらしむき豊ならざる我にして母国観光募集のラジオ聞きおり

同

長 友 安 徳

吾がことにあらねど寄付は貰いに行きて作物の出来もほめて  
帰れり

一九四九年

吾が男の子遂に生れたりこの願いああ十年の長き年月

同

馬鈴薯の消毒終えて疲れたる夕べ小川に噴霧器洗う

同

これ以上産みたくないと言う妻の産制に吾も素直に同意す

一九五二年

雑踏を行きつつ額に汗流す子を抱く吾も荷を持つ妻も

一九五三年

今日の午後豌豆二列くくり終え既に冷えゆく夕暮れとなる

同

六十俵玉菜出荷して疲れたり今宵は娘等に肩をもまする

同

蒔くことを吾が反対せし小豆穫れ今日は食うなり汁粉作りて

同

丈合わぬ長き白衣を吾は着て朝々散歩す長き廊下を

一九五五年

七人の子等をかかえて失職せし嘆きは吾より妻が大きく

一九五六年

教員の吾の未来に何がある思いわびしみ坂道下る

同

病癒えて一月振りに来し校舎に秋の陽のさす位置変りたり

同

中 西 岳 人

山の辺に畑をへだてて白き家まばらに見えて邦人の住む

一九六三年

日本の母のよわいを思いつつ久し振りなる手紙書きおり

一九六四年

中 西 静 世

椿苗ひとつ求めて植えしこと日記につけて今日の終れり

一九七四年

手にとれば野の香りして菊ににるセンプレビーバは紙の音た  
つ

同

祝宴の華やぎの中しらじらと別れのキスは頬に冷たし

同

手にとれば湖の匂いの残りつつ水草の根は鉢に馴染みぬ

一九七五年

こぼれ落ちし硬貨が立てる音ひとつ午後の舗道のざわめきの  
中

同

ほそぼそと灯火もれくる村の家崖より暮れて物音もなし

同

冬雨の暮れ早き灯にすかしつつ幼き子らの髪切りてやる

一九七七年

黄塵の舞い上る中粗壁のれんが乾けり首都の八月

同

みんなみの町の寒さを言いながら旅立つ朝の低き雨雲

同

谷に湧く霧にまざれて細々と山家に上る炊煙のいろ

同

紫陽花の花壇ひとつ影おとす朝のホテルの白き円柱

一九七九年

仲 根 香 樹

夕日光いまだ明るき山峡の空鳴き渡るトツカーノの群れ

一九四八年

はてもなく松原つづくパラナ路の山奥ふかく入りて吾が来し

同

棉の葉をみな翻しつつ向かつ畑夕立にさきがけ風渡る見ゆ

一九六七年

朝より時雨るる森にイナンプーの一声啼きてそれより聞こえず

同

我が欲りし馬は飼われず牧場は草のみ繁りこおろぎの鳴く

同

カマラダに出る朝なりとく起きて鋤のくさびを強く打ちこむ

同

パイネーラの花の散りたる梢には実のまばらにて秋深みけり

同

民族の将来を語る夜の客のきおえる言葉に淋しくなりぬ

同

太筆にて工場のマーク記したるサツコのシャツを着て伜けり

同

中野 いき

みどり児を胸に抱きて学ぶ夜に更けて凍れる十字の星光

年代不明

中野 鉄城

立ちのきの悲慘は戦場さながらに西に東に追わるる同胞

年代不明

永野 青蛾

棉つみの人夫をのせしトラックが帰りつきたり暮れなずむ町

一九六六年

新しき息吹きに満ちて活気あるパラナバイの町をわが町とする

同

霜害に心おののきコーヒーの葉にさわりつつのぼりゆく道

同

生産過剰を思いながらも霜害のコーヒー園にミリーヨを蒔きぬ  
一九六七年

珈琲の蕾ふくらみ枝に重し雨待ちて咲かん気配にみちて

同

中村 式衛

老父母の金婚を祝し羽田より子らがおくりし緋牡丹の花

一九六九年

中林 俊二

冬空に果てしなきゴヤス高原のパストは枯れつ牛群れを見ず

一九七八年

仲 其 美登里

旅にいてうつつ心もあらざりき日本敗戦の記事を読みしたま  
ゆら  
一九四七年

中村 俊二

移民祭への参加をかねて妹二人老母に逢わんと空飛び来たる

一九七七年

表情かたくカブラル章を受けている義兄の写真を切り抜く老

妻は

一九七八年

初めてのピクニックにてキロンボの湯に温まる老人われら

同

ボツカツの山の景色よ日輪は赤く夕靄に浮きているなり

同

中村 たえ

枝切りし松のしきりに匂えればマンダガリイが寄り来て群れる

一九五七年

裏山のかげが我家を包む頃ねぎと白菜を抱えて帰る

一九五八年

廃鶏を出したる鶏舎に入日射し餌箱のみの並ぶ静けさ

同

灯に寄りて指輪に細く刻まれし子の嫁となる人の名をよむ

一九五九年

桜咲く我が故里に帰り来て此のしあわせを頒つ夫亡し

一九七三年

朝寒きビラコツポスの雨の中我が住みなれし国に戻りぬ

同

塀越えて冴え冴えと咲くつるばらの我が寄る窓にほのかに匂  
う

一九七九年

汐引きし入江に貝を漁る時見さくる沖に巨船動かず

同

中村 孤雁

エンジンの音朝の氣に冴えにつつ子は日曜も畑をすきおり

一九五五年

中村 健夫

陸橋をのぼりて来たるバスの前つつじの花の咲き盛る見ゆ

年代不明

中村 とよ

水銀灯のあかりの下に街路樹はおのもくろぐろと影を落とせ  
る

年代不明

孫たちに会うがうれしく朝早く街路樹しげるアベニード行く

同



窓べりにおける鉢植南天の葉のくれないに朝の日のさす

同

中村 豊子

望郷の思いに耐えて訪日の夫見送りぬ病の床に

一九七三年

渚行く吾につき来て異人の子が日本の事をばつきつきと問う

同

マクンバの祈禱ありしか青々と笹立ててあり朝の浜辺に

一九七八年

山間の部落に煙り立つ見えて祭日今日はサントアントニオ

同

灯をともし流るるバロン追うごとぐ一羽の夜鳥飛びゆくが見  
ゆ

同

中村 秀夫

新移民が荒らして行ける此の耕地草種子のみの被害にあらず

一九六三年

中村 幽情

転住と思ひさだめて道遠くパラナの山を友と視察す

一九五〇年

いみじくもパラナ松原遠見つつ飲む珈琲は土の香ぞする

同

雨未だ達しと思う高原の風は渦巻くわが前の樹に

一九五一年

中村 洛水

店を守る暇にラジオを聞き入れば祖国日本を属国のごと云う

一九六〇年

霧こむるモジの山並み低くして牛の草食む静かなる原

一九六一年

中山 修南

フアゼンダの朝の鐘の音ききいたり遠いむかしをなつかしみ  
つつ

一九六三年

見はるかす秋空に立つクヤバ富士振りかえりつつ別れを惜し  
む

同

移り来て還暦も既に過ぎ去りぬ夢のごとはかなく逝くか一生  
(ひとよ) は

同

心温まることすらあらずこの国に夜々仰ぎ見る南十字星

同

## 中山 稠子

亡きははの遺骨を護りて帰り行くつい希願（ねがい）も忍ぶべき世か

一九四九年

天皇制の廃止をさえあげつらう自由となりし大和島根か

同

衣を隔ててかようおみな感触の仄かにしつつ通夜に連なる

一九五〇年

断念（あきらめ）し帰国にかわるなぐさめを持つにもあらぬ

山の明暮れ

同

山に来て朝々深む霧を見つ霧はま白く淋しかな

同

深谷にそそれる山を切拓き此处にも同胞の住居せる見ゆ

一九五三年

茅芒（ちすすき）の穂絮飛び交う高野原ひとりの路を呆けつつ歩む

一九五五年

遠街（おんがい）の灯かげにおえる空の色明日は大統領が通過するとう

同

過ぎ行きはまたたく夢と流離わが二十四年をいまかえりみる

一九五七年

すめらぎのい坐す日本をおもうとき吾が行く果てのふくらみ  
来たる

同

## 中山 葉子

とめどなく夫をなじりて出で来しが言い過ぎせしと悔い思い  
おり

一九五〇年

年老いて病む日の多き舅姑は灸すえいたまうかわるがわるに

同

ある時は帰国を断念せし母上も希みつのりていらだち給う

同

新聞の訪日あいさつを母上は声に出だして読みあげ給う

同

アスファルト溶けゆく午後の三時頃飛礫（つぶて）の如く救  
急車行く

同

いささかは濃過ぎたりしと気にしつつ引きし口紅の明るさに  
おり

同

看護婦が出で行けば手当ての不届きと食事の粗末をみな言  
い出づ

同

吾が臥る窓の対かいに調理場のありて折々皿ふるる音

同

移り来て町に出づれば赫土に汚れし犬が吾につきくる

同

マンガうるる頃としなりて子の腫物とみにふえきぬすこやかなれど

一九五一年

白ぬりの塀に沿い行けば荷を持ちてまろくうつれる吾が影あわれ

同

内職の賃金を得むとパトロンの不在の店に待てりほとほと

同

家貨など気にしつつミシンふみおれば吾が足元にからみくる猫

同

## 中山 弘

去勢終えし豚が流せし血によれる冬蠅いくつ去るとしもなく

一九七一年

ウルブーが低く舞いおるに近よりて見れば大きな牛の死骸あり

一九七二年

子供らに小旗で蟻の巣をマークさせ吾らは棉の蒔きつけ急ぐ

同

よき湿りかなたこなたに種を蒔く風は播種機の音つたえくる

同

長 良 晶 子

夜毎来て黙々と酒を飲む君にそびらをむけて鶴を折りいつ

一九七〇年

あかね雲流るる果てに君在るを思いひそかに今日も粧う

一九七〇年

ねむの花恋しき人の肩に散る船の灯りのゆらぐ浜辺に

同

梨 本 雨 情

高齢者何れおとらずすぎ去りの労苦のあとの皺ふかき顔

一九六七年

夏 井 緑

子をはげまし日々炎天に鋤引けど収支の合わぬ農を嘆かう

一九五六年

つづまりは農を捨てぬ夫とあきらめて今日も灼けつく畑に出  
でゆく

同

鍋田 都川

ひげ剃ると鏡にうつる吾が顔の老いゆくままに父に似て来し

一九五八年

窓明けて朝日射しいる病室に今日退院の荷をまとめおり

同

幾度も思い直して又遂に移転ときめて今宵眠れるか

一九六〇年

神戸にて買いたる食器まだありて思い出の種にと妻は保存す

同

屠所近く坐りて動かぬ拗ね牛の血を噴く程に鞭打たれおり

一九七一年

この一生不如意のままに終るらし古稀も半ばとなりたる我の

同

故国より持参の足袋を寝るだけのたのしみにして妻は保存す

一九七二年

行方 正治郎

我が生命（いのち）賭けて育てし此の村の湖底に沈む日は迫り来る――九億立方米のダム建設工事進む――

年代不明

集団移住の企画も遂にむなしくて思いおもいに去りゆく村人

同

三千本超ゆる果樹らよ三十年の起伏しみじみいま顧みる

同

五十余年の移民のくらし来し方を顧みて心悔ゆることなし

同

五十余年此の国に住み孫子等を育てし事を幸とせむ

同

五千籽空の旅来て下りたちしフォルタレーザの夜の空港

同

マラニョン迄続く砂丘を見遙かす吹き上ぐる砂の嶺に佇ちて

同

潮風の吹き上ぐる砂おびただし椰子の林は半ば埋もれて

同

奴隷等が故郷アフリカを望みつつ泣きしとう断崖の上に来て

佇つ

同

カルナウバの疎林密林打続くセアラの野は焦(や)くる炎

熱

同

ジャンガードより揚ぐる鮮魚を砂の上に投ぐる仕ぐさをしば

し見ており

年代不明

サルヴァドールの紺青の海見さけつつ生(なま)ココの水に

涸きをいやす

同

流刑者家族と共になごみ住む島はゆたけき椰子の密林



同

古き砲赤く錆びつつ要塞の跡にも流刑の人等住みつく

同

並木 野の人

イバイ河闇夜を渡る舟の中煙草の火のみ真近に赤し

一九五四年

一日を働き終えし夜の庭にこおろぎ鳴けば目を閉じて聴く

一九五六年

色黒き大学総長を仰ぎ見つつ人種に差別なきブラジルを讃う

同

望郷のうたも幾つか書きのこし死にたる人の墓に降る雨

一九五八年

パイネーラの蔭深きところ足投げて行商人は銭かぞえおり

一九六二年

声かけてコーヒー採集の人過ぎぬ朝五時を告ぐる鐘の鳴るとき

一九六六年

音たててニグロ親子が競い打つ豆がらは白く秋の陽に飛ぶ

同

眉あげて子の説く未来うべなえば移民の裔と言う翳はなし

同

ふるさとの山の名つけて住み古りぬコーヒー樹海の中の小山に

一九七二年

九月七日独立記念日の行進に胸張りてわが孫も並べる

一九七五年

## 奈良 一 美

訪日のよろこびの日を夢見つつ我は耐えきぬ四十幾とせ

一九七八年

年を経て記憶うすれし故里へわれは豊かなる夢を廻らす

同

訪日の意慾を持ちて今日もまた過労おしつつグラマ刈りおり

同

## 檜 崎 巧

此処なれば永住の覚悟なると妻言う故郷の景に似たるが故に

年代不明

雛（ひな）四百と墓標立てたり焼跡に二十日（はつか）の命

あわれと思う

同

金箔の仏壇新し妻の居と位牌おさめて心安けき

一九七八年

成田 恵美子

河霧のたゆとう中に人の気もなき山畑に一人棉摘む

一九五七年

朝露の葉群を分けてピラボ河ニグロの小舟今出でにけり

一九五八年

弓なりにかたむき立てる対岸の木づるに遊ぶ六匹の猿

一九五八年

成瀬 弘

美容院に妻が行きたるそのひまにボールにてすする熱きコー  
ヒー

一九五三年

節くれしわが指にはめて三日経し結婚指輪をはずしてみたり

同

うす汚れしノルチスタの一団が街灯暗き舗道を横切る

同

穂草白く風に光れる畑の道耕馬をひきて昼餉に帰る

同

昼曇り明るく晴れてゆきながら僅かの雨を此処にこぼせり

同

素枯れたるトマトの棚をこわしいる隣家の娘らのシャペウ

デ パーリヤ

同

縄手 敏夫

空腹の脚踏みしむる夜の駅己れの街に着きし安らぎ

年代不明

枯草の丘いつさんにかけて下る獣の如き童子ひと群れ

同

教会の高き鐘楼真陽うけて発光体の如く光れり

同

南海 孤舟

浮草の花咲く池に赤トンボ二つ来たりてしばらく飛べり

一九四九年

南條 千枝子

戦争へつながる思いけしがたし十八の子のファルダ濯ぎつつ

一九六一年

大統領の重大発表とダイヤルを合せて子らは吾を呼びに来ぬ

同

此の国に生れし子らと共にさだかに聴かん国のなやみを

同

南 條 由喜夫 ―長島可山―

耶蘇教は邪教と罵る臣連の人には抗わずクリスチャン吾は

一九四九年

マ州より河幅二籽をわたりくる風冷えびえし顔痛きまで

一九五五年

道の辺に牛を屠りて木の枝に吊しし肉に群がる人ら

一九五六年

棉の値のよきなどバスに同胞は人なき如く日本語つかう

同

八月の曇天にしてイツペの花黄にかがよえる丘ひとつみゆ

同

桃の苗植えしがすでに芽吹きおり実らぬ緯度というソロカバナ

一九五七年

チエテ河の水くろくみえ音もなくもり上りつつ曇りに光る

一九五九年

ひとときの昼のねむりのさめし時アバカテの葉に重き風出づ

一九六〇年

生き居れば時に花野の樹の翳に来て手づかみにシュラスコを食う

同

パラナ河に連なる湖と聞きながら見の限りめぐる森の寂かさ

一九六二年

椎茸と海苔の香のするこの雑煮日本を近く思いつつ食う

同

過ぎ去（ゆ）きの何に揺らぎて湧く悔いかアバカテの樹の蔭  
ふかく居て

一九六三年

吊しおくバカリヤウ一つ雨ゆえに稀に雫のしたたるさびし

一九六四年

聖州の季に土に馴れバイヤ椰子黄の実豊かに熟れ光りおり

同

## 新 納 潤 魚

しばし吾が身をかくしおくバナナ林ひそかに昧（くら）く蜂  
どりは啼けり

一九五一年

畑の土やわらかくなり幼子らちに蹤ききてたのしき季なり

同

クルゼイロ ド スールめぐれどいね難し亡べる王の裔の如  
くに

同

中風の妻にかわりてきざみいつ胡瓜が発てる香にも耐うべく

一九五六年

捨て鋤の風化を隠し冬の草エルバ サンジュオン道を埋めた  
り

一九五七年

くるしみに耐えいむ妻が背をむけてみつめる蟻は曳くあかき  
バラ

同

幾許か儲けし金に陶醉（よ）いたるを傷痕として渴く冬街

同

たまたまに出でたる都街瘦身に浸みとおる如キャデラツキ過ぐ

同

赤屋根についにとどきし唐黍の揺らぐを遠く望み見ており

一九五八年

ひしめきて下種を果せしカツピンの穂先よほそりほそり行きおり

一九六〇年

蟬時雨つづく埃の間路に裸足のひとの指型ふかし

同

還るなき日の自らが計量（はか）られているらし吾子が薪を割る音

一九六一年

土硬く乾きてバナナ プラッタの痩せし房実を仰ぎ求める

同

慣れ難きフバーの粗き粉を食しわが魂魄を養わむとす

同

疑いを持たざる長き列なして納屋のミーリヨを蟻は担げる

同

さか吊りにさげられ鶏の見開ける目がたどりおり牧の細道

同

日系の子らが五官を育てむかフバーを妻が練る音きこゆ

一九六四年

港より船の汽笛のとどく窓移民なること忘るるならず

一九六八年

破綻ぎりぎりの線を歩み来て老農と言う足どりをせり

同

アルファセ玉と結びて掌に重くわれに残れるいのちを訊す

同

新山 充

寒波おそれ畑の西瓜に覆いする無理できぬ腰労りながら

一九七九年

野菜植えて今年も又運なしと佇つ大霜の畑に朝陽が昇る

同

久し振りに手紙書きいる夜の更けを屋根うつ春に入る雨の音

同

西 真弓

ひた走る車の行く手明るみて山壁のみに霧はただよう

一九七二年

西岡 うの

移民という吾が越し方の四十年を病めばしみじみ思う日のあり  
年代不明



店先の賑いに昼はまぎらえど語る夫亡きその夜は長し

同

西 礪 秋 翠

終戦の詔をばかしこみて吾は励まん祖国のために

一九四八年

西久保 希与女

雨雲の低くたれたる切れ間より射す日の光部屋に明るく

年代不明

咲き満てる白き木蓮池の面に影をおとしてゆれうごきいる

同

遠く来てつかれおぼゆる此の夜を部屋にこもりて波の音きく

同

ミナス路を走る車窓にひろごれる牧場に牛の群れている見ゆ

同

西久保 多介之

角笛にみちびかれつつ蜿々と牛の群れはも並木路を行く

年代不明

西 田 季 子

椅子の上に膝折り曲げて座り居り一世移民の老婆小さく

一九四六年

いたわる如繰り返す想い一つありてその時心瑞々開く

一九六三年

火酒の中にレモンを潰す手つきすら慣れてさびしき老移民ぞ  
夫は

一九六九年

かりそめの縁と想う現身にふれてサルビヤの花散り易し

一九七三年

またたきに似てかすかなり蜂雀花サルビヤに来てとどまらず

同

交配の終りし黍の吐く息の青さよ乳房のかすかな痛み

一九七四年

断続の夢皆過去につながるに杜は濃霧の白き夜明けか

一九七五年

山鳩よ切々と啼け老いて尚心しきりに荒るる日のあり

同

一年の月日を泪と呑み去りて視野をさえぎる白濁の霧

一九七七年

祈りしは平安な日々石の上に座して瞑じて心したたらす

同

西 田 孝 徳

オニブスの中にて大きく地図開く我は一人のツーリストにて

一九五五年

衝突せる油送車の油流れ行く川下に生きいる魚を思えり

一九五六年

サンベントの晩鐘聞こゆ人波の中なる我の歩調はゆるむ

同

バスを待ちつつ電光ニュースの中に読むアウトモベルと銀行  
の広告

同

拡大鏡はずせばしばし目がかすむ電光の下に夜業終りて

同

杖つきつつタラップ下りて来し母の皺探き顔にまなこ輝く

一九五七年

水栓の洩れ水いたく気にかかる熱少しある寝苦しき夜

一九五八年

理由なく心しづみて居れる夜エレミヤ哀歌声出してよむ

同

いなずまに空のあかるむ瞬間に老母の小さき姿を見たり

一九六二年

ろうそくを持ちて入り来し妻の影うしろの壁に大きくゆるる

同

寝返りも叶わぬままに置かれたる朝の位置に夕べ迎える

一九六三年

片側のみ陽のよくあたる我が足が他人の足のごとくに黒し

同

西田 照子

風たちて夕餉の煙ながれゆく己がなやみもかのはてに消ゆ

一九六三年

西田 はるの

薬師様に安産の願かけしとう変体がなの母の文来ぬ

一九六二年

漸くに鋏にもなれてささやかな幸の日々と母に文書く

同

西館 康子

イグアッペの浜辺に佇ちて古里の幼きころの海を想えり

年代不明

旅人の心和ますイグアッペの丘のキリスト白く光れり

同

イグアツペの丘のキリスト見えくればわれ古里へ帰りしごと  
し

年代不明

西原 義作

農捨つる子の意を変うるすべもなくわが焚く薪は樹液噴き出  
す

一九六六年

西 灘 攝津夫

君も酔い我も酔いたりステップも乱れて鶏のときの声きく

一九五〇年

叱らんとして叱り得ず高々と子をさしあげて笑わしてみる

同

椰子林の彼方に赤き屋並見えて牧畜村はたそがれてゆく

同

柿の実のほの色づける枝もれて夕陽さしこむポロンの事務室

同

あら草の色おとろえて一所穂に出し萱の白き波立つ

一九六七年

路の辺に百日草の花枯れて半ば朽ちたる十字架立てる

同

赭土の埃たちこめたそがるる吾が住む町は騒然として

同

いつの日か花咲くときをたのみつつ小雨降る中イペ苗植える

一九七二年

森の辺にサビヤなくなり畑に立ち鋤をやすめて吾はききおり

同

西村 佐太夫

北米とソ連が上げるサテリテが秋の夜空に鮮かに見ゆ

一九六六年

住む人のなき廃屋の屋根に咲く絲瓜の花に夏の日すがし

同

古箱で造りし車に孫を乗せて子守している老の安らぎ

一九六七年

破れたるポスターに「天勝」とうすれ見ゆ場末の街の音響の  
中

一九六八年

子供会始まりてより吾が家に片言まじりの日本語きこゆ

一九七一年

計算器うちつつ家計簿調べいる長子の頭髮薄きが目立つ

一九七四年

農産物最低価格の表を見て今年の作付ようやく決まる

同

夜を通し風にのり来るサンバの音謝肉祭は今宵始まる

同

水槽の鰐は動かず吾を見る淡き冬日に暖を取りつつ

一九七五年

混血の孫を抱きて昼寝する愛に人種の異和感湧かず

一九七八年

ピコレ売る老爺木蔭に休みいて小銭かぞうるしわ深き手に

同

新大豆積みたるトラック列をなし地をゆるがして朝の町ゆく

一九七九年

西村 貞子

クワレズマ花むらさきは濃きままに散りいて匂う上にまた散る

一九六八年

西村 青泉

永住の地を求めつつ幾たびか原始林を拓きては来し

一九六四年

西村 智恵子

軒並みに日本人の家ありて歩きながらに聞く歌謡放送

一九五七年

道傍の立看板の空間よりマリンガの街は視野に拡がる

一九五八年

この村落を彩るものの一つにて傘状に蔭おくフランボイアン  
の大樹

一九五九年

年毎に繁りて樹齡六年のペカン  
は豊かに庭に蔭おく

一九六一年

吾子どちに囃されにつつボーロ切る吾が手に重ねし夫の手堅  
し

同

子も夫もラジオに頭よせ合いてジャニオ辞任の放送をきく

同

庭隅にパイナ明るく咲き匂う訪日の旅に我が発つ朝を

一九六二年

ブラジルに常見る草木植えあればパナマは遠き地と思われず

同

秋らしき晨見上ぐる青空にペカンは葉裏を見せて吹かるる

一九六三年

パンパスの白穂かしげて吹く風に息整うる孫抱き来て

一九六四年

送り来しテープ今宵もかけて居り幾度か聞く遠き汝が声

一九六五年



西村 トーマス

祖国より母が送りし小包みの中にて球根芽をふき居りぬ

一九六二年

吾が父の渡伯中止の便り来て描きし夢は崩れ去りたり

一九六三年

真夜中のイピランガ通り人も無く棕櫚の葉ずれの音のみ高し

同

沈黙のうちにろうそくはともされて墓地に静けき夕暮れ来たる

同

灯の下に横たう骸に執拗に蛾一つまつわり飛びめぐりいる

同

昨日まで着ていし作業衣のかかりいる室にて静かに通夜をすごせり

同

納屋隅にうずくまり蒲をしばりおり時折り窓の稲光り見て

同

薪はぜる厨の屋根にそこはかと熟れし木葡萄の落ちる音する

一九六四年

静かなる芝生に横たえる裸婦像に斑をなす秋の淡き木洩れ陽

同

菓子なども買えぬ生活の夜にしてミーリヨ粉いりて食みいる  
独り

同

西 森 寛

夜盗虫ひと日潰せば青じみし指が夕餉の卓に臭えり

一九七二年

出荷すれど値なき野菜をジングルベルの鳴りくる畑に子等と  
剪りゆく

同

寒き夜は父の遺品のどてら着て杳き憶いの残り香を嗅ぐ

同

報わるる事なき農と思いつつ黒土沁みし指の爪切る

同

移民の手離れて久しき病院の文字も薄れし低き碑に佇つ

一九七三年

慣例も吾が代限りか元朝のお供え餅も大き目に切る

一九七四年

呑みさしのコップ手に持ちバルコンの隅に綻ぶ梅の香に寄る

一九七五年

身を証す術なく帰る雨の夜の道に油紋は黝く拡ぐる

同

ロッキード汚職の記事は見出しだけ読んで汗くさき野良帽を  
かぶる

一九七六年

青き枇杷の実の幾つかが野良着脱ぐ風呂場に軽き音たてて落  
つ

同

片寄りの物価騰貴に耐えながら蒔くほかはなき畑鋤き起す

同

永く病む子の煎薬にアバカテの陽をよく受けし枝の葉を摘む

同

掌に重きぶどうの摘果する吾を囲みて小鳥の声の明るさ

一九七七年

葬りし没陽の陵を降りつつ明日につながる言葉かけ合う

同

逢いたしと思う人あり夕庭に回帰のつばめなき交いて飛ぶ

同

旅遠き道辺の闇にモーテルの文字青となりまた紅となる

同

## 西山陽都

葉を打ちて過ぎゆくスコールにも慣れて濡れしままにて斧振りつづく

一九五四年

沐浴の小川の岸に蝶吹雪人を包みて音もなく舞う

同

## 新田角夫

たくましき角つけたれど車ひく牛の瞳はやさしかりけり

一九五〇年

手にふるる土のぬくみも心地よき秋晴の日を妻と芋掘る

同

新田 知二

ながし場の水反射してトタン屋根に日影うごくが窓にうつれり

一九五〇年

弟の家近き畑打ちおれば終日きこゆ子を叱る声

一九五三年

枯草の上はわけても霜白きあしたの径を母家に向かう

同

カプシングの根元通りてクツピンの列つくり来る暑き曇り日

同

いちご祭に行きしうからが持ちて来し籠のいちごを惜しみつつ食う

同

布川 富貴子

お歯黒をいと黒々と塗りていし身だしなみよき母の思い出

一九七九年

根 岸 栄 治

わが意志に反して帰国する若者を見送る心複雑にして

一九六〇年

ミナス路の鉄のボタ山訪ね来て絵筆（ふで）とる人の肌麦色にして

一九六〇年

パリよりハイジャクされし我が機なり満載の客とキューバに降りぬ

一九六五年

根 本 ふみ子

ひと呼吸いれる間もなくシャベルカー地響きたてて地を崩しゆく

一九七七年

野 上 忠

酒たばことらずその費を蓄えて汝が未来にかける望みぞ

一九五〇年

五十米のターンすばやき古橋にテツオ オカモト必死に続く

同

野 上 とし子

帰り来る夫迎えむとひそやかに化粧をするも年に幾度

一九五一年

掃除終え花をばかえて母の日を子無きが故の静けさにおり

同

見る人も無く畑隅に咲きて散るダリヤは淡き残照の中

一九七〇年

靴音に女の思いこめてゆく夫のかたえに歩を合せつつ

同

燃やすべきもの燃えつきし思いして老への道をふみしめてゆく

一九七二年

移り来て農一筋のわが指ようやく寒さに痛み覚えぬ

一九七四年

野 口 一 郎

イツペーの花はなか空に輝きて昨日も今日も豆蒔きつづく

一九五五年

実の入らぬミーリヨもぎ来て子らは焼くただに遊ぶを楽しむとして

一九五六年

我が住める森をへだててイタリヤのコロノの燃やす煙揚がれり

一九五七年

彼の山もいつか伐られて焼かるべし今朝鹿射ちて人の出で来し  
同

先導の牛の鈴の音ころよき響きをあげて徐々にすぎゆく  
一九五八年

綿つめし竹箆かつぐ吾子二人肩より汗の滲み出づる見ゆ  
一九六三年

木葡萄の葉も実も落ちし庭隅にニグロの娘水汲みにくる  
同

納 田 たけじ

数少なき移民もおよそ技術者にて農業移民の声聞かずなりぬ  
一九六八年

消息の絶えし人らを尋ねいる放送に同航移住者また混りいる  
一九六九年

野 中 みや

寄せ焼きの煙いくすじなびきつつ霜害のあとの畑昏れなずむ  
一九七〇年

ほのぼのと夜空明るきひとところ子等の待つ街ようやく近し  
一九七一年

また曾孫生れし便りあふれ咲く百日紅の花眩しめり  
同

野の果ての永き夕映え肩並めて生きる月日のいつまで続く

同

残さるる者の哀しみ思う夜を風は冬木を軋ませてゆく

一九七二年

残すもの持たぬ一生かしらじらと咲きて結ばぬ鉢の南天

一九七五年

オレンジの色に街の灯うるみつつひっそりと雨の路は夜に入る

一九七七年

ゴム長を履きて蘭に水注ぐ娘にうらうらと朝の日が射す

同

延岡 ゆき

移り住みて三月は過ぎぬ我が拓き蒔きし青菜を間引きて食ぶる

一九五七年

野村 溪正

蜂鳥の羽音の繁き日々にして庭のパイネーラ今盛りなり

一九七一年

バルサ待つパネーマ河畔夕付きて煙霧は低く河面をとざす

同

丘の畑に馬追う声の遠のきて落花生蒔きつつ今日も昏れゆく



一九七二年

一望の牧鋤き終えし夕陽なか風が運べる土の香に佇つ

同

島に住む人等に避難うながしてリオ パラナの増水報ず

同

ようやくに実をつけそめしコンデ樹を掘り抜き捨てて家建て  
増しぬ

一九七三年

野村 さち子

重かろうと氣遣いいつも菜を持たす吾娘は自炊の夜学生なれ  
ば

一九七七年

ひしめきて建つフアベーラよ住む人の心のかげが壁に映れり

同

合掌し瞑目すればうずら啼く声の聞こゆるとり供養の日

同

降り注ぐ陽光に姑の幾つかの襠褌は白さ増しつつ乾く

一九七九年

在りし日の姑が定めし門徒寺に永代経を頼み安らぐ

同

母の日のやわら陽受けて老母は形見と言いてつつじ植えます

同

野村 三太郎

立ち並ぶ墓標にまじりて日本字を記せる十字架見ればわびしも

一九四九年

野村 清七

コーヒーの花咲く国に移り来て土に生きんと鋤を振りいつ

一九六一年

野村 幸正

道添いに続くリツシャの花明り鞭音高く牛追われ行く

一九七〇年

アンデスの雪解けそそぎてアマゾンの流れふくらみ雨季おとろえず

一九七二年

霜害に飢えし野鳥は人里を恋い集りて庭を賑わす

一九七六年

野村 芳子

なつかしき日本より来し白椿つぼみのままについぞひらかず

一九七〇年

憩う家もなき北伯移民らをぬらし朝より雨降る今日は

一九七一年

牧夫の声ききわけて牛の群れ牧場を出づる列を乱さず

同

夕焼けて一望の牧子頭の牛皆白し散りて草食む

一九七五年

## 則 近 正 義

地平線の雲の茜は薄れつつ刻々昏れゆくモンソン平原

一九五〇年

庭椰子の葉が揺れながら影映す午前十時の病室の壁

一九五五年

エンバウーバの霜枯れし葉が眼の前の芝草に落ちぬその鈍き  
音

一九五六年

マシユシユ棚の奥にて子供らを叱りいる妻の声太し風強き午  
後

同

丘三つ重なれる果ての陽は低くバルバ デ ボーデの穂波が  
眩し

一九五七年

長屋住まいのジエラルドは工場より帰りきて今宵も表通りで  
薪割りをはじめ 同

芳賀 溪山

移り来てまた吟道を共にせる十有余年も夢の間に間に ー悼  
繁村 徳太郎翁 ー 一九七四年

芳賀 芳朗

茫漠たる麻州平原の中にしてわれより低き落日に立つ  
年代不明  
ジープにてひと日走るを山もなく麻州の広野は天につらなる  
同

萩川 友也

みじか尾の守宮一匹天井を這いいたりけり点せるときに  
一九七四年  
敏感に風に應えて秋蝶は身を翻して白く去りたり

同

若きらは都会に移りて帰るなく老いのみ目立つ雲低き街

同

茫々と梨の花白き朝の街まつ毛を伏せし女が往けり

同

橋浦 静女

年を経て巡りあいしにそのかみの面影ありと君のたまいぬ  
一九六三年  
若き日は口数少なかりし我なるを和みて語る齡となりぬ

同

折にふれわが見る夢は新墾に移りし頃の農のわざごと

同

橋 浦 昌 雄

朝霧のパラナの河に音たててモーター ボートは岸に近づく  
一九四七年

みなざらうパラナの河の草いかだ奥地は早も雨季に入るらし  
同

長雨の晴間はれ間を重く垂るる稲穂刈りつぎ夕焼けに立つ  
同

橋 浦 由善夫

さくさくと踏む落葉道やや遠くたずぬる人の牧場をゆく

カンポスの丘の起伏を見はるかすその一処夕立のせり  
一九六三年  
同

橋 本 垂 南

木犀の多きこの町住みつきて夜の散歩の街角に佇つ  
一九七九年

さざんかの花の散りしは何時頃か池畔のつつじ今花盛り  
同

新聞を開きて友のまた一人逝きたるを知り心騒ぐも  
同

橋 本 元 江

半世紀過ぎれば多くの人去りてただ広々と牧場つづく  
年代不明

移住時庭に蒔きたる草花も野草となりし古き移住地  
同

蓮 沼 清 江

幼等に「飛魚」のニュース読みてやるこの明るさや幾年ぶり  
か 年代不明  
沿線に桜に似たるパイネーラ咲き初めいたりこの五十年祭  
同

蓮 沼 信一

七色の蛇のかかれる滝しぶき彼岸にかすむ亜国の樹海  
一九七二年  
クワレズマ散りしく深き山ゆけば日ぐらしの声谷にこだます  
一九七三年

長 谷 浄

長雨のあとの静かな山道の梢のかげにサビア啼くなり  
一九六三年  
教会の昼をし告ぐる鐘の音街ゆく人の歩をゆるまする  
同

伐採の音のきこゆる山道に今朝はオームの羽音をききぬ  
同

伐採の斧音ひびく山道に今朝もオームの声かしましき  
同

脱柵の仔牛もとめて広き野を馬走らせてわが行きめぐる  
同

牧場の中の小道を学童が急ぎゆくなり牛おそれつつ  
同

長谷川 京 子

州境をこゆれば広野展けきて蟻の巢の丘おちこちに見ゆ  
一九七三年

長谷川 洋

鍬だこのいまだ残れる父の手は訪日のマール軽くさげゆく

一九六九年

畑 中 栄 子

高野山に棲むというなる佛法僧の声を朝夕ブラジルに聞く  
一九五一年

畑 本 文 子

雨脚を気遣い乍ら我と娘の米叩く音のみ厳しくひびく  
一九五八年  
土に生きんとブラジルに來し我なれば唯耐え抜きて土を耕す  
一九六五年  
耕耘機運転せよと手を取りて夫は指導す青空の下  
一九六六年  
鋤を砥ぎ今日もカルピす青空にけずる大地は我が土なりき  
一九七〇年  
我が夫は豚舎に孫をあやす如くつぶやきながら餌をやりて居  
り  
一九七七年  
黄金に輝く稜線の彼方より製材始業のサイレンひびく  
一九七九年

八 川 千 鶴

久々に嫁ぎし吾娘を訪いければ面やつれしてみごもりいたり  
一九六三年

雨過ぎて小暗き桑の葉のかげに流るる如き蟬の声あり  
同

魚釣りにゆきし夫の歸らぬに日暮れて荒き雨風の吹く  
同

鶏を片手に抱きて黒人が若草の野辺にてバスを待ちおり  
一九六四年

直線の道路の彼方プルデンテ市の空白々と雨降れる見ゆ  
同

合乗りしバルサに同胞の顔あまたあれど言葉もなく別れけり  
一九六五年

豚買いの手をのがれ来し子豚等がイバイの河に泳ぎ入りゆく  
同

鍬振らねば食えぬと言いて細雨に肩ぬらしつつ人等除草す  
同

幼き日別れて住めば愛うすく今日この人を看とるかなしみ  
一九六六年

## 服部 武雄

はらからのあつき心の身に沁みてこのふるさとの土に居るわ  
れ  
一九七四年

先ず行きて告げなまし地下の父母に叙勲をうけしこの光栄を  
一九七九年

## 花井 重人

会えば必ず友らと語る朝鮮問題連合軍の弱きを少し非難して  
一九五〇年

高台の枯木にカナリヤ屯して朝日の中にさえずりやまず  
同

## 花井 信吉（のぶよし）

再会のあてのあらねば訣れ来し友の便りをくり返し読む  
年代不明

鯉のぼりたつる日本のうから等を思いながらにケージをつく  
る  
同

移り来て苦節の日々を続けゆく妻に白髪が目立ち来たれり  
同

尾根高く沈む真赤な太陽に椰子の一本うきぼりに見ゆ  
同

訪れる人は鶏飼いばかりにて不況の嘆きのみを聞きおり



大木の茂る隙より木洩陽は鋭く射して遠き滝音 同

見渡せば緑の樹海広々と遙かに霞むウーナの流れ 同

その昔インジヨの住みしと言う山に草に覆われて残る道あり 同

五年たてば帰ると別れしその日より早や十八年の時は過ぎた 同

ひえまさる夜更けの椅子に目をとじてたどりつつあり兵の記憶を 同

娘等の嫁ぎゆくたび日本に帰らむ意志の遠ざかりゆく 同

県人の集いは楽し名物のカツポの酒をくみ交しつつ 同

花城 清栄

祖国復帰なりたる今日を沸き立てる沖縄の友等を遙かに想う 一九七二年

雨に濡れ薪束背負う童等にわが幼き日想いつつおり 一九七三年

故里を偲ばせて鳴く鈴虫の四世なるも音色変らず 一九七六年

糠漬の大根ほのかな匂い持つ今にし想う妻在りし頃 一九七五年

秋陽差す個室に一人坐し居れば微塵の流れわれにまつわる 一九七六年

花園 三郎

陽の光なつかしみつつ梅雨ばれの牧場の柵に毛布干し居り

一九五〇年

両の手をボルソに突込み笑う君欠けし前齒の特に目立ちて  
同

はなぶさ たけし

パッサ プレットの暁つぐる鳴き声に追憶しいたりしがまた  
まどろみぬ  
一九五一年

浜 崎 実

同胞の集団地なればマリリアの墓地の多くは日本文字の碑  
一九五二年

古竹の物干し竿の割れたるに夜風吹きいて笛の音する  
同

棺を囲み遺族の写真とりにけり午后四時あわき寂光の中  
同

「こんな遠い所まで来たら帰れない」と言いし父は遂に死に  
ける  
同

焼け残るペローバに止まりきつつきの木つつく音の野空に響く  
一九五三年

老いませる母も父の如此の国に果つるならむか古里恋いつつ  
一九五四年

裏山に今日も木を切る音すれど朝霧深く人影みえず  
一九七八年

目醒むれば煉瓦工場の土掘機の始動しいたり病床に聞く  
同

昨夜の雨からりと晴れし朝空に動力噴霧機の音響くなり  
一九七九年

浜 田 かよ

見るかぎり盆の供花のあふれいて墓に静けし人の動きは  
一九六一年

浜田 きよし

年経りて祀りまいらす母の忌に萩餅つくる小豆買いたり

一九七三年

雛鳥の足より小さく葉を屈げて赤々と鉢の楓萌え出づ

同

野鳥鳴く盆地は明けてキロンボの湯沸かす煙低きより立つ

一九七四年

教会堂建てる公園の昼しずかただ赤々と火焰樹咲けり

同

イギリスの国の形の夕雲が光宿せりわが屋根の上

同

浜田 良一郎

金借るは酒のむ程に易からず夕映え白き街角に立つ

年代不明

思う事ことごと金にかかわればあかねの空も心にそまず

同

移り来て四十二年八人の子と十一人の孫を得しのみ

一九七〇年

故国は山河さえも変り居り日本語話す我は異国人

同

浜津 正夫

軍隊蟻に部屋を渡して出で来たり日の暮れ方の庭隅に佇つ

一九五三年

バスを待つ宵のフイラの二た所横切り子らへの土産とどのう

同

早川 勲

訪日の日もまた夢かほのかなる望みもちつつ四十路となりぬ  
一九六九年

早川 千代子

女中たちをシネマにやりて百合活けしサロンに今日の新聞を  
読む  
一九四九年

林 越南

帰るなき吾が古里のどんど火を恋う夜は子等と藁塚を焼く  
一九五〇年  
密猟の野獣の肉も食べ馴れて四肢たくましく移住地の子等  
同

さすらいの民の如くに移り住みいまだ吾が家の墓地も定めず  
一九五五年  
汗ぬれて重き荷をひく馬車馬のあがきは吾の来し方にて  
同

子に遺す吾が家の系図こまごまと記せど子等には読めぬ日本  
語  
一九六〇年

林 しぐれ

古ぼけし吾が青春のおどましき二百三高地巻の髪の面影  
一九五六年  
わが園の疲れし土を耕して春に咲かせむ三色すみれ  
同

過ぎて来しかたくななりし妻の日をそぞろに思う白きこうべ  
に  
同

林 射心鬼

塀のみの養老院の予定地に老いし淫浪者はや住みつけり

一九六三年

むらがりて死馬に降りくるウルブーの羽音するとき牧の夕暮

同

死馬の肉あさるウルブーのひと群れのそこより暗く峽ははじ

まる

日並べて積み重ねたる柏の木を一夜燃やして灰となしたり

同

野分けの風荒び吹きしく原中を短き列車過ぎゆきにけり

同

林 達馬

農薬の匂い染みしか蚊もよらぬ半裸にて憩う闇の露台に

一九五八年

林 ヨシ

母の日に孫より受けし白菊の瑞々しさに眼をみはる

年代不明

林 田 道子

ようやくに寡婦の文字にもこだわらず記入し終りぬ納税申告書

一九七三年

林 田 ゆきはる

家もなく家族もたえし老移民鰥売り歩く世界の果てに

一九六七年

羽 山 孝二

はるばると海を渡りて届きたる扇子風呂敷故郷の写真

一九五三年

米の足しにフエイジョンをうまくたかむとて圧力鍋を妻は買  
いたり

同

友は肉吾はビールを持ちよりてシユラスコを焼く寒き雨の日  
同

同

いくつかの吾が歌もある新聞歌壇発表毎に切り抜きて置く

同

幼らがひねもす遊ぶぶらんこのかかれる桃の木花咲きそめつ

一九五四年

余憤まだ心にありて吾が業のガス溶接の手先ふるえる

同

通行の人も焚火に寄り来たり昨日の霜の被害を語る  
同

同

ドラードスの記事を読みたる夜はからずもラジオは告ぐる移  
民脱耕者の事

一九五九年

山拓き家建て果樹植え五百羽の鶏をそだてて年あらたまる

一九六七年

協力のためのリファを人ら買い実態調査続けられゆく

同

## 原 暁

日に日に飼料騰りて採算のとれぬ養鶏を吾等つづくる

一九五七年

萌え出でし薯の若芽は列なして朝日に露がきらきら光る

同

## 原 朗 子

ケープタンの波静かなりと記されし亡父の日記を今宵も読み  
居る

一九五二年

移転近き夕べの庭に下りたちて又採り集める草花の種子

一九六七年

パッサロ プレット群れ鳴く声の聞こえるまぶしき日和を  
棉つみいそぐ

同

北伯に移りてゆきし妹よ少女の姿で吾が夢に来る

一九七八年

町住みの庭にバナナの房垂れて古里となりし移住地よ遠し

一九七九年

## 原 君子

土産など何も要らぬと書きたれど貰えば嬉し故里の品

一九七八年

除草する繁みの中に一本のパルマ咲きいて残しおくなり

一九七九年

浴槽にひたりて眼閉じおれば夜汽車の響きかすかに聞こゆ

同

鉢に咲くただ一輪の桔梗にも故郷の秋の野が浮かぶなり

同

## 原 枯 風

ウクレレを弾きあきしカマラダの小屋静かにてただ月影の  
白々とさす

一九四九年

湯浴みせし吾子らの足の砂蚤をとるがこの頃日課となれり

同

気弱なりし亡父の性を受けつぎて世にし立てれば苦しみ多し

同

## 原 ふさえ

白雲の覆いくる岨通り来てセーラ ド マールの片日照る峰

一九七六年

イグアスの滝の流れに夕映えてしぶけるところ虹立ちみゆ  
る

同

原 口 傾 月

日並べて雨降りしかば引きおきしフエイジョンはさや割れ白  
き根を出す 一九五六年

原 田 秀 峰

子らは皆畑に行きて我は妻と嫁ぐ日近き長女の支度を案ず  
一九五五年

原 田 竹之助

三キロに余るアスファルトの滑走路麻州に誇るカンポ グラ  
ンデ空港 一九五五年  
ジュシチガールがものごし軟く運び来し香りの高きカフェー  
を飲む 同

原 田 満 典

夜となれば街にあふれる黒人の夜の女の高きその声  
一九五五年

言葉解らぬ友を便所に連れて行く年老いしブラジル人に笑わ  
れながら 同

日本のこと聞きあかざりしスペインの女教師の声は美しかり  
一九五六年

何事も率直で単純なこの国の人々が我の胸をはなれぬ  
同

原 田 牧 草

いくつかの村をすぎ来てこの町に一ミル高きグワラナ飲むな  
り 一九五三年

アマゾンの人魚と言える哺乳魚はムゼウに飼われ草食みいた  
り 一九七〇年



右ブラジル左パラグワイの標識も挨にまみれ色褪せて見ゆ  
同

涯しなき広野の彼方につらなりて墓標にも似し国境標識  
同

窮屈なレーデにも馴れアマゾンの河行く旅は日に増し楽し  
一九七二年

旅行者の徑しるべなりや道端の随所に見ゆるサントの祠

一九七二年

この町の憩いの広場に歩み来て火焰樹を背に写真撮りたり

同

リベルダーデの広場賑わし東洋の民芸品を売る店並ぶ

一九七六年

## 春 名 宏 文

午後の陽を照り返しつつ高々とペードラ バウは我が前に立つ

一九五六年

癒えたりと母に告げやる日のなくてふたたび療にめぐる「母の日」

一九五八年

曾祖父に日系の血を受けたりと言う少女あり祖父の名は知らず

一九五九年

四代経し日系の血はあともなく髪波うたせサンバを踊る

同

異邦人の如き思いに歩み居りリンスの町に我が帰り来て

一九六〇年

垣の内に暮鐘草は実となれる古びゆくなりリンスの町は

同

ゆくりなくアンゼラスの鐘鳴り出でて十字架の向こうに雲の夕焼け

同

南十字星思わぬ方にまたたける母に背中を流され居りて

同

東叡山文恭院殿の石燈籠サンパウロの街に移し建てらる

一九六二年

ブラジルに移し建てらるる石燈籠刻む葵の紋もはかなく

一九六二年

パライーバの河に漁りしインジオの土器の紋様魚鱗に似たり

同

インジオの土器の原型今もなお作り継がれて人は水汲む

同

日毎飲む薬滋の水を汲みて置くインカの土器に似たるモリン  
ガ

同

焼けあとに唐黍を蒔く農民よかかる生活の我にもありぬ

一九六三年

ドクメント持たざる我を幾人もよりてしらぶる罪人のごと

同

強いられし労働に頬の尖りつつカンテラの火を囲み飯食む

一九六四年

生きている者が集いて華やぎを盛りあげている死者の日の墓

地  
一九七七年

楽の音に誘われてゆく公園の夜空に映ゆる五彩の噴水

一九六三年

丹念に孫娘の乾したる澱粉の真白さまぶし粉ほぐしつつ

同

珈琲の値上げ運動に協力しグレーベの街わびしみ通る

同

ベランダに寄りて見いりぬたくましきマンガの花と空の碧さを  
一九六九年

半田 利雄

長屋住まいのジェラルドは工場より帰りきて今宵も表通りで  
薪割りはじめ  
同

芳賀 溪山

移り来てまた吟道を共にせる十有余年も夢の間に間に

―悼茂村 徳太郎翁―

一九七四年

芳賀 芳朗

茫漠たる麻州平原の中にしてわれより低き落日に立つ

年代不明

ジープにてひと日走るを山もなく麻州の眩野は天につらなる

同

萩川 友也

みじか尾の守宮一匹天井を這いたりけり点せるときに

一九七四年

敏感に風に應えて秋蝶は身を翻して白く去りたり

同

若きらは都会に移りて帰るなく老いのみ目立つ雲低き街

同

茫々と梨の花白き朝の街まつ毛を伏せし女が往けり

同

橋 浦 静 女

年を経て巡りあいしにそのかみの面影ありと君のたまいぬ

一九六三年

若き日は口数少なかりし我なるを和みて語る齡となりぬ

同

折にふれわが見る夢は新墾に移りし頃の農のわざごと

同

橋 浦 昌 雄

朝霧のパラナの河に音たててモーター ボートは岸に近づく

一九四七年

みなぎらうパラナの河の草いかだ奥地は早も雨季に入るらし

同

長雨の晴間はれ間を重く垂るる稲穂刈りつぎ夕焼けに立つ

同

橋 浦 由喜夫

さくさくと踏む落葉道やや遠くたずぬる人の牧場をゆく

一九六三年

カンポスの丘の起伏を見はるかすその一処夕立のせり

同

橋 本 垂 南

木犀の多きこの町住みつきて夜の散歩の街角に佇つ

一九七九年

さざんかの花の散りしは何時頃か池畔のつつじ今花盛り

同

新聞を開きて友のまた一人逝きたるを知り心騒ぐも

同

橋 本 元 江

半世紀過ぎれば多くの人去りてただ広々と牧場つづく

年代不明

移住時庭に蒔きたる草花も野草となりし古き移住地

同

蓮 沼 清 江

幼等に「飛魚」のニュース讀みてやるこの明るさや幾年ぶり  
か

年代不明

沿線に桜に似たるパイネーラ咲き初めいたりこの五十年祭

同

蓮 沼 信 一

七色の虻のかかれる滝しぶき彼岸にかすむ亜国の樹海

一九七二年

クワレズマ散りしく深き山ゆけば日ぐらしの声谷にこだます

一九七三年

長 谷 浄

長雨のあとの静かな山道の梢のかげにサビア啼くなり

一九六三年

教会の昼をし告ぐる鐘の音街ゆく人の歩をゆるまする

同

伐採の音のきこゆる山道に今朝はオームの羽音をききぬ

同

伐採の斧音ひびく山道に今朝もオームの声かしましき

同

脱柵の仔牛もとめて広き野を馬走らせてわが行きめぐる

同

牧場の中の小道を学童が急ぎゆくなり牛おそれつつ

同



長谷川 京子

州境をこゆれば広野展けきて蟻の巢の丘おちこちに見ゆ

一九七三年

長谷川 洋

鍬だこのいまだ残れる父の手は訪日のマーラ軽くさげゆく

一九六九年

畑 中 栄子

高野山に棲むというなる仏法僧の声を朝夕ブラジルに聞く

一九五一年

畑 本 文子

雨脚を気遣い乍ら我と娘の米叩く音のみ厳しくひびく

一九五八年

土に生きんとブラジルに來し我なれば唯耐え抜きて土を耕す

一九六五年

耕耘機運転せよと手を取りて夫は指導す青空の下

一九六六年

鍬を砥ぎ今日もカルピす青空にけずる大地は我が土なりき

一九七〇年

我が夫は豚舎に孫をあやす如くつぶやきながら餌をやりて居り

一九七七年

黄金に輝く稜線の彼方より製材始業のサイレンひびく

一九七九年

## 八 川 千 鶴

久々に嫁ぎし吾娘を訪いければ面やつれしてみごもりいたり

一九六三年

雨過ぎて小暗き桑の葉のかげに流るる如き蟬の声あり

同

魚釣りにゆきし夫の帰らぬに日暮れて荒き雨風の吹く

同

鶏を片手に抱きて黒人が若草の野辺にてバスを待ちおり

一九六四年

直線の道路の彼方プルデンテ市の空白々と雨降れる見ゆ

同

合乗りしバルサに同胞の顔あまたあれど言葉もなく別れけり

一九六五年

豚買いの手をのがれ来し子豚等がイバイの河に泳ぎ入りゆく

同

鍬振らねば食えぬと言いて細雨に肩ぬらしつつ人等除草す

同

幼き日別れて住めば愛うすく今日この人を看とるかなしみ

一九六六年

服部 武雄

はらからのあつき心の身に沁みてこのふるさとの土に居るわれ

一九七四年

先ず行きて告げなまし地下の父母に叙勲をうけしこの光栄を

一九七九年

花井 重人

会えば必ず友らと語る朝鮮問題連合軍の弱きを少し非難して

一九五〇年

高台の枯木にカナリヤ屯して朝日の中にさえずりやまず

同

花井 信吉（ノブヨシ）

再会のあてのあらねば訣れ来し友の便りをくり返し読む

年代不明

鯉のぼりたつる日本のうから等を思いながらにケージをつくる

同

移り来て苦節の日々を続けゆく妻に白髪が目立ち来たれり

同

尾根高く沈む真赤な太陽に椰子の一本うきぼりに見ゆ

同

訪れる人は鶏飼（とりか）いばかりにて不況の嘆きのみを聞きおり

同

大木の茂る隙より木洩陽は鋭く射して遠き滝音

同

見渡せば緑の樹海広々と遙かに霞むウーナの流れ

同

その昔インジヨの住みしと言う山に草に覆われて残る道あり

同

五年たてば帰ると別れしその日より早や十八年の時は過ぎたり

同

ひえまさる夜更けの椅子に目をとじてたどりつつあり兵の記憶を  
同

娘等の嫁ぎゆくたび日本に帰らむ意志の遠ざかりゆく

同

県人の集いは楽し名物のカツポの酒をくみ交しつつ

同

## 花城 清栄

祖国復帰なりたる今日を沸き立てる沖縄の友等を遙かに想う

一九七二年

雨に濡れ薪束背負う童等にわが幼き日想いつつおり

一九七三年

故里を偲ばせて鳴く鈴虫の四世なるも音色変らず

一九七四年

糠漬の大根ほのかな匂い持つ今にし想う妻在りし頃

一九七五年

秋陽差す個室に一人坐し居れば微塵の流れわれにまつわる

一九七六年

## 花園 三郎

陽の光なつかしみつつ梅雨ばれの牧場の柵に毛布干し居り

一九五〇年

両の手をボルソに突込み笑う君缺けし前歯の特に目立ちて

同

はなぶさ たけし

パツサ プレットの暁つぐる鳴き声に追憶しいたりしがまた  
まどろみぬ

一九五一年

浜 崎 実

同胞の集団地なればマリリアの墓地の多くは日本文字の碑

一九五二年

古竹の物干し竿の割れたるに夜風吹きいて笛の音する

同

棺を圍み遺族の写真とりにけり午后四時あわき寂光の中

同

「こんな遠い所まで来たら帰れない」と言いし父は遂に死に  
ける

同

焼け残るペローバに止まりきつつきの木つつく音の野空に響

く

一九五三年

老いませる母も父の如此の国に果つるならむか古里恋いつつ

一九五四年

裏山に今日も木を切る音すれど朝霧深く人影みえず

一九七八年

目醒むれば煉瓦工場の土掘機の始動しいたり病床に聞く

同

昨夜の雨からりと晴れし朝空に動力噴霧機の音響くなり

一九七九年

浜田 かよ

見るかぎり盆の供花のあふれいて墓に静けし人の動きは

一九六一年

浜田 きよし

年経りて祀りまいらす母の忌に萩餅つくる小豆買いたり

一九七三年

雛鳥の足より小さく葉を屈げて赤々と鉢の楓萌え出づ

同

野鳥鳴く盆地は明けてキロンボの湯沸かす煙低きより立つ

一九七四年

教会堂建てる公園の昼しずかただ赤々と火焰樹咲けり

同

イギリスの国の形の夕雲が光宿せりわが屋根の上

同

浜田 良一郎

金借るは酒のむ程に易からず夕映え白き街角に立つ

年代不明

思う事ことごと金にかかわればあかねの空も心にそまず

同

移り来て四十二年八人の子と十一人の孫を得しのみ

一九七〇年

故国は山河さえも変り居り日本語話す我は異国人

同

浜津 正夫

軍隊蟻に部屋を渡して出で来たり日の暮れ方の庭隅に佇つ

一九五三年

バスを待つ宵のフライの二た所横切り子らへの土産とどのう



早川 勲

同

訪日の日もまた夢かほのかなる望みもちつつ四十路となりぬ  
一九六九年

早川 千代子

女中たちをシネマにやりて百合活けしサロンに今日の新聞を  
読む  
一九四九年

林 越南

帰るなき吾が古里のどんど火を恋う夜は子等と藁塚を焼く  
一九五〇年

密猟の野獣の肉も食べ馴れて四肢たくましき移住地の子等  
同

さすらいの民の如くに移り住みいまだ吾が家の墓地も定めず  
一九五五年

汗ぬれて重き荷をひく馬車馬のあがきは吾の来し方にて  
同

子に遺す吾が家の系図こまごまと記せど子等には読めぬ日本語  
一九六〇年

林 しぐれ

古ぼけし吾が青春のおどましき二百三高地巻の髪の面影

一九五六年

わが園の疲れし土を耕して春に咲かせむ三色すみれ

同

過ぎて来しかたくななりし妻の日をそぞろに思う白きこうべに

同

林 射心鬼

塀のみの養老院の予定地に老いし淫浪者はや住みつけり

一九六三年

むらがりて死馬に降りくるウルブーの羽音するどき牧の夕暮れ

同

死馬の肉あさるウルブーのひと群れのそこより暗く峽ははじまる

同

日並べて積み重ねたる棉の木を一夜燃やして灰となしたり

同

野分けの風荒び吹きしく原中を短き列車過ぎゆきにけり

同

林 達馬

農薬の匂い染みしか蚊もよらぬ半裸にて憩う闇の露台に

一九五八年

林 ヨシ

母の日に孫より受けし白菊の瑞々しさに眼をみはる

年代不明

林 田 道子

ようやくに寡婦の文字にもこだわらず記入し終りぬ納税申告  
書

一九七三年

林 田 ゆきはる

家もなく家族もたえし老移民鰥売り歩く世界の果てに

一九六七年

羽 山 孝 二

はるばると海を渡りて届きたる扇子風呂敷故郷の写真

一九五三年

米の足しにフエイジョンをうまくたかむとて圧力鍋を妻は  
買いたり

同

友は肉吾はビールを持ちよりてシユラスコを焼く寒き雨の日

同

いくつかの吾が歌もある新聞歌壇発表毎に切り抜きて置く

同

幼らがひねもす遊ぶぶらんこのかかれる桃の木花咲きそめつ

同

余憤まだ心にありて吾が業のガス溶接の手先ふるえる

一九五四年

通行の人も焚火に寄り来たり昨日の霜の被害を語る

同

ドラードスの記事を読みたる夜はからずもラジオは告ぐる移  
民脱耕者の事

同

山拓き家建て果樹植え五百羽の鶏をそだてて年あらたまる

一九五九年

協力のためのリファを人ら買い実態調査続けられゆく

一九六七年

日に日に飼料騰りて採算のとれぬ養鶏を吾等つづくる

同

原 暁

萌え出でし薯の若芽は列なして朝日に露がきらきら光る

一九五七年

赫黒き塊の一鍬一鍬に吾が土地と思うよろこびを知る

同

原 朗 子

ケープタンの波静かなりと記されし亡父の日記を今宵も読み  
居る

一九五二年

移転近き夕べの庭に下りたちて又採り集める草花の種子

一九六七年

パッサロ プレット群れ鳴く声の聞こえるまぶしき日和を  
棉つみいそぐ

同

北伯に移りてゆきし妹よ少女の姿で吾が夢に来る

一九七八年

町住みの庭にバナナの房垂れて古里となりし移住地よ遠し

一九七九年

原 君子

土産など何も要らぬと書きたれど貰えば嬉し故里の品

一九七八年

除草する繁みの中に一本のパルマ咲きいて残しおくなり

一九七九年

浴槽にひたりて眼閉じおれば夜汽車の響きかすかに聞こゆ

同

鉢に咲くただ一輪の桔梗にも故郷の秋の野が浮かぶなり

同

原 枯 風

ウクレレを弾きあきしカマラダの小屋静かにてただ月影の  
白々とさす

一九四九年

湯浴みせし吾子らの足の砂蚤をとるがこの頃日課となれり

同

気弱なりし亡父の性を受けつぎて世にし立てれば苦しみ多し

同

原 ふさえ

白雲の覆いくる岨通り来てセーラ ド マールの片日照る峰

一九七六年

イグアスの滝の流れに夕映えてしぶける所虹立ちみゆる

同

原 口 傾 月

日並べて雨降りしかば引きおきしフエイジョンはさや割れ白  
き根を出す

一九五六年

原 田 秀 峰

子らは皆畑に行きて我は妻と嫁ぐ日近き長女の支度を案ず

一九五五年

原 田 竹之助

三キロに余るアスファルトの滑走路麻州に誇るカンポ グラ  
ンデ空港

一九五五年

ジュシチガールがものごし軟く運び来し香りの高きカフェー  
を飲む

同

原 田 満 典

夜となれば街にあふれる黒人の夜の女の高きその声

一九五五年

言葉解らぬ友を便所に連れて行く年老いしブラジル人に笑われながら

同

日本のこと聞きあかざりしスペインの女教師の声は美しかりき

一九五六年

何事も率直で単純なこの国の人々が我の胸をはなれぬ

同

原 田 牧 草

いくつかの村をすぎ来てこの町に一ミル高きグワラナ飲むなり

一九五三年

アマゾンの人魚と言える哺乳魚はムゼウに飼われ草食みいたり

一九七〇年

右ブラジル左パラグワイの標識も挨にまみれ色褪せて見ゆ

同

涯しなき眩野の彼方につらなりて墓標にも似し国境標識

同



窮屈なレーデにも馴れアマゾンの河行く旅は日に増し楽し

一九七一年

旅行者の径しるべなりや道端の随所に見ゆるサントの祠

一九七二年

この町の憩いの広場に歩み来て火焰樹を背に写真撮りたり

同

リベルダーデの広場賑わし東洋の民芸品を売る店並ぶ

一九七六年

## 春 名 宏 文

午後の陽を照り返しつつ高々とペードラ バウは我が前に立つ

一九五六年

癒えたりと母に告げやる日のなくてふたたび療にめぐる「母の日」

一九五八年

曾祖父に日系の血を受けたりと言う少女あり祖父の名は知らず

一九五九年

四代経し日系の血はあともなく髪波うたせサンバを踊る

同

異邦人の如き思いに歩み居りリンスの町に我が帰り来て

一九六〇年

垣の内に暮鐘草は実となれる古びゆくなりリンスの町は

同

ゆくりなくアンゼラスの鐘鳴り出でて十字架の向こうに雲の  
夕焼け  
同

南十字星思わぬ方にまたたける母に背中を流され居りて  
同

東叡山文恭院殿の石燈籠サンパウロの街に移し建てらる  
一九六二年

ブラジルに移し建てらるる石燈籠刻む葵の紋もはかなく  
一九六二年

パライーバの河に漁りしインジオの土器の紋様魚鱗に似たり  
同

インジオの土器の原型今もなお作り継がれて人は水汲む  
同

日毎飲む薬滋の水を汲みて置くインカの土器に似たるモリン  
ガ  
同

焼けあとに唐黍を蒔く農民よかかる生活の我にもありぬ  
一九六三年

ドクメント持たざる我を幾人もよりてしらぶる罪人のごと  
同

強いられし労働に頬の尖りつつカンテラの火を囲み飯食む  
一九六四年

生きている者が集いて華やぎを盛りあげている死者の日の墓  
地  
一九七七年

半田 一枝

楽の音に誘われてゆく公園の夜空に映ゆる五彩の噴水

一九六三年

丹念に孫娘の乾したる澱粉の真白さまぶし粉ほぐしつ

同

珈琲の値上げ運動に協力しグレーベの街わびしみ通る

同

ベランダに寄りて見いりぬたくましきマンガの花と空の碧さを

一九六九年

半田 利雄

金貸しし事ある友に肥料買う金なきを言いて借りて来にけり

一九五一年

聖市より買いて帰りし物のうち粉末ワカモトは父にまいらす

一九五三年

しるしして残しておきし種胡瓜葉の下蔭にいたく太れり

同

阪東 啓二

停電の度重なれば仕方なく石油ランプを妻は買い来ぬ

一九五二年

売れ残る戦後肉体文学書値下げの札をつけて積みおく

同

パイネーラしきりに落葉散りゆきて丸き蕾のあまた現わる

同

鼻の上の傷あとのみが印象に残りておりぬ石黒在外事務所長

同

朝寒をけむる竈にうから寄り生姜のにおう甘酒する

同

朗らかに肩のオウムと話しつつ腕なき乞食が店に入りくる

同

冬の日の今朝あたたかく教会の塔よりおりて遊ぶ群れ鳩

同

薦サンジョン赤く咲きたる牧にして血にそみ牛をほふるニグ

口等

同

カンテラを高くかざして老い父の頭の筍子ビッシヨを押し出す

同

池の端につつじは紅く咲きさかり家鴨の親子がその下をゆく

同

厨水流す小溝の両側にひでり続けどにらの花咲く

同

黄に燃えてガブルブーの花咲きぬ池田ホテルの庭をおおいて

同

花咲けどついに実らぬ一株の南瓜に人工授粉をほどこす

同

三千トンの米を日本に輸出するこの国人らもろくならざるに

同

娼婦より受けし紙幣の新しく香水強く匂い放てり

一九五四年

沢庵漬かすかに匂う弁当が気になりバス待つ人ごみの中

一九五六年

縄煙草刻み吸う仕草も物なれて百姓君の荒れしてのひら

一九五七年

いつの世の誰が手にありし石斧かにぶき光りを放ちて重し

一九六〇年

日 賀 美野子

移民祭に顔を並べて祝うべし万骨草生にくちし思いて

一九七八年

東 肇

コーヒーを挽ける匂いの流れ来て東の風の爽やかに吹く

一九五九年

東野 暁風

幼子がつけていねたるピツコンの実夜半に覚めつつまさぐり  
て取る

一九四六～五一年

だまされて居るとは知りつつ知己ながきこの日雇いにまた金  
を貸す

同

この国に住みつく心もさだまりて妻がつくれる雑煮いただく

同

パラナ路は紅塵高くたちこめてバスが真昼を点しつつ来る

一九五二～五五年

移り来ていく日かすぎぬ吾子どちに伯語の手紙を苦しみて書  
く

同

会話さえたどとしきままこの国にただに働きてすぎし三十  
年

同

脱柵の馬さがしつつゆく徑にコロニヨン茂りこの草いきれ

同

野菜売りのその大方は邦人にて少女が二人で荷馬車駁し来る

同

塩ふきて紙のごとくに音たつる密輸昆布を購いて持つ

一九五六〜六〇年

同胞のすでに住まざるこの町の墓地に日本字の墓碑名いくつ

同

屠殺場の牧に羽根干すウルブーが踊るが如くときに移動す

同

この辺りインジオ棲みし跡にして土葬のつぼが畑より出づ

同

ロテリヤでも当てて家を買ひ度しと呟き居しがいつか眠りぬ

一九六一〜六七年

農を嫌い子が次々に出て行けば住み馴れし土地も売らねばならぬ

同

東野 さかえ

次々と子等が麻疹にかかりゆくにサブゲイロなど買ひ来て服  
ます

一九五二年

浜木綿の花咲く見れば紀州なる吾が故郷の海辺恋（こお）し  
も

同

樋口 辰男

一瞬に命を奪いし落雷に白く裂けいる厨の柱

一九五八年

協議まだ結論成らず卓上のサンドイッチは徐々に反りつつ

同

揺れやまぬ水紋写る客船の吃水線下はぬりたての赤

同

もう一度ピングを吞みてつり銭の中に交りし破れ札で払う

一九五九年

あぐらして一日トマテを撰びつつ時おり膝を延ばして堪うる

一九六〇年

灯を消してくらくなりたる家の辺にうめくが如く蛙なき出づ

一九六一年

衰えし嗅覚なれど陽を吸いし実紫蘇は匂う揉みほぐす時

一九六三年

蜘蛛の巣に白くかかれる鶏の毛を壁を沿い来し風がなぶりぬ

一九六四年

柔かき朝の陽光に研ぎ了えし鋭鎌はしかと濃き影もてり

同

ポ語終えてまたも日語を学ぶ孫がたそがれ近く坂下り来る

一九七七年

樋口　　ますみ

コンクリートに捨て身の如く寝るわにの背に夕陽がつやなく



当る

一九五七年

やすらかな夫の眠りも書きそえて吾の日記の終りとはなす

一九五八年

久高 鴻村

青苔の半ば乾ける洲の岩に弁当箱をひとまずおけり

一九五三年

とがりたる岩岬の上にくろぐろと夜鷹の類か止まれるが見ゆ

同

平岩 和子

雨あがりに流るる水は道ぞいに溝をつくりて音たてて行く

一九六四年

ガラージに夜石けんをとりに行く吾は小さきランプたのみて

同

平川 清 ―てんぴよう―

乱れ立つ雲暗くして降る雨の向こうに澄みし空見えており

一九四九年

照りわたす陽の光暑しきらめきて畑になびかうもろこしの葉

は

同

サントス寄りの層雲暗くうつつと吹き下ろす風は雨を含み  
ぬ

同

朝靄のたなびく峡のユーカリが明るみそめて日輪のぼる

同

既にして烈しき日射しかがやけるユーカリ林に蝉声しげし

同

ひたすらに野菜切断機使いつつ子らの視線を頬に意識す

同

暮れはてし空にとおりて遠くより牛車の軌音の近づく聞こゆ

同

大どかに朝霧はるる地のはたてあわあわとして山脈かすむ

同

燃えさかるほのおおとろえ暮れなずむ片山かげに煙はなびく

同

埃風風ぎて夕づく日の光がユーカリ林にしまらく暑し

一九五〇年

ユーカリ林に射せる日光も昏れゆきて夕闇となる道をかえり  
来

一九五二年

霞みつつ昏れしタイヤスペーバの原遠く山焼きの火があかあ  
かで見ゆ

同

生樹焼く煙しきりににおいつつ霧にはやくるる一日の夕べ

一九五三年

窓外の強き日光が照り返しかげあるさまに鶏卵白

し

一九五三

年

ひとむらの青葉の光り声高き少年等黒き裸足であるく

同

平 木 明 子

インガの実を求め移動する一群は昨日の猿か声なくわたる

一九七九年

長き尾は生きたる鞭の如しないポケット猿は疎林わたり来

同

真昼日の澄み極まれる中にしてプレギツサはマモンの新芽抱  
きおり

同

マンガ大樹の処どころにある径は墓処に行く径心惨みつつ

同

荒々しき生活の息吹き見せ乍ら労働者らは朝のカフェ呑みお  
り

同

朝の陽も熱帯なればきびしくてきらめきたてる国道の果て

同

グワジャラー湾一望のもとに見下ろして子育てに一区切り得  
たる安らぎ

同

オンサ島が目路の限りを遮りて岸边ひしめく屋根を陽は射る

同

雨止めば午後四時にして鉛色にアマゾン河口早や昏れなずむ

同

柊 寿 温

雑踏の巷に高きパイネーラの花に渴ける心を寄する

一九五六年

離り住む重き心は消ぬべくもあらずイペー咲く窓にたちいて

同

耳たばに凍傷出来ぬ渡伯してかかるためしは曾てなかりき

年代不明

凍傷とはゆめ思わざり惑いけりひと夜に手足のはれたりしか  
ば

同

平 栗 登茂子

羽田発ちはじめて暮れし機上にてつぶる臉にまた涙湧く

一九五一年

東京に降り立つ光景想いつつ大西洋を我は翔び居り

一九五二年

菜園に灌水はこぶ度ごとにパストの馬は水欲りて寄る

一九六三年

保存林の焼け跡にそのまま一面に蒔きたる南瓜きそい茂れり

一九六四年

開 理 浩

鼻先を突き出しにつつ仔豚らがセルカに立てる吾によりくる

一九五三年

大霜のあしたを昇る日の早さコーヒー園は色変りつつ

同

平 田 三 振

おそ降りの雨にぬれつつ白穂なる陸稲の畠を回り見るなり

一九七九年

病院より出でくる柩に福祉院がおくりし花輪一つのせあり

同

平 野 佳 代

我が倖たしかむる如珈琲の乾場作りの煉瓦並ぶる

一九七四年

平野 満寿子

黄塵の煙あびつつ走り来る真昼のライト光りが赤し

年代不明

歓喜樹の黄なる花になごみつつ乾季ほこりを浴びて旅ゆく

同

裸木となりたる庭の梅檀の房なす黄な実あさの陽にはゆ

同

平松 霞

今日あたり旅より帰る夫を思い日射し弱けれど蒲団ほしたり

一九五三年

友の見舞に來し病院の白き窓かつてはここに夫を看護りき

一九五四年

岩の間をひとすじ洩るる光ありて洞窟の中の湧く水照らす

一九五五年

熟れ残り下がるぶどうにかすかなるうなりをたてて蜂は群れ  
とぶ

同

風に揺るるユーカリ並木の高き穂にきらめきにつつ陽は沈み  
ゆく

同

寄せおきし柿の落葉に降りそそぐ雨をききおり夜のくだちに

同

金雀枝は日暮れの風に揺らぎつつ地面にあわき影を落とせり

同

おおまかに椰子の垂れ葉をゆすりつつ乾きし昼の風すぎてゆ  
く

同

大粒の日照りの雨が仰向きて桃まびくわが頬に落ちきぬ

同

日に幾度わが汲む井戸の辺に生ゆるアヴェンカは常に濡れ色  
を持つ

同

紫の芙蓉咲く下末の子の汚れし靴がぬぎすててあり

同

細りたる肩をまるめて帰りゆく老父に冬陽が淡く照りそう

一九五六年

夜の壁に影を映して棚の上に陶え物の如く眠る白猫

同

スーベルの初熟れ二つわがもぎて一とせぶりのこの桃の香よ

同

いさかいの後のさびしさ夕庭にくぐまりて茶のこぼれ実拾う

一九五七年

広岡 はる

水葬をいたむ汽笛はながたと沈みてかえらぬ日の丸の旗

年代不明

バラ色に夕焼け輝くサントス港幸ある国に着きしと思う

年代不明

走馬燈見る心地せりふる里の長き便りを読みおえてなお

同

蜂雀飛びくる見れば窓近きざくろの花の今盛りなり

同

焼跡にひと本高き枯木あり啄木鳥の音そこよりおこる

同

広瀬 静子

コーヒーの実紅となりすがすがし登校の子らさざめきてゆく

一九五五年

広瀬 紫陽草

雑草の道通り来て木の蔭に衣につきし草の実払う

一九四八年

うちつづく山焼くけむりたちこめて日暮れて帰る家路かすめ



り

一九四九年

落雷はいずくと見れば背戸近く高きバナナ樹さけたおれたる

同

三年ぶり訪い来し友はうらぶれて棉の不作をいいかこちたり

同

広瀬 滄州

麻州へと土地をさがしてなだれゆく哀れ夢追う略奪農ら

一九六六年

雨降ればよく鳴くというサラクーラ鳴く音を恋いて雨待つ我  
は

同

オニブスの座席ゆずりて立ちならぶチーロ デ ゲーラの兵  
らたのもし

一九六七年

二世より大臣出でしビッグニュース我が事として喜び合えり

一九七〇年

弘中 千賀子

ブラジル語もて思考する子と日本語にて思いを述ぶる吾との  
うつつ

一九七七年

遂に吾が裡なる景とならぬままいのち終らむこの国の土

一九七九年

子に孫に理解されざる哀しみをひそめてイミグランテ吾の残  
生 同

生計（たつき）の場移すのみにはあらざりし幼なき移民吾が  
精神史 同

肯（うべな）わねばならぬいくつも慣るるなく移り棲みたる  
国のとしつき 同

吾を限りに日本人ならぬ裔（すえ）のこと現実として思いみ  
るはや 同

子に伝うる哀しみならずをやすらいとなすや豁達（くわつたつ）に笑声（わうしやう）ひび  
く 同

伝承の血の執心を削ぐ如く乾季の粗き風吹き抜くる  
同

杳（やう）くより生き継ぎ来たる土ならず肌荒き風と陽のあふれつつ  
同

陽も風も直截にして葉肉の厚き樹林のにおい立ちつつ  
一九七九年

意識深く沈めて遠しにっぽんの伝いて永き管弦の樂  
同

断たれたる哀しみ吾を限りとし籠りいる日の太棹の三味  
同

一筋に繋がる念い夜の部屋早打ち太鼓身を包み鳴る  
同

思郷という言葉こころを苛（さいな）みてひとりの部屋の伝

承の樂

同

ひそむがに籠り居る日の黄の帯を締めてあわあわ深む夕やみ

同

思考するなべての帰結哀れむにっぽんの藍匂う浴衣地

同

童形の石の地蔵と穂すすきと吾の思いを俯かせつつ

同

表裏なす愛憎のなか故里とう記憶に淡し遠きくにつち

伝承の父祖たぐりつつ異土に経る蝸牛（かぎゅう）の角のご

とき吾生

同

悔恨のひと世といえどこの国のパイナの花のあふるるに遇

（あ）う

同

深 沢 喜久雄

十字架を刻みつけたる仏壇に異和も感ぜず移民古りたり

一九六四年

落ち敷けるパイナは径に溢れいて踏むには惜しき朝霧の中

同

尋ね来し友の家近き辺りにて竹の子取りいるニグロを見たり

同

日本語で「ボラはどうかね」と声かける伯人に笑いつつ買わ  
されている

一九六五年

亡き母の自慢の手打ちそばの味二世の妻の知る由もなし

同

幌馬車は雨の中より現われてドイツ移民の裔運び行く

一九六六年

ピンニョにて豚飼うというこの辺り山の形容も異境めきいて

同

## 吹 本 菊 子

心許せし友も他州に移りゆきて相会う事も稀々となる

一九五五年

移住祭の呼びものなりし盆踊り拍手浴びつつ花道を行く

同

ソルベツテを嚙り従きくる子の鈍さ叱りてニグラは足早め行  
く

一九五七年

ほろ酔いて昼のボールに喋々とジャニオの父を誹れる男

同

耕主邸いづる柩に徙く人に門のイッペーの花散りかかる

同

横切れずプロシソンの過ぎ行くを辻に待ちおり雨もよう宵

一九五八年

木盃組の中に子の名を見いでたる一瞬紙面に眼を凝らす

同

新移民に借りしグラフ誌「サン」に知る夏山スキー場月山の  
全景

一九五九年

蚊遣りなど及ばず二十余年目に吊る古蚊張の故郷めきつつ

一九六〇年

パイネーラ咲くべくなりて迷いいし心も決まり旅行かんとす

同

福井 ふみ

祝盃をあげてよろこぶ初便り父すこやかに祖国に在す

一九四九年

福島 会津志

芽吹きいる木々に囲まれ一本の枯れし大木が枝拡げ立つ

一九七七年

子供等の遊ぶ木蔭の伸びる頃孫の手をひき帰る翁ら

同

福田 信子

新芽萌ゆる雑木林の中にしてラッパチヨの花さやかに咲くも

一九七一年

若き日の「ほしがりません勝つまでは」ととき折り思いぬ移

民の吾は

一九七二年

大き陽のいまし沈まんパンパスに余光はしばし枯野彩る

一九七三年

久々に晴れきわまれる秋空を吾がものとして胸をはりゆく

同

胸を張りてもろ手は頭上の籠支え腰振り歩くパラグアイの女

同

若き等の流れにさからい小舟こぐかいの雫の光を返す

一九七五年

福本 ふくりゅう

末の子の稚かりし日の夢醒めて淋し雨雲遠く群れいて

一九七八年

濁水の渦巻く中に屋根一つテレビに写る街の終りを

一九七九年

福本 文枝

見はるかす地平線のかなたにも緑の丘の長く横たう

年代不明

房 本 徹

明日を待つ蕾の群れにかがやけり落日も亦朝日のごとく

一九四六年

開墾の樹を伐る音が山峡の四方にひびきて朝はすがしも

一九五〇年

古温室の褪せし木をひけば年輪出づ時（と）刻（き）の象と  
匂うすがしさ

一九五七年

午前二時暗き車内に座すひとり外燈も月に似てわが身を照ら  
す

一九五九年

ハカランダの花散る街に花ふめば移民のわれのこうべにも落  
つ

一九六三年

花を剪る半裸のわれと子のうえに風わたり元日のあさ鳥の啼  
く

一九七〇年

栄え一つ屈辱一つかたちなす出身地大阪と書き終えたれば

一九七一年

帰るものかえらぬものも盛り分けて異国の赤き飯喰みており

一九七三年

叔母にたよりの書きつぐわれの前に出てテレビの蛙コロロと  
啼けり

一九七七年

至らざるものになぐさめ地にひくくマリモニアまるき薄紅の  
花

同

霧たまる低きを過ぎて山のうえホテルに入れば見ゆるみずう  
み

同

不二多 鉄人

今日もまた生きる重荷に堪えかねて死にせる記事が新聞にあ  
る

一九四九年

藤井 久子

玉体のただすこやかにましませと清き白菊いけて祝しぬ

一九五三年

藤木 田鶴子

初経みる頃と書いて生理帯を三つ縫い送りぬ聖市なる娘に

一九五〇年

さにずらう乙女我が娘よ小包を解けば豊けき頬もゆるべし

同

夫を抱き切に祈らす聾盲の師の御頬に泣きらめく

―新里先生―

同



やや気取りて乙女らが年賀述べあえば華やぐ衣の匂いこぼる  
る

一九五一年

八人の子を生み育て年を経て今宵見出でし初白髪抜く

同

藤 木 義 夫

のどかなる河面にねむる群れ鰐の姿は消えて嵐近づく

一九六七年

藤 永 晴 海

アンジツコの向こうを流れゆく雲に虹は冴えつつ木の間より  
見ゆ

一九五三年

井の中を波立たせつつ上らんと舌出しもかく蛇を見ており

同

一番のオーリヨ クルーの汽車の笛朝の床にきけばたのしき

同

ドミンゴの台所にてあげものを一人している昼の静けさ

同

藤 田 朝 日 子

行進の列見守れりこの中に二人の吾子も加わりている

一九五九年

大統領にジャニオが当選せし朝妻は白百合の花を活けたり

同

旱魃に牛馬の牧草（くさ）も絶えたれば椰子を倒して其の葉を喰わす

一九六〇年

間作のミイリヨは今年も良く出来て馬車の轍を軋ませて引く

同

父母が諍う夜を開拓の山赤々と燃えつづくなり

一九七三年

山焼きて十日過ぎたり灰の上に太き蜥蜴の尾を曳ける跡

同

見透かせるばかりに焼けし原始林余燼くすぶる中に入りゆく

同

パン窯に火入るる娘北欧の貌して旅行者我に禮（いや）せり

同

北欧の貌まだ失せぬ娘等のいてオランダ村に鳴る風車

一九七六年

玻璃戸より冷えしんと伝わりてラジオは寒波北上を告ぐ

同

音に出でて水は噴きくるたわしもて暗き井底に岩盤洗う

一九七七年

今日の空ブラジル晴とう友の声暗き井の底渌えつつ聞く

同

移民史料館シンボルマーク切り取りて妻は新しきアルバムに貼る

一九七八年

原始林を伐り拓きたる双の手に友は勲記をおし戴きぬ

同

要りたる妻が始めて手取りせる餅つややかに搗きあがりたり

一九七九年

暑き日に徐々にのユーカリ馴れゆく態（かたち）にて樹皮脱ぎてゆく庭

同

霧深き夜とし思う庭椰子の葉末ゆ雫の音絶え間なし

同

藤 田 トヨミ

受難祭この山寺に祈りいて出づれば時雨に尾花散るなり

一九七九年

一望の視界は麦の緑にて車は走る雲たれし朝

同

藤 田 美砂子

憧れの如き思いも湛えいてわがみごもれる一日を過ぐす

一九五一年

子を叱る夫のかたえを離れ来て風呂を焚きつつ時長くおり

同

伸びて行く若き世代を恃みつつ移り来たりし国に老いゆく

一九五八年

育て来し子の言動を負目とし喪のごとくらき食卓につく

一九六三年

勾配の急なる石の段長く尽くれば小さき寺院の建てり

一九六四年

傷み易き心持てると思う子が描きゆく画の線細からず

同

海ぞいの道は尽きぬと戸惑える眼に群がりて咲く緋のカンナ

一九六五年

散策の道何時となく定まりて話題も狭き範囲をいはず

一九六六年

描きたる夢には遠く生きて来て海に佇つ夫の構えなき貌

同

自らを埋めてゆかむ晩年を想いて眠る夜よ膝まげて

一九六九年

夏の陽の灼くる臭いがためらわず孕みし魚を割く手に溜まる

同

年毎に可能の範囲狭まれど購いて持つ菊は匂えり

一九七三年

寒気呼ぶ春の嵐に吹かれいる藤の花房なべて短し

一九七五年

慎しく生き来て染みの浮きし手に弛くなりたる指輪を廻す

一九七六年

移民史料館成りて世代は移ろえど杳き記憶の斧音絶えず

一九七八年

終止符を打たれし吾の思いみな蒐めてたてり吾子の墓標は

一九七九年

愛憎を越えて過ぎゆく歳月を沁みて思うに子は先立ちぬ

同

開拓時の話題も二人のものとなり病む老い夫にひそと寄り添う

同

藤原 美重

ブラジルの国歌唄えぬ老い我は心苦しく式典に連なる

一九七〇年

輝ける移民の蔭に幸うすく施設にひそと病む人もあり

同

それぞれの旧姓と近況つづり込み友ら集える写真届きぬ

一九七八年

藤 本 三 春

日本の雛の祭りと壇の上にニグロ人形も添えて飾りぬ

一九五〇年

また逢わんと我が手握りし従妹の駅の鏡に写りし横顔

同

しるこなど作りて子らははしやぎぬ吾は誕生日を忘れおりし  
が

同

藤 山 定 男 — 南歩 —

何処まで歩いてても親しみのない街 日暮れを帰る

一九四八年

断崖の急カーブを廻るとカツキリ視野に入る海！ 遠く大西

洋の波が揺れてる

同

最初の釦を掛け違えた俺、茫漠と思い疲れて街の遠景を見て  
いる

一九四九年

珈琲の立飲みもいつか身につきポケットから探り出す三〇セ  
ンターヴオス

同

部 谷 風太郎

二人分仿きたまう父上のふしどに高き鼾（いびき）聞こゆる

一九五五年

二葉 伯風

バテデイラの動力の音に励まされ稲刈る人のおのずときおう

一九五〇年

ムダンサの荷積み終えて友は吾に遊びに来いよと声くもり言  
う

同

吾が家の窓あけみれば金色の稲穂たわわに陽にかがやけり

同

勢（きおい）よく伸びしトマテも黒点病にてみるみる黒ずみ  
見るかげもなし

同

古川 信子

光りつつ海面に映るビルの灯の縞なす影は渚につづく

年代不明

丘の上に女神まつれる御堂あり花飾られて人影もなし

同

葉がくれに人家も見えて馬曳きし人登りゆく山の細道

同

古北 政治

苛酷なるこの旱魃に生き伸びて穂を実らせる二十サンチの麦

年代不明

故里の秋の訪れ一葉の紅葉に托せし従兄の便り

同

駅前の廣場に群なす流浪民農村離散のこの吹き溜り

同

パイネーラ花咲く度に語る母渡伯の頃の桜しのびて

同

古沢 剣舟

むしばみて衰えし齒は光沢もなく瓦の如く欠けゆくあわれ

一九五〇年

子を産むたびに齒は蝕みてこの日頃ものいう口元の老けにし  
妻よ

同

底ごもり沸きくる湯音ききにつつ心のどけく風呂にひたれり

同

口つけてすする岩間の湧き清水かすかに青く苔の匂えり

同



今日明日の知れない妻の分娩に家庭医書の一所何度も読めり  
同

独身時代に使いし鍋で飯をたく妻が産褥に臥りてあれば  
同

父われの性に似たるか習い初めし字さえ大きく太く書きたり  
同

再び酒は飲むまじと夜の公園の石のベンチにて酔さましおり  
一九七九年

電気鋸の音近々と聞こえ来るときあり風の向き変わるらし  
一九八〇年

一夜にて衣食住を奪われたる水害の人ら多く語らず  
同

古 沢 千代子

齒の悪しきを嘆かうちに多忙なる一日をさきて豆腐を作る  
一九五三年

遠雷のひびく昼間を夫と我と言葉少なに綿つみいそぐ  
同

ブラジルに住み古りしかば新年の感動もいつしか淡くなりた  
り  
一九五六年

施療院の階段しずかにのぼりゆく老尼僧は手にクルスをもち  
て  
同

いくばくの樹齡ならんか枝はりし木棉の花は咲きさかりたり

同

囚われて一日を檻になく小猿時に乞う如き表情をして

同

小暗きに馬をはげます声のして車のきしみ遠ぞきてゆく

同

音たててフエイジョン煮ゆるを聞きいつつその甘き香に安ら  
ぎ覚ゆ

一九五七年

忙しさの幾日のはてに目にとめしコスモスは大方花散りいた  
り

一九五八年

近々と星がしきりに光る夜赤く燃えつつバロンとびゆく

同

一月（ひとつき）をひたに内職せし報酬なり一コント札八枚  
たたみてしまう

一九五九年

古 荘 辰 穂

故郷知らぬ吾が子に風呂を焚かせつつ阿蘇のふもとの温泉を  
語る

一九五八年

古 田 格三郎

鼻緒ある草履笑いし伯人が今日すらすらと履きて街ゆく

一九七二年

古藤 節男

祭典に節婦の表彰受けし君孤独の蔭を濃く宿しいて

一九五八年

古屋 きさを

湖のはるか丘は緑こくその向こうに天文台白く光れり

一九四九年

おどろなす荒草山に風吹きて雲影速くよぎり行くみゆ

同

白壁を背にして立てる無花果の若干の実も色着きにけり

同

サツペ刈ると朝な夕なに通い居る砂多き道は歩み難しも

同

古山 孝子

山々の低みをみたしこの湖は四千アルケールの広さをもてり

一九七九年

山の影陽のかげ映して湖の面（おも）日に幾度か色移りゆく

同

視野広きベランダに佇てばドン　ペードロの州道と湖一望の  
もと　同

雨止みて薄日のさせば山裾を貫く舗装路一すじ光る  
同

別　所　　慧

夜の風に梢打ち騒ぐユーカーリに渦状星雲は見えかくれつつ  
一九五〇年

打ち上げし花火の消えし闇空に蹴球場の歓声ひびく  
一九五一年

シユラスコの焼串を卓に突立てて娼婦と語る山買いに来て  
一九五四年

亀を剖くインジオは我に似て親しアマゾン土産の十六ミリ映  
画　年代不明

野飼豚追いくる人に埃たてパラナ路のバス灯をともしくる  
一九七二年

別　府　二　郎

この家に住むも三年か家洗う妻を始めて手伝いにけり

一九四八年

正月は妻子を連れて来よと言ひ旅費まで添えし母よりの文

同

敗戦の日本あわれと言う人にいきなりコップを投げつけし友

同

パール シネマも営業中止す共産党暴動勃発の兆ありとて

一九四九年

ブラジル語わからぬ母は道化師がいやしき所作する時のみ笑  
う

一九五一年

願望の土地もとめ得し安らぎに六十路に入りし父は肥えたり

同

パトロンが友の盗みを聞き糺す声高まりぬ閉店間際に

同

一日のつとめの終り店の扉を閉ざして鍵をパトロンに渡す

一九五二年

帰り来て今日の少なき商いの銭は数えず金庫に入るる

一九五三年

吹きあれし西風止みて重々と山焼く煙のこもりし夕べ

同

この客はパラナ州より来しならん赤土つきしシャツを着てい  
る

同

ほの白くパン屋のけむり真夜中の空地の草の上に流るる

一九五四年

別役 みつ

客足のしげきこの日は心張り疲れ忘れてトマテ拭きおり

一九七八年

星野 明

首欠けし神像ありてコスモスの咲ける道辺の小さきほこら

年代不明

刻々に色あせてゆく綿雲を眺めておりぬ静かな夕べ

一九四九年

星野 福次郎

朝靄の山峡の里は静まりてアバカテの梢に陽のあたるみゆ

一九五九年

星野 忘れな草

退院の喜びもちて帰りたる谷地の我が家も菊咲きており

一九五一年

投売りの靴の中より結局は修繕のきく型を選べり

一九五七年

生きている限りは苦悩あるものか紫陽花は哀愁の色もちて咲く

一九六八年

会いて又別るる寂しさ背に残し川波光る道沿いを行く

一九七〇年

スイナンの冷たき炎眼にしみるおびえもて待つ次の言葉を

同

気づまりな沈黙長く続く卓グワラナの気泡細かくはじく

同

又一つゴール入りたるらし花火鳴る厨にひとり皿洗うとき

同

穂 島 千 代

焼け跡もいつしか草に覆われてマルゴーズの穂高くゆれいつ

年代不明

もの言えば淋しさいよよ募るべし瞼閉ざして髪を梳きいき

同

旱魃の赤土吹き上ぐる風ながら旅立つ心洗われており

同

石多き瘦地の畠が円かなる丘となりたり草萌えいでて

同

細 江 仙 子

奴隷に似し記憶をもてる父たちを黄に染めし地我を生みし地

一九六七年

移りゆく野に落としたる父たちの血のいろ混沌とさせて野火  
燃ゆ

同

この国の土となりたる彼の名を異邦人と呼ばぬ広き野のあり

同

ミイラとなれる牛の修羅もひそませて掠奪農の果ての野の焼  
け

同

フアゼンダに母妊りてより頒ちえぬことばを持てる苦しみを  
負う

同

流刑に似てぴしぴしと身を打ちしポ語を禁じて父は老いたり

同

いつの日もよそ者なりし父の国神話の国でなければならず

同

毛唐嫁を怖れ告げる父の眼のとどくひろさの村に育ちて

同

唾のごと日本人街すぎてきて「毛唐」のなかの友の饒舌

同

日系に生まれしことを歎きしを秘めごととしてぬくめ来たり  
ぬ

一九六七年

畜など思わず燃やしあいたるマメルーコの気泡のごとき血を  
眩しめり

同

北の海越えきしものら終わりたる街にまぎれてゆく系譜あり



同

何処にて血胤ひろいしか邑遠く散りゆくムラートの児らの足音

同

同

ちぢれ髪の未だかなしみに繋がれり邑に少女の脛ながく伸び  
原始林焼きつつふくらみてゆくわが視野に黄の色の陽天にう  
ごかず

同

同

日本の言葉壁にはられて草いきれのなかの日本人会館

同

移りゆきし父らの跡に残したるカボクロのもつ大蛇伝説

同

細川 末男

六月二十日大降霜のありたりと農業日誌に赤字で記す

一九五二―五八年

同

子等は皆日本シネマを觀にゆきて妻と黍もぐ天長節の午後  
いそしみて子等の育てしトマテ畑この大旱魃に半ば枯れたり

同

まつわりてマンチケラにある雲の一日動かず夕となりぬ

同

人參を積みたる駄馬が幾頭か眼下の谷に蟻の如く見ゆ

同

アルゼンチンのバタタ入荷が話題となる今日の月例部落集会

同

けたたましくジョン デ バーロが啼き次ぎて今日の午睡の  
刻も過ぎたり

同

日本語の学習用にと購いしガソリン ランプ今宵明るし

同

風風ぎて静かな朝なり晴れやかに日本よりのラジオが聞こゆ

同

林檎祭りなりと言いつつペンソンの主婦は蕎麦など出しても  
てなす

同

土砂降りの中を人參拔きに行く共同出荷が初まりたれば

同

叱りつつ馬を追うあり黙しつつ馬につくあり人參積みて

同

草拔きに疲れし腰を伸ばしつつビンテージ啼く方を見て佇つ

同

屠らんと空箱の中に伏せおきし若鶏あわれ関（とき）作るな  
り

同

椰子帽子顔に当てつつ朝の陽を我浴びて居ればコーヒーラの啼  
く

同

細川 断腸花

日本語を習い初めし末の子が煤掃きのことを妻に問い居り

一九五三年

永病めば我が子にさえも疎まるとこの老友は涙湛えて

同

サナトリオに三年過ごせば二組の敷布もいよ破れ初めたり

同

短歌欄見たきばかりに療費さきて「南米時事」を購読せし君

同

或る時は君は主治医に泣きすがり胸廓成形手術乞いにき

同

恐る恐る廊下に立ちて骸を敷布に包むを我等見ていき

同

細島 六合

州境の河港しらじら明けそめてさ霧の中にバルサ発ちゆく

一九六一年

堀田 きよし

音たててニグロ親子が競い打つ豆がらは白く秋の陽に飛ぶ

一九五七年

堀田 亮子

音たてて燃える未明のかまど辺に旅立つ夫にカフェーすすむ  
る

一九六四年

穂屋野 潔

なしの葉のかげに座りて面会の妻が語るを吾黙し聞く

一九五二年

高原の梅雨の寒さを言いにつつ妻に外套を出して着けやる

同

吾が家の牛馬を売りて身の病癒やさん料と妻はなしたり

同

蛍光板見つめて医師は空洞の塞がりいるを静かに言い出づ

同

掘り下げし池に光りて音たつる笥の水をしばし聞きおり

一九五三年

移し来て池に浮かべる布袋草幾茎が紫の花咲き出でぬ

同

退院の友に会わんと朝まだき四キロの道を歩み来にけり

同

雨もやう暖かき夜の稲光りミナスの山のほの白く見ゆ

同

わらび摘みて丘に坐しつつ打ち仰ぐミナスの山は見れど飽か  
なく

同

トラホームの菓にやけし眼もて君は数々の写真を見おり ―  
岩波夫人―

同

いそしみて故友の育てし桃の木に手を触れにつつ涙の流る

同

布袋草二つ浮きたる山房の浅井の水は濁り居たりき

同

## 堀 石 凡 生

アバカテの若葉もえたつ春の朝五アルケールの畑棉蒔き始む

年代不明

バルサ待つしばしのいとま岸におりて旅疲れせし素足をひた  
す

同

後何年営み得るか吾が耕地取りまきてビーラの家建ち増しぬ

同

来年に望みをかけて冬眠に入りしぶどうの樹皮をむきゆく

同

昼の雲影落とし行くぶどう畑摘果人夫のラジオ高鳴る

同

好転は遂に望めず今年又融資仰ぎて農を続ける

同

しらじらと視野こめて降る霧深し娘の出勤を送る朝道

同

一ところ降りし夕立の跡ありて強き日射しの照りかえす街道  
(みち)

同

麻降りの雨にこもりて味噌をたく妻が用意の鉄鍋みがく

同

みずしき月照れば古きアコデオン持ち出して弾く

同

堀内 秀子

吾子達の産湯わかせし古釜で今日は孫等の赤飯をたくも

年代不明

ふた親の言葉を訳す混血の幼き孫は面さかしらに

同

長病みのようやく癒えし床の上髪すく櫛に白毛まつわる

同

病癒えて集う友らと語り合う明るき午後のみどり目にしむ

同

本 庄 研 一

幼顔（おさながお）うつる写真も色褪せて旅券に託せし一生  
（よ）すぎゆく 年代不明

母の記憶もたねば乳の匂いなき夢に埴輪の笑みは顕ちくる

同

赭き地底に眠れる父よひと知れぬ移民哀史の空白に住む

同

もの植える性（さが）継がしめし父の血よ異邦の土に叛く日  
のなく 同

白く乾く牛の髑髏を魔除けとし移民がいだく小さき充足

同

怯えつつ日語学校に通う子ら移民の裔の翳をまといて |

第二次大戦前後 |

同

異民族が蹂躪されるを怒りつつ脆き幸福にわれら寄る日々

―チエコ潰滅―

同

親の国の言葉がもてる違和感を拒みて子らの生きる道あり

同

この国の原住民に骨相の似るわれら不意にレジスタンスもつ

同

汗ばみて軀寄せ合う夜のバスに澱む国籍知れぬ体臭

同

陥穽のごと結ばれし父母をもつ混血の子の孤独なる顔

同

新しき親子の倫理を肯いて老いし移民に平安があり

同

いくたびか挫折埋めてきし月日灯る聖樹のかげに想いぬ

同

変貌を遂げゆく祖国 地球儀の中に小さく朱き島々

同

赤く灯す孤高といえど星に遠し放送塔は昏き地に立つ

同

余剰なる枝剪（き）ることも易からず果樹もさびしき冬の貌  
もつ

同

生と死の岐路迫りくる手術室の無影燈下に仰臥すわれは

同

本 庄 真津緒

とじ終えし冬の用意の蒲団をば西陽に干して心足らえる

年代不明

健かに育つ双生児のひとりにて逝きしひとりが惜しまるるな  
り

同

息づきのあらき子と居て夜の明けを待てばせつなし時計の音  
も

同



算術を子に教えいし夫の声の荒々しくなりゆくを湯殿にてき  
く

同

町住みの庭ひろからず唐黍の葉ずれの音のひねもすやまず

同

給水の止まりてすでに十日経ぬ箱の茄子苗は日々に萎えつつ

同

本 田 梅 子

トラクターもて水運びつつ西瓜まく夫の苦勞のしみて思おゆ

一九四九年

粗壁の未だ仕上らぬ屋敷にてバナナ二三本植えあるがみゆ

一九五〇年

本 田 笑 山 — 数 良 —

朝毎に飲むカフェーの濃きがよく早や十六年をこの国に生く

一九四八年

うつしみのうれいも忘れこの海の悠久に変らぬ潮鳴りをきく

一九五〇年

朝光はペードラ バウーに耀いて霧こめし峡にせせらぎの音

同

山峡の朝日をうけてたたずめばバウーは澄みて風すがすがし

同

カラマールの峡谷廻りて下りくる赤き電車の耀くをみる

同

霧雨はパシオの上にけぶりつつバウーの巨岩はくもりて見えず

同

寂しくも美しきものを今宵見ぬ真夜の墓場にのぼりゆく月

同

市民権持たないわれとわが友と選挙場前の雑踏にあり

同

渦巻きて霧は谷よりたちのぼり峡間のヴィラは今し明けゆく

同

この墓地に日本人は一人というその一人なり逝きし吾が妻

一九五二年

一つがい十コントスするデンマーク犬われらより賛沢なる物を食いおり

一九五二年

日本人ただわれ一人混り居てわびしく通夜の夜は更けゆく

一九五六年

このひと日雨降り続き夕べとなり家ぬちにひそけく鋤をとぐ

音

同

每 熊 百 合

秋雨の空地に児らの集りてボール蹴りおり汗にまみれて

一九七五年

わが歌う江戸子守唄ききながらやすらぎ眠る混血の孫

一九七六年

値切らずに品を求めし吾に向きかすかななごみ見せしインジ  
オ  
同

槇 文子

月例の日本シネマは賑やかにミッキーの漫画となりて終りぬ  
一九五五年

真 神 鳴 草

カルナバルに白髪を染めて紅をさす年増楽師のドナ マリー  
アは  
一九五四年

カラピッショ何のゆかりの野の草ぞもの憎むがに吾にからま  
る  
同

コロノ小屋の裏川に懸かりし水車あり終日のどけき音をたて  
おり  
一九五五年

牧 政 治

越えて来し七十年の辛酸を永久に消さじと移民史に書く

一九七八年

日本移民此処に眠ると永遠の歴史に記す拓魂の碑（いしづみ）

同

牧 守 人

黒雲の低く下り来て斜めなる雨脚強く土にひびけり

一九四九年

蒔 田 南 岳

仰ぎ見て感慨ふかし実を蒔きて育てあげたるこのパイネーラ

一九五六年

折々に木棉の瓣の散る下に珈琲採取の梯子つくろう

一九五八年

ジャルジンの青葉の蔭に身をひそめ銀行預金の額をたしかむ

一九六二年

訪うことの稀なる彼がたずね来て無心いうとき同県人という

一九六四年

秋陽てるテレロに高く寄せ終えしカフェの乾き手に掬い見つ

一九六五年

こぼれ散る椰子の黄花を日ざかりに蟻の曳くさまあかず見て  
おり

同

国道に添う焼跡にペルアとめ芽生えて太き蕨を摘めり

一九六五年

一発の弾丸横腹をつらぬきてよろめくガンバついに斃れき

一九六六年

大統領迎うる礼砲殷々と雲なき秋の空に轟く

一九六七年

霜に枯れ褐色になりし珈琲園吹き渡りくる風なまぐさき

同

渡伯して苦勞のしるしありたりとわが珈琲の樹海見わたす

一九六九年

大半は黴びたるフエイジョン幾度も掌にすくいつつ暗しこの  
雨季

同

カフェ採りようやく終えし日曜日子牛屠りてコロノ犒う

一九七四年

牧 野 数 馬

昂ぶれる妻に黙して外に立てばそよ吹く風の頬に温とし

一九五三年

湯浴みつつ我が見る四肢の痩せ細りみにくき老いのしみて思  
わゆ

同

正 木 思 水

夕立の過ぎたる後の風絶えて青葉明りに羽蟻飛び交う

一九四六年

ふと口にあてて吹きしが木の葉笛肺病む吾の息がつづかぬ

同

エキリップスの匂いを放つ邦字紙の祖国の記事に先ず見入るなり

同

昨日おそく人死にゆきて今朝ははや芥溜りに物の焼かるる

一九四九年

後すぎる山羊を鞭うち追いたてて土人（カボクロ）ひとり市場へ急ぐ

同

ラッセルの胸底に鳴るに目が醒めて夜半寒々と寝返りをうつ

一九五二年

小車（シャレット）に肉積みかさね配りいるひと日静かな山の町にして

一九五三年

時ながく見つつし居れば背戸の桧はかそけき風に花粉をこぼす

一九五五年

白き腹返し飛びかうつばくらを見つつし午後の検温をする

同

つぎつぎに絡みて苦しき痰を喀き冷めし朝のコーヒーを飲む

同

永病みの末に腎さえ侵されて今日より塩を断たねばならぬ

同

十年に余る病に吾がやせて給仕婦にまでいたわられおり

同

朝々にむくみ増しきし両足をひきずり歩く冬蠅に似つ

一九五六年

隔離室に移りし今宵黄に濃き蝶ひとつおり白きカーテンに

同

息切れの激しき時にいつまでもこうろぎ一つ部屋隅に鳴く

同

美しき臨終を残さむと思いつつひそやかに酸素吸入をする

同

残りたる肺に押し入る酸素なりからく吸いつつ我が生きて居り

一九五六年

読まんとて買ったためし本を読むこともあらず命は絶えゆかんとす

同

## 間島 正典

糸柳芽ぶけるそばにたかだかと旗押し立てる独立記念像

一九六〇年

アバカシの棘葉が山と積まれつつ昼たけてゆく市場の周囲

一九六一年

新緑のアレлуйヤ並木をくぐり来て黄に染められし茹卵買う

同

たんぽぽの咲きいる池の辺をすぎて心故郷に帰りておりぬ

同

バスとめていそいそ肉を買いに行く運転手きみも白毛増した  
り

同

歌い来るプロシッソンに灯を消してかわりおりぬ復活祭の  
夜

同

いさぎよく密貿易を摘発すジャニオを見れば未来あかるし

同

何せんと吾は立ちしか夜の梁に吊りしバナナの熟るる匂いす

同

鶏飼いの減りゆくと言うイタペチの山麓深く霧立ちこむる

同

火のごときカンナに向かい胸を拭く日系二世農を受け継がん

同

あぶら草うす紅に咲きにけりしみじみ郷の母を恋うる日

同

炎ゆる火のアロエの花を原点に畳なわる峯ミナスに続く

同

牧の牛群れつどいゆくあかあかと眩野の涯に日の入る夕

同

増田 小葉

四、五人のあらくれ男のカマラダの中に交りてアメンドイン  
打つ

一九五五年



赤茶けし「椰子樹」一号を一つ持ち着きし四十一号と見比べ  
て居る

同

ビリグイへの旅の車中に読まんとて鞆に「椰子樹」をしのば  
せて行く

一九六一年

増田 秋水

移り来てわれ五十年恵まれず裸足の妻をじっと見つめる

一九六一年

崩え果てしインカ城趾に登りきて還す由なき世をば偲びぬ

一九七三年

町田 貴志

耐えかぬる圧迫なりと涙して語る過去あり新移民の妻は

一九六六年

帰化人の吾が責任と選びたりサンパウロ市議日系候補を

一九六九年

子供らの協力を得てようやくに踏みきり得たり訪日の旅

一九六九年

群れながら新芽嚙む牛の肌をなで麻州の春の風は流るる

一九七一年

雲にまで巻きあげている土煙り麻州の風に吾が目を伏せぬ

同

たたなわる山の彼方になびきつつパライーバ河岸の草焼く煙

同

インジオの墓も日系が拓きたる畑も沈めてひろがれる湖

一九七二年

牛一頭八百コントスと笑いつつ言い出す君は今牧場主

同

末 永 花

異邦人の我を気づかい若者はタクシーで行けよとすすめるも

一九七三年

サン クリストーボン パラダにあれば囀りに和して幽けき

松籟きこゆ

同

松 尾 紫 郎

街角の冬のこぼれ陽さす壁に盲の乞食ひねもす佇てり

一九七六年

暴落のことには触れず夜更けまで妻と二人でトマト選り居り

一九七七年

赫々と陽は傾きて乾季風吹く高原の草枯れつくす

同

霧の中ボイア フリーアは道に群れ田舎の町の朝が始まる

一九七七年

はしやぎいしボイア フリーアいつしかに黙しいるなり雨降り止まず

同

サンバの音遠くに聴きつつ歩を運ぶ裏通りには人影もなく

一九七八年

透明に流れてすぐに固まりつつ蠟涙は溜る盛土の上

同

屈辱の思い噛みしめ行く舗道背に照り付くる西日は強く

一九七九年

## 松隈 咲代

カペーラに灯して祈る一刻を松風さわぐ心重き日

一九六六年

マンガ樹の太きに白き根を這わせ見事に咲けりシユーバ  
デオロ

一九六八年

川の辺に小さき花の一株が踏まれて今日もまた白く咲く

同

朝焼けに映ゆる椰子樹は髪を梳く鏡の中にまばゆく写る

一九六九年

洗濯物頭にのせし少年が朗かに行く朝の街角

一九七一年

サンジオンの焚火祭りに集い来る素朴な民の中に住みつく

同

吾子一人残して帰る都市の灯が遠退きて行くバックミラーに

一九七二年

フオゴ パゴウと言うがにきこゆ椰子の樹に巣籠りて啼く山鳩の声

一九七三年

コスモスに似たる野草の咲く土手に明日は旅立つ子と釣りており

同

民謡を口ずさみつつ米を選ぶ母の背中に冬日は温し

一九七六年

仏壇に点す灯に浮かぶ舅位牌となりて年あらたまる

同

山深きミナス路にして炭を焼く煙細々立つを見て往く

一九七八年

松 島 末 野

野火のたつ季節今年も巡り来て鶏舎のまわりの除草をいそぐ

一九五四年

骨肉の絆と言うか今生れし小さきものによする想いは

一九六二年

青葉濃き街路樹の下に若きらはバス待つ間も腕組みており

同

パイネーラと椰子と並びて立つ辻は尋ねる友の家の目印

同

舗装路の際なる太きパイネーラ花真近きに切られ積まるる

同

乳母車かたえにおきて釣をする家族づれなるブラジル人は

同

松 田 寒 山

点々と土掘りあげてひもすがら蓮根掘りぬ泥にまみれて

一九七六年

子供等と俱に唄いている妻を愛しと思う温かき朝

同

煉瓦積み到时過ぎおれば自ら（おのずか）心平らになりて吾  
がおり

同

松 田 博

グラデーラ通せしあとの桑畑みどり濃くなり背丈程に伸ぶ

一九七七年

泥のごと疲れし体鞭打ちて桑刈りつづけぬ農夫ぞわれは

同

齒車のかみ合わぬ如もどかしく父親とともに経たり二日間

同

松 藤 良 光

原始林ひらきてうえし茶畑のみどりをひくくつばくらめ飛ぶ

一九七〇年

みちをゆく黒人の子のポケットに蝉の鳴きいる元日の朝

一九七四年

松 永 イ ノ

勤め終え疲れて帰る老いわれに冬の宵風容赦なく吹く

一九七〇年

渡伯して五十年ぶりに見る桜咲き盛る園にふるさとを憶う

同

向かつ丘のそびらの森におもむろに没りゆく日輪の光眩しも

一九七〇年

松 原      志津哉

三人目の孫の産着を縫い急ぐ妻の横顔に歳月を見る

一九七八年

山間の小さき墾屋にともる灯のまたたき増してたそがれ深む

同

謝肉祭いま酣と踊り狂う都大路を黒人の群れ

同

黒人の子と肩組みあいて登校の吾子を送れば朝蟬の啼く

同

一度だに抱きしことなき孫ははや四才となりて坂を駆けゆく

一九七九年

いらだちの心見せじと歌などを作る明け暮れ今日も過ぎゆく

同

松 前      涼

母逝きてすでに七年すぎしかば墓標の文字の墨跡もなし

一九四八年

棉不作馬鈴薯不作と百姓のかこつ言葉は他人ごとならず

同

出盛りの月に入りしが精棉場に出入る自動車の乏しかりけり

同

何一つ手職も持たで儲からぬ百姓一途にたどり来しはや

同

この土地に住むも八年か一度も儲けしことなく土地売りにけり

一九四八年

馬鈴薯は不作というに値下がりし話ききたりうなずきがたし

一九四九年

## 松 本 晚 翠

この雨は棉のためには悪けれどバタチニヤにはよき湿りなり

一九四九年

この頃は豆腐も納豆も売られて母国日本に在るとかわらじ

一九六三年

胡瓜もみそこぼくの紫蘇の葉を入れて匂い親しく夕餉に向かう

一九六八年

空高くつがいのアララ鳴きつつ飛び森の彼方に消えてゆきたり

一九七二年

アチバイアより年賀の餅を貰いたりつつしんで神仏に供えまいらす

同

黒雲は層をなしつつ遠岡の放送塔の上を流るる

同



摩耶 晃

そのかみは邦人も住みつらん老廃の耕地に大根の花白く咲く

一九五四年

借りのある家の籬を紅に咲けるプリマベラ仰ぎつつ通る

同

丸木 清太

灸点にも似たる瘦地の棉殻に祈るがごとく火をつけてゆく

一九七〇年

円坂 琴

母国より携えて来にし水仙の季をたがわず年々に咲く

一九四七年

恙なき日は思わねど我が病めば子等は真心こめてかしづく

一九四九年

療養の心静けき昨日今日小春の窓辺に小鳥来啼けり

同

郷愁のつれば此処を訪なわむパルケ イビラプエーラの日  
本館

一九五五年

丸山 林子

郷愁にはやや異なれる熱きもの持ちて読みゆく移民の記録

一九七五年

抵抗の象とも見ゆ十字架もわれも真昼の陽に曝されつ

一九七六年

あざやかな切手幾つも貼られて会うには遠きわが位置を知る  
同

陽の匂いかすかに残る紫蘇の葉を漬けゆくときに故郷杳けし  
同

丸山 重子

久々の雨に喜ぶ植民地夜明けの空にプラントの音

一九五六年

三浦 朝江

生活は田舎にあれば困らねど砂糖欲しとの姉の文来ぬ

一九四八年

おり立ちて庭掃き居れば梨の木の青葉がくれにビンテージー啼く  
同

霊前に香華捧げてつつましく額（ぬか）づきまつる夫の忌今日を――三浦 鑿 三周忌――  
一九四九年

百姓が配給米を受くるちよう事もいくさに敗れし悲哀か

年代不明

高工に入学せしちよう故里の甥の手紙はローマ字にして

同

実情をわが同胞に知らさんと書きつづりたる日記貴し

同

三十年余り住みにしこの街を去るは故郷を離るる心地す

一九五三年

セー寺院に帰り来たりて一斉に額づけばしばし鐘鳴りつづく

一九五九年

幸うすき人らのために身を捧げ働く君のただに尊く――渡

辺マルガリーダ夫人――

一九六一年

三 浦 久和子

谷に沿う雑木は緑深くしてそこより朝の霧生るるなり

一九七〇年

ついの住まいここに定めて思い探し亡夫の遺骨移しまいらす

同

高原は秋来るも早し街路樹のすずかけはすでに黄ばみ初めたり

一九七二年

ゆくりなく故里人に逢える思いつわぶきの花素朴に咲きて

同

間引き菜の根も葉も汁の実となして味気なき夕餉幾日かつづ  
く

一九七三年

新しきナフタリン入れて又しまう着る折とてもなき日本着を

一九七四年

一つ岩一つ山なす高处より湧きて流るる水光りつつ

一九七六年

三 浦 ま ち

野の花を手折り来たりて瓶に挿しメーザに置けば我が家明か  
るし

一九五〇年

霧雨も今宵は晴れてイタチンの嶺にある雲も薄らぎにつつ

同

朝窓を開く遥かにイタチンス山裾こめて霧立ち流る

同

三 浦 義 雄

馬を曳きて戻る夕べの田舎道野風冷たくわが頬を吹く

一九五五年

黒人の假装の乙女タンボリンを叩きて通るカルナバール  
の夕

同

移り住みて此の国の言葉になじめぬを心侘びつつ二十年を過ぐ

一九五六年

塀ぎわにわが培いしアルメロン紫あわき花をつけたり

同

朝よりの雨は終日降り止まず冷えし身体をいたわりて寝る

同

水 島 三千世

山伐りの斧のひびきは移住地の朝の冷氣をふるわせきこゆ

一九六一年

寝そびれて瞼とじつつ時すぎぬ又アバカテの実の落ちし音

一九六三年

暁の小暗き丘にほの白く見ゆる教会堂に灯がともりたり

一九六四年

終戦の年に生れし子丈たかくついにこの国の兵にとられぬ

同

デスファイレの太鼓のひびき重おもし吾子を見出す兵服の中に

同

マルゴーズばかりの中に放たれて何喰うものか胴太き馬

同

水田 恵子

この国の習いに従きてつつましくセマーナ サンタは暮れて  
行きたり

一九五八年

水仕事終りしあとの静寂にも家建つる音こだましきこゆ

同

水田 龍資

在伯の年月足らず木杯を貰えぬ老女の米寿を祝う

一九五八年

水野 春生

家族扶養の責も果たさぬ父が来て吾が惨めなる生活を嗤う

一九五三年

たそがるる湖の岸边にはぎ高き鷺群れ居りてとぶこともなし

同

そこばくの負債を済まし帰り来て心安らに楳火にあたる

同

ちぎり初めしキアボそこばく束にして線路工夫らに売りつけ  
にけり

一九五四年

水野 浩志

伯人の薬師の薬効かざれば今田薬師へ母旅立ちぬ

一九四九年

教会の異国情緒にひたり居し少年移民の胸の十字架

同

水原 のりとし

不具者なる我は娶らず老いゆくか既に幾人も友は子を持つ

一九五五年

天長の佳節もすでに近まりて我が裏庭の菊も咲きたり

同

「ハイセン」と我に毒づく近所の子日系なれども日語を知らず

同

水本 すみ子

夕浜に心放ちてゆく夫に従きゆくわれの歩幅も狭し

一九七〇年

夕月の光増しくる渚辺に変わりようなきふたりの歩み

同

ひとつひとつ葉脈の透く葉となりて日射しのなかの五感鮮らし  
一九七五年

沼百合の薙ぎ倒されしひとところ犯されしまま花は香にたつ  
同

透くばかり山の気配に盈ちながら単純となるわれの思念の  
同

海添いに鎮まりて古き街並を乱すがごとし日語会話は  
―パラチ―市街―  
一九七六年

宜誓の胸に置く手に伝いつつ裡なる挽歌祖国喪失  
―帰化申請―  
一九七八年

知らざりし密かなるものの剥がさるる痛みに耐うるわれの日  
同

夫子らに随きゆかむわれの不意を衝きて捨てむ祖国の意外に  
重し  
同

帰化人とう馴染めなき名にこだわりて歩みゆく町は異邦のご  
とし  
同

夕蟬のひた鳴く蔭に散り敷きて花ジャカラランダの滲む道すじ  
同

野の気配躬にとおりつつ夕されば濃度深まるごとし大気は  
同

寂かなる森の下辺のゆきもどりわれより滲む青き滴り  
同



はだらなす河茫漠とつづきいて密林の岸はるかにかすむ —  
アマゾン河 —

一九七九年

敏捷に河面を漁る鳥らいて背（そびら）より湧くひぐらしの  
声

同

流るるともなくたゆたいてリオ ネグロ潮に似たる水の香は  
あり

同

夕つ光われに対して條をなすアマゾン大河の金の夕暮れ

同

郷愁の亡母がいたりし歌舞伎座に吾がかえり来て観る玉三  
郎ぞ

同

歌舞伎座の舞台に展（ひら）くもの語り大方は母より聞き伝  
いたる

同

風化せし郷愁のなか準二世われに育ちしふたつの流れ

同

### 三 瀬 喜代志

黒き手に指輪の光る黒人と肩並べ吾のビール飲みおり

一九六七年

巧みな手風琴納屋より聞こえて黒人蔑視うすれゆきつつ

同

溝口 栄子

病人の今はやすめる時の間をうす暗がりに解く乱れ髪

一九四七年

珈琲の花をそびらに撮さんと幾年希い未だ果たさず

一九四八年

溝口 年子

慎しく柩に従う群にまじる夫の背広の色の褪せたる

一九五三年

光川 徹

流し場の上に並べる白き皿せまる夕べの光に清し

一九五三年

清らかに岩に伝いて来る水の落つる筈に我が口を寄す

同

いつまでも溪のせせらぎ聞こえて蔓のさがれる路深く行く

同

三奈美      阿佐子

住みなれし町へ帰ると言い出づる子をなだめつつ我も恋しき

一九五五年

日本語の放送は高く聞こえる移りて間なき朝の我が家に

同

湍    元      溪流

新年の朝となりたる吾が部屋の壁にかけてある世界新地図

一九五三年

南              寿    二

何ごともなかりしごとく潮風は人の死にたる浜を吹きおり

一九五五年

給餌時来ればまず餌をひと掴み脚折れし鶏にあたえてかかる

同

足もとに背を低くして動かざる鶏をまたぎて給餌してゆく

同

聖州にもニューカッスル病発生との今朝のラジオが一日想わる

同

日に五たび樽に練餌をする我の手の爪へりて痛くなりくる

同

南

豊

山峡にひっそりとしたるサナトリオ真白き壁に朝の日は射す

一九五〇年

南 崎 稚 草

諦めていし訪日も日本のラジオを聞けば切にゆきたし

一九六一年

嫁ぎ来しわれの年齢となれる娘の物言い仕草まだ幼くて

同

二十年離り住まいし父母も亡く今宵を月に向かいて思う

同

爆音はうすれゆきつつ夫の乗る飛行機は今雲に入りゆく

同

日本の便り開けば茶の花と桜の花の押花落ちぬ

同

何思う吾が娘か花を浮かしめし風呂をばわれにしきりにすす

む

同

落葉焚く匂いひろごりあわあわと郷愁誘う冬木の梢

同

紫の花の散り敷く道ゆけり祝福さるる如き陽の中

同

辛かりしことは言うまじ七人の子らに囲まれて銀婚を迎う

同

蓑毛 正淳

これも又有縁（えん）と思い見も知らぬ人の墓標を書きて参らす

一九六九年

灰被ぐ燠の赤きが眼に沁みる焚火祭りの果てし夜の更け

同

思わざる邂逅の師と語りつつわが回想は尽くることなし

同

白魚というには遠き汝が指に光る石もつ指輪をはむる

一九七六年

この海を越えて来し日のはるけくて流離の思いをゆする潮騒

同

石荀をたたけば遠き世のひびき還りくるがに底籠もる音

一九七七年

盲いたる魚棲むというこの川の落ち入る洞に瀬音かそけし

同

木蓮の花衰えてうす紅の花芯を虫の這い出づる見ゆ

一九七九年

三原 千介

アンペラを敷いて黒んぼ寝ていたりカンテラの灯のさゆらぐ  
渡舟 一九五二年

木の葉落ちて少し動ける池の水うつろう午後の日を返しつづ  
同

秋雨の中に日伯の手旗振り「陸上日本」の青年を迎う  
一九六七年

はるばるとブラジルの地に名を挙げしまだ少年と見ゆる選手  
達 同

三原 豊

朝市の野菜下ろしてバンカ組む火焰樹の花降りしく下に  
一九七四年

たたかいを終えたるあとの思いにてフエイラで上げし銭を数  
うる 一九七七年

寄せ書きの日の丸古りしまま出でぬ出航の日の思いあらたに  
一九七八年

テールライトの鎖状となりて上りゆくパカエンブーは霧に閉  
ざされ 同

イーノ ナシヨナル地軸をゆすり鳴り響くパカエンブーの空  
の限りを 同

七十年の歴史の跡をここに見る無慮八万の中のひとりか

同

摂氏二千三百度理解の外の瞬時なり炉を流れ出る炎の帯となり

一九七八年

しかすがに山の稜線暗くして音ともなわぬ稲妻しげし

一九七九年

再びを避難命令出る夕べ容赦なき雨また降りいだす

同

サイレンと車の騒音ひびくなか浸水地区の人ら去りゆく

同

最後まで留まる決意家族らと退避荷物の点検おわる

同

### 三 牧 は ら

露すでに置ける雑草踏み帰る暮るるに早き冬の短か日

年代不明

つきつめて甲斐なき思索と思い知るすがれしカンナに弱し冬

日が

同

たらちねの母が幾夜さ手習いて書きたるならんこの文に泣く

同

宮城野 原 雄

四力月あまり雨なき山々は日毎夜毎を燃え続けおり

一九四九年

宮古田 寂 穂

雨多き収穫終えて久々に仰ぐ夜空の月おぼろなり

一九四九年

霧白くかかりし外の月あかりミナス連山おぼろにぞ見ゆ

同

秋すでに半ばと思う南風に散りゆく木棉の花をし見れば

同

宮 武 勝 甫

蔦サンジョン咲きからまれる路の辺の朽十字架に蠟涙あつし

一九六二年

窓近きマモンの熟実をついばみに来る小禽（とり）あり冬深  
みつつ

同

転業を言わずなりたる我が友がセツカに乏しき稚蚕桑をつむ

一九六四年



すみやかに革命なりて追放者のリスタのニュースながながつづく

同

わが町の出身農相の免職を告げてラジオの声はつめたし

同

忍び来しごとく目だたぬ秋にして茗荷の薺は日々に枯れふす

一九七〇年

すでにして夏去る頃か花季了えてシュウバ　デ　オウロが散らす病葉

同

銭勘定ばかりしている訪日の夢見ていたり宵はやく寝て

同

宮　崎　　多満江

雲低く暮れゆく街の騒音のとどく厨に香る味噌汁

一九七五年

大和桜の花びらを添えくによりの嫁の便りの文字まどかなり

一九七六年

インカ帝国の土器やこけしの並びいて物おだやかな混血の医師

同

亡き母に不器用な娘と言われしを肯いており髪を梳きつつ

同

耳馴れし幼らが唄うこの国の悲恋の歌を今宵ききいる

同

誰かれの訪日の記事のある新聞たたみ明るく振舞わんとす

同

雨あとのぬかるみ多く政情の整わぬまま新芽吹く街

一九七七年

取り出だす日本着すでになじめなく祖国離れて老いゆく身には

同

宮 里 秀 正

朝まだき原始の森に斧振れば合槌のごとアラポンガ鳴く

一九七八年

行けば又会う同胞のいくたりが頭ちきて楽しサンパウロの街

一九七九年

秋晴れの空より広き麻州野を縫うが如くに吾がバスは行く

同

宮 沢 半次郎

運命なりと言うは逃避と思いつつ古き旅券のわが写真見る

一九七七年

黄ばみたる旅券の写真をわが生の原点となす老後と思う

同

牛群守る夜半を母恋う牧童が角笛吹けば星流れたり

同

浜椰子の影濃き島の渡し場に吹く風あわき魚臭混りて

一九七八年

はにかめる如くもの言う教師あり蟹の這い寄る島の学舎に

同

美しく老いし人にてその人は沖縄桜の一枝持てり

一九七九年

炭焼窯の火止めせむとて泥を練る深夜の山にふくろうの鳴く

同

炭焼窯に塗り込められし一枝の茨が赤きつぶら実を持つ

同

ひと窯の炭焼きあげし汗の身を溪流の岩のあわいに浸す

同

宮 下 迷 春

幼くて逝きにし吾子の夢にして夜露の中に佇み居たり

一九七八年

宮 西 津 多

移り来て幾年月か知らぬ間に気丈な母の白髪増え来し

一九六九年

したためし命かぎりの文を読み思いつづけし母逝きませり

一九七一年

朝霧の晴れくる時に停車場の古りし時計台近づきて見ゆ

一九七九年

深山 静

長雨のあがれば心晴ばれと鉢のサボテン接ぎはじめたり

一九七二年

寝苦しき夜半の戸外に野良犬か頻りに骨を噛る音する

同

宮本 一声

日照りにも雨にも困るパラナ路も住みて久しき吾が都なり

年代不明

宮本 勝太郎

行商の乏しき中より病むわれに妻は葡萄を買いて帰りぬ

一九五〇年

借金の重荷に心堪えかねておちどのあらぬ妻を罵る

同

宮 本 三 春

暮れ残る森をへだててはるかなる大工場の焰はく見ゆ

一九四七年

一年を飼いたらせし豚二匹売り渡したる寂しさに居る

一九四九年

牛購いてカーロを買い残る金あるやなしやに来る年おもう

一九五〇年

ジナジオへ入りし我が子の将来も見届けかぬる老いと思ふ

同

病み臥してあれば氣弱くなり来たり涙もろくも物読みて泣く

一九五二年

宮 本 武

病む足をひきずりながら来し庭の芝生は初夏の陽射しが温し

一九七四年

風邪癒えてつれだち佇てば園に咲くジャスミンの香に妻むせ  
かえる

一九七八年

宮 本 寧

堀りおこす土のしめりの匂いつつ心洗わるるがに思う

一九六八年

三 好 綱 一——案山子——

朝雨にぬれし草原に山羊二頭つなぎてニグロの妻の去りたり

一九四〇年代後半

椰子の実のこぼれ漁りて日あたりの庭に安けく蜥蜴はあそぶ

同

混血（あいのこと）の孫に日本着縫いてやると針の運びにいそしむ妻は

同

ふたたびを見ること難きふるさとの家の写真をひらきて語る

同

妻が挽く珈琲の香り伝い来て案山子庵なる朝床をたつ

同

サンパウロに身を据えてより二十五年漸く位置の定まるごとし

同

風呂わきし知らせ聞こゆれど日本に送る手紙を吾の書きつく

同

日本にかかわる記事の多きことよはてなる国に離り来るれど

同

ブラジルに来て住むわれが地球儀に眺め入りおる夜の一とき

同

雨乞いをするにニグロら木を倒し火をつけて踊る暗き一夜を

同

ブラジルでなければ詠めぬ歌よめと励まし給う師の在すなり

同

カルナバルを境に雨の口があき雨雲おもく西よりおしかく

同

移り来てここの風土になじみつつ祖国の樹木をわが育てきぬ

同

なぐりこみが二度もありたる総領事館の面目なしと新聞は告  
ぐ

同

鯉のぼりたててみたしと長男を生みたる二世の夫婦が語る

同

子の一人孫の四人が選挙する大統領の名を吾は覚  
えず

同

満月のあかるき真夜を眼覚め居てこの日本荘の松平和なり

同

向井 恒夫

同じ頃嫁ぎし友の幸福を語れる妻の顔のやつれよ

一九四九年

棕野 寿美

波青き海峡を帰り来るランシャ一條白き水脈を残して

一九七〇年

いとけなき日に移り来て記憶にはなき祖国の話黙し聞き居り

一九七五年

さわやかにイペの黄の花揺りて吹く早春の風の中に佇む

一九七六年

莢となりしイペの幾もとその中に後れてひと木花のまぶしさ

同

さくさくと鳴る砂利の音もまがなしく甥を葬る列長く続く

一九七八年

ほのぼのと地の温みが身をつつむ朝あさ通う冬の地下鉄

一九七九年

武藤 玉水

金髪の髪の匂いをいとしめば汝に高まる哀感はあり

一九七四年



キリストを偲ぶよすがにオリーブを愛し育む支柱を立てて

一九七七年

蜂の巣が野に群るる頃黄に熟れてバナナ豊穡の実を垂らしたり

一九七八年

街に住みて漸く食の足る思い湯浴みする腕の筋肉の張り

同

焼肉を食いつつ自ずと湧く涙作業場に一人つくねんとおり

一九七九年

武藤 寿 尋

時経れど水禍の傷跡なお残りパンタナールに漂う屍臭

一九七六年

咲き盛るマナカの岸に佇みて眼下に海のひろがりを見る

一九七八年

村 上 実 義

あえぎ引く耕馬はげます吾も又傾く日差しに耐えがたく疲れ  
る

一九四九年

薄汚れたる頬も手足もそのままの吾子の午睡に日差し及べり

一九五三年

吹く風のまにまに街より聞こえる時事を報ずる拡声器の声

一九五四年

村上 正児

あまた居る子に与えむと西瓜蒔く主作に影響すると知りつつ

一九五三年

村上 園

夕ちかく町より帰りし父の背に荷物の如き新聞の束

一九六七年

窓近きマモナの繁りすける日が厨に立てるわれを染むるも

同

村上 証二

唯一人バス待つ吾にカボクロはこびるが如く話しかけ来る

一九五六年

借金は早く返せとのたまいて老いたる母の鍬引きたまう

同

換羽期の鶏に多産を望みつつ緑餌となさん玉菜を植えぬ

同

祖母（おおはは）が買いととのえし鞆をば枕辺におきて吾子はねむれり

同

体弱き吾を恃まず働けば妻の手いたく荒れているなり

同

移民てう過渡期の貧苦を貌に持つ汝も学なき準二世にて

一九六一年

## 村上 喜文

昨日まで出荷に夜を働きしが今朝見る霜に夢も消えゆく

一九七八年

大霜に裸となりしアメントエーラ冬の陽光を浴びて立ち居り

同

幾万本の熟れしカフェーもぎたりき手に血滲ませ幼妻汝も

同

疲れ果てし妻を労わり帰る道月煌々と我らを写す

同

奴隸のごとき仕事に我ら耐えかねて脱耕せしは若き日のこと

同

村田 耿

邦語教育日々むずかしくなりにつけり新法令に心痛むも

一九六七年

児を見つつ時ありて帰心しきりなりこの国の土に生きてあれども

同

村田 西山

大河に低くさし出す一本のイッペー古木に咲く花とぼし

一九六八年

焼野原の送電線の鉄塔にかぶさるごとく春の白雲

同

村田 徳太郎

日本にて棉のなる木と聞きたりし移り来て見るパイネーラの花  
一九六二年

村手 千恵

没りつ日のかげりし窓の花鉢に明日は開かむ蕾を数う

一九五八年

病む吾の明日に希望のある如き明々とした日の暮れに居り

同

母の席に据えられ療の母の日に祝詞きき居り子のなき吾も

同

友が為粥を炊き居りこの冬をやや健かさ身に還り来て

同

赤き手提げ吾に見せむとはにかめる亡き友が子の末だ幼く

一九五九年

山頂に佇ちて仰げば空は猶遙かなるかな底いも知れず

同

胸深く秘めたる思慕の募る夜は心のたけを日記に誌す

同

奪い合い吾が手に下がる童等に足もつれつつ心足り居り

同

気胸して縮みし肺を意識しつつ吐く息荒く坂登りゆく

一九六一年

いつの日か君が心の照りかげり知りて聞きたいし低き口笛

同

幼子が吾を掴める手の温み吾子ならば一生の支えにならむ

同

一途なる愛に生きしとは言ひ難き吾が眼にしみて白き小手毯

一九六二年

背を丸め飯炊く母の眼に顫ちぬ帰国の希み絶たれたる今 同

室 伏 誠 二

表土流失防止にかくる鋤の刃がコーヒー太根を音立てて切る

一九五四年

馬がひく鋤の柄握る吾の手に鋤かれゆく土の響伝わる

同

種あまたつけしピツコンの枯れたるを捧もて払いミーリヨも  
ぎおり

一九五五年

わが祖父はインジオなりしとはじらわず浅黒き肌を示して語  
る

同

朝風にミーリヨの穂より霧の如花粉こぼるる小道を通る

同

新しきコロノの墓に蠟燭の灯のあかあかと見ゆる夕暮

同

月の照るコーヒー樹海を吾が乗れる汽車は行くなり火の粉吐  
きつつ

一九五六年

枝もたわわにみのれる蜜柑の下かげに毛の薄き子豚群れて寝  
ており

同

手造りのローラーを今日も廻しつつカンナを搾る若き夫婦は

一九五七年

日本語の放送終りてポ語となり数倍つよき電波となりぬ

一九六二年

収穫の近づくときにコロノらは契約を破棄し移転しゆけり

同

コーヒーを混ぜ混ぜゆくその音は生産者われの知る喜びか

同

コーヒーの蕾大きくふくらみしかたえに鋤にやすりをかくる

同

黒人の教師をいたく侮辱せし生徒は登校を禁じられたり

同

刈りとりしラミーの畑の白々と見ゆる月夜にビオロン聞こゆ

一九六三年

## 持 永 勸 二

ブラジルには曲れる電柱多くして日本の友は写して帰れり

一九六五年

トラックで運ぶ人夫をパウ デ アララと吾らは言えど語源  
を知らず

同

ロケットが月に届きし記事を読むこじれし風邪に苦しむ床に

一九六六年

牛の背にガビオン一羽とまり居てだにをついばむ春の牧場

同

望 月 喜恵子

砂山にペテッカ打ちつつたわむる男女二人を見て通りたり

一九五五年

病み長き床にしきりと浮かび来るカルロス先生の国語の時間

一九五七年

ブラジルのレコードしまいてこの宵は母と一緒に浪花節を聞く  
同

日本語を批判されつつ新来の青年と踊り得る曲のいくつか

一九六三年

福音を伝えるためにと日本語を学べる君等の音澄みて来し

一九六四年

野生蜜柑が蜜源となるパラナバイへ我が養蜂は買われ発ちゆく  
同

インジオの部落に近く住める人七年目なりと蕎麦をよろこぶ

同

ポルトガル人のアクセント濃く開放的な君が母の声受話器に伝う  
同

日本人の妻の従順をたたえいる伯人には奪われし自由は言わず  
同

ブラジルの文豪マツシャード読む姉に寄りて歌詠むバス待てる間を  
同



食料と交換にして百十才の奴隷の長の踊りて見する

同

記憶なき故郷なれども折りあればくり返し聴く「雪の石狩」

一九六五年

帰化せしを告げる受話器に親しみを込めし声聞く「我が同

胞」(ミンニヤ パトリツシア)

同

温泉の「愛の泉」(フォンテ ドス アモーレス)の水飲み  
て帰り来し日も君と和まず

同

カボクロの遺体を花で埋めつつ怒りを買ひし日を思いおり

一九六六年

桜花を庭に咲かせて待ちくれし異邦人なる君に嫁げず

一九六八年

望 月 左呂女

はるばるとイツペの花咲く国に来て頭髮白く我は老いたり

一九六五年

草の穂に光をこぼす三日月を背伸びして呼ぶ丘の上に

一九七六年

本 山 美智子

移民妻として子を育て三十年白き我が髪手鏡に見る

一九六九年

メカニコの夜業今宵も続くらし鉄のすれ合う音響かせて

一九七〇年

すぎさりし三十八年の日もおぼろこの山峡に我は老いゆく

一九七三年

本 木 彦兵衛

下り行く小舟を岸にまねきよせ黄金魚（ドラード）買うは  
ファゼンデイロか

一九六九年

この国の秋の終りを告ぐるごと火祭りの夜の花火とどろく

一九七三年

年々に痩せ枯れてゆく吾が顔を洗う両掌に触るる頬骨

同

大いなる湖のごとき雲海が低き耕地を埋めて動かず

同

椰子の樹を吹きまくる風定まればカマラダ集め野を焼かんと  
す

同

草青む野の日溜りに牛追いは靴を枕に昼寝していき

同

野良仕事終りて戻る女らは拾いし薪を横抱きにせり

同

イペーの花に埋めて柩の吾が妻を葬りしよりイペーは悲しも

一九七七年

妻と在る仕合わせうたう人の歌読みつつ心ゆるがずなりぬ

同

物 部 さよ子

アンデスの峰を仰ぎてその上の天にも心あくがれにけり

一九五〇年

珈琲の高き香りはふくめども身にはつめたしリマの秋風

同

熱帯の木の実のかおりゆたかにもふくめる風に吸われゆく時

同

その昔君と見し月十字星南の海のむらきの色

同

紫のつらなる山をぬき出でてアンデスの峰めでたく光る

同

森 久 子

花の刺繍無心にむしる小さき手母の遺品と知るよしもなく

一九六六年

ミナス路の山並霞みて時折を群鳩翔りて白く光れり

一九六八年

山焼きの櫓火幾日もくすぼりて時折火の手夜風に上る

一九七一年

森 牧 夫

ポツソスの町守るがに山頂のキリスト像は陽をうけて立つ

一九七二年

森 美代子

八月十五日大阪大空襲ありて吾が友咲江生き埋めとなる

一九七二年

森 口 久 一

除草終え草花髪に飾る娘の素顔は美し夕日に照りて

一九七三年

ビイラ ベーリア奇岩巨岩天を摩す下に小さき草花の咲く

同

草むらの道よぎり行く駝鳥二羽木かげに佇ちてしばし見送る

一九七五年

ポエーラ舞うパラナの道を旅行けば赤く染まりぬ髪も着衣も

同

今はなし栄えし村も年古りて牛群れ遊ぶ広き牧原

同

森 重 扶 美

仮借なき言葉ありあり甦る店の大扉に鍵かける時

一九五八年

信頼はかく静かにて対い合う卓に珈琲は細き湯気立つ

一九五九年

庇護されている安らぎに眠らむかひそみ鳴くこおろぎの声を  
聞きつつ

同

鳴きつれてインコら渡る空蒼し人の違約をさびしみ佇つに

一九六一年

わが衷の混迷に似て夕空に動く茜の雲かぎりなし

一九六二年

わが裡に脱けゆくもののある如し帰化宣誓書に署名を終えて

一九六三年

「祖国」とう語感も今は切実に帰化証明書を手提げに仕舞う

同

心渇くと人には告げず居る日々を厨に芽ぶく冬の玉ねぎ

一九六五年

わが生れし日本を何時も美しく吾娘に語れど疼くものあり

同

鳳凰樹翳ふかくしてわがめぐり禁断の域のごとき風あり

一九六七年

程々花の色褪せてゆく過程さえ身に痛く喪にこもりいる日々

同

かたちなきものの声々顕たしめて苦渋の襞のごとき夜の潮

一九六八年

日系の凶悪犯罪にこころ冷え朝の厨に新聞たたむ

一九七〇年

夕茜消えゆく空に過ぎ去りの秘めたる修羅が炎ゆるたまゆら

一九七三年

椰子の実の殻に彫りたる猿ひとつ膝を抱きて棚に眠れる

一九七八年

葛藤を解くすべあらぬ夕庭に寺塔の鐘は刻ながく鳴る

同

入植五十年記念碑建ちぬ刻まれし氏名は親し俱に生き来て

一九七八年

夜の驟雨過ぎていよいよ冷えまさるわが限わが魂薄明の窓

一九七九年

森 重 羊 鈴

育て来し十五の吾子が馬使う声きき居りて安らぐ心

一九五一年

吾がぬぎし靴に止まりて山の蝶息する如くに翅をうごかす

一九五二年

昏れ早き田舎の道に夜の宿を気遣い佇む集金員吾は

一九五三年

入院せし母をあきらめ寝ねし子が夜半に手をのべ吾が胸を探る

一九五四年

假風呂につるせし布のすき間より吹き入る風の冷たき宵かな

同

四十年この国に生きし今にして帰化宣誓書に署名を終る

一九六五年

見送りてくれし眼が背にありて四十一年裡に生く母

一九六八年

過ぎ去りし苦しき時代を語りつつ腰の痛みをもみくるる妻

一九六七年

吾が精気吸い取る如く声あげてそり返り泣く腕中の孫

一九六八年

空の旅初めてなれば空港にひとり心のひきしまるなり

一九七八年

過ぎ去りの迅きを思う身となれり四十六年バストスに住み

同

高官をあまた迎えて謝辞のぶる吾子の声きく公式バンケット  
場

同

森田 吉久

昏れなずむ場末の街を暫くは職場帰りの人等つづけり

一九六一年

ぬかづきて母動かざる奥津城の鉄の花輪は風に鳴り居り

一九六二年

マロニエの花は黄色く散り敷きて小さき柩ゆく日系墓地

一九六四年

脈拍の跡絶えがちな夜を醒めて玻璃窓は白く雨にしぶけり

同

住み慣れしコロニアの屋根おろしいる湖底となる珈琲園の中

一九七一年

米打ちに疲れて戻る夕闇に子等は牧扉を軋ませて待つ

同

霧深き石道曲る馬車ありて牛乳瓶の触れ合える音

一九七二年

森光 秋翠

美しき粒の揃いし新米を炊ぎ参らす老母上に 一九四八年



森 元 三 山

澄み渡る朝の陽光射し初めば鋤きたる土は黝き艶もつ

一九六六年

パライーバの稻田の緑吹き分けて季節外れの風ある盆地

一九六七年

故郷に似ている峡の川に来て妊る妻と秋日に和む

同

秋日さす川のほとりのわが畑に戦後移住の妻と鋤採る

同

蠟涙の光り流れて絶ゆるなき奴隷刑死の遺跡を弔う

一九六八年

訪えば裏の畑より声すなり蝶が来ている大根の花

一九六九年

森 谷 風 男

髪油の匂いにきざす感傷よ衰えし母の背さすりつつ

一九五〇年

樹の蔭に伏せばかそけき音に出でてアメントイン ブラーボ  
の実のはじけおり

同

冬の夜氣いたく乾けりむさぼりて火酒飲む君もわれも貧しく

一九六三年

莩の火つけんと歩みとめしとき峡のかすかな瀬音たちたり

同

麻醉より醒めんとしつつ近みくる轍の冴ゆる音をききたり

一九六五年

醒めがての今朝の夢などおもいつつ雨後の重たき鍬ひきて  
いき

一九六六年

泊てて今朝醒めたる庭の赭土に粗き雨跡ありて匂えり

一九七六年

貧しさの故の疲れかバスを待つ列に跼みて汗拭くわれは

一九七一年

夜の街の風かばいつつ来し故に言葉体温の如きやさしさ

一九七六年

荒蓼の冬野を来たるバスの中戻れば汝が声をききたし

一九七八年

森 谷 春 男

試歩に肩を借りて歩めばモレーナの看護婦の体臭も親しきも  
のを

一九六七年

未払いの医科費のことと思ひおり病悪化するきざしある日に

一九六八年

手の缺けしコーヒー茶碗の疵の痕人を憎みているとき皓し

一九七〇年

線香のとぼしくなれば柩より顔上げて母が物言うごとし

同

冬ざれの裾の起伏にまぎれつついくつかの牛群ときてゆく

一九七二年

コーヒーの繁りを見つつゆく窓にさか落とし来る野の鳩の群

一九七五年

抗いて父に追われし少年に稲番小屋は暖かかりき

同

原始林伐りいたる日を幻に今細々と風呂の火を焚く

同

傾きてテレビアンテナ見ゆる窓にくずれんとする低き冬空

同

僅かながら借り返し来てまた臥せば寂かなるかな吾が病む部

屋は

一九七六年

残されて牛舎に咆える病み牛に樹海をいでし赤き日輪

同

不愉快な話の人を送り出しドリルの錐を研ぎ直さんとす

同

明日にかかわる銭欲しきこと思いつつ更けて歌書く遺書のご  
とくに

一九七七年

八木 伊都夫

移り来て父と拓きし果樹園も州道となる運命迫りぬ

一九七一年

移り来し頃は魚もよく釣れしチエテは黒く濁り流るる

一九七二年

州道となる日までもと思いつつ春立つ畑を子らと耕す

同

老いたりと思えぬ父の野辺送りすめば茜に沈む冬の陽

一九七三年

矢坂 行男

日本語の解らぬ孫となりしこと老父はいたく悲しみて言う

一九五五年

桃色の雲かとまごうばかりにて木棉の花は今さかりなり

同

雨雲は麻州の方に垂れこめて今宵は星の近々と見ゆ

同

サン ペードロの残り聖火に芋を焼く児ら時として歓声あぐる

同

税務官買収し生きる手段と言うこの現実には馴れゆく吾が

同

卑屈なる態度も今は習性の如く税吏にもの言う吾等

同

照りそめし日射しに霜の融けゆきてたちまち変る珈琲樹の色

一九五六年

山焼きの灰のしきりに落つる夜木の葉もいくつか混りて落つる

同

選挙権なき我なれど大統領候補者の閱歴は心に止む

同

黒人の縊死をつげいる窓下に白夾竹桃のたわわなる花

同

柳 沢 津奈代

吾が惰性の日々をゆさぶる如くにもユーカリ林の風吹きやま  
ず

一九七六年

命ありて移民七十年祭祝うとぞ吾が家混血の孫も生れて

一九七八年

柳 敏彦

一雨に油桐の畠の青みたり木末に白き花は見えつつ

一九四九年

紫のカチンゲーロの露の穂の朝陽に光り起伏する牧

一九五〇年

帰国する意志などなしと常言えど身近き友の発てば羨しも

一九五三年

築瀬 龍雄 — 柳川 竜二

屋根下に育ちし苗は日影さす北に向かいて傾くなべて

一九五〇年

牧原に伐り残されしイッペーの樹々に揃いて花咲き盛る

同

ファベールの取り払われし跡にしてバナナ伸び立つ雑草の中

一九七五年

ポ語のみで語る妻子の傍に在れば身に沁む断絶疎外

同

電燈も井戸さえもなきファベールに日光のみが豊かに注ぐ

同

柳田 威

荷上げする土人監視の白人の腰に鋭く光るピストル

一九六七年

ふりかえりプラタ丸の国旗見きサントス波止場時雨降りつ  
つ

同

ゆけどゆけど果てしも知れぬ地の海を移民列車はひた走り  
り

同

排気音こだま返しつつ荒野ゆく薪焚く汽車は火の粉降らしつ

同

医とてなき拓地の夜に病める児を看護れる妻はものをも言わ  
ず

同

心はずむ気軽さありて児等のごと口笛吹けば山羊あらわれぬ

同

日本より手紙きたると定期車の助手笛鳴らし手を挙げており

同

十字架の墓標の蔭に血の如きダリア咲きおり日本人墓地

同

荒れ朽ちて墓標の文字もかすかなりこの奥津城の家族よいず  
こ

同

## 築田 月耕

朝の山路逢う人もなくしみじみと妻と互みにもの言いて行く

一九五五年

高岡専太郎の額掲げある応接室妻を待ちつつ慎しくいる

同

野放しの馬の瞳にうつりいるくつきりとした空の夕やけ

一九五六年

浚渫船泊てて久しきチエテ河の夜霧は暖く南に流るる

一九五九年

入らせわしく往き交う師走の街中で密輸のトランジスタ買わんかと言う

一九六〇年

オーヴォ デ パスコアの店にわが妻は見入りおりしが言葉なく去る

同

県人会の通知持ち来ぬ新興宗教の信者となりし友のひとりが

一九六一年

電氣局のフイスカールの前にポ語日本語交えて今日の支払いをなす

同

スイナンの赤き蕾持つ枝折りて妻と歩めど何か寂しく

一九六三年

元日の文化センターひそまりてかかげし日の丸の旗はうごかず

一九六四年

矢野 晶 男

移り来て心ようやく落ち着く日小庭の黄菊陽を返しいる

一九六五年

母と子が日本語にて話しているバストス近き連絡車の中

一九六六年

幼等も混りてアメンドイン叩きいる一片の雲なき夏陽の下に

同

若者の耕馬追う声高くしてユーカリ梢の風音を消す



一九六八年

矢野 加寿夫

百五十年の祭典を待つイピランガの丘の木立ちは細雨にけむる

一九七二年

ミニコッパの優勝決まりし一瞬は大統領も目頭拭う

同

矢野 千秋

終日とともに働きしわが妻が皿洗う音夕べ寝て聞く

一九五一年

夕となり約せし如く降り出づる雨は彼方の丘よりせまる

同

落花生掘りゆく彼方の草かげにマリア プレッタの実は露に光れり

同

丘高き林抜ければ目の下に見ゆる茅ぶきのわが姉の家

同

我が向けしカメラのレンズに小さく見ゆ花かげの姉はほほえみており

同

わずかなる薯を売りたる老婆より受け取る銅貨に肌のぬくもり

一九五二年

山岡 清子

未熟なるポ語にて応待せしあとの卑屈感はなく吾が裡めぐる

一九六八年

新鮮なこのひと時よ朝明けの坂登り来てポンを買う道

一九六九年

山川 草木

かりそめの動作もままにならぬ身となりはてながら金を欲り居り

一九五五年

身代を築きあげんとこの国にいたくあせりて老い廃れたり

同

山川 百合

疲れたる心いたわり出で来ればオンゼオーラの赤ぞ目にしむ

一九五二年

八巻 梅夫

同胞に顔いたく似しインジオの親子が巷に銭乞い歩く

一九五五年

カテドラルの角にてゆきあいし年若き婦警はフランス風の  
帽かぶりいき

一九五六年

街路樹のイペーの種子採る人二人折り折り粒を舗道にこぼす

同

わた中に陽は落ちゆけりしまらくを染まりて浜の舟は明るし

同

はり窓の内にパステイスの煮ゆる音と濁り少なき華語の聞こ  
ゆる

同

おどろくばかり幹の下方にひしめける木葡萄の実を朝は見に  
行く

同

私設バスの運転手は邦人二世にて耳のうしろに大き禿あり

一九六六年

トンネルが間近くあれば車内灯ともして昼のバスは入りゆく

同

## 八 卷 たけ子

郷愁につながるものか幾年を母が放さぬ手拭い一つ

一九六五年

菰の伸び遅きをかこち移住地に貧しき厨支えきし母

同

ポ語のみに交せる子らのはずむ声マモンの香り高き夜の卓

一九六九年

開拓の畑打つ背に眠りゆく吾子の温みに支えられいき

一九七一年

訪日も叶わぬままに色褪せし若き写真の吾がパスポート

一九七三年

故里を訪うこともなくブラジルに日本南瓜の種子を蒔く夫

同

移民らの建てし校舎の庭隅に今を盛りのパイネーラ咲く

同

移民なる舅姑（おや）が持ちきし日本の古銭いくつに吹ける  
青錆

一九七四年

亡き母の抽斗深く仕舞いいし五厘銅貨の余りに軽し

同

「日本語の話せる人を優先」と店員募集の師走広告

一九七五年

めぐりみな工場となりし吾が土地に野鹿一匹馴れて草喰む

同

生きゆかん支えとなれる三世の孫に縫いやるネルの日本着

一九七六年

鍬ひきしコーヒー園の花の香を吾がものとして老いし移民ら

一九七八年

一本のマツチも心して使う移民のかげり身に添いて老ゆ

同

八 卷 耕 土

サルビアの散る公園の港町旧き砲台は海峡に向く

一九五九年

恵まれぬ業にいそしむカイサーラ ココ椰子かげに網を繕う

同

島めぐる浜椰子かげに潮さびし水難の碑は浪にしぶきぬ

一九六〇年

椰子の樹に吃水線は印されてやがてはダムに沈む集落

一九六七年

過誤ひとつ吾が責として堪える夜を浮標は孤り沖に灯りぬ

一九六九年

吾のみに兆す杞憂かパイネーラの棘の梢に孵る雛鳥

同

啼きつれて海渡りゆく候鳥は吾が望郷の空に連なる

一九七〇年

「雄叫びの丘」のイペーを映しつつ独立祭の聖火燃えたつ

一九七二年

混迷の谿に救いの暗示とも渡るモルフオのあとを追いゆく

一九七三年

詩書を手にひとり思索に耽りいる帝の像に燃ゆる火焰樹

一九七四年

荒山を共に拓きし馬なりし煉瓦工場に轆轤牽きおり

同

日航機降りし総理は深々とブラジル国旗に頭垂れおり

同

この業に果てん希みも崩れつつ旱に枯れし畑に佇む

一九七五年

幼らと乗りゆくマリア フマツサに牧夫は角笛鳴らし帽振る

一九七六年

訪日も果たせず老いて身まかりし父母の墓守り吾も老いゆく

同

## 八 卷 汀 石

わが町の展ごれる灯を峠より見下しにつつ旅戻り来ぬ

年代不明

畑隅に妻が蒔きたるフェイジョンが穫れて夕餉の卓に匂えり

同

灯の下の土間に草の実こぼしつと日の重き野良靴を脱ぐ

同

秋の陽のあまねき庭のしずけさをやぶりてパラナ松の実はじく

同

年暮れのわが門に佇ち物乞うは同胞にして鬢髪白し

同

遠き藪に捨てきし墓がいつしかに挿芽の床に戻りていたり

同

近隣の庭にも生えよ風にのり風船草の穂絮とびゆく

同

わが農と共に古りたるパイネーラ花を仰げば追憶ふかし

同

還暦を寿ぐ日にも朝なより半裸となりて芝生刈る兄

同

パトロンと呼びて訪ねてくるるあり今は小さき百姓吾を

同

式場の拍手の中に入りてくる吾娘の花嫁衣裳がかすむ

同

酔いざまの悪しきを責めし日も杳く酒盃を供う父の忌の墓

同

農薬の中毒なりと診（み）し医師が農をやめよと簡単に言う

同

街住みを羨むこともなくなりて妻は巧みに鋏の柄を換う

同

農薬に侵されし身も癒え近し窓により見る妻が守る畑

同

わが農を継ぐ子らもなく風の中孤り歩めば栗の実落ちくる

同

夜学の子帰りくるまで燃えるべし煖炉に太き櫓くべて寝る

同

二世兵の模範になれと希いつつ肩まで垂れし子の髪を切る

同

夜の更けに軍靴の音もいさぎよく週末休暇の子が帰りきぬ

同

## 八 卷 培 夫

との曇るひと日の果てを雲切れて寒々あかし山際空

年代不明

黄の水着きて少女自転車を通る向こうに絶え間なき海の騒音

同

幾山は青木ながらに燃えさかり炎すさまじき滅びのとよみ

同

箒なす細枝しみみに差し交し梨の並木は未だ芽ぶかず

同

卓上の電話のベルの鳴りていとある小駅を汽車の発ちゆく

同

水平線を行く汽船がいつまでも見えており映画にある別離の  
場面の如く

同



鳥ひとつ声なくよぎる山峡の真昼閑かに咲くイペーの花

同

湿原に温気うごかぬ午さがりおどろくばかり近き落雷

同

轟ける都市の向こうに寄り合いて夕べのいろに沈む群山

同

風ややに夕風ぎ来れば山燃ゆる煙は直に天に立つかも

同

## 山 岸 赤 城

試験終えし子らは早目に夕餉して心安けく床に入りたり

年代不明

## 山 口 き わ

古きノートに亡夫の記せし覚え書き読みつつ吾の胸せまり来る  
一九七〇年

吾に手をかけて甘える孫の髪触るればぬくし陽の匂いして

一九七一年

こまごまと夕餉の材料買いこみし籠の重さが吾を充たせり

同

陽の匂い残れる夜具の温かく明日をたのみて眠りにつかむ

一九七二年

片言を言い初めたる孫の声わが持つ受話器の中にきこゆる

一九七三年

老いわれが折れねばならぬと思いつつやさしき言葉の一つを  
さがす

同

暮となりまた書き送る年賀状かくて今年も生けるしるしに

一九七四年

山口 茂

民主天皇の写真を見て日本から来たものかと姉は疑いて言う

一九五〇年

アバレー駅過ぎて寒けき真夜中を何時か追想は君に走せいる

一九五一年

黄昏を寒さに耐えてオニブス待つ人の素足が白く目に沁む

同

濡れてゆく街路に聴けりかすかなる住宅地区のオルガンの音

同

山口 すえ子

「泥かぶら」見し娘は葡語の間投詞をしきりにあげて一気に

語る

一九七二年

山口

宏

豚の仔のふえて暮しにある弾み青草をいま帰り荷として

一九六六年

珈琲の実をこき落としゆける掌の汚れにふれてひびく冬あり

同

聖（サン）ジヨンの炎たてるべくかまどの火移し近づく人声  
を待つ

一九六七年

たれかれの便り遠のきブラジルに己れみつめる日が多くなる

同

日曜の酒舗にたむろする土民らを押し分けわずか糖菓子を買  
う

同

ウインドの内ぬくぬくと拳銃も売らるる街の風きなぐさき

一九六八年

黍畑に軒をうずめて住むニグロより森の小鳥を獲る術聞きぬ

一九七〇年

原始林拓きてむすぶ假小屋の視野に行き交う道さえ見えぬ

同

山口

忘我

職求め乗り行くバスの窓口にマンチケーラの霧流れ来る

一九五五年

延々と聖市に続く水道管谷越え来ては丘の上をゆく

同

繰綿工場も年々さびれゆく見えて畜産熱のたかまりて来つ

一九五六年

人等皆なげきて居らん牛飼いの吾は長雨もにくむ事なし

同

露草のひかり耀う牧の朝牛ら群れゆく草食みながら

同

三十年も火田農業続けたればマンジオカすらも伸びずなりたり  
り

同

三年も大凶作が続きたれば今年は蒔くべきものにも迷う

同

切り岸のかげに青菜を少し植え吾が同胞が鶏飼いて居き

一九五七年

朝露に小さく花はたもてども伸びずなりたりイタリア南瓜

同

寝静まるスザノの町の霧中を襟立て歩む吾が影寒し

同

山崎 浅子

又来ると笑みつつ別れし兄なるに変わり果てたる墓標に向かう

一九五三年

朝な朝な顔洗う井戸の近くなる蘭の香りは高くただよう

一九五八年

山崎 益一

落葉踏む音を佗しむ時折りにアバカテの花強く匂えり

一九七一年

牛群を導きて来る牧童の日焼けて更に面ただけし

一九七四年

束の間の茜静まる牧原に蒼みたちたる夕靄は這う

一九七五年

林業試験場深く行きつつ吾が植えし四十年の老木仰ぐ

同

人種差別無き国に来て諸々の国人を友とし齡重ねたり

同

古き書物の中に出で来し領収証四十四年前の盲腸手術代

一九七六年

奴隸らが積みし石垣年古りて手を触れゆけば迫り来るもの

同

開拓の苦難の跡を刻みたる移民の廃家草に埋まる

一九七八年

逝きたりし身内知友の顔浮かぶ移民七十年祭に祈る一刻

同

山崎 松夫

ドア開きなだれ入りたる乙女らのさざめきおりて明るき電車

一九五三年

突然におこりし楽に見下せばビル街を行く難民救済隊の一団

同

山沢 せつ子

あまりにも整いすぎる電照の菊なじめざり淡き香の中

一九七七年

山下 隆

水洩をすすり上げつつ靴磨く頬赤き児は三世という

一九七一年

悪臭を持ちて燃ゆる古ゴムの煙は峽に黒くたなびく

一九七二年

サイレンをひびかせて発つ救援艇白き気泡の波を引きつつ

一九七四年

ソロカバのみかん畑の夕風は二十年ぶりに来し吾に暖かき

一九七六年

海峡に架橋の噂幾年か対岸のゴヤバたわわにうれて

一九七八年

山下 満

売れ残りし富籤下げて帰る街しかすがに老いを生き抜くとし  
て

一九七一年

ファベラに住む日系混血女の父は酔いどれの黒人なりき

一九七二年

画報（レビスタ）に見るアマゾン開発の道路延々と貫きゆけ  
り

同

混血の娘に母は夢かけて日本舞踊ならわするなり

一九七五年

山田 耕人

筈を結えし縄に文つけて留守に誰やら訪れにけり

年代不明

山 田 朴

娘と嫁に一枚ずつの俎板を同じ長さに尺あてて切る

年代不明

読む本に吾が古里の名を見れば幾度も其処を繰り返し読む

同

山 田 聖 二

魚売りて来にし高処ゆはるかなる吾が住む町をうち眺めつつ

一九五一年

道端にたおれし牛の悪臭があたりの草木にしむかと思う

同

山 田 鉄 男

朝つゆをふんで摘み取るモランゴがまぶしく光るかこの中に  
て 一九七七年

逝きし子の影をひきずる如くして妻の顔より愁いは去らず  
一九七八年

確約を得られぬ俚に帰途につく三日月細く寒き夜の更け

同

祭典に溢れんばかりの同胞が涙で聞きし皇子の言葉を

同



逝きし子の墓標の蔭にひそやかに咲きたる紅き草花ありき

一九七九年

亡き母の墓碑建て終えて重ね来し不孝の償い果たせる思いす

同

定まらぬ思考の果てに浮かびくる輪禍で逝きし吾子の幻

同

降霜の残す爪跡しるき朝しばし忘れて小犬抱きおり

同

声合わせ若き日の唄口ずさむ妻と二人の安らぎの夜に

同

山 田 露 人

病室の匂いの沁みたる手荷物が吾娘退院の吾が家に匂う

一九七五年

父病みし二週の中にひっそりと月下美人の花期は過ぎたり

一九七九年

朝まだきパン配達の馬車音がこの頃絶えしを目覚めて思う

同

フェラエス氏の胸像わきの八重桜が開き初めたり供花の如くに

同

大和 光輝

夕立ちをしのぐ軒端に聞こえ来し音楽にしばし耳を傾く

一九五一年

山中 サイ

エンシャード握りしあのかたくして節だこの光る老に入りし指

一九七九年

ガラス越しサマンバイアの群がりて渡伯五十年のつつましき  
部屋

同

開拓の記念に植えしユーカリの樹令重ねてうつそうとあり

同

山中 小百合

味噌あえにせむとわが摘むエスピナフレ茎に小さき蕾みえお  
り

一九五八年

今日の日もひねもす鋤をうちふりて移民の夫の白髪ふえゆく

一九六一年

トラットールのエンジンの音響かえば我は競いてミシン踏み  
つぐ

一九六二年

移り来し小さき家にこまごまと荷を片づけて夕べとなれり

一九六三年

此の国の日々の食にもわが馴れて時には豚の頭を食す

同

胎動にこよなく愛情を感じつつアレルイアの花散る塀に沿い  
ゆく

同

山中 光

大根のきりぼしすべくきざみゆくボンバの音に調子合わせて

一九六三年

旅路より疲れてかえる我が家にて吾子らあかあかとランプ点  
せり

一九六四年

細々と吾が貯えし十コント ポケット深く掌を触れて行く

同

山野 草人

山の路歩みつかれて休むとき牛追いて通る人に出合いき

一九五一年

山野　みどり

憔悴の母吾の悩み薄らげば心和むか嫁も微笑む

一九七九年

山中　民樹

憤りとけ難きままに聞く娘の言葉に何時か心寄せいき

一九四九年

山内　準一

朝光の清しく霜の遠のきし甘藷畑の蔓芽吹き居り

一九六〇年

一連の雲ひろがりて昏れ残る遠山黒く冬の雨降る

同

カブシニングの木の間を出でてクツピンの群舞いたたり暑き曇り日

同

農を見切りし人の川辺の家荒れて丸太のままに屋根見えて居り

同

薄暗き露路に入り来て前をゆく娼婦の影を踏みて歩めり

一九六一年

山内 博

コンデ街なだりの道を赤色の無軌道電車下りて行く見ゆ

一九五〇年

山根 久子

ぜんざいの甘さ加減を言う子らの横顔に日系のかげりは見え  
ず

一九六五年

漬物に父の郷愁も充ちぬべしシユラスコ宴の終わりし後に

一九六六年

土間に座す北伯移民を駅に見るわが移り来し日のみじめさの  
ままに

同

雨けぶる寒き街道に豊作のセボーラ売らんと呼ぶ声きこゆ

一九六七年

訪日の母の土産の髪飾り一人静かな午後に挿しみる

同

山村 俊子

移り住みて二十年は過ぎぬれど聖市四百年祭かかわりもなし

一九五四年

アバカテの稚実揺れる木蔭にて少し癖ある吾子の髪すく

一九五六年

山村 藤男

ミナス路はかすみにけぶり白々と梨の木の花咲きあかるめり

一九五〇年

山室 新太郎

パラナ松木の間に見ゆる黎明の雲ことごとく南に流るる

一九四六年

幽かなる韻つたえて眼の前のカシヤ デ オウロに注ぐ雨あり

一九六八年

霜枯れし黒きマモナのひと所萌えでる青のやさしき色は

一九七二年

炎の跡を幹に印して立つ木々に風は朝の光をはこぶ

一九七三年

たつ風に梢よりひとつ光りつつ螢が眼前にこぼれきたれり

一九七六年

眼眩み暫し佇ちいるわが耳に重油発電機の音圧しくる

同

軒ごとに咲ける紫陽花の色褪せて午後の日射しはうなじを焦  
がす

一九七八年

暁の雲はしきりに動きいていずくともなくくみ鳴く鳩

一九七九年

山 本 一 男

ズボンよりむしりとりたるカラピツショをバルコンに置き客  
は出で行く

一九五四年

山 本 佐 敷

花珈琲匂い来るなり窓ちかく座りて朝のコーヒーを飲む

一九五五年

山焼きの煙立つなり故里の阿蘇の噴煙思いたたせて

同

境界に伐り残しある山の中に春さきがけてイペーの花咲く

同

この前に撃ち損じたる尻切れのとかげまた来ぬ鶏卵とりに

同

霜枯れてついに芽ぶかぬ珈琲の畑にユーカリの苗植えてゆく

同

珈琲樹の下に捨てたる大根が首をもたげて花つけており

同

雨降りし後の軟かき畑土にアーリヨ盗みし太き足跡

同

学校より帰り来し子に子守させ午後より妻も珈琲をもぐ

同

雨しみて耕土の色のうるみ見ゆ一日励みて吾は豆蒔く

同

入院の吾に寄せ書き送り来し吾子のたどたどしき日本語の文字

同

珈琲採る総身露に濡れ居れば焚火もやして畑に朝餉す

同

あちこちに盗人の被害しきりなり合図の花火戸毎に買い置く

同

偻僂の如腰曲りいし一匹の残る仔犬も貰われにけり

一九五七年

友の家谷を隔てて見えおれど農繁期なれば久しく逢わず

同

山 本 君 子

移り来し町に味噌汁匂わせて異邦人の如くひそと我が住む

一九七三年



いくばくの小銭ボルサにたしかめて午後の日差しの店に牛乳  
買う  
同

戦争の悲惨は言わず国々のガソリン不足伝う声々

一九七四年

山 本 たけ子

この海の潮の限りに吾が生れし郷土の山のやま彦よ顕て

年代不明

相容るる心に触れて佇つ庭に白紫陽花のまろく群れ咲く

同

囲われし無縁仏の碑のめぐり蠟涙溢れ地表に炎ゆる

同

風鈴と見まごう程に色づきてとり残されしざくろゆらげり

同

人去りし夕暮れの海去りがたく我が郷愁の声たてむとす

同

日盛りをもの思いつつ畦道に影踏み行けば陽炎ゆらぐ

同

新しき年の暦もたずさえて疎遠に過ぎし父母を訪いゆく

同

子等が皆学舎に在れば静けくて窓に小鳥の覗く春の日

同

山 本 博

切り株にのぼりて夕餉呼ぶ子等の頭上を鳥の啼き渡りゆく

一九六五年

樹海焼く合図の声の訝して第一番の火の手あがりぬ

一九六六年

浪花節が好きになりしと妻の言う共に不惑の年となりしか

同

山 本 操

子や孫や友等に祝われ金婚式の指輪交せり皺ふかき手に

一九七八年

朝潮の満ち来る時は風強く浜の並木の椰子の葉さわぐ

同

岩に生えし潮の香強き青のりの瑞々しきを佃煮にせり

同

山 本 由 之

しばしばも鉛筆けずり読みがたき教科書になやむ夜学する子  
は

一九五四年

山本 和多留

夕迫り林に帰る群アララ一望の原を啼き渡りゆく

一九七一年

薪を焚く二輦の汽車が夜の原を火の粉ふきつつ過ぎてゆきたり

同

空港のロビーに椰子の実を売れるモレーナら居て暑き午後の陽

同

遠き日の蚊隸の哀話たたせつつ荘園にコロノの貧しかるまま

同

井戸水は濁り塩辛き町なれば馬に負わせて水売りが来る

同

八幡 与三

角笛の鳴り来る辺り幅広にポエーラ立ち居り牛群行くらし

一九六四年

くれないの焰吐きつつ夜の野火音を高めて広がりに行く

同

祖国より我を咎める声を聞く帰化せんと旅券を取り出せるとき

一九六五年

帰化のことふみ切り難く心ある友を訪ねて語らい更かす

同

此の国の公式マークのある紙に帰化申請の署名をなせり

同

伯国旗広げし机うち囲み帰化宣誓の式は迫りぬ

同

頼りなき子等の日本語聞き居れば祖国は遠くに去りたる如し

同

日本語の祝辞も翻訳（やく）して司会する長女の背丈は妻より伸びたり

同

由緒ある古き耕地の樹も切られ舗装路伸びゆく我が里モジアナ

同

セスナ機は土人部落のあると言う樹海にかかりぬ河光りつつ

一九六七年

道辺（べ）りに草葺き小屋の点在しダイヤ掘り場に寒々と佇む

同

ダイヤ掘る人住む草葺き小屋にして吊り床一つ色あせて有り

同

湯川 沢子

カンポスの染井吉野の花だよりあこがれつづけ年かさねゆく

一九七三年

夢野 山川

土を割りて伸びし若芽の二三寸風吹けば揺るる緑さやけく

一九五〇年

横川 孝二

我が母と齡同じき人の来て世を恨みては涙ながしぬ

一九五〇年

横沢 幸子

予定過ぎ未だ生れぬ初孫を今日か明日かと待ち待ちている

年代不明

横山 耕人

夜毎吹く風強ければこの夜頃光豊けし風力電燈

一九四九年

齒の裏の齒石の舌にざらつくをひねもす我のかかずらいおり

同

秋日未だ此処には射さずテラツソのモザイクの上に転寝せし

児

同

黒々と鋤かれし畑に立ちのぼる地靄ほのけき初冬の朝

同

聖ドミンゴ河此处にたわみて淀なせるラゴアの岸を歩む白さ  
ぎ

同

インバウーバの葉裏かえして川沿いを風渡る見ゆ玻璃窓越し  
に

同

片側に茂りて咲けるアラマンダの黄色が映えて露台明るし

一九五〇年

年毎に落ちる収穫量の古畑に十五回目の棉開き初む

同

横 山 敬 男

病床にふるえるペンを握りつつ年賀状書く我が心暗く

年代不明

きらきらと晩夏のひかりこぼれいる木の下道を牛車軋み行く

同

吉 岡 敏 子

ひと言の悔いごとすらもなかりけり拓きつ植えつ君逝きませ  
り

一九六五年

ようやくにおとなとなりて子が振るう斧は鋭く木肌にきまる

一九六六年

山伐りのすめば支柱を割りに行く若きは疲れ知らぬ如くに

同

茹で上げしピケア一皿とり分けて使いに行きし子の帰り待つ

同

パラ―栗の花散り止まず吹く風も湿りを持ちて雨季に成りゆく  
一九六七年

アマゾンのこの地に極寒の日がありて窓の日ざしに背を温たむる

同

方位感失いて子に従きてゆく幾年ぶりのベレンの街を

同

日焼けせし農婦の貌を晒しつつ白人客の中にも買う

同

美しき声ふるわせてロシノール鳴くなりひとり豆摘みおれば

同

さ庭辺のピクレイザの実を漬けてアマゾン梅と食卓に添う

同

朝まだき起きて胡椒を摘みに来る母子よかつての吾と子のごとく

同

足裏に土やわらかく感じつつ農に果つべきいのち思いぬ

同

帰り来るひとにあらざうべないつつ一つの椅子は残しおく

べし

一九六八年

ひと頃の胡椒ブームで身につきし浪費の癖が村に残れり

同

柵を脱け遊び足りたる仔豚らが夕べとなりて戻り来にけり

一九六九年

栗よりは風味劣れど菱の実に似たりと思うパンの樹の実よ

一九七一年

郷愁は断ちがたけれど我が骨を埋むはこの地亡き夫の辺に

同

国道沿いに耕地求めしよろこびをききおり友の未来図として

同

吉 開 牧 子

故郷の月見草の花黄なりし今宵白きが我が庭に咲く

一九四九年

在りし日の面さながらに好みます緑茶をすする父を夢見ぬ

同

サンジョン祭の近づきたれば花火買い独りあげみる子の無き

我は

同

しらじらと冬の陽差せる庭隅に猫うずくまる眠るともなく

同



サンバ鳴る国に生れし吾が孫もムジカを聞けば体くねらす

同

吉川 忠男

遠く来しアパレシーダ詣りのカミニヨンのエンセラードの埃  
の厚み

一九五五年

ユーカリの林の中に茅を切る風無き午後を山鳩鳴きつ

同

吉崎 南舟

賑やかに飾れる店に佇みて貧しき吾が家暫し忘れつ

一九五四年

吉川 ほう枷

牧場のロツサ人夫ら木棉樹の花咲く下に憩っていたり

一九五六年

木棉樹の花のそろいてよく咲くは農年の兆と土人等は言う

同

吉 田 孝太郎

此の丘に住みしインジオ思いつつ暗き油灯に石斧を見つ

一九六八年

火に寄りて石斧研げるインジオを太古の闇に置いて思いぬ

同

高原の風荒々しユーカリの防風林に夜を吹き止まず

同

谿に沿い点々と家建ちており自らなる向き定まりて

一九六九年

木洩陽の明暗苔に揺らぎ居て緑明るく雨期深みゆく

同

撫でさするより術のなき病妻の背の切なきまで骨だちて来し

一九七七年

吾が顔の二つに見ゆと言いたるを最後に妻の意識みだれる

同

破産ときめ夜更け冷たき床に入れば家具の一つ一つに頭ち来る  
思い

同

鋤かれたる土塊赫く乾きいて生あるものの影を止めず

同

恃むもの何一つなき農と言え赭土畑に裸木は立つ

同

火田民と違いもあらぬ農法を疑いもなく我が続けつつ

同

吉田 双川

一カ月家空けし間に鳳凰樹の緑の枝が窓を覆えり

年代不明

鳳凰樹のみどりの蔭に椅子置きて八十のわれが語復習す

同

吾が作る胡瓜トマトなど覚めながら食べいし孫も街へ帰れり

同

チコチコの来馴れて一羽轉れり繁る庭木の窓際にして

同

何百年ここにも人の住みいしか耕す畑より石器出でたり

同

沼底に逆さに蔭をおとしいる樹よりウルブーは湧くがにとべり

同

与志妥 多毛男

雨期長く病虫害の多くして胡瓜の苗は欠株多し

一九六七年

穫り終えて又移転する不作農嘲る如く驢馬啼きにけり

同

久々に父に実情知らさんと新聞の切り抜きと共に便りす

同

乳牛はのどかに鳴きて人声もなき山小屋の陽ざし明るく

同

事毎に思い出される故郷を懐しみつつアルバムをくる

同

人の世のあわれしみみに思いつつ友の事故死の報せ聞きおり

同

夏毎の吾の悩みの一つにてこの水虫に良薬のなく

同

吉 田 博 美

四才でこの国へわが第一歩印せし村にアヌー啼きいし

一九七九年

訪い來たる村昔日の影もなくマンガの異様な茂り目につく

一九八〇年

何を焼く煙か低く匂い來る夕べにて知る雨の近きを

同

吉 武      加野枝

俄雨軒に避けて立つ背後よりパモニアの香り温かく匂う

一九六九年

耐えしのぶ思いにも似て燃え立たぬ野火の煙は低く這いゆく

同

訪日の友を送りて佇つ庭に採り残されし柿の実一つ

一九七〇年

吾が子らに労られつつ夜遅きポイントにセアザ行きのバス待つ

同

故里を歩む錯誤の野路に顛つ椰子の葉ずれの乾きたる音

同

オニブスが昨日墜ちしという谷間濃霧の中より鈍き陽の射す

同

なだらかな山の起伏に抱かれし移民の村に桃の花咲く

同

乾きたつ椰子の葉ずれに覚まされし夢よ吾も移民のひとり

一九七〇年

迎え火を焚く習わしも何時しかに異国に祖の御霊祀りぬ

一九七一年

不渡りの小切手電の被害など話題は暗き吾が身のめぐり

同

秋深き墓地下りつつこの国に母葬りしをしみて思えり

同

ユーカリの薄き葉の間を透したる夕映え長く牧を色どる

同

草むらに降りしウルブーの餌に群れて暫しひそかなこの午下り

同

移り住みなおも生計に追われつつ荒地起こしてももの蒔かんとす

同

## 吉 武 三 郎

アボーボラの茂みの中にひそみいし毒蛇に咬まれ千代は死せりと

一九五六年

魚獲期のクヤバの町はおおまかにキロ売りはせずカンバーダ用う

一九六〇年

木製の圧搾機回して主婦達は自家用の砂糖 ピンガをつくる

同

C A P E Nの文字鮮かにそめぬきしバルサ静かにパラチンガ渡る

同

産卵期にアマゾン河をのぼり来るマトリンシヤンの群夥し

同

焼け石にマトリンシヤンをのせて焼く原始料理に舌鼓うつ

同

二百年の昔築きし土塀は小石混りて銃眼を備う

同

照り返す敷石道に薪背負い牛の一群かたまり立てり

同

吉 永 流藻子

生活に疲れし顔のひしめける夕べのバスののろき進行

一九六四年

友を待つ石燈籠の傍のベンチにかけて一時間余り

一九七〇年

奥地より来し邦人が郷愁を慰め居るか燈籠撫でつつ

同

吉 野 貞 三

純白の甘き砂糖と喜びて祖国より友の礼状が来ぬ

一九四九年

吉 原 いわお ―鹿毛 至―

赤土によごれしままの街の灯にパウ デ アララの人影暗し

一九六六年

棉つみの人夫出て行く騒音の後をしずかにパン馬車は行く

同

国境の秋美しき便りにてわれ訪ねゆく日を待つとあり

一九六七年

夕映えの麻州の果ての国境は君知りてより心ひかるる

一九四七年

ウルブーの黒き羽ばたき枯野中つめたき風をおこして去りぬ

同

これよりは麻州につぐく道にして果てなき枯野夕陽に赤し

同

吉 本 一 郎

縫針を熱してつぶす手のまめの日々増えて跡残りいる

一九七八年

朝靄は音なく流れ谷ぞいの道急ぎゆく頬に冷たし

同

待ちわびし雨の雫を手を受けて旱に枯れし稲を思うも

同

霜の夜は痛みにまなこ冴ゆるなり戦に受けし足の弾丸あと

同

桑束の重きに疲れいる眼に五令の蚕白く眩しき

一九七九年



木の墓標朽ちていたりき佇めば動く影なき墓地に鳥鳴く

同

アバカテの稚実に露は下りいて新たな年の朝の静けさ

同

呑み水の残りを桑の根にこぼし一日の除草終えし安らい

同

木の呻く声にも似たり自動鋸の重き響に森はざわめく

同

糸吐きてあがりゆく蚕を見つめおれば幾月の疲れどつと湧き  
来る

同

## 吉 本 悟

むずかりそ泣く背の児に葱笛を吹いて夕飯の味噌汁を炊く

一九五一年

北伯の流民の群はさむざむとかたまり合いつつ街中を往く

一九五六年

野火跡のひとかたまりの牛糞に糸筋のごと直ぐに立つ煙

一九五七年

あがないし吾が墓地に来て子等と佇つ限りある身の果て想い  
つつ

同

柿の葉の散りしく村の裏通り吾が青春の思い出の路

一九七八年

吉 本 青 夢

海に入る川のながれは激しけれど芥はしばし漂うここに

一九四九年

磯島の高处にひそむ海鴨の声聞きおれば高み来る潮

同

海鴨のひそみ鳴き居し磯島に月経て来ればひぐらしの声

同

海べりの朱実のジュアは低けれど夕汐風に揺れいたりけり

一九五〇年

生きゆかん吾が能力も定まりて練りし陶土に貝殻ならぶ

一九五一年

自らをいとう気持になりおりて乾ける浜の白砂を踏む

一九五二年

わが脚にまつわり消ゆる潮泡の汚れて今日のいたぶれる海

一九五二年

遠山に雨けぶらえば蘇る記憶よここに移り来し日の

同

誰も彼も生活にきおう一途さにわがひしがれて立ち帰るなり

同

たずさえば道に木棉の花散りてまた嘆かいは汝に依りゆく

一九五三年

家出ですでに四月を過ぎたりと木棉の絮の散る道を行く

同

ちびりたる木履をはきてゆく方に川ありすでに夕霧は立つ

一九五五年

ピタंगाの木下に来たりかの遠き日の平安の実をもぎて食う

同

幾度か汽車にて過ぐるイタニヤエン見る折もなし片身の妻を

同

フェイラ帰りの人の通るを店頭に立ちて見ているわが所在なく

一九五六年

原価に下げしが誰も買いくれぬ萎びて小さくなりしバタタは

同

しらじらと明けゆく時にまぼろしの如く頭ち見ゆ丘のクルス  
は

一九五八年

カンポスの夜の霧いつかこもりいて吾ら降り立つ終着駅に

同

浜椰子の黄なる小花の散る下にたたずみ思う過ぎかたのこと

一九五九年

ジャカラランダの芽吹きも早し春の路い行く二人よ結ぶ日近し

一九六一年

吉 本 伯 桃

朝なさな暗きに起きて蚕養（か）う業にも馴れて鎌とぎいそ  
ぐ

一九六三年

移り来て七年過ぎき濃き眉を汗に光らせ桑を刈る妻

同

蚕飼う友は気安く声かけてわが門過ぎき曇れる朝

同

地平線はるかに見えてカフエー樹の茂れる中に赫き屋根見ゆ

同

田舎駅の人影もなき陽ざかりを犬寝そべりて汽車見送れり

同

細月の木の間に沈む夜のふけをまゆ撰り居れば雨蛙なく

同

乾湿計室にかけおき掃きたての蚕に瞳寄せて息吸う

同

鮮かな桑の香りのたちこめる室に蚕をわが掃きたてつ

同

桑畑のしげみに白く露おきて鶏なく朝のあけそめにけり

同

雨来ると夕餉はおきてガスランプ子らに持たせてしばし桑摘  
む

同

桑の束一つ背に負い時過ぎし朝餉に帰る小径馳せつつ

同

三日月の白く浮かべる日ぐれ時毯蹴る子らの高声きこゆ

同

まぶしよりまゆとる妻が繰り返し不作の蚕を嘆き

言うかも

一九六

三年

井戸車きしませ妻が水汲めば夜明けの霧が湧き出でにけり

同

吉 山 錦 生

夕やけを映せる原のパラナ松高々と枝を張りて立ちたり

一九六三年

米 沢 幹 夫

節だてるおゆびの過去にふれゆくとコロノの頃の日記をひらく

一九五八年

土民部落の隣に移民部落ありいずれも富まず過ぎゆく月日

一九六二年

この丘に奴隷飼われし世もありて石塀厚きままに残れる

同

先駆者の墓標かたむく草のなか記憶をもたぬ風わたりゆく

同

エンシャーダ振りし一日家族らの働きて得んいくばくの銭

同

丘の雲一つひとつを記録して杳き彼の日の如き夕焼け

同

カイサーラの素朴な訛りききつつ行くパンの実熟れて地に落  
つ季なり

一九六四年

休息を持たぎりし過去とつとつと語る移民のひとりも老いぬ

一九六六年

血を継ぎて幼き孫ら育ちゆけど美しき父祖の言葉を知らず

一九七四年

結実をおえて散りしくコーヒーの花骸をふみて行くとき寂し

同

指そめて紫蘇の実をこく家妻がふるさと言うとき日本語

同

鍬を打つくさむらのなか鈴蛇が尾を立てている拒否美しき

一九七五年

地球儀を半回すればわれを待つふるさとの地図赤く塗られて

一九七六年

目閉ずれば顔ちくる顔の中の一つ日本の父にまぎれもあらぬ

同

ポーズして撮られいるとき森遠く鉄打つに似て啼く鍛冶屋鳥  
同

外国語のみのめぐりの中に住み日本の言葉を捨てきれぬ生き  
一九七七年

復活祭の夜を降りきし雨に行く鶏盗人とおぼしき人か  
同

選挙権なき外国人の一人にて政治批判などする声もたぬ  
同

越えて来し幾山河を踰たせつつ移民七十年祭をわれら迎うる  
一九七八年

自我を通すこともなくなり落日に向き立つ椰子も己れも孤独  
一九七九年

竜造寺 伸

子を叱る妻の声音にかなしさをおぼえながらに注射器を煮る  
一九五三年

若井 幸枝

手術せむ思いようやく定まれば心しずかに吾子を抱きぬ  
一九五八年

若生 五十路

亡き妻の好みしを唄う吾娘の声嫁ぐ日迫る夕に聞きいる

一九七三年

悪たれの放ついばりを背に受けていぼ持つがまは微動だにせず

一九七七年

## 脇坂 一

いたく營養のとれしが如く思えりと砂糖の札状は我を泣かしむ

一九四八年

コロニアの跡荒れはてて牧となり古井戸めぐりて咲くアマリス

一九四九年

忙しき蚕飼いの業の明け暮れよ活け置きしバラの花も枯れつつ

一九五〇年

移民の日の遠き回想に友も我もかたみにもだし海見ていたり

同

日ならべて珈琲植えゆく畑の上旅客機ゆきかえば昼餉にかえる

一九五三年

ほろほろとピカン花粉こぼしいて芝に静かに降る春の雨

一九五四年

移り来て二十年すぎし年月よ牛殺す事も今はなれたり

一九五五年



渡 辺 巖

渡伯時の友の寄書き今にして籠る心をしみじみと見る

一九七四年

渡 辺 君 江

板一枚隣もコロノ同じ屋に住むお互いに団欒もなく

一九四六年

土負けの痛む足引きコーヒー園に行く道すがらも野草がかかる

同

健かに若くあれよと遠き娘が送りてくれぬ電気マッサージ機

一九七九年

移り来てカフェー育て五十年移転もせずに夫は老いづく

同

渡 辺 貞 子

久々の義弟の便りロテリアをかけるも長寿法の一つとありぬ

一九七八年

日本を恋う一言も言わずして母はブラジルの土となりたり

同

教わりしブラジル料理作らんと馴れぬ材料買い集めたり

同

コツパ　ド　ムンドのテレビに集う若き等にまじりて吾も声  
上ぐるなり

同

四十年耐えて来しよと我とわが節太き手を撫でさするなり

同

渡　辺　春　一

原始林倒して焼きし新山に蒔き付け終えて憩うひととき

一九七八年

岩山の頂上に立つキリストの像に詣でし霧深き朝

同

旅行けば車窓にうつる夕映えのはてしなき野に放牛の群

一九七九年

渡　辺　次　郎

家の辺の草きり払う鎌先にふれてめん鶏巢よりとび出す

一九四九年

牛追いが幾千頭の牛追うとラツパ吹き吹き通り行く見る

一九五四年

漸くに物置倉を建て終えて雑多な物在中に移せり

同

伊太利の人にならって大豆打つ二つの棒をつなぎ合せて

一九六〇年

渡 部 チ エ

投げ縄にかかりし馬が朝露にまみれし胴をふるいいがなく

一九五六年

硝子器にマモンのサラダ冷やし置く今日より夏を迎える如く

一九五七年

祭典の慰霊祭の放送おごそかなり昼を小暗くガロア降りいて

一九五八年

カザメントもシユラスコ式が多くなりて二世時代の社交にか  
わる

一九五九年

ブラジリアに繋がる道なり橋桁をゆるがせ続くトラックF  
N M

一九六一年

木々の剪定終えて憩えばかたわらの咲けるコンデに蝶があつ  
まる

同

丈越ゆる庭のマルゴーズけずり居りくさびのゆるむ鋏なおし  
つつ

同

移転する心実感とならぬまま土地売却の書類受け取る

同

ポエーラ立つドラードスに永住の心きめて布団カバーにも新  
たな工夫をこらす

一九六二年

落葉する並木もなくドラーダスの冬は日ぐせに埃風吹く

同

伯人の通訳つきにて巨人の如きパラグアイ婦人の寸法を計る

一九六三年

道ぞいの焼野にゆるく歩を移す駝鳥さながら画ける如く

同

原始林のままなる木立ちに囲まれて土人が学ぶ壁なき校舎

一九六四年

陽の光若葉にためてシマロンの自然林あり土人領地に

同

真新しき五コントス紙幣も週末は労賃となして土人に手渡す

同

渡 辺 つま子

来年は百頭にせむと牛の背をながむる夫とのひと時たのし

一九六九年

モーターの爆発音をひびかせて珈琲消毒に余念なき吾子

一九七二年

州道の遠近に見ゆるパイネーラ母の日近きを告げること咲く

一九七三年

むし暑き日々に熟れつぐコーヒーの実に追わるる如く励みい  
るなり

同

久方に母とも逢いたる平野寺に「移民の父」の足跡偲ぶ

同

苦学する娘は遠く夜の更けをわれは厨に草梅をむく

同

渡 辺 十九三

はるばると我を訪ねて来し父は自作のぶどうを土産に持ちて

一九五三年

渡 部 南仙子

露しとどなる朝まだき轟々と伜き始む大豆収穫機

一九七六年

耕耘機整列の中今出づる耕主の葬に輝る花ユツカ

同

うす濁りしつつ水増すダムの底村を沈めて高き冬空

同

ひとごとにあらざる寒き喪にこもりいたわれおり疲れ果て  
おり

同

讃美歌をうたいつつ孫らと朝な訪う妻の墓処のセメント匂う

同

娘等嫁と涙流しつつ争うは他愛もあらぬ形見の小筥

同

供華とせるスイナン水を揚げずして墓石固く影を深むる

同

孫に買いし小さき紙の国旗持ちて独立祭のメトロを上る

一九七七年

風鈴を外す妻の忌しみじみと妻の声など恋い思いおり

同

元朝の一家墓参の家水を孫そそぐなり爪立ちをして

同

渡 部      パウロ

航海の楽流しつつラジオ今日日本漁船の大漁を告ぐ

一九五七年

真夜中にシュベール浴びる人の居て戸も開けて寝るクヤバの  
宿屋

同

渡 辺      まさ子

ローマ字で署名終りし老い母が額の汗をぬぐい給いぬ

一九五六年

田舎より移り来し子が草笛を独り吹きおり蜜柑の蔭に

一九五九年

渡 辺 松 子

花路を作りて通るプロシツソン古き行事を今につづけて

一九七九年

古き列車過ぎし線路に雨煙り旅愁をそそるカサパーバの駅

同

渡 辺 護

野火跡に焼かれし牛の悪臭をしたいて集うウルブーの群

一九六四年

霜害の珈琲園にかすかなる息吹き of 如く青芽ふきそむ

同

吾が耕地のプラツカ野火に赤さびて文字も消えたり叢の中

同

土間に火を囲みて芋を焼きながらコロノ等との新契約をする

同

舗装路の曲りに真新しきクルース建てり邦人父子遭難の場処

同

霜に焼けしコーヒー園にまた稲も旱りに枯れて風のみ強し

同

野火跡のミーリヨ色づき見はるかす黄一色に彩る起伏

同

ミーリヨ売りフエイジョン売りて返済の金作りしと吾に差し出す

同

霜の季もようやく過ぎてこの雨にカフェの花も咲き揃わんか

一九六五年

ボテキンの主の腰の拳銃が身じろぐ度に鈍く光れり

同

渡会 照子

桜葉に包みし菓子を頂きて桜の香りなつかしみつつ

年代不明

川岸は枝垂柳の土堤つづき古里に似し道を歩めり

同

割鞘 たけ

夕映えの小高き屋根に群がれる鳩つぎつぎに光りてとびたつ

一九六三年

夜は更けて静けき川を渡りゆくカノアの中のわがかげ一つ

同



赤々と大空焼けて鰯売る人のだみ声遠くきこゆる

同

日は落ちて濁りし川の箱舟がくり舟ひきて静かにゆけり

同

鶏頭の花の赤きにしたい寄る虻一つありて真陽かがやけり

一九六四年

しばらくは人の気配に鳴かざりしきりぎりす鳴きいよいよ暑  
し

同

（おわり）

## コロニア慣用語註解

### ア

|          |                |
|----------|----------------|
| アウトモベル   | 自動車            |
| アウリベルデ   | 黄と緑と（ブラジル国旗の稱） |
| アエロモッサ   | スチュワーデス        |
| アグア ブランカ | 白い水の意（船名、地名）   |
| アサイ      | 地名             |
| アゼイテ     | 植物油、（地名にも用いる）  |
| アチバイア    | 地名             |
| アデマール デ  | バールロス ブラジルの政治家 |
| アデウス     | 告別の辞、さようなら     |
| アヌー      | 野鳥の一種          |
| アバカシー    | パイナップル         |
| アバカテ     | アボカト、果物の一種     |
| アバレー     | 地名             |
| アパレシーダ   | 地名             |
| アブリゴ     | 避難所、庇護所        |
| アベニード    | 大通り、アベニユー      |
| アベンカ     | 観葉植物           |
| アポゼンタード  | 恩給賦与者          |
| アポゼンタドリア | 恩給             |
| アボーブラ    | 正しくはアボーボラ、南瓜   |

アmendイン 落花生

アmendイン ブラーボ 雑草の一種

アmendエーラ 杏樹、巴旦杏の木

アモール デ フローレス “花々の愛” (公園名などに用いる)

アラサ サンパウロ市内の墓地名

アラポンガ 小禽の一種、かじや鳥

アラマンダ 有明かずら

アラメ 針金

アララ 大型おうむの一種

アランビツケ 蒸溜器

アーリオ にんにく

アルカシヨフラ 朝鮮あざみ

アルケール 面積単位、一アルケールは二四二〇〇平方

## M

アルタイ 地名

アルト ダ セーラ 高台の地

アルファッセ ちしや、レタス

アルメロン ラルガ 葉野菜の一種

アレルイア 歓喜樹及びその花

アロエーラ 乳香樹

アローバ 計量単位、一アローバは十五K Gアンゴラ  
ほろほろ鳥、家禽の一種

アンジツコ 樹木の名

アンデス 南米大陸西部の山脈名

## イ

イガラポ 島と島との間にできた狭い運河状態を指す

イグアスー イグアスー瀑布のこと

イグアツペ 地名

イサ 赤頭の大蟻

イタケーラ 地名

イタチンス 山の名

イタニヤエン 地名

イタバリカ 地名

イタペチ 地名

イナンブー イニャンブー うずら

イーノ ナシヨナル 国歌

イバイ 地名

イパチンガ 地名

イピランガ 地名

イペー イツペー 樹木名及びその花

(黄イペーはブラジルの国花)

イペー ロツシヨ 紫イペー

イミグランテ 移民

インガー インガー樹の果実、食用になる

インジオ 先住土人

インバウーバ 正しくはエンバウーバ

## ウ

ウーナ 地名

ウーバ イタリヤ イタリアヤ葡萄

ウバツーバ 地名

ウルグアイ 国名

ウルタウ みみづくの一種

ウルナ 投標箱

ウルブー 鳥の名、腐肉を喰らう

## エ

エイトール レグルー 人名、地名

エキリップス 印刷用インク名

エスピナフレ ほうれん草

エンシヤーダ 除草鋤、鋤

エンセラード 蠟引布

エンバウーバ 樹木名、やつでのような大葉を特長とする

## オ

O FOGO 火、花火

オニブス バス、乗合自動車

オーボ デ パスコア 復活祭に食べる卵形の菓子  
オーリヨ (オーレオ) クルー 油・原油  
オーリヨ デ ペローバ 艶出し油の一種  
オリンピア 地名  
オルタ 野菜畠  
オルランジア 地名  
オンサ 豹  
オンゼオーラ 十一時の意 (松葉牡丹)

## カ

カイアブ 地名  
カイエイラ 石灰製造所  
カイサーラ 浜辺の住人、主に賤民を指す  
カイシヤ ポスタール 郵便函  
カイピーラ 野人、田舎者  
ガウーシヨ 南リオグランデ州民の総稱  
K A K i 柿  
カーザ 家  
カサパーバ 地名  
カザメント 結婚  
カザメント デ ラポーザ 狐の結婚  
カシヤ デ オーロ 黄金の房の意、観賞木カジマル カジ  
ユマル 樹木名、台湾松

カチンゲーロ 悪臭を放つ、牧草名

カッピン 草、雑草

カッピン ゴルゾーラ 油草、脂肪草

カッピン フィーナ 草の名

カテドラル 大寺院、本山

カトレア 蘭の一種

カネーラ 樹木名

カノア カヌー、丸木舟

ガビオン 鷹

ガビローバ 果実の一種

カフェ、カフェー 珈琲

カフェ、ココ 精撰しない珈琲豆

カブシンギー 樹木名

カブラル 人名、ブラジルの発見者

カブルービー、カブルブー 樹木の一種

カペーラ 礼拝堂

カベルナ 鍾乳洞

C A P E N 社名

カーボ 農具の柄

カボコ、カボクロ 田舎者、田野人

カーマ 寝台

カマラダ 農場の日雇人

カミーザ シャツ

カミニヨン

トラック、貨物自動車

カラグワ

地名カラグアタツバの略称

ガラージ

車庫、ガレージ

ガラニー

（グワラニー）ブラジル土人の一種族

カラピツショ

雑草の名、種に棘を有し衣服や獣毛につく

ガラフオン

大瓶

カラマール

地名

カリオカ

リオ・デ・ジャネイロ住民の俗称

カリマン

開かない棉の病果

カリンニヨ

小車

ガリンポ

砂金やダイヤの採掘場

ガリンペイロ

砂金、ダイヤなどの採掘者

ガルサ

鷺

カルソン

水泳用の下ばき

カルデロン

底の深い鍋

カルトン

厚紙、カルトン   ポスタルは葉書

カルナウーバ

椰子の一種

カルナバル

カーニバル、謝肉祭

カルネ

セツカ

乾し肉

カルバリーヨ

ピント

ブラジルの政治家

ガルボン   ブエノ

街路名、サンパウロ市の東洋人街とし

て有名

カルピ

除草



カルル 雑草の名

カルロス 人名

カルロポリス 地名

カーロ 車

ガロア 霧雨

カローサ 荷馬車

カンジャ 粥

カンテイロ 苗床

カンナ 甘蔗

ガンバ 袋ねずみ属、鶏などを襲う

カンバーダ 鉤又は紐で一括りとしたもの

カンビリ 地名

カンポ 野、原

カンポ グランデ 地名

カンポス 地名、カンポス ド ジョルドンの略称、

避暑地

カンポ モロン 地名

## キ

キアボ オクラ

キタンダ 八百屋、野菜店

キロンボ 地名

## ク

クツピン 白蟻

クバトン 地名

クヤバ 地名

グラード 農機具の一種

クラブ カーネーション

グラマ 芝草

クルージア（コルージャ）みみずく ふくろう

クルス 十字架

クルゼイロ ブラジル貨幣の単位

クルゼイロ ド スール 南十字星

グレーベ 同盟罷業、ストライキ

グワジャラー 地名、アマゾン特産の木の实

グワラナ 清涼飲料水名

グワラプアーパ 地名

クワレズマ 四旬節、その季節に山林に咲く花とその

木、野牡丹

「グランド ホテル」 雑誌名

## ケ

ケイジョ チーズ

ケリー 女兒の愛称

ケリーダ ママエ 「愛する母よ」の意

ケルメツセ

キリスト教会の資金カンパ市

## コ

コケーロ

椰子樹の総称

ココ、コツコ

椰子の実

コジンニヤ

炊事場、台所

C・A・C

コチア産業組合の略称

コツコ アノン

小人椰子

コツパ ドムンド サッカーの世界選手権戦

コツポ

コップ

コツポ デレイテ かいとう、花の名

コパカバーナ

地名

コヒーラ

小禽の一種

コペイロ

厨僕

ゴベルノ

政府

コミツシヨ

集会

コモーヴエ

社名

ゴヤス

州名

ゴヤバ

果実の一種、蜜石榴（バンジロウ）

コルコバード

地区名

コルシヨン

敷蒲団（マットレス、草の一種）

コルンバ

地名

コロア デビウバ やもめかずら

コロツテ

水樽

コロニア

請負耕作人住居群、植民地コロニヨン

牧草の一種

コロノ

請負耕作人、植民

ゴンザカ

地区名

コンシヤ

しやくし

コンデ

果実の一種

コンデ

サンパウロ市コンデ デ サルゼーダス街

の略称

コント、コントス 往年の貨幣単位、コントスは複数

コンビ

ワーゲン社の箱型自動車

## サ

サツコ、サツク

農産物用袋

サテリテ

人工衛星

サビア

小禽類の一種

サブゲイロ

灌木の名、葉は薬用

サペ、サツペー

茅、萱

サボン

石鹼

サマンバイア

羊齒

サーラ

客間、応接間

サラクーラ

水禽の一種

サラリオ

給料、サラリー

サルサ                      パセリ

サルヴアートル            都市名、バイヤ州の首都

SALVE                      祝福

サンクリストーボン      地名

サンジョン                聖ヨハネ

サンタ カーザ            慈善病院

サンタリータ            地名

サンタレン               地名

サント                    聖人

サント アントニオ        聖アントニオ

サントス                  地名

サントレース            カトリック教の一祭日

サンバ                    曲種及びその踊り

サンビセンテ            地名

サンフオーナ            手風琴、アコーディオン

サン ペードロ            聖ペードロ

サン ミゲール            地名

サン ロッケ              地名

## シ

ジーア サント            キリスト教の祭日

ジエニパッポ            果実の一種

ジエラルド 人名

ジスコ ボードール 飛行円盤

シポ<sup>ロ</sup> 蔓

ジナジオ 中等学校

シマロン 茶の一種

ジャカラ<sup>ン</sup>ダ 樹木名及びその花

ジャクチ<sup>ン</sup>ガ 鶉鶏類の鳥、花の名

ジャスミン 素馨、ソケイ

ジャタイ 地名

ジャツカ 果実の一種、正しくはジャカ

シャミネ 煙突

シャツパ 鑑札、X光線で撮ったネガ写真

ジャニオ ブラジルの政治家、前大統領

ジャバー 乾肉

シャフアリス 噴水

シャペウ 帽子

シャペウ デ パ<sup>ー</sup>リヤ 麦藁帽子

ジャボ 悪魔、植物の名

ジャボチカーバ 木葡萄

ジャポネース、 JAPONES 日本人

ジャポン 日本

ジャラグワイ 牧草の一種

ジャルジネーラ 乗合自動車

ジャルジン 園、公園

シャレッタ 客用の馬車

ジャンガード 筏

ジュア 草の一種、その実

ジュケリ 地名

シュシュ 隼人瓜

シューバ デ オーロ 黄金の雨の意、オンシジュームの一種

ジュキア 地方名

シュベロー シャワー

シュラスコ バーベキュ

ジュンケーラ 耕地名、人名

ジョガ ボーラ 蹴球

ジョフレ 人名

ジョン デ バーロ 小禽の一種

シリエーマ 鳥の名

シルコ サークス、曲芸

ジレイタ 街路名

シンザ 灰の意、河の名

## ス

スイナン 灌木名及びその花

スクリジュ 蛇の名

スザノ

地名

## セ

セー

サンパウロ市の中央広場

セアラー

州名

セアザ

政府経営の果・蔬菜集荷場

セツカ

日照り、旱魃

セツテ ケーダス 地名、七瀧の意

SETTE DE SETEMBRO 九月七日、ブラジル独

立記念日

セーヅラ

投票用紙、手形、証明書

セードロ

樹木名

セボーラ

玉葱

セマーナ

週日

セマーナ サンタ 聖週間

セーラアズール 地名

セラード

矮樹草原地帯

セーラ ド マール 海岸山脈

セーラ ネグラ 地名

セラリヤ

製材所

セルカ

柵

セルトン

内奥地

セントヴオス ブラジル貨幣の一単位



センプイン 小禽の一種

センプレビーバ 草花の一種、観賞用

## ソ

ソルベツテ 氷菓子、アイスクリーム

ソロカバ 地名

ソロカバナ 地方名

## タ

タイパ 土をこねただけの煉瓦

タイパス 地名

タイヤスパーバ 地名

タチアナ マリーア 人名

タツ― せんざんこう

ダツタ 住宅敷地

タピライ 地名

タビンニヤ 小坂

タボン 地名

ダーマ ダ ノイテ 草花の名

タマンコ 木履

タマンヅアテイ サンパウロ市内を流れる川

タレファ 計積の一単位

タンケ 水溜め

## チ

チエテ

地名

チコチコ

雀様の小鳥

チツロ

券、投票券、表題、証券

チバジ

河の名

チラピア

草魚

チリリカ 草の名

チーロ デ ゲーラ 軍事教練

## ツ

ツーリスト 観光者、旅行者

ツン 植物の名

## テ

テスト

テキスト

デスファイレ 行列、行進

デード デ モッサ 乙女の指

デプタード 代議士、国会議員

テラッソ

テラス

テレゾポリス

地名

テレーロ 物干場、乾燥場

ト

トアーリヤ

タオル、卓布

ドクメント

証明書、書類

トツカーノ

鳥の一種、大嘴が特長

トツコ

切り株

トツパン

地名

ドーナ

女性の尊稱、主婦

トマテ

トマト

トマテーロ

トマト作り

ドミンゴ

日曜日

トメアスー

地名

トモベ

アウトモーベルの誤用

トーラ

丸太材木

トラットール

トラクター

ドラセーナ

植物名（地名）

ドラーダス

地名

トランスバール

地名

トルネーラ

水道の蛇口

ドン ペードロ

独立以前のブラジル皇帝

ナ

ナカチロン

植物の一種とその花

ナタール

降誕祭、クリスマス

ナモラーダ

恋人（男、女はナモラーダ）

ナンブー

イナンブーの誤用、うずら

ニ

ニテロイ

地名

ネ

ネグラ

黒人（女）ニグラ

ネグロ

黒人（男）ニグロ

ノ

ノルチスタ

北伯の住民

ノルデスチーノ

北東伯の住民

ノロエステ

地名

ハ

バイア

州名

バイアーノ

バイア州人

パイナ

木棉の実

パイネイラ、パイネーラ 木棉及びその花

ハイビスカス

仏桑花

バイレ

舞踏会

バイロ

都市の区

パウ

樹

バウー

地名

パウ　ダアーリヨ　にんにく木

パウ　デ　アララ　日雇い

パウリスタ　地名

バウルー　地名

パカエンブー　地名

ハカラランダ　樹木の名（亜国語）

バカリヤウ　鱈

バージエン　莢ささげ

パスコア　復活祭

バスチオン　人名、正しくはセバスチオン

パステイス　肉饅頭様の食物

パスト　牧場

バストス　地名

バタタ　芋の総称

バタチンニヤ　芋、馬鈴薯

B A T M A S J E S O M　アメリカ映画の主人公

パツサロ　プレット　黒鳥の意、禽の名

バテデイラ　稲を打ちつける収穫台

パドリンニヨ　代父、代親

パトロン　主人、雇い主

パネマ　河の名

ババスー　椰子の一種

パモニア　青い唐黍を原料とした黍菓子

|             |                   |
|-------------|-------------------|
| パラー         | 州名                |
| パライーバ       | 地名                |
| パラグアイ       | 国名                |
| パラシオ        | 宮殿、官邸             |
| パラード        | バスなど停まる所          |
| パラチンガ       | 地名                |
| パラナ         | 州名及び地方名           |
| パラナバイ       | 地名                |
| パラナ パネマ     | 地名                |
| バランセツテ      | 収支決算表             |
| ボール         | 簡易飲食店             |
| ヴアルガス       | ブラジルの元大統領         |
| パルケ         | 公園、遊園地            |
| パルケ イビラプエーラ | イビラプエーラ公園（サンパウロ市） |
| バルコン        | 商台、店台、又は露台        |
| バルサ         | 渡し舟               |
| バルセーロ       | 渡し舟を操る人           |
| パルド         | 地名                |
| バルバチモン      | 灌木名 タンニンをとる       |
| バルバ デ ボーデ   | 雄山羊の髯（ひげ）の意 草の名   |
| パルマ         | グラジオラス            |
| パルミット       | 椰子の一種、芯は食用        |

バーレ デ パライーバ パライーバ盆地

バロン 灯風船

バンカ 野菜や果物を商う盤台

バンケツテ 宴会

パンタナール 湿原

バンデイラ 旗

バンデイランテ ブラジル開発初期の探険隊

パンノ 布一般、農産物収穫の時地面に敷く布

パンパス 南ブラジルの草原地帯

## ヒ

ピオン 独楽（流れ者を指す）

ピカード 草や木を伐って通れるようにした所

ピカン 菊科植物の一種

ピキニツキ 行楽、ピクニック

ピクレイザ アマゾン地方の植物

ピケア 灌木、果を食べる

ピコレ アイスキャンデーの一種

ピコン こせんだん草、衣服にとりつく黒い種を

もつ雑草、移民初期にはこの葉を野菜代りに用いた

ビッシヨ 虫の総称、ここでは砂蚤（ビッシヨ ド

ペー）を指す

ピタンガ 木の実の名、食用になる

ピポカ 黍の粒を火で爆ぜさせて作った菓子

ピメンタ 胡椒

ビーラ、ヴィーラ 市街の区、小さな町

ビラコッポス サンパウロ市郊外にある国際飛行場

ピラシカーバ 地名

ビーラ ベーリヤ 地名

ピラポ 地名、河の名

ピラール 地名

ブリグイ 地名

ピング 甘蔗汁で作る蒸溜酒

ピンダ 地名、ピンダモニヤンガーバの略称

ピンタ シルバ 正しくはピンタ シルゴ、小禽の名

ビンチビー 啼き声からきた小禽の名

ピンニヨ 松の一種、その実

ビンニヨ、バイニヨ ぶどう酒

## フ

ファゼンダ 耕地、農場

ファゼンデイロ 耕地主、農場主

ファブリカ 工場

ファベール スラム街、細民街

ファルダ 制服

フィゲラ 樹木名



フイスカール 監督

フィツタ 細長い切布、紙など

フイーラ 列

フエイジョン 豆、五月ささげ

フエイジョアード 黒豆に豚の耳や尾を炊きこんだブラジル

独得の料理

フエイラ 定期的に開く街路市場

フエイランテ 街路市の商人

フオイセ 草や木の伐採に使う大鉋

フオゴ パゴウ 火が消えたの意、小鳥の啼き声

フォルミシード 殺蟻剤

フオリーニヤ 暦、カレンダー

フォルタレーザ セアラ州の首都

ブーグレ 土人

ブジーナ らっぱ、警笛

フバー 唐黍の粉

フーモ 縄煙草

ブラジレイロ ブラジル人

プラツサ ジョンメンデス サンパウロ市にある広場

プラツカ 標札、看板

プラッタ 銀

プランタ 蒔くこと

フランボイアン 鳳凰樹

プリマベéra 筏葛、ブーゲンベリヤ  
プリンコデ プリンセーザ 皇女の耳飾り、植物名及びそ  
の花

ブルーザ ブラウス

プルデンテ 地名、正式にはプレシデンテ・プルデンテ

プレイジョ、ブレイジョン 湿地

プレギツサ なまけもの

プーロ 驢馬

フロール 花

プロシソン 禮拝行列

へ

ペカドール 罪ある人、罪人

ペカン 胡桃の一種

ペキネース 独

ペテカ 羽根つき様の遊戯

ペードラ バウー ペードラは石、巖、バウーは地名

ペードロ 人名

ペトロブラス ブラジル石油公団

ペーニャ 区名

ベネジット 人名

ペリキット インコ

ペルア 後方に荷を積むようになった乗用車

ペルイベ 地名

ベルソ 揺り籠

ベルズレーロ 野菜売り

ペレー ブラジルのサッカー選手

ペレイラ 地名

ペローバ 樹木名、ブラジル有数の用材

ペンソン 下宿、木賃宿

ペンダ 田舎の売店、酒店

ベント スール 南風

## ホ

ポ語、葡語 ポルトガル語の略称

ボアノイテ 挨拶語「今晚は」の意、草花の名

ボア ビアージエン 「良い旅を」の意

ボイア フリーア 冷飯（日雇い）

ポインセチア 猩々花

ポエーラ 埃、土埃

ボツカツ 地名

ボツクス 一つの仕切り、詰所

ポツソス 地名、ポツソス デ カルダスの略

ボテキン 珈琲や酒を飲んだりする小店

ボブリンニヤ アボブリンニヤの誤用、細長い南瓜

ボーブラ アボーボラの誤用、南瓜

ポマール 果樹園

ボヤデイロ 牛追い、牧夫

ポルコ 豚

ボルサ バック、手提げ

ボルソ ポケット

ポルテイラ 牧場の大扉

ポルトン 柵扉

ボーロ ケーキ

ポロン 地下室

ポン パン

ボンデ 電車

ボンデ アスーカル 砂糖パンの意、リオ デ ジャネ

イロ市の名所

ボンデディア、ボンジーア 挨拶語「お早よう」

ポント 自動車やバスの乗り場

ボンバ ポンプ

ボンバ フルツアンテ 浮上ポンプ

## マ

マ州、麻州 マットグロッソ州の略称

マカウーバ 椰子の一種

マカコ 猿

マカコ ベーリヨ 古猿、旧移民の意

マカロン

マカロニー

マキナ

機械の総称

マクンバ

土俗宗教の一種

マシユシユ

シユシユの別称、隼人瓜

マタラーゾ

ブラジルの名門

マツサン

林檎

マツシヤデイロ

斧で木を伐る人夫

マツシヤード

斧

マツト

森林

マツト グロツソ

州名

マテ

茶の一種

マトリンシヤン

アマゾンの川魚の一種

マナカ

灌木名及びその花

マメルーコ

白人と土人女の間の混血児

マモナ

唐胡麻

マモン

パイア

マーラ

鞆

マラクジャ

果物の一種、果物時計草

マラニヨン

州名

マリア フマツサ

薪を焚いて走る汽車

マリナ プレツタ

草の名及びその実

マリオポリス

地名

マリスコ

貝の一種

マリタカ                    おうむの一種

マリモニア                花の名（アルゼンチン）

マリリア                  地名

マリंगा                   地名

マルカ                    マーク、印

マルゴーズ               雑草の一種

マルンビー               地名

マンガ                    マンゴー

マンジオカ、マンジヨカ      タピオカ、木薯

マンジューバ              魚の名

マンダカリイ              鳥の名

マンダカル                さばてんの一種、別名ジャマルカ

マンチケーラ              山脈の名

## ミ

ミサ                        弥撒

ミナス                    州名ミナス      ジエライスの略

ミナス      ゼライス      州名

ミニコツパ                サッカーの小世界選手権戦

ミモーザ                  含羞草

ミラカツ                  地名

ミーリヨ                  唐黍

ミル（ミルレース）          往年の貨幣の単位

ム

ムゼウ

博物館

ムジカ

音楽

ムダンサ

移転、移ること

ムラタ

半黒人の女

ムラト

半黒人の男

ムリツペ

地名

メ

メイア

靴下

メカニコ

機械工、自動車などの修理工

メーザ

机、卓

メザーダ

月払い額

メトロ

地下鉄

メルカード

市場

モ

モジ

地名、モジダス クルーゼスの略称

モジアナ

地方名

モツサ

乙女、処女

モデロ デゼノーベ 鑑識手帳、身分証明書（外国人用）

モランゴ

苺

モリンガ 素焼きの水瓶

モルフオ 蝶の一種

モレーナ 黄褐色の女

モンジロー 草花の名

モンソン 地名

## ラ

ラゴア 沼

ラゴア ポラン 地名

ラバッチョ 植物の名

ラバペー 小蟻

ラビニア 地名

ラプラタ アルゼンチンにある河の名

ラミー 麻の一種

ラランジア 柑橘

ランシャ ランチ、小艇

ランバリー 鮡に似た魚

## リ

リオ 河、又はリオ・デ・ジャネイロの略称

リオ グランデ河

リオ ネグロ河

リオ パネマ河



リスタ 名簿、目録

リツシャ 灌木名

リファ 資金カンパなどで行う一種の籤引き

リベイラ 地名

リベルダーデ 街路名、街区名

リベロン 地名

リマ ペルー国の首都

リーマ 柑橘の一種

リリオ 百合

リリオ デ ブレジョ 沢百合

リンス 地名

## ル

ルア 街路

ルス 街区名

ルテシア 地名

## レ

レアール 航空会社名

レイテリア 牛乳屋

レイロン 競売

レーゴ 溝、小流れ

レジストロ 地名

レシーボ

受取り、領収証

レース

往年のブラジル貨幣の最低単位

レーデ

ハンモック

レポリーヨ

甘藍、キャベツ

レンソ

大型ハンカチ、手拭い

## ロ

ロ市

地名、ロンドリーナ市の略称

ロザリオ

数珠

ロシノール

アマゾン地方の小禽

ローダ ジガンテ

遊団地で人を乗せて巡る大輪

ロッサ

草木を伐り払うこと

ロテリア

富籤

## コロニア短歌略史

コロニア短歌の消長を一瞥略記するにあたり、おおよそ次のような時代区分に従いたいと思う。

移民初期（一九〇八年～一九二七年）、集団移住地・植民地形成期（一九二八年～一九四一年）、戦時沈黙期（一九四二年～一九四六年）、転換移動期（一九四七年～一九六四年）、静観定着期（一九六五年～一九八〇年）。

以上は、「ブラジル日本移民七〇年史」の中の「移民史的視点から見たコロニアの文芸略史（執筆、武本由夫、安良田済）」の時代区分に準拠したものである。

## 移民初期

詩歌は、移民入国と同時に製作されたものと思われる。

一九一三年頃、サンパウロ市に短歌会が生まれ、手書きの歌集も刊行されたという。しかし、それは組織的な“短歌運動”がおこなわれたというわけではない。作歌の素養を持つ人が、筆のすさびとして短歌を作り、趣味人間に披露していたということである。したがって、記録され今に残るものもきわめて少ない。

一九一五年以後、コロニアでは、日本語による新聞、雑誌の発行が相次いだ。それらに鈴木南樹（貞次郎）その他二、

三の作品が、折々発表されている。また、これら日本語紙誌社の代表者には、文芸人が多かった。「聖州新報（一九二一年創刊）」社長香山六郎（公孫樹、素骨、毒露）、「日本新聞（一九三三年創刊）」社長翁長助成（白水郎）、「農業のブラジル誌（一九二五年創刊）」社長揮旗深志など、文芸に親しみ、短歌を作った。こうした事情も、後の「集団移住地形成期」に至って、組織的な短歌運動が起こった、その素地をなしたとみることができる。

## 集団移住地・植民地形成期

これは、長野、富山、鳥取、熊本など各県が作った移住組合、ブラジル拓殖組合その他が各地に移住地を造成し、一方ではコーヒー園の雇用契約者として渡航した移民たちが独立を目指して集団植民地を造成した時代である。これらの移住地には、多くの日本直来移民が入植したが、またさきに移住して、移民会社の手で契約移民として、ブラジル人耕地に入植した人々も転入した。

集団移住地、植民地に入った日本人は日本人会を作り日本語学校を経営して子弟に対する日本語教育を奨励した。こうした傾向は、日本文芸の普及に拍車をかけ、作歌にも好影響をあたえた。特に、幼少年期に家族の一員として移住し、そこで育った者に作歌の道をひらいた。長ずるに及んで、日本

語紙誌の歌壇に作品を投じ、修練を積んだ者の中から、後年コロニア短歌の指導的役割りをはたす者の輩出したことから、それを言うことができると思う。

各地の集団移住地に短歌会が結成され、機関誌の発行をみた。ありあんさ移住地の「おかぼ」、マリリア地方の「燎原」、パラグワスー方面の「白日」など、一九三一年から一九三九年までに発行された短歌誌である。

コロニアの短歌史上、大きくエポックを画したのは、一九三八年に短歌専門誌「椰子樹」の創刊をみたことである。一九三六年、坂根準三がサンパウロ総領事として着任した。彼は「歌の総領事」といわれたほど、短歌を愛し、着任まもなく、坂根嵯峨、花瀬群濤、桜井薫、水島十三子の四ペンネームを駆使して、当時の日本語各紙誌に短歌を発表した。また坂根と前後して、リオの正金銀行支店長

として駐在した椎本文也も、日本知名の短歌人で、折々紙上に作品を発表していた。

一九三八年「椰子樹」の創刊をみた。中心となったのは「アラギ」島木赤彦門下で、ありあんさ移住地在住、日伯新聞歌壇選者の岩波菊治、若山牧水門下で、サンパウロ短歌会の指導者阿部青杜（太）であった。「椰子樹」には、当時新聞歌壇で活躍していた全伯各地の主要作歌者が参加して、さかな短歌運動を展開した。

## 戦時の沈黙期

ブラジルが連合国側に立って、日本に宣戦を布告するに及び、コロニアの様相は一変した。日系諸機関の自主的な運営権が剥奪され、日本語使用が厳禁となり、日本人の行動にも制限が加えられた。日系人は穀を閉じたかたつむり同然、息をひそめて、各自の生活を守るに手いっぱいとなった。各地の短歌会も解体または活動を停止した。

しかし、大戦がようやく連合国側に有利な展開をみせはじめてから、当局の敵性国人に対する制限も、幾分ゆるめられるようになった。一九四四年ごろ、パラナ州トレス・バールス（アサイ）に「ユーカリ短歌会」が生まれた。またサンパウロ市に近いモジ・ダス・クルーゼスに「林泉短歌会」が誕生したのもそのころであった。この歌合には、スザノ、サンパウロ市方面の作歌人も参加して、かなりの賑わいをみせた。また機関誌「林泉」三巻は、戦後の「椰子樹」復刊の準備的役割りを果たしたとも言えよう。

その他、ブリグイ、カフエランジャ、サントポリス、アリアンサ、プ・プルデンテなどでも、ひそかに短歌活動がおこなわれて、戦後の爆発的な短歌運動の素地をなしたとみられる。

## 転換・移動期

熾烈をきわめた大戦も、日本の敗北を以て終熄した。ブラジルの日系コロニアも大衝撃をうけ、一時混乱状態におちいつ

たが、一九四七年頃から冷静さを取り戻した。

移民社会に対する根本的な省察がおこなわれ、思想的な転換が生じた。必然的に、子弟教育についての考え方に変化が見られ、ブラジル語教育がより以上に重要視されてきた。この思想の転換によって、集団移住地の解体、脱出分散という現象が見られるようになった。

いったんは、日系社会の崩壊といった感じもあったが、やがて各地方の都市を中心に集中がおこなわれてきた。これは各家庭の経済と子弟教育との事情によるものであった。

この思想の転換と、移動、再集中とは、日本語による文芸の消長にも大きく影響した。戦時の抑圧から解放されたこの期間初期の短歌活動は、一世、準二世、新来移住者によって、目に見えるほど高揚された。しかし、戦後育ちの二世間に日本語習得の低下が甚しく今後における短歌の低迷は、思いつかばに過ぎるものがある。

戦後の「椰子樹」は会員が増加し、頁数も増大した。作歌奨励の意味で、復刊間もなく「短歌賞」をも設定した。最初に設定したのは「坂根賞」で、これは「椰子樹」創刊の発案者坂根嵯峨（準三）の名を冠した賞で、一九五〇年に第一回を授賞以後四回まで続けられた。一九五四年から「坂根賞」にかわるものとして「椰子樹賞」を設定した。さきの「坂根賞」は、過去一か年間に秀れた作歌活動を行なった者に与える賞であったが、「椰子樹賞」は、一般から作品二十首を

募集し、最優秀作品の作者に授与される賞である。この賞は一九六四年の第一〇回を以て止め、一九六五年から、そのあとを受けて「岩波菊治賞」が設定された。

「椰子樹」の復刊に次いで、地方歌語もだんだん創刊された。プ・プルデンテの「和滴」、ビリグイの「青桐」、グワインベーの「南米短歌」などが主なるものであった。

また、戦後再刊、創刊の日本語紙・誌の歌壇も大いに盛況を呈した。この趨勢に乗じて、「パウリスタ新聞社」は、全伯短歌大会をサンパウロ市で開催した。この大会は、のちに主催を「椰子樹」に譲ったが、毎年一回催されて今日に至っている。

この期間に設置された紙・誌歌壇とその担当者は、次のようになっている。「パウリスタ新聞歌壇（岩波菊治―行方正治郎）」「サンパウロ新聞歌壇（徳尾溪舟―酒井繁一―中山稠子―井本惇）」「日伯毎日新聞歌壇（武本由夫―弘中千賀子）」「南米時事歌壇（小田切剣―瀬崎涛声）」「農業と協同歌壇（武本由夫）」「よみもの歌壇（徳尾溪舟と清谷益次）」。

＊

### 静観、定着期

戦後日本からかなりの新移住者があった。戦前渡伯の旧移民と、戦後渡伯の新移民とでは、多くの共通点は持ちながら、戦争をはさんでの時代相のへだたりから来る相違点も見



られた。戦後渡伯の新移民は、旧移民に比べて、より現実的な人生観を持っているという。従って、コロニアの文芸界に足を踏み入れる者も少ない。まして短歌の分野となると、寥々たるものと言える。

新移民の参加が少ないことも心許ないが、また一世の老齡化と二世の日本語離れも、コロニア短歌の将来を卜する上から、悲觀的な材料となっている。

コロニア短歌界も、この期間の前期には、まだまだ活氣ある活動振りを見せた。だが後期にいたって、量の面では、むしろ前期を上回る製作が行なわれているが、質的水準の高度化に、見るべきものがないことが言われている。しかし、別の見方をすれば、一応このへんで、日本から移植した短歌も、コロニア短歌として定着したとも言える。この国の風土と人情を反映して、おおらかな“大陸的短歌”としての落ち着きを見せてきた、ということかも知れない。

コロニアの戦後短歌も、前期に続いて主流は写実主義派であるが、戦後世界の自由民主主義的な思想の影響をうけて、幾分の変化を見せている。自由で理知的な、そして平衡感覚に支えられた作品が現われてきた。俗語などもふんだんに取り入れた口語発想の作品が見られたのは、一九五〇年ごろから一九六〇年ごろまでであった。その後、前衛的な作品（新写実、超現実、抽象など）なども現われてきた。これは、多分に日本の短歌界の影響と思われるが、一九七〇年頃以後

は、それも少数の芸術派作品だけに名残りをとどめている。現在では、写実主義派も後退して、むしろ自然主義派に属する作品が多数を占めているように見られる。

こうした現象をふまえて、「椰子樹」は、「流派巧拙を問わず」広く門戸を開いて、発行が継続され、今日に至っている。コロニア短歌の消長や、作風の変転を見るには、「椰子樹」を通読するのが、最も近道であるといえる。

さきにも触れたように、前期設定の「椰子樹賞」は、一九六四年第十回を以て止め、一九六五年「岩波菊治賞」が設けられた。これは、コロニア短歌発展の原動力となった故岩波菊治を記念して設けられた「賞」である。この「賞」も、応募二十首中の最優秀作品の作者に授与されるもので、年一回ずつ行なわれ、今日に至っている。

近年は定期的な地方歌語の発行は殆ど見られなくなったが、一九七五年、サンパウロ市に詩歌総合誌の「コロニア詩歌」が誕生した。

これは、句歌詩の専門誌で、短歌も毎号掲載され、一九八〇年三月まで第四二号を以て終刊となった。そして引き続き、より文芸総合誌的な性格を持つ「コロニア詩文学」にバトン・タッチし、主要短歌人の作品が肩を並べている。

全伯短歌大会は、最初から第二十回まで「パウリスタ新聞社」主催であったが、一九六七年、第二十一回より「椰子樹」主催となり本年（一九八〇年）第三十二回目を催した。この

大会にも盛衰の波はあったが、毎回二百五十〜三百前後の応募作品が集まり、近年は約百名が出席して盛大をきわめている。

全伯地方短歌大会も、前期に引き続き、一九七二年以後、サンビセンテ、ロンドリーナ、スザノ、グワイーラなどで催されてきた。

新聞歌壇とその担当者を記しておく。「パウリスタ新聞歌壇（行方正治郎―米沢幹夫）」、「日伯毎日新聞歌壇（弘中千賀子―梅崎嘉明）」、「サンパウロ新聞歌壇（井本惇―小笠原富枝と陣内しのぶ）」以上の陣容で、今日に至っており、それぞれに盛況をみせている。

ブラジルに日本移民と共に上陸した「短歌」は、近年その衰亡が懸念されながらも、作歌者たちの熱意に支えられて、詠み継がれている。そして、このたび「コロニア万葉集」の刊行にまでたどりついたことは、まことにめでたい。今後何時まで作歌が継続されるものか、予想の限りでないが、ますます、風土色を深め、しかも文学的な高度化を目ざして詠み続けられることを希望してやまない。

＊

追、文中敬称を略したこと、紙数の都合で、この全期間中に出版された個人、共同の著書、歌集に触れなかったことをお断りしておく。

## 解 題

### 書名

「コロニア万葉集」というのは初め假称のつもりで便宜上使用していたものであったが、それがそのままいつの間にか定着した。

この集の内容を正確に表わすとすれば「移民万葉集」とでもすべきであろう。しかし、コロニアという言葉は、今ではブラジルの日系社会を指すものとして普遍化し、日本などでも通用するようになっていいる。異論の出なかったゆえんである。

刊行に踏み切るまでの経過概略 移民七〇年が誰もの意識にのぼるようになった前後から、コロニアの短歌関係者の間では何らかの形で移民が作り続けて来た短歌の全貌を俯瞰することの出来る作品集を纏めておくべきではないかと誰もが考えるようになっていた。

しかし、戦前（第二次世界戦争）戦後にわたり膨大な数の作品が発表されていることがわかっていながら、その発表された紙、誌の数が多くまたその散逸も夥しいので（特に戦前のもの）、それをどうして収集し、また誰が担当可能なのか、といった点で、ためらいを余儀なくされたのであった。

さらに、近年の著しい印刷費の高騰も大きな障害と感じられたのである。

そうしたところへ、移民七〇年の記念事業の一つとして、ブラジル日本文化協会が建設を企図した「ブラジル日本移民史料館」の資料として、広くコロニアから寄贈されるものの中に、戦前の新聞、雑誌その他の刊行物が少なからず見られるようになり、それらは既存のものの欠落の合間を埋める場合が少なくなく、戦前の作品により多く移民の生活様相、生活感情が、より直接的な表現をとって詠まれているのではないかという観点に立つときそれは一つの救いのようなものであり、関係者を勇気づけることになったのであった。

もう一つ加えておかねばならないのは、今は一応盛んなような姿を見せているコロニアの短歌も、戦前移住の一世層（準二世を含めて）の老令化と減少につれて、やがて衰微するのは明らかであり、現時点においてその集大成と言えるものを編んでおかなければ永久にその機会はないだろうという、一種の危機感が関係者誰もの気持の中にあり、それが相当な困難は覚悟の上での刊行に踏み切らせる要因になったのである。仕事を担当する者の側からすれば、一つの使命感に駆られた、といえぬこともない。

## 編纂方針

a 戦前（第二次世界戦争以前）、戦後の二部に分ける、 b 生存者からは自選二〇首を応募させ、故人及び生存者（過去及び現在に発表活動を行った、或いは行っている）で作品応募のないものは、戦前戦後それぞれ二〇首を限度として担当委員が資料から抽出（予選）、 c 抽出された作品は七名を以て構成する選考委員会で選考し、三点歌以上（委員三名以上が掲載を可とした作品）を採録する。 d 選考委員にまわす作品はすべて作者名を付さない（委員の作品も同様）。

右のうち a 項については多少説明を付す必要がある。刊行を企画した当初は応募作品と抽出作品を一作者二〇首を限度として選考委員に回付、選考する、と言う簡単な方法が考えられていたのであるが、抽出作業に入った段階で、①移民の生活の姿、生活感情が最もプリミティブで、直接的表現をとって作品化されているのは、戦前のそれに多いのではないか、②そうしたものを現在の鑑識眼、批評眼のみで選考したのでは、戦前の作品は戦後のそれと比較して表現水準（素材の捉え方、詠出の技巧）が概ね低かったことを考えると、移民の姿を歴史的に辿ることの出来る多くの作品がこぼれ落ちてしまうことになるのではないか、③そこで、作品を戦前と戦後に分け作品の年代を考慮しながら選考すれば②項の不安は解消されよう、④一九四五年八月の大戦終結を境として、移民の、生活意識及び養国ブラジル、祖国日本を含めての世

界観に一つの変革がもたらされた、という認識からも、戦前戦後の二つに分けての編纂が妥当と考えられる、⑤戦前作品は抽出（予選）、選考共に各作品の年代を考慮しながら、「移民の姿（あらゆるものを含めて）」が把握され、表現も或る程度の水準には達しているということを基準として選考しなければならぬ、⑥コロニア短歌をより歴史的に観る便宜のためには、全作品を年代別に編むべきであるが、これは紙数と労力を非常に多く必要とするので、一作者の作品の年代順配列とする、といった意見が提出され、数次の委員会の検討を経て決定したのであった。

このように、戦前戦後に分けて編纂するという方針が最終的に決まったのは、既に作品募集、抽出作業に入った後であったために、幾らかの不都合、不公平が生じたことも否定できない。それは前述のように一人二〇首を限度としての応募を呼びかけていたために、戦前戦後を合せて二〇首を寄せた作者―あまり多くはないにしても―があることであり、当初より戦前戦後それぞれ二〇首と決まっていれば、一人最高四〇首の応募が可能で、それだけその作者の収録作品が多くなる可能性もあった、ということである。

しかしこの点については戦前の諸資料の中から「移民の生活の姿と心情を表現している作品」という視点に立って、応募作品以外にもなるべく規定の一作者二〇首に近づくように抽出の努力は委員によって払われているので、当初の不備は

かなり緩和されていると言うことが出来る（なお、戦前戦後に分けてそれぞれ二〇首としたために、最高四〇首採録という結果になった作者もある）。また戦前戦後合せての応募作品は年代により、さらに応募、抽出ともに年代不明のものは作品の内容により、いずれも選考後にそれぞれの部に振り分けた。

### 抽出及び整理作業

戦前の部は抽出、整理共に清谷益次、「椰子樹」その他の戦後刊行物（椰子樹は戦前も含む）ゝ米沢幹夫、パウリスタ新聞ゝ井本惇、日伯毎日新聞ゝ武本由夫、サンパウロ新聞ゝ小笠原富枝、陣内しのぶ、水本すみ子、弘中千賀子、南米時事ゝ水本すみ子、植村かずの分担で抽出を行い、抽出作品、応募作品の選考委員回付までの整理は米沢幹夫が担当した。抽出作業は一九七九年初めから取りかかって約一年半を費し、選考、編集を経て印刷にまわしたのは一九八〇年一月であった。

### 作者数・作品数

応募、抽出を合せて選考対象作者数は一五九九人（戦前三一、戦後一二八八）、同作品数は一五〇六二首（戦前一六〇〇、戦後一三四六二）で、収録作者数一三七八人（戦前二六九、戦後一一〇九）、同作品数六六三四首（戦前九九一、戦



後五六四三」となっているが、作者には戦前戦後にわたるものがあるのでこれは延べ数である。また戦前はペンネーム、雅号を用いる習慣が多く、どこの誰とも判明しないのや、或いは同一人と思われるものもあるが、確証のない場合はそのまま、もしくは別の作者として扱わざるを得なかった。

刊行企画の当初は作者の略歴を巻末に付す予定だったが、①不明のことが多いこと（特に故人や戦前だけの作歌活動で終った人たち）②現存者でも、応募がなかった為に委員が作品を抽出したもの、応募者にも投稿規定に従わず略歴を付さないのがかなりあったことで不平等になる。③他国に移住した者とその作品という”大前提”だけで足りるのではないかと考えられること、などの理由で一様に略歴は記載しないことにした。一言つけ加えれば作者はアマゾン地帯から隣国アルゼンチンまでの居住者にわたり、出身地、年令は千差万別である。（準二世及び幾人かの純二世も勿論含まれている）。

なお、移民社会に日語新聞が現われるより前にも、移民が作った短歌はあっただろうしまた地方々々で発行された会誌、同人誌の類にもかなりな数の作品が発表されたと思われるが、委員会の資料貸与を求める呼びかけに対する反応も見られず、それらを探し求めることは不可能であった。

用語・用字・かな使い・送りがな

①戦前戦後の作品共に新かな使いに改めた。しかし必ずし

も日本の現行のものに拘わらず、読みちがえの生じ易いものはその生じにくい方を採用した。例えば、出(い)ず(・)は出(で)ず(・)、来(きた)るは来(く)ると読まれる可能性もあるので、出づ(・)来た(・)る、とした。②明らかな誤字言葉の誤用、送りがたと文法上の誤りと見られるものは編集者の責任で改めた。例 a 送りがなの場合 || 行(ゆか)ず || 行か(・)ず、振(ふるわ)ず || 振わ(・)ず、埋る || 埋め(・)る、埋ま(・)る、b 文法の場合 || (イ) 同じ動作が続く場合のつ(・)つ(・)をつ(・)と誤用したもの、(ロ) 終止形の「リ」の誤用く見えり || 見えたり、見えぬ。覚め(・)り(・) || 覚め(・)た(・)り或いは覚め(・)ぬ(・)、c 当用漢字に拘わらず原作を尊重したが、印刷の段階で当用漢字しかない場合も生じた。d 同じ漢字が続く場合は字面が固くなるので「々」を使った。例「時時刻刻」 || 時々刻々。反対に同一かながつづく場合は「ゝ」を使わずそのかなの連記とした。例「つゝ」 || つつ、「まゝ」 || 「まま」、理由は印刷の時の打ち間違いや校正間違い等が生じにくいのと、字面は却て感じが柔くなるからである。e 外国語もしくは略語のかたかな表記は当然としても、純粋な日本語の不必要なかな表記はできるだけひらかな或いは漢字に改めた。例「コオロギ」「ブドウ」 || こおろぎ、ぶどう。f ブラジル語のかな表記は難しい問題だが、コロニア語として一般化しているものは原作通りとした。例イペー、イツ

ペーは共に慣用化されている。ファーカー、ファツカも同様である。ただし作者の誤解に基づく誤記はできるだけ訂正した。例フエジョンⅡフエイジョン、トモベⅡアウトモーベル。

―清谷 益次 米沢 幹夫―

## あとがき

一九七八年六月、ブラジル日本移民七十周年記念祝典が行われる前後頃から、古来日本人が喜怒哀楽の表現手段として最も親しんでいる短歌を通じ、日本移民が今日まで各自の移民生活をどのように感受し、表現して来たかを辿る「コロニア万葉集」といったものを刊行するのは有意義なことではないか、という意見が一部コロニアの有志や短歌関係者の間で出始めていた。

この相談を受けた時、私はあまり乗り気にはなれなかった。

吾々一世移民が総力を挙げて祝うことの出来る最後の祝典であろうと言われる日本移民七十周年祭を記念する意味で

も、大變有意義である事に間違いはないが、すぐ「よし、やろう」と踏み切れないものがあつた。

一口に七十年と言つても、その間移民達が作つた短歌の数は数万或いは数十万首に達するであらうし、その中には当人のノートにメモされたままのもの、新聞雑誌その他の刊行物に發表されたものなど無数にあるだらう。それらを拾い集めての集大成となると中々大變だ、特にそうした記銀や刊行物には、第二次世界大戦中のブラジル当局の取締りもあつて散失してしまつてゐるものが多く、この悪条件下で資料を収集するのは困難でもあり、日時もかかる。それを誰がどうしてやるのかと思うと腰も重くなる。

更に私が心配したのは印刷費用の問題である。刊行するなら立派な本にしたい。折からブラジルはインフレの昂進中で、物価は際限なく上昇し続けており、印刷費も随分高くなるだらう。幾ら大義名分の上に立つ事業であるとは言え、趣旨に賛同して寄付金など出す篤志家も少ないだらうし、第一こうした本が一体どれだけ捌けるものだらうか。あれこれ考へつつ刊行へのふんぎりがつかないまま、荏苒日々が過ぎて行つた。

そうしてゐるうちにも「コロニア万葉集」刊行の要望は次第に強まつて行つた。今にして我々が結束してこの刊行に当らねば、今後その機会は永久にめぐり来ないであらう。もし費用の点で出版出来なくなるにしても、資料をまとめて置く

だけでも意義があるではないか、という意見も出たりして、短歌誌「椰子樹」を中心とする関係者達も次第に心を決めて行ったようだ。

何回も相談会を開いて検討し合った後、出来るだけの資料を収集してみようと決定したのは移民七十年祭の挙行された一九七八年も終った七九年の初め頃であつたと思う。

とりあえずサンパウロ市在住の「椰子樹」関係者を中心に刊行委員会を設け、総務く中江克己、企画協力く岩佐静雄、資料収集戦前の部く清谷益次、同「椰子樹」く米沢幹夫、同戦後の新聞・雑誌その他刊行物く武本由夫を担当者とし、またこれとは別に各人二十首迄の自選歌を募集することとし、収集及び応募作品の選考委員には現在新聞歌壇並びに「椰子樹」の選者である酒井繁一、井本惇、武本由夫、米沢幹夫、小笠原富枝、陣内しのぶ、弘中千賀子の七名を選び、また会計は水本すみ子の担当とした。

資料の収集期間は七九年末迄とし、刊行のめどが立つまでは寄付金、予約金は一切求めない、その間の経費は関係者有志が負担するなどの申し合わせをして、愈よ刊行活動に入つた訳である。

資料収集担当者らは（註、戦後の刊行物からの抽出作業は「解題」に記したような分担となった）、黙々として自分の仕事の余暇を当てながら一文の報酬にもならないその作業と取り組んでくれたし、選考委員その他の有志には陰に陽に親身に

なつて協力して頂いた。全く頭の下がる思いであつた。

こうした熱意と努力にも関わらず、対象の範囲が非常に膨大であるため抽出作業は予定期間内に終らず、作品の選考と整理がほぼ纏まつたのは一九八〇年の十月頃であつた。

前にも言つた通り、諸種の事情で資料の散逸が多く、もつと多くの作歌者や、更に秀れた作品が見落とされたのでは、という懸念が残るとしても、よくこれだけの作品が収集された事だと感心させられる（「解題」参照）。改めて本書刊行に就ての関係者各位の協力と努力に深くお礼申し上げる。

残るは印刷所との印刷費の折衝、予約募集という時点で、私は欧州廻りで日本訪問の旅に出、年末に帰つて来た。私の留守中、委員たちが非常によくやってくれていて、印刷所と印刷費も決まり、来年二、三月頃には予約者に配本できるよう手配済みになっており、また予約数も意外に多く、一千部作らねば、と見られるほどで洵に欣快な話である。

望むところは、できるだけ多くの人にこの集を見て頂きたい事と「コロニア万葉集」が我々が念願としたところの、ブラジル日本移民の精神史の側面を、多少とも表現し得ておれば幸いである。

一九八〇年 十二月

コロニア万葉集刊行委員会

代表 徳 尾 恒 寿（溪舟）

コロニア万葉集刊行委員会

委員長 徳尾恒寿

総務 中江克己

会計 水本すみ子

整理・編集 米沢幹夫

清谷益次

選考委員 酒井繁一

武本由夫

井本惇

米沢幹夫

陣内しのぶ

小笠原富枝

弘中千賀子

企画協力 岩佐静雄

富岡清治

サンパウロ市椰子樹運営委員

表紙イラスト 田中 慎 二

コロニア万葉集

— 1981年3月 発行 —

編纂・刊行      コロニア万葉集刊行委員会

印刷所      トッププレス印刷出版(有)

EDITORAGRAFICA TOP  
AN—PRESSELTA.

Rua Muniz de Souza, 645

CAMBUCI SAO PAULO